

早稲田大学審査学位論文
博士（スポーツ科学）

沖縄空手の創造と展開
－呼称の変遷を手がかりにして－

Creating and developing Okinawa Karate
－ The significance of transitions in the term “karate” －

2017年 7月

早稲田大学大学院 スポーツ科学研究科
嘉手苅 徹

K A D E K A R U, T o r u

研究指導教員： 寒川 恒夫 教授

目次

序章

| | | | |
|-----|-------------------|---|----|
| 第1節 | 問題の所在と本研究の目的・背景 | … | 1 |
| 第2節 | 琉球・沖縄の時代 | … | 8 |
| 第3節 | 呼称の変遷 | … | 13 |
| 第4節 | 琉球語（沖縄語）と日本語（標準語） | … | 15 |
| 第5節 | 史料 | … | 19 |
| 第6節 | 先行研究の検討 | … | 23 |

第1章 琉球の徒手武芸 —多様化した琉球の武芸—

| | | | |
|-----|-----------------------------|---|----|
| 第1節 | はじめに | … | 27 |
| 第2節 | 日本の武芸と中国拳法の受容 | … | 30 |
| 第1項 | 首里王府による武芸の奨励 —『羽地仕置』— | … | 30 |
| 第2項 | 那覇士族の武芸 —「阿嘉直識遺言書」— | … | 34 |
| 第3項 | 冊封体制下における中国人武術家の来琉 —『大島筆記』— | … | 42 |
| 第4項 | 薩摩藩士が見た琉球の徒手武芸 | … | 53 |
| | 瓦を突き砕く男 —『薩遊紀行』— | … | 53 |
| | 拳を鍛える男 —『南島雑話』— | … | 56 |
| 第3節 | 国事の祝宴に供される唐手 | … | 59 |
| 第1項 | 王城落成祝い「木遣」における久米村人の唐手 | … | 60 |
| 第2項 | 組踊「二山和睦」に登場する唐手 | … | 63 |
| 第3項 | 久米村人の「三六九並諸芸番組」 | … | 65 |
| 第4節 | 唐手の3つの側面 | … | 69 |
| 第1項 | 「武術」としての殺傷性 | … | 70 |
| 第2項 | 「教養」としての武芸 | … | 70 |
| 第3項 | 「芸能」としての役割 | … | 71 |
| 第5節 | 小結 | … | 73 |

第2章 感う唐手の評価 —変容する唐手と地域に根づく唐手—

| | | | |
|-----|-------------------|---|----|
| 第1節 | はじめに | … | 76 |
| 第2節 | 就学率の変遷と唐手の体操化、運動会 | … | 78 |
| 第3節 | 疎まれる唐手 | … | 82 |
| 第4節 | 地域で継承される唐手 | … | 86 |
| 第5節 | 学校行事で披露される唐手 | … | 89 |
| 第6節 | 小結 | … | 94 |

第3章 新たな唐手の創造 —沖縄における唐手の近代化—

| | | | |
|-----|------------------------|---|-----|
| 第1節 | はじめに | … | 96 |
| 第2節 | 唐手の再評価 | … | 97 |
| 第1項 | 学校教育への唐手の導入 | … | 97 |
| 第2項 | 糸洲安恒「唐手十箇条」に示された唐手の近代化 | … | 98 |
| 第3項 | 徳田安貞「唐手」にみる安里安恒の武術観 | … | 102 |
| 第4項 | 花城長茂の「空手組手」 | … | 106 |
| 第3節 | 県内各地に普及する唐手 | … | 111 |
| 第4節 | 師範学校の「唐手奨励会」と「唐手大会」 | … | 114 |
| 第5節 | 京都武徳殿と講道館における生徒の唐手演武 | … | 117 |

| | | |
|---------------------------------------|---|-----|
| 第6節 本土への普及 | … | 123 |
| 第1項 唐手の全体像の模索 | … | 123 |
| 第2項 「手」の言説 | … | 128 |
| 第3項 富名腰(船越)義珍の上京 | … | 129 |
| 第7節 小結 | … | 130 |
| 第4章 空手道への志向 —本土への同化と対抗— | | |
| 第1節 はじめに | … | 132 |
| 第2節 唐手(空手道)における「型の構成」 | … | 133 |
| 第1項 船越義珍による型の体系化 | … | 133 |
| 第2項 「型の構成」の仕組み | … | 135 |
| 『琉球拳法唐手』の画期性 | … | 136 |
| 『鍊胆護身唐手術』への発展 | … | 140 |
| 『空手道教範』の到達点 | … | 142 |
| 第3項 型の構成の変容 | … | 147 |
| 第4項 中国拳法書「武備誌」とその影響 | … | 150 |
| 第5項 空手道の体育化と武道化 | … | 155 |
| 第3節 日本の武道への傾斜 | … | 156 |
| 第1項 東恩納寛量の伝えたサンチン | … | 156 |
| 京都武徳殿で演じられたサンチン | … | 157 |
| 東恩納道場の練習風景 | … | 158 |
| 第2項 船越義珍、本部朝基、摩文仁賢和のサンチン | … | 158 |
| 第3項 移民と海外への普及 | … | 159 |
| 第4節 宮城長順の論考の変遷 | … | 159 |
| 「剛柔流拳法」と流派の発生 | … | 160 |
| 「唐手道概説(琉球拳法唐手道沿革概要)」と沖縄空手の統一 | … | 162 |
| 「法剛柔吞吐」に表れる沖縄の文化的アイデンティティ | … | 166 |
| 第5節 琉球新報社主催「空手座談会」 | … | 169 |
| 第1項 「空手座談会」が催された背景 | … | 169 |
| 第2項 空手の呼称はなぜ統一されなければならなかったのか | … | 173 |
| 第3項 沖縄における空手道の課題 | … | 180 |
| 第6節 仲宗根源和著『空手道大観』の刊行 | … | 181 |
| 第1項 刊行の意義と呼称の問題 | … | 181 |
| 第2項 沖縄空手の理念と技法 | … | 182 |
| 第7節 小結 | … | 183 |
| 第5章 再出した「唐手」の呼称 —「戦技」としての「唐手」— | | |
| 第1節 はじめに | … | 184 |
| 第2節 沖縄戦と「唐手」 | … | 184 |
| 第3節 戦時下における大手新聞社の報道と『国民抗戦必携』 | … | 186 |
| 第4節 小結 | … | 189 |
| 終章 —まとめと課題— | … | 191 |

文献

図表目次

| | | |
|------|----------------------------|-------|
| 図－1 | 琉球・沖縄と日本の時代対照図 | … 12 |
| 図－2 | 琉球王国の主要交易ルート（14～16世紀） | … 13 |
| 図－3 | 琉球語の方言分布 | … 16 |
| 図－4 | 沖縄対話 | … 18 |
| 図－5 | 潟原の馬揃え | … 31 |
| 図－6 | 冊封使が見た琉球の弓 | … 32 |
| 図－7 | 肥後藩士の旅程 | … 53 |
| 図－8 | 拳を鍛える男の絵 | … 56 |
| 図－9 | 「二山和睦」の台本 | … 63 |
| 図－10 | 近世琉球の徒手武芸の全体像 | … 68 |
| 図－11 | 会員ニ告ぐ | … 82 |
| 図－12 | 「糸洲十箇条」 | … 102 |
| 図－13 | 花城長茂の「空手組手」の指導資料 | … 107 |
| 図－14 | 型の構成 | … 135 |
| 図－15 | 『十八の研究』に付録として掲載された「武備誌」の書名 | … 151 |
| 図－16 | 「武備誌」の中に見られる散切り頭の絵図 | … 153 |
| 図－17 | 「組手編」の中にある中国拳法の組手の絵図 | … 154 |
| 図－18 | 「空手座談会」を報じる記事 | … 169 |
| 図－19 | 『柔道』に掲載された『空手道大観』の広告 | … 181 |
| 図－20 | 本部小学校児童の空手猛訓練風景 | … 186 |
| 図－21 | 『国民抗戦必携』で使用された唐手の呼称 | … 189 |
| 図－22 | 沖縄空手の呼称の変遷 | … 193 |
| | | |
| 表－1 | 戦前期に刊行された唐手・空手道の単行本一覧 | … 22 |
| 表－2 | 琉球王及び冊封使正使・使録一覧 | … 46 |
| 表－3 | 沖縄における就学率－1879～1906年 | … 80 |
| 表－4 | 連合運動会のプログラム | … 109 |
| 表－5 | 唐手の普及状況（1905～1907年） | … 113 |
| 表－6 | 『琉球拳法唐手』の型の構成 | … 138 |
| 表－7 | 『鍊胆護身唐手術』の型の構成 | … 141 |
| 表－8 | 『空手道教範』の型の構成 | … 144 |
| 表－9 | 船越による型名の変遷一覧 | … 148 |

凡例

- ①史料を引用するにあたっては、次のように修正した。常用漢字については、旧字体を新字体にし、その他の漢字は概ね通行の字体に改めた。句読点のない場合は適宜句読点を施し、明らかに誤字・脱字と判断したものについては修正した。
- ②原文に漢字にふりがなが振られている場合には、引用する際に問題となる部分にのみふりがなを残し、他は割愛した。

序 章

序章

第1節 問題の所在と本研究の目的・背景

本研究は、古琉球から近代沖縄¹にかけて、沖縄空手がどのように創造され、展開されたのかを明らかにすることを目的としている。その重要な手がかりとなるのが呼称の変遷である。本研究では、沖縄県が琉球王国を形成した古琉球から沖縄戦終結時までを主に扱っている。

日本において、武道の種目として空手道を表現する言葉としては「空手」「カラ手」「からて」「KARATE」等があり、かつては「からむとう」「唐手^{トーディー}」（琉球語読み）「唐手^{からて}」（日本語読み）等も使われてきた。本研究では、これらは沖縄で使用されてきた呼称ということを読み、今日とかつての武術・武道としての空手道の総称を表現する種目名として「沖縄空手」という呼称を使用する。従来、沖縄空手という呼称は使用されていなかったが、近年、沖縄県では「沖縄空手会館」という使い方に見られるように、県民の間では、沖縄の「文化的アイデンティティ」を含めた意味を込めて、沖縄空手の呼称を使い始めてもいる。また、琉球・沖縄で発祥したからむとう、唐手^{トーディー}、唐手^{からて}、空手道等と多様に変遷してきた呼称の問題を論じる際には、文脈によってそれぞれの呼称を使

1 沖縄の時代区分は、11世紀後半ないしは12世紀初期から島津氏の琉球侵攻（1609年）までを古琉球といい、1609年から1879年の「琉球処分」までを近世琉球、1879年から沖縄戦終結の1945年までを近代沖縄としている。

用する²。

琉球・沖縄は、日本の他の地方とは異なる独自性の強い地域であり、時代区分にも表れている。沖縄空手の創造と展開を考察する上で、琉球・沖縄の時代区分を考慮して考察を進めていく必要がある。

琉球と中国（明・清）との武術的交流は、14世紀頃には琉球に住み着いていたと言われる「閩人三十六姓（福建人）」³が福建南方の武術を伝播したことに始まると考えられる。福建南方は、独自の中国武術が栄えた地域であり、倭寇や渡海の危険を冒して往来する福建人が琉球に福建南方の南拳を持ち込んだことは想像に難くない。福建南方から移住した人々は、久米村を形成して、琉球の進貢貿易に深く関わっていった。久米村は14世紀から16世紀にかけて盛衰はあるものの、近世琉球以降は、久米士族として琉球に融合し、首里王府の中で重要な役割を担い、その地位を揺るぎないものにしていった。

また、冊封使録には、封舟や冊封使節団の武備状況として、同行する兵士は福建人から選ばれ、火器兵器や各種武器を装備し、琉球滞在中に兵士が武術の訓練を行っていたことが記載されている。この時にも中国拳法の伝播・交流があったと考えられる。しかし、中国拳法の伝播や継承は、実技という特徴から、実践する目的、師弟関係、継続的

2 今日、日本武道協議会と文部科学省の種目名としては、「空手道」が使用されている（文部科学省，史料5 財団法人日本武道館史料，http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/rikkoku/detail/1293110.htm, 2016年11月30日）。また、2020年のオリンピックの種目名は、「空手」（公益財団法人全日本空手道連盟，<http://www.jkf.ne.jp/topics/news/20160804/8821>, 2016年11月30日）と「KARATE」（WORLD KARATE FEDERATION, <http://www.wkf.net/index.php>, 2016年11月30日）が使用されている。さらに、沖縄県が2017年3月に設置した「沖縄空手会館」は、空手発祥の地としての独自性を主張する意味において「沖縄空手」という呼称を一般化して使用していく方向が見られる。沖縄県知事を会長とする「沖縄伝統空手道振興協会」をはじめ、加盟する「沖縄県空手道連合会」「沖縄県空手道連盟」「全沖縄空手道連盟」「沖縄空手・古武道連盟」がすべて空手道を用いていることや沖縄県指定無形文化財の指定名称が「沖縄の空手・古武術」になっていることに如実に表れている。このように、武道種目やオリンピック種目同様、空手道と空手が混在しているのが実状である。

3 琉球の国史として編まれた『球陽』には、明の皇帝から「閩人三十六姓」を賜るとされているが、実際にはこの頃、すでに閩南人が交易を通して往来があり、住み着いていたとみられる（平凡社地方資料センター：日本歴史地名大系第48巻 沖縄県の地名，平凡社，2002年，p. 156）。

な伝承・継承等の問題があり、これらが備わって実現するといえよう。中国拳法は、武器術以上に伝播と継承に困難が伴っているといえることができる。

中国武術は武器術と拳法は分離したものではなく、同時に学ばれるものであった。明代の中国の武術書、唐順之（1507～1560）『武編』⁴、俞大猷（1504～1580）『劍經』⁵、戚繼光（1528～1587）『紀效新書』⁶（1560）、鄭若曾（1503～1570）『江南經略』⁷、茅元儀（1594～1630）『武備志』⁸（1621）等においても武器術、拳法、兵法等が含まれており、拳法は兵士の体錬の基本であり、拳法によって培われた身体操作が活かされるのである。古琉球から近代沖縄にかけて、中国から伝播したり、影響を受け、琉球で独自に発達した武器術は、今日継承されている棒（棍）、ティンバー、ヌンチャク、サイ、トンファー等は福建南方の武器術に類似したものである。徒手の武術と同様に型を媒介として伝承される。武器の種類は、上記の他にも鎌やエーク等の農具が含まれている⁹。

18世紀以降には、琉球の徒手武芸¹⁰に関連する史料の中で、中国拳法や琉球の徒手武芸の呼称、近代沖縄に繋がる型名が文献史料で確認される¹¹。冊封体制下の琉球と中国（明・清）との交流のあり方からも、福建南拳の型の伝播との関わりが深いことは濃厚

4 林伯原：明代の武術，中国武術史—先史時代から十九世紀中期まで—，技芸社，2015年，p. 466。

5 林伯原同上書，pp. 466-467。

6 林伯原同上書，pp. 468-469。

7 林伯原同上書，pp. 469-470。

8 林伯原同上書，p. 471-473。

9 仲本政博・津波清：沖縄伝統古武道とは何か，高宮城繁・新里勝彦・仲本政博：沖縄空手古武道事典，柏書房，2008年，p. 300。

10 近世琉球以降に中国拳法が琉球化した武術。日本の武芸とは歴史や「芸道」としての経緯等は異なる（寒川恒夫編，図説スポーツ史，朝倉書店，1991年，pp. 102-103）。ここで武芸が使用するものは、近世琉球以降、士族の武術が武備として位置づけられていなかったこと、同時代の史料に呼称として表れされていること、士族に幅広い目的で嗜まれたことから武芸を使用している。

11 山内成彬：慶賀木遣手，山内成彬著作集，第2巻，沖縄タイムス社，1993年，p. 205. で、1846年の首里城正殿改築祝いの聞き取り調査で、パッサイ、クーサンク。三六九並諸芸番組，島袋全発：打花鼓，島袋全発著作集，おきなわ社，1956年，pp. 300-306. で、十三歩、壺百〇八歩。

である¹²。

本研究では、琉球の徒手武芸の源流は、冊封体制下において福建南方の中国拳法が伝播して、琉球国の性格や時代背景の中で影響を受けて琉球化した武術と位置づけている。琉球の徒手武芸は、型を媒介として継承される武術であり中国拳法と同じである。型名には、福建南拳の型名や琉球語と日本語にはない名称がほとんどである。さらに、近代沖縄の唐手家や歴史家が初期に唱えた沖縄空手の源流は、すべて中国由来としている¹³。

中国拳法の伝播後、琉球の徒手武芸は、島津侵攻後の薩摩藩の支配下において、軍事体制として軍隊を持たなかったことや王府の政治的な性格から、本来の敵を殺傷することを第一義とする武術としてではなく、琉球独特の武芸文化として花開いていったといえよう。

それでは、琉球の徒手武芸は、どのような人々に、どのような目的で嗜まれるようになったのか。

1778年、那覇士族の阿嘉親雲上直識（以下、阿嘉と記す）は、生前に息子に遺言書を書いた。この史料は、1941年に原本が活字化されて「阿嘉親雲上の遺言書」として紹介された¹⁴。原本は、沖縄戦で灰燼に帰したが、沖縄学の東恩納寛惇¹⁵は、歴史史料とし

12 真境名安興：沖縄一千年史，真境名安興全集，第1巻，琉球新報社，1993年，p. 233。

13 1900年代以降の唐手家や沖縄学の研究者等を指している。時期によって、新たな推測が付け加えられ空手史観が変遷していった。

14 原題は「阿嘉親雲上直識愚息松金直秀へ相教候遺言之条々」。2部からなり、第1部は、1778年、直識58歳、直秀6歳のときに書いた遺書で、第2部は5年後の83年に、前者を補うために書き足した部分である（小島瓔禮：阿嘉直識遺言書，沖縄大百科事典 上巻，沖縄タイムス社，1983年，p. 23）。阿嘉直識（島袋源一郎）：阿嘉親雲上の遺言書，沖縄教育，沖縄県教育会，1941年，pp. 18-24。

15 東恩納寛惇は、1882年那覇東町に生まれる。東京帝国大学文化大学史学科卒業。国史を専攻する。伊波普猷・真境名安興ら、後の沖縄学の大家といわれた一人であり、歴史学、地名・人名、医学、工芸、芸能、文学など幅広い研究を行った（宮島壯英：沖縄大百科事典，下巻，p. 283）。

ての価値を論じた¹⁶。その一文に、士族が嗜む「からむとう」という武芸が記されている。東恩納は、改めて『歴史と国文学』¹⁷に史料を紹介し、その注解で、からむとうには「不明」と付している¹⁸。本研究では、からむとうを中国拳法が琉球化した徒手武芸ととらえている。からむとうは、琉球人によって初めて名づけられた自称の呼称でもある。

本研究では、このことを考察するために、近世琉球以降の首里王府が武芸をどのように位置づけたのか、また、1878年に書かれた阿嘉の遺言書にからむとうがどのような位置づけで記されているのか、さらに、どのような目的で嗜まれていたのかを再検討して、士族の武芸に臨む態度をみた上で、からむとうを明らかにしていく。また、近代沖縄以降の問題として、東恩納は、なぜからむとうを「不明」としたのか。このことは、沖縄空手の本土への普及と沖縄の置かれた状況から、唐手家等の理論的な支えとなった東恩納をはじめとする沖縄学の先学等が、琉球の徒手武芸や空手史とどのように向かい合ったのかを考える上で、重要な問題と位置づけて考察を行っていく。

琉球の徒手武芸の呼称は、からむとう以降、自称や他称の様々な呼称を文献史料にみることができる。1846年、首里城正殿改築の祝賀¹⁹で、琉球の徒手武芸は自称の「唐^{トーディー}手」²⁰の呼称が使用されている。その後、唐^{トーディー}手は複数の文献に表され、一般化されて近代沖縄へ繋がっていった。

16 「原本は沖縄県立図書館強度質の蔵に係り、先年島袋全発氏館長時代の採蒐である。私は、昭和14年帰省の折、同所で一見したが、卷子本に実直に認められてゐたやうに記憶してゐる。其時には詳細味読するには至らなかつたが、昨16年の12月号沖縄教育誌にその全文が発表されたので読みかへして見ると、沖縄へ伝はつた国学の伝統及び旧時代に於ける士流の家庭並官場生活の実際を知る上に貴重な文献と思はれるので、註を加へて紹介する事にした」と、その経緯を述べている（東恩納寛惇：阿嘉直識遺言書，歴史と国文学，大洋社，1942年，p. 24。東恩納寛惇：東恩納寛惇全集 5，第一書房，1978年，p. 425）。

17 東恩納同上書，pp. 425-438。

18 東恩納同上書，p. 434。

19 山内成彬：10王城落成祝の木遣音頭，山内成彬著作集，第2巻，沖縄タイムス社，1993年，pp. 202-203。

20 唐手の「唐」を「た（と）う」と読み、「唐手」は琉球語（首里方言）で「トーディー」と発音する。

1879年の「琉球処分」²¹後、唐手は、明治政府の同化教育、皇民化教育の目的に沿うように唐手の体系化が進んでいった。しかし、1900年頃までの約20年間は唐手の社会的評価は揺らぎ、複雑な問題を孕んでいた。明治政府による武力を背景とした琉球国の「廃藩置県」に抵抗し、旧士族を中心に中国へ「復国運動」を盛んに行い、その運動に多くの久米村士族が関わり、「護衛」として唐手家との関わりもあったとみられるからである²²。また、日本と沖縄、中国との関係は、中国由来の唐手に対して「風俗改良運動」の文化と見なす問題があったこともうかがわれる。

しかし、1895年の日清戦争の日本の勝利によって、復国運動は終息し、沖縄の社会状況は大きく変わっていった。1900年頃には、学校や地域の行事に積極的に取り込まれる新たな唐手として人々の前に登場し、地域で継承される唐手は学校教育へ導入されていた。1904年には、沖縄初の志願兵で唐手大家としても知られる屋部憲通や花城長茂、2人を指導した糸洲安恒等が、自宅で若者達へ指導を行い、学校教育へ導入する中心的な役割を担って活動を始めた。彼らの周りには、王府時代の唐手を知る安里安恒や東恩納寛量、喜屋武朝徳をはじめ久米村人や無名の唐手家等の影響や活動があったことも口承やわずかの記録からうかがい知ることができる。いずれにしろ、近世琉球の唐手を嗜んだ人物が数多くいたことが推測される²³。

1898年の地元の新聞では、唐手の呼称は、「支那流の柔術の？」²⁴「支那手（柔術

21 琉球処分は、明治政府のもとで、琉球が日本の近代国家のなかに強制的に組みこまれる一連の政治過程をいう。この過程は1872年の琉球藩設置を始期とし、1879年の廃藩置県をへて、分島問題がおこる翌1880年を終期とする前後9年間にまたがり、また、明治政府の方針が強権をもって一方的におしつけられる形で事が運ばれており、「処分」といわれるゆえんである。これによって琉球王国は滅び、沖縄県となった（金城正篤：琉球処分，沖縄大百科事典，下巻，pp. 882-883）。

22 後多田敦：終章 琉球救国運動とは何だったのか，琉球救国運動，出版舎 Mugen，2010年，p. 313。

23 師範学校唐手大会，琉球新報，1911年1月25日。

24 頑固の児童教育，琉球新報，1898年6月13日。

の如き者)」²⁵「泊得意の唐手」²⁶「手拳（てくぶし）・唐手（からて）」²⁷「無手勝流」²⁸等と記されている。「本県人の専有物」²⁹「本県人士独占の芸たる唐手」³⁰等と沖縄の「文化的アイデンティティ」が込められた表現で記された新聞や教育関係誌の記録がそのことを示唆している。このような多様な評価を行って創造される新たな唐手は多角的に考察する必要がある。

1922年、富名腰（船越）義珍³¹の上京によって、唐手は沖縄から本土へ本格的に紹介されていった³²。そこでは、大学唐手研究会を足がかりとして普及が進んでいった³³。当時の最高学府の学生への指導は、新たな指導者の養成という側面からも重要であり、本土では、唐手は日本の武道としての確立を目指して近代化が一層促進された。呼称や型の改称が唱えられ、公教育を主導に普及した沖縄とは異なった形で近代化が行われた。このことは、沖縄と本土では、歴史的背景や社会状況が異なることから、唐手の発展は複線的発展³⁴を遂げたことを示唆している。

1905年には、沖縄では学校教育の教科の一部として課されたことが重要な転機となり、新たな唐手として創造され、展開されていった³⁵。体操科の一部に取り入れられ、随意

25 乱暴館の養成所，琉球新報，1899年1月15日。

26 屋宜曹長の歓迎会，琉球新報，1899年10月21日。

27 清国義和団の動乱，琉球教育，第53号，沖縄県私立教育会事務所，1900年（州立ハワイ大学編：琉球教育，第6巻，本邦書籍，1980年，p.136）

28 宮城仁之助：名護兼久ノ演技，龍潭，第1号，沖縄県師範学校学友会，1902年，p.82。

29 宮城同上書，送別会順序，p.83。

30 宮城仁之助：送別会，龍潭，第2号，沖縄県師範学校学友会，1903年，p.146。

31 富名腰義珍の呼称は、『からて』（尹曦炳：からて，韓武館出版部，1947年，p.15）では船越の名字が使われている。戦後、船越への改称の時期は定かでない。本研究では、戦前期の文献はそのまま富名腰とするが、本文中では改姓後の船越を採用する。

32 神秘的な武術琉球の「唐手」，東京日日新聞，1922年6月3日。

33 最初の唐手研究会の発足は、慶應義塾体育会であり、以降東京帝国大学、日本史専門学校、第一高等学校など10数校に拡大した。

34 豊嶋建広・井下佳織・嘉手苺徹・浜崎鈴子：空手道の国際化における諸問題，空手道研究，第16号，日本武道学会空手道専門分科会空手道研究会，2013年，pp.9-20。

35 宮城亀：（2）県立中学校沿革，沖縄教育大31号，義務教育延長記念，沖縄教育会，1908年，p.33。

科や部活動として中学校や師範学校を中心に各種の学校教育に導入された³⁶。行事として連合運動会や記念運動会が大規模で催されると、唐手はその演目となり、多くの地域住民や来賓の面前で披露されるようになった³⁷。また、本土から軍人や皇族等が視察の目的で来沖し、中学校や師範学校の視察に際して、生徒たちの唐手の演武も参観していたのである³⁸。

唐手の教材化は、県庁や軍人らが求める唐手へと近代化が進んでいった。唐手は、体育の指導法や技法は、軍国主義教育に貢献することが重要な課題となっていった。唐手は、行政主導で人々の認知は進み、わずか数年間で県内各地の学校や地域に普及していった。

1937年に勃発した日中戦争前後の時期には、呼称や型の改称は、本土と沖縄で喫緊の問題となった。沖縄でも空手道への改称についての意見が各界から出され、地元新聞社主催の「空手座談会」によって斯界や関係者の統一的な見解として示された。その成果として仲宗根源和は多くの空手家等と共に『空手道大観』を刊行した。

沖縄空手の呼称は、1940年頃までには、空手、空手道に一般化される傾向にあったが、空手拳法、唐手、空手術、拳法、カラ手、沖縄手等やそれら以外にも様々な呼称が混在して使用されていた。しかし、1945年、沖縄戦時下に、唐手の呼称が再び使用された。

なぜこのような呼称の混在が生じたのか。この内実に、沖縄空手の創造と展開を明らかにする事象が含まれているといえる。沖縄県は、沖縄戦（アジア・太平洋戦争）によって近代の終焉という区切りを迎えた。日本の敗戦後、日本と分離されて米軍統治下に置かれることになり、沖縄空手にとって重要な転換期となった。

本研究では、唐手から空手道への改称は、単に呼称が変わったということではなく、日本の武道の動向と連動し、沖縄と本土で複線的に発展しつつも、いずれも日本の武道としての確立を志向していったことを実証的に明らかにすることを試みている。

第2節 琉球・沖縄の時代

古琉球とは、グスク時代の開始（11世紀後半ないしは12世紀初期）から島津氏の琉球

36 師範学校沿革略（3），琉球新報，1906年6月27日。

37 那覇首里臨時連合運動会，琉球新報，1905年3月9日。連合運動会，琉球新報，1905年11月11日。

38 北条侍従の学校巡視，琉球新報，1907年2月3日。

征服までの500年余で、琉球王国の形成・展開期にあたとされている³⁹。

1392年、中山明に入貢し「閩人三十六姓」が帰化し、1429年、三山は統一された⁴⁰。島津侵攻前後の文献では、琉球の武備は、日本や中国の武器によって備えられ、戦も多く行っていた⁴¹。

『李朝実録』の琉球の武備事情によると、琉球の武器は日本のものと同一であるとの記述がある⁴²。山本正昭・上里隆史は、文献史料と発掘調査の遺物との比較・検討した結果、「15世紀前後の「首里グスク」の考古遺物にも日本様式の武器、武具である特徴が甲や面部に見られ」、「刀剣や弓矢に関しても日本式武器の可能性が考えられる。又中国伝来と考えられる火気兵器も確認できた」⁴³としている。また、「文献史料からも琉球国内で独自に兵器生産を行っていたのは、ほぼ確実だと考えることができる」⁴⁴と考察している。

「百浦添欄干之銘」から当時の琉球の武備をうかがい知ることができる⁴⁵。また、正

39 安里進：はじめに，総論「古琉球」概念の再検討，沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室：沖縄県史 各論編，第3巻 古琉球，沖縄県教育委員会，2010年，p. 3。

40 嘉手納宗徳：尚巴志，沖縄大百科事典，中巻，沖縄タイムス社，1983年，p. 431。

41 嘉手納前掲書40，武備，下巻，pp. 388-389。

42 和田久徳・高瀬恭子：李朝実録の琉球国史料（訳注）（4），南島史学，第39号，南島史学会，1992年，p. 56。

43 山本正昭・上里隆史：首里グスク出土の武具史料の一考察，沖縄米文研究 2，沖縄県立埋蔵文化財センター，2004年，pp. 58-59。

44 同上書43，pp. 58-59。

45 1509年に、首里城正殿前の欄干に刻された尚真王の功績をたたえた銘文である。その中に、「服は錦綉をたち、器は金銀を用い、専ら刀剣をつんで、以て護国の利器となす。此の邦の財用、武器、他州の及ばざる所なり」とあり、「服は在来の麻、芭蕉布にまさる絹布をも用い、器も在来の木器、土器でない金銀のを用い、武器も竹槍、棒等でない、刀剣を貯えて、国防を充実せしめた」と、武備が充実していることが記されている（仲原善忠：琉球王国の性格と武器，仲原善忠全集，沖縄タイムス社，1977年，p. 588）。

史の『球陽』には、「空手」の文字を使用した記述が見られる⁴⁶。

陳侃『使琉球録』⁴⁷、郭汝霖『重篇 使琉球録』⁴⁸、蕭崇業・謝杰『使琉球録』⁴⁹、夏子陽『使琉球録』⁵⁰等の使録には、古琉球の封舟や使節団の武備状況を知ることができる。これらの使録には、中国拳法の琉球への伝播や琉球における徒手武術に関することは記されていないものと考えられる。

1609年、琉球は薩摩藩の支配下に組み込まれた。島津侵攻は、あっけなく琉球を攻め落とした。夏子陽が尚寧王の冊封使として来琉したのは1606年であった。すでに琉球の武備は弱まっていた。夏子陽が任務を終えて戻った際に、琉球事情を次のように話した。

「日本は千人近く、刀を抜き身にして、交易をしておりました。琉球はやがて日本に

46 「建極、手に寸鉄無く、但空手を以て童子の両股を折破し、城門を走せ出で、中山坊外に行き至りて斃卒す」（鄭秉哲：球陽，1524年，球陽研究会：球陽，読み下し編，角川書店，1974年，p. 159）。「時に一大野猪有り。箭と刃とを受け、威を振ひ、奮怒して猛然として飛び来る。儀間、空手にて擒住す」（球陽研究会：球陽，読み下し編，角川書店，1974年，p. 708）。

47 尚清王を封ずるために陳侃を正史とする冊封使節団来琉の使録。この中には、封舟の武備について「刀・鎗・弓箭（中略）佛郎機もまた2門がそなえつけられ（中略）戦闘に用いる道具は、すっかりそろえられていた」とある（原田禹雄：訳注 陳侃 使琉球録，榕樹社，1995年，p. 27）。

48 造舟にあたって、「刀・鎗・弓・箭の類は多いほどよい。仏郎機もまた、二門そなえつけられていた。およそ、戦闘に用いる道具は、すっかり揃えられていた。中国の威風をさかんにして海外の醜敵の胆を、ひやりとさせるためになのである」と記している（原田禹雄：郭汝霖重編使琉球録，榕樹書林，2000年，p. 107）。

49 「渡海用の舟の防御の器械は、旧規では仏郎機銃二十門、鳥銃一百門、碗口銃十門、袖銃三十門、籐牌一百面、長鎗六十枝、鏢鎗八百枝、鉄甲四十副、かぶと四十頂、腰刀百五十把である。弓・矢・火薬・鉛弾といったものは、それぞれ三分の一を用い、およそ銀三百両余りを節約した」とある（原田禹雄・三浦罔雄訳注：蕭崇業・謝杰使琉球録，榕樹書林，2011年，pp. 122-123）。

50 「航海中の船の防御の器械、たとえば大銃・鏢鎗・^{やり} 籃^{よろいかぶと} 甲^{ゆみや}・弓箭・火薬といったものについては、旧規には定額がある」とある（原田禹雄：夏子陽使琉球録，榕樹書林，2001年，p. 148）。

屈服することでしょう。中国の使臣が、かの国にしようが、知らん顔でした」⁵¹

薩摩藩に支配された琉球は、武力は厳しく統制され、倭寇襲撃の恐れのある進貢船には薩摩藩の管理の下に臨時的に鉄砲や武器が装備される状況であった。

一方清朝以後、冊封使は武臣派遣が慣例となり、使節団の武備や兵士の様子、琉球滞在中の兵士の訓練のようすが、張学礼『使琉球紀』『中山紀略』⁵²に記されている。約4ヶ月にわたる滞在中、兵士は辻の演武場で訓練を行っており、中国拳法が琉球人に披露され、伝播した可能性は高い。

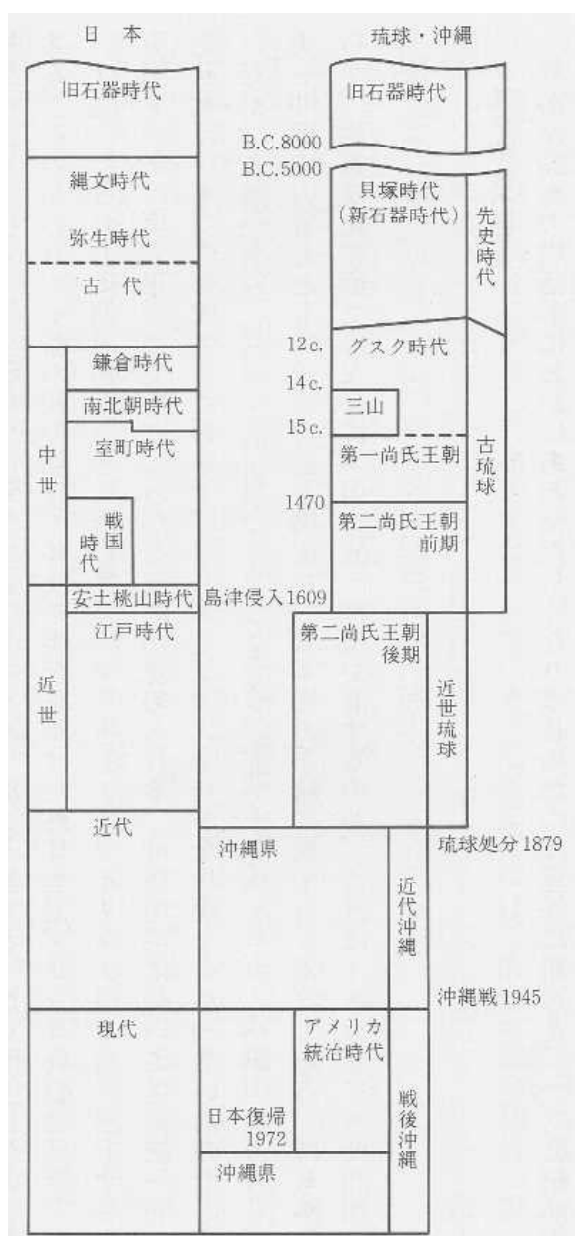
明治政府によって、「首里城の明け渡し」「藩王の上京」「土地人民および官簿ほか其他諸藩の引き渡し」等が命じられ、「琉球を全国的な中央集権体制の中に沖縄県として組み入れる「置県処分」を強行」したのである。これは、「軍事力・警察力の行使」によつての「廃藩置県」であった⁵³。

このような琉球・沖縄の歴史的な経緯から、沖縄の時代区分は、1609年から1879年までを近世琉球、1879年から沖縄戦終結の1945年までを近代沖縄としている。(図-1)

51 原田禹雄：福州府志，明代琉球資料集成，榕樹書林，2004年，p. 145。

52 注において「天子に随行した兵員らの演武場は辻にあった。そこで、天子の兵士の検閲や武技の訓練が行われた」とある（原田禹雄：張学礼 使琉球記・中山紀略，榕樹書林，1998年，pp. 82-83）。

53 赤嶺守：琉球士族の反抗，沖縄県史 各論編，第5巻 近代，沖縄県教育委員会，2011年，p. 72。

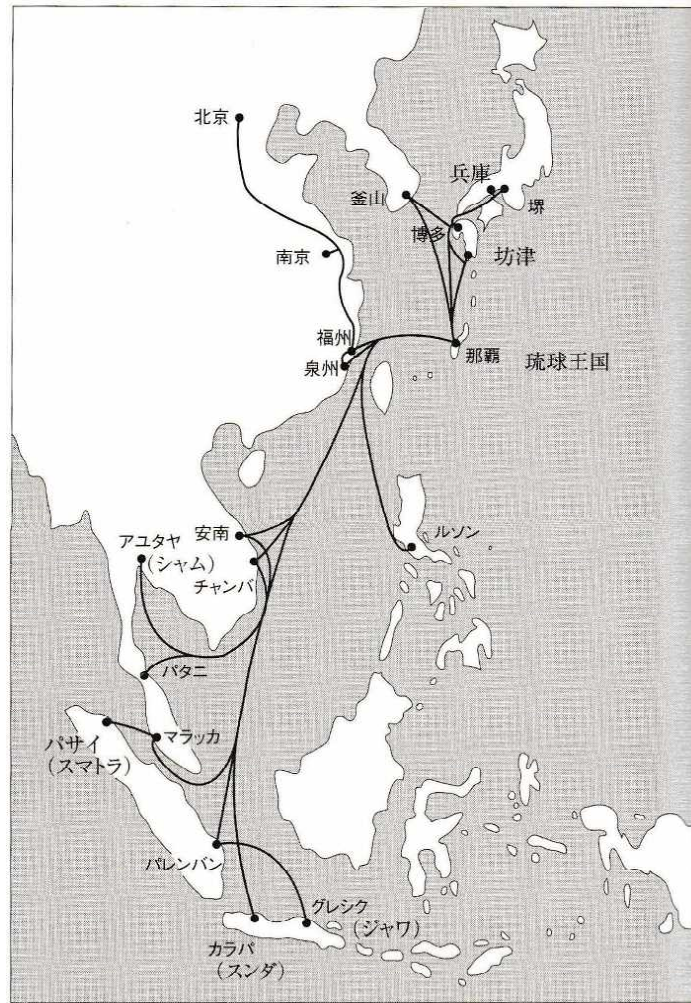


図－1 琉球・沖縄と日本の時代対照図

(出典 高良倉吉：琉球王国の構造，吉川弘文館，1987年，p. 2. より転載)

琉球国は、中国の海禁政策を有利な条件として活用し、日本、中国、ベトナム、タイ、マレーシア、インドネシア等の東南アジア諸国の各地の港市での活発な中継貿易を展開していった⁵⁴。このような経緯によって、中国武術の伝播をもたらし、日本の武芸の影響を受けていった。(図－2)

54 赤嶺守：琉球王国 東アジアのコーナーストーン，講談社選書メチエ，2004年，p. 50。



図－2 琉球王国の主要交易ルート（14～16世紀）

（出典 赤嶺守：琉球王国 東アジアのコーナーストーン，講談社メチエ，2004年，p. 51. より転載）

第3節 呼称の変遷

沖縄空手の呼称は、関係者の意図やその時代の政治的・社会的・文化的状況が反映されて変遷してきた。呼称は、技法の特性、来歴、目指す方向性の理念等によって名づけられてきた。中国人による琉球の徒手武芸に関連する文献史料は、呼称を含めて確認されていない。それでは、中国拳法が琉球化したことを琉球人がどのように記録に残したのか、一方では、日本の武芸の影響を受けて、琉球の徒手武芸へどう影響し、薩摩藩士や他藩士はどのようにとらえたのかが問題となる。

呼称は、『広辞苑』では、呼称は、「呼びとなえること。名づけること。呼び名。名

まえ」⁵⁵とある。沖縄空手の呼称は、表記と読み方の区別にも重要な意味がある。中国由来の唐手を沖縄語（首里方言）の「トーディー」と読むのか、標準語の「からて」と読むのかによって区別されたからである。学校教育ではとくに沖縄語の使用を禁じ、標準語が強制的に励行されたことが影響を及ぼした。

また、呼称の文字をどのように定義づけるのかという問題もある。「空手」は、唐手と同じ「からて」の発音となることや手に武器を持たないことを意味する。このことから、素手の武術として唐手と置き換えることができる。空手の「空」に対して、哲学的な意味を持たせて論じ、日本の武道としての位置づけを明確にするため「道」の概念を付与して「空手道」の呼称が唱えられてもいった⁵⁶。このように呼称は、表記、読み方、字義（定義づけ）の3つの区別が複合して名づけられていったのである。

さらに、近世琉球では、琉球・沖縄で名づけられた自称か、他称なのかも琉球の徒手武芸のあり方に影響を及ぼしていった。たとえば、現在の沖縄の呼称は、「琉球」から沖縄に一般化されていった。「琉球」は中国が名付けた国名で、「沖縄」は沖縄固有の言葉に基づく島名であった⁵⁷。つまり、内部から規定されていく過程と外部から規定されていく過程があるといえる。近世琉球で、自称の唐手が唱えられたことによって、琉球独特の徒手武芸としての特徴が明らかになっていったと考えられる⁵⁸。近代沖縄は、たとえば「琉球独特の武術」⁵⁹と「沖縄固有の武術」⁶⁰の違いは、かつての琉球を強調

55 広辞苑，第6版，DVD-ROM版，岩波書店，2008年。

56 下川五郎：「空」に就いて，こぶし 創刊号，慶應義塾空手研究会，1930年，pp. 2-11。

57 小玉正任：はじめに，琉球と沖縄の名称の変遷，琉球新報社，2007年 pp. 5-6。「『琉球』も『沖縄』もその名称に定着するまでには，次のようないろいろな表記が見られる。流求・留仇・留求・流口（木偏に求）・幽求・流虬・瑠求・琉球（他に、瑠球・琉求・流求）阿児奈波・おきなは・（他に、をきなう・おきにや）・倭急拿（他に、倭的拿・倭及奴・倭及那・屋其惹）・悪鬼納（他に沖那波）・沖縄（他に、浮縄・浮那・浮名）」。琉球と沖縄の呼称においても様々な変遷が見られ、第二次世界大戦後に、米軍と統治下に置かれた沖縄に対して、アメリカは「琉球」の呼称を正式に使用している。

58 この問題は、近世琉球に、薩摩や江戸で「琉躍」「唐躍」、冊封使歓待の宴で組踊に「唐棒」などが琉球の芸能として演じられたことと関連する。

59 吉川秀雄：空手雑感，富名腰義珍：修正増補版空手道教範，広文堂書店，1941年，p. 29 7)。

60 大学教授の沖縄観，琉球新報，1906年9月22日。

するのか、または、琉球処分以降の沖縄を強調するのか表現上異なった意味を含ませていたと考えられる。

本研究では、自称を使用するのか他称を使用するのかの問題やこの呼称を沖縄の人々が使うのか、本土の人々が使うのかによって、主張する意味が異なる問題等も念頭に置いて沖縄空手の呼称の変遷を考察する。

第4節 琉球語（沖縄語）と日本語（標準語）⁶¹

琉球語と日本語の関係は、中本は、「現日本語が東へ、北へと広がって発達したのが本土語で、南下したのが琉球語である。琉球語の勢力は与那国島まで伸び、台湾の別系列の言語と接して境界をつくった。原日本語は日本列島と琉球列島の島々に膨張した強大な言語であったといえるであろう。琉球語は原日本語から分かれて無縁の言語となっ

61 本研究において、学説や時期によって沖縄の方言は、「琉球方言」「沖縄方言」とも表記されるが、近世琉球の「琉球語」に対して、近代沖縄以降は4つの地方の方言の総称に「沖縄語」を用いる。文化庁は、ユネスコが2009年に発表した“Atlas of the world's in danger”

（「消滅の危機にある方言・言語」）として6つの方言・言語が含まれていることから調査委託事業を行った結果を発表している。これを受けて、沖縄県では、沖縄語の普及促進に向けて「中期『しまくとぅば』普及推進行動計画」を策定し、学校、地域等で取り組んでいる（平成28年度～平成30年度）。また、方言に対する日本語について「共通語」もあるが、ここでは「標準語」に統一して表記する。ただし、引用に関してはそのまま表記する。

たのでなく、その時代の中央語の影響を強く受けている」⁶²と記している。(図-3)

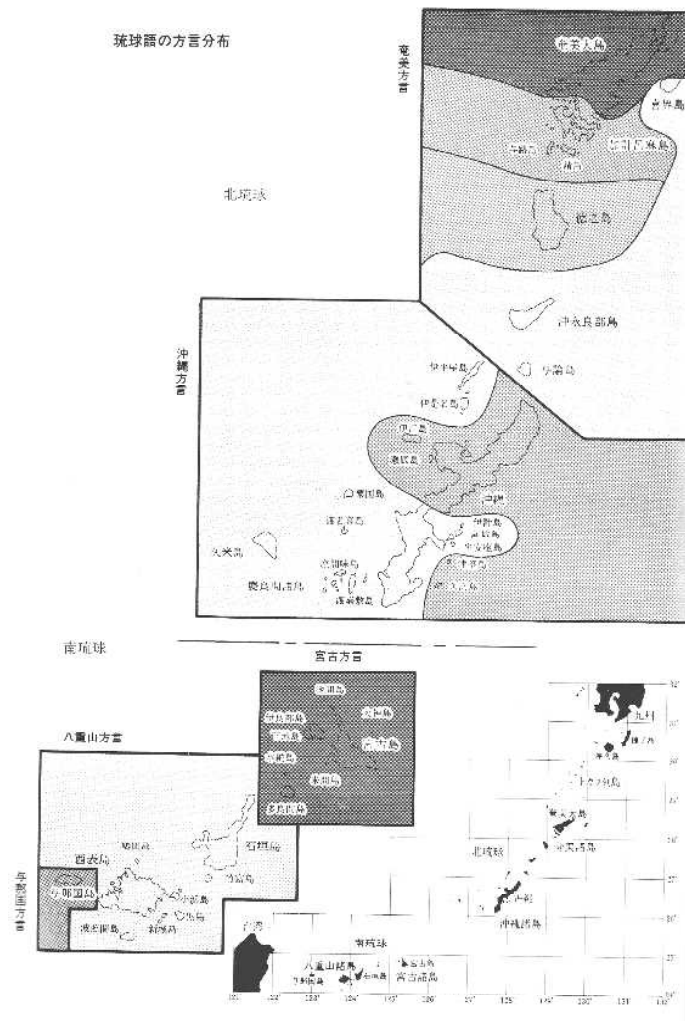


図-3 琉球語の方言分布

(出典 中本正智：口絵，琉球語彙史の研究，三一書房，1983年. より転載)

近世琉球の琉球語と日本語は同一の系統を持つ言語である。しかし、日本の地方の多彩な方言とも異なり、まったく相通じなかった。

また、「琉球語は本土語と関係を保ちながら独自の歴史過程を経ている。日本語の歴史が語っているように、日本語史上、きわだっている変化は、奈良朝期から平安朝期へ移るところと、平安朝期から中世期を経て近世期に移るところに見られる。この2度にわたる変化のうねりは、中央語はもちろん、東北や九州の辺地にまで及び、日本語の姿

62 中本正智：はしがき，琉球語彙史の研究，三一書房，1983年，pp. 1-2.

を大きく変えてしまった。ところが、この大変化といえども、琉球列島全域に浸透しているわけではない。琉球語が独自の歴史を歩んでいるゆえんである」⁶³。

琉球語が日本語との関係を保ちながらも琉球語としての独自性を維持してきたこと、日本の8世紀初頭から16世紀初頭までにみられた日本語の大きな変化の時期を経ても琉球語は独自の歴史を歩んできたのである。琉球語の特徴は、琉球内部でも奄美・沖縄・宮古・八重山の各諸島で話される内部の言語で互いに通じないほどの相違がある⁶⁴。

琉球処分後の沖縄県における学校設置の概略についてみると、1880年2月に、県庁学務課内に「会話伝習所」が教員の速成を目的として設置された。同年6月に、沖縄県師範学校へ吸収され、会話伝習所は廃止された⁶⁵。他府県でも師範学校創設に先だって、伝習所、講習所、養成所等の名称で教員速成機関が設けられた地域は多いが、沖縄県でこれを会話伝習所としたところに特色がある⁶⁶。つまり、公教育を行うために、まず、標準語教育をどうするかが県庁の最重要課題であったのである。これに対応する目的で県学務課は、1880年、『沖縄対話』を編さんした。(図-4) これは、沖縄県になって初めて刊行された標準語学習のための教科書であり、師範学校や小学校で使用された⁶⁷。

63 中本前掲書62, 総説 琉球語の成立と発達, p. 10。

64 中本正智: 琉球方言, 沖縄大百科事典, 下巻, p. 921。

65 本永守靖: 会話伝習所, 沖縄大百科事典, 上巻, p. 675。

66 「当時、沖縄では、共通語の話せる人はほとんどいなかった。それほど琉球方言(当時は〈琉球語〉〈沖縄語〉とよんだ)は共通語とかけはなれたものであり、日本語教育もまったくなされていなかった。そのうえ、県内における方言も、地域間でかなりの差があった。そういう状況で、全国一律の教育をおこなうとなれば、さしあたって共通語の使える〈特殊教員〉を養成する必要がある」のである(本永同上書)。

67 本永前掲書65, 沖縄対話, p. 554。



図-4 『沖繩對話』(出典 沖繩對話上, 国立国会図書館デジタルコレクション, <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/868664>. より転載)

地方の初等学校沿革において、「開校後は直に従前の下等小學規則により教授を施し全く幼年児童同様の取扱をなし先づ発音法より教授す然れども師弟の間双方言語の不通に苦み言ふもの聞くもの皆其意を解せず殊に年長者の如きは畢竟言語の不通に原因するを以て當時本縣学務課の編纂にかゝる沖繩對話を用いて機械的に教へ込み日課外にも専ら練習せしめたる結果稍々言語を解するに至る」⁶⁸と記している。

近藤は、「会話伝習所の教育は沖繩人の言語風俗の大和化に着手したものであり、沖繩における学校教育の開始当初から沖繩人が一方的に標準語を覚えさせられた特徴を見いだすことができる」⁶⁹としている。

子どもたちへの教育、壮丁の教育において、最も重要な課題は言葉の問題であった。沖繩の方言を標準語に統一することが県庁にとって喫緊の課題であったことが分かる。

68 宮城亀：中頭初等教育沿革，沖繩教育，義務教育延長記念，第31号，沖繩教育会，1908年，pp. 7-8。

69 近藤健一：(一) 会話伝習所，第三節 琉球処分直後の学校設置，第一章 学校が「大和屋」と呼ばれた頃，近代沖繩における教育と国民統合，北海道大学出版会，2006年，pp. 50-53。

また、「本土他府県とは趣を異にする沖縄の歴史的特性＝土着性に十分考慮がはらわれることなく、むしろそれを野蛮な「奇風異習」として蔑視し、抹殺する形で「皇民化」教育が進められた」⁷⁰。

日本の他の地方と異なる慣習や王国時代から続く言語・風俗・習慣は、同化教育を進める上で変更されるべきものとして「風俗改良運動」として推進されていった。このような変化が沖縄では、急速かつ強引に進められていった。

そのなかで、標準語励行の意義として、近藤健一は、「沖縄人教員は差別からの脱却という意味を持って沖縄人の標準語習得をめざし、それと一対のものとして教授用語として沖縄語を用いないことを考えた」⁷¹と記している。一方、照屋信治は、「沖縄という状況を前提とし、「本県の位置をして他府県と比肩」させ「一躍再躍して其上を越すべき覚悟」を有するとき、近代的な知識・技術を獲得する道具としての普通語はまさに「励行」されなければならないものであったと考えられる」⁷²としている。

本研究では、このような状況を踏まえて、沖縄県設置以降、空手道の呼称にするべきであるという統一した見解が沖縄内でまとめられるまでの時期に、琉球国時代の唐手がどう位置づけられ、呼称の変遷がどのように行われたのかを追っていき、沖縄空手の呼称の変遷を考察する。

第5節 史料

沖縄空手の主な研究史料として、文献史料や前近代から伝わる武器・武具・鍛錬具(遺物を含む「モノ」)や口承、近代沖縄以降に継承された型等があげられる。口承やモノについては、他の文献史料との比較、検証が必要であろう。

このような史料は、琉球処分や沖縄戦の戦禍等によって消失・散逸してしまい、沖縄

70 この状況は、明治政府（県庁）が教育方針として進めていったのであるが、「沖縄内部からも『国民的同化』を高唱しつつ積極的に政府＝県の教育方針に迎合荷担する勢力も徐々にうまれていた」（金城正篤：方言論争，金城正篤・上原兼善・秋山勝・仲地哲夫・大城将保：沖縄県の百年，山側出版社，2005年，p. 8）。

71 近藤健一郎：1 近代における方言札の出現，方言札 ことばと身体，社会評論社，pp. 46-47，2008年，pp. 46-47。

72 照屋信治：第3章 1910年代の『沖縄教育』誌上の「新人世代」の言論御一親泊朝擢の編集記を中心に一，溪水社，2014年，pp. 156-157。

空手の実証的な研究を難しくしている⁷³。

琉球処分後、明治政府は、多くの王国史料を没収して内務省に保管していたが、1923年の関東大震災でその大半を消失している。また、沖縄戦では、首里城をはじめ王国時代の文化遺産が壊滅的な打撃にさらされ、その戦火の中で、1424年から1867年までの中国や朝鮮・東南アジア諸国との往来文書を綴った琉球王国の外交文書である『歴代宝案』の原文書を始め、多くの貴重な王国史料を失ってしまった⁷⁴。

琉球処分後の沖縄の社会状況は、復国運動や風俗改良運動⁷⁵が行われ、同時代の沖縄空手の継承者の記録や口承は記録としてほとんど残されず、不明な点が多い。このことは、史料の散逸・消失の問題とともに、琉球・沖縄が日本と中国の政治・外交的な関係の影響によって沖縄空手がどう記録されたのか、あるいは当時の状況から記録が残されなかったのかどうかの検討が必要であることを示唆している。

また、沖縄戦によって、アメリカ軍を主体とする連合軍の上陸とともに、約3ヶ月にわたって無差別に多量の砲弾が撃ち込まれた。そのため、一般住民を巻き込んで人的・物的に甚大な戦禍に見まわられた⁷⁶。沖縄空手の指導者も沖縄戦の前後に本部朝基、喜屋武朝徳、新里仁安、花城長茂、徳田安文、知念三良、金城松、山田義輝、又吉真光、上地完文らが亡くなっている⁷⁷。

沖縄県立図書館や沖縄郷土博物館（現沖縄県立博物館の前身）等の文化施設も全焼し、ほとんどの史料が消失した。また、戦前の歴史・政治・社会・経済・文化等の記事が掲載された地元で刊行された新聞や教育関係誌等の刊行物も被害を被った。沖縄では、これまで本土の大学や国会図書館等で保管されていたものを複写したり、今日においても研究者や収集家達の努力と協力によって、紙面単位や記事の切れ端さえ発掘・収集され、

73 とくに琉球国時代の首里王府関係の公文書や家譜史料をはじめ、近代沖縄の人々の動向が記録された新聞、雑誌、単行本などの文献などは数多くが混乱や戦禍によって消失、散逸した。この中に、沖縄空手に関連する文献史料やモノも含まれていたと考えられる。

74 赤嶺前掲書54, 消失した王国史料と新しい研究, pp. 14-15。

75 安里前掲書39, p. 3。

76 約20万人もの戦死者があり、日本人188, 136人中、沖縄県出身者122, 228人で「県民の根こそぎ動員による」正規軍を上回る一般人9, 400人が犠牲となった。

77 高宮城繁・仲本政博・新里勝彦編著：沖縄空手古武道事典，柏書房，2008年，pp. 717-716。

貴重な歴史史料となっている⁷⁸。

沖縄空手の文献史料については、戦前までに刊行された論文、専門書、雑誌等が確認できなかったり、稀覯本となって入手が困難であった。このことは、戦後の沖縄空手の研究で文献史料の比較・考察、再検証が十分にできないまま、多くの課題を残してきた要因となった。さらに、戦後、1972年に日本復帰するまで米軍統治下にあった沖縄と本土との交流が困難な状況にあり、学術的な研究は滞ってしまったことも挙げられる。

今日では、長年にわたって沖縄空手の文献史料を収集してきた指導者や研究者らがその貴重な文献を公的機関に寄贈して、新たに確認された史料を含めて、誰もが活用できるようになった。戦前期の稀覯本の多くも、特に地元の出版社の努力によって基本となる文献の復刻が進み、入手できるようになってきた。(表-1)

2017年3月にオープンした沖縄空手会館は、沖縄県によって「沖縄伝統空手を独自の文化遺産として保存・継承・発展させ、「空手発祥の地・沖縄」を国内外に発信するための

78 下地聡子：近代沖縄における新聞の変遷，沖縄県史，各論編 第5巻 近代，pp. 262-263。

拠点」として設置された。全国的に見ても希な公共施設であり、錬成道場とともに展示

| | 年 | 和暦 | 月 | 日 | 書名 | 緒編者 | 出版社等 | 頁 | 復刻 |
|----|------|------|----|----|----------------------------|---------------|-------------|-----|----|
| 1 | 1922 | 大正11 | 11 | 25 | 琉球拳法 唐手 | 富名腰義珍 | 武侠社 | 284 | ● |
| 2 | 1925 | 大正14 | 3 | 10 | 錬胆護身 唐手術 | 富名腰義珍 | 大倉廣文堂 | 304 | ● |
| 3 | 1926 | 大正15 | 5 | 5 | 沖繩拳法唐手術 組手編 | 本部朝基 | 唐手術普及会 | 58 | ● |
| 4 | 1930 | 昭和5 | 1 | 10 | 拳法概説 (ガリ版刷り) | 三木二三郎・陸奥瑞穂共編 | 東京敵国大学拳法部 | 183 | |
| 5 | 1930 | 昭和5 | 6 | 1 | 拳法概説 (改訂活字版) | 三木二三郎・陸奥瑞穂共編 | 東京帝国大学唐手研究会 | 242 | ● |
| 6 | 1932 | 昭和7 | 3 | 17 | 私の唐手術 | 本部朝基 | 東京唐手普及会 | 97 | ● |
| 7 | 1933 | 昭和8 | 2 | 11 | 富名腰義珍先生還暦記念詩文集 | 植村常次郎 | 大日本唐手研究会 | 105 | ● |
| 8 | 1933 | 昭和8 | 8 | 15 | 唐手拳法 全 | 陸奥瑞穂 | 東大唐手研究会 | 482 | ● |
| 9 | 1934 | 昭和9 | 3 | 5 | 攻防自在 護身術空手拳法 | 摩文仁賢和 | 大南洋社 | 160 | ● |
| 10 | 1934 | 昭和9 | 7 | 20 | 唐手術の研究 | 糸満盛信 | 新光閣 | 201 | |
| 11 | 1934 | 昭和9 | 10 | 25 | 攻防自在・空手拳法 十八の研究 | 摩文仁賢和 | 空手研究社興武館 | 176 | ● |
| 12 | 1934 | 昭和9 | 12 | 5 | 空手研究 第一集 | 仲宗根源和 | 空手研究社興武館 | 135 | ● |
| 13 | 1935 | 昭和10 | 5 | 25 | 空手道教範 | 富名腰義珍 | 廣文堂書店 | 302 | ● |
| 14 | 1935 | 昭和10 | 10 | 28 | 攻防自在護身拳法 空手道入門別名・空手独習 | 摩文仁賢和・仲宗根源和共著 | 空手研究社興武館 | 210 | |
| 15 | 1936 | 昭和11 | 2 | 12 | 空手道集成 | 松本信雄編 | 慶應義塾体育会空手部 | 350 | |
| 16 | 1936 | 昭和11 | 7 | — | 琉球拳法空手術の話 呼吸を整ふ可き話 (ガリ版刷り) | 高良昭昌 | 高良昭昌 | 350 | |
| 17 | 1937 | 昭和12 | 5 | 14 | 空手の話 理想的体育・護身・錬胆法 | 仲宗根源和 | 指南社 | 57 | ● |
| 18 | 1938 | 昭和13 | 3 | 25 | 攻防自在護身拳法 空手道入門別名 空手術教範 | 摩文仁賢和・仲宗根源和共著 | 京文社書店 | 209 | ● |
| 19 | 1938 | 昭和13 | 5 | 5 | 空手道大観 | 仲宗根源和著 | 東京図書株式會社 | 414 | ● |
| 20 | 1939 | 昭和14 | 1 | 29 | 空手道真髓 全 | 釘宮幸雄・植村和堂編 | 大日本空手道松濤館 | 51 | |
| 21 | 1940 | 昭和15 | 9 | 20 | 空手術指導教本 | 空手振興会 | 大衆社書店 | 89 | |
| 22 | 1941 | 昭和16 | 9 | 20 | 増補 空手道教範 | 富名腰義珍 | 廣文堂書店 | 302 | ● |
| 23 | 1944 | 昭和19 | 6 | 15 | 拳武雜考 | 糸満盛信 | 武富吉臣 | 105 | |

●は復刻済み

作成:嘉手苺 徹

表-1 戦前期に刊行された唐手・空手道の単行本一覧

室、史料室等が併設され、上述した寄贈史料や県によって収集された関連史料が所蔵さ

れている⁷⁹。これらによって、戦前期の文献史料や戦後の刊行物を比較・考察したり、口承や文献とのよりスムーズな検証作業の条件が整えられつつあるといえよう。

第6節 先行研究の検討

沖縄空手の呼称の変遷については、今日では空手道史の中で取り上げられている。そのため、「呼称の変遷と型」で述べたように、文献史料の比較や口承の研究によって、関係者の意図や時代の政治的・社会的・文化的状況が反映していることに着目して沖縄空手の創造と展開を明らかにする作業は、一部の研究だけでほとんど手つかずのまま、呼称の変遷に対する問題意識には至っていないものと考えられる。

戦後の沖縄空手の研究では、主要なテーマは、空手道の定義づけ、歴史、技法の特徴、沖縄史との関連、練習方法、型、試合、ルールなどを明らかにすることである。とくに競技としての空手道は戦後において土台をなすものであり、ルールに基づく試合方法とその技法・練習法が重要なテーマとなっている。先述したように呼称の変遷をテーマにした学術研究はほとんど見られないが、空手道の指導者や研究者によって著された単行本や文献の中の呼称の問題は、歴史の一部として論じられている。

とくに沖縄空手の歴史は、戦前期に書かれた単行本や論文が原典として扱われて引用されるか、または、その内容に新たな推論を重ねて論じられている傾向があると考えられる。また、空手道は流派が基盤となっているので、流祖の歴史観が強く反映される傾向にあることである。このような特徴から、沖縄空手の呼称の変遷に関する問題は、ほとんど取り上げられないまま、今日に至っているといえよう。

呼称の変遷に関して論じられた共通する問題では、以下の点が挙げられる。

- (1) 沖縄空手の起源として「^{てい}手」の言説が検証されずに引用されていること
- (2) 琉球の徒手武芸が「^{てい}手」と中国拳法の融合によって発達したとすること
- (3) 沖縄空手の「唐手」「首里手」「那覇手」「泊手」などの呼称が検証されずに引用されていること

などである。これらの問題が生じる理由には、次の3つが考えられる。

- 1つ目は、沖縄空手の同時代の史料が乏しいこと

79 沖縄空手関係寄贈文献の所蔵は、岸秋正寄贈文庫（沖縄県立公文書館）、金城裕寄贈文庫（沖縄県立図書館）、高宮城繁（沖縄空手会館）、中村保夫寄贈文庫（沖縄空手会館）がある。

2つ目は、流派の発生によって沖縄空手の歴史を解明する上で組織的な対応が常にあること

3つ目は、近代という時代状況が反映しているところから比較・検証作業を行う視点が欠如していること

である。

呼称の変遷を手がかりにして、近世琉球の徒手武芸から沖縄空手の創造と展開を明らかにする学術的な研究は、管見の限り、嘉手苺徹「『手』から『唐手』」⁸⁰以外には、確認することはできなかった。また、嘉手苺の学会発表が3件ある⁸¹。

「『手』から『空手』へ」は、近世琉球の数少ない史料に示された琉球の徒手武芸がどのような時代背景と理由から呼称が名づけられたのか、また、その意味づけには、沖縄空手の指導者だけでなく、関係者の意図が複雑に関係して、自称や他称の呼称として変遷してきたことを明らかにしている。さらに、沖縄空手の起源とされる「^{てい}手」と中国拳法の融合によって新たな徒手武芸が生み出されたとされ発達論としてのとらえ方が検証されずに定説化されていると論じている。つまり、「^{てい}手」は、空手の全体像を模索して明らかにしようと船越義珍や伊波普猷等によって、近代沖縄以降に琉球の徒手武術を総称する呼称として議論されてきたことが論じられている。嘉手苺は、「^{てい}手」の言説は、日本語の語意としての「手」（武芸などの型、技術など）⁸²に対して、沖縄語の「^{てい}手」が、琉球の徒手武芸の固有名詞として使用されていたという言説が検証されずに定説化されたものではないかと論じている。

本論文では、呼称の変遷の重要性に着眼しつつ、沖縄空手の諸相を明らかにしようと

80 嘉手苺徹：「手」から「唐手」へ，島村幸一編：琉球 交差する歴史と文化，勉強出版，2014年，pp. 354-365。

81 (1) 嘉手苺徹：空手の名称の変遷空手の名称の変遷－①「手（^{てい}手）」から「唐手（からて）」への変容，日本武道学会第43回大会，研究発表抄録，日本武道学会，2010年，p. 14. (2) 嘉手苺徹：空手の名称の変遷－②「唐手（からて）」から「空手道」への変容－，日本武道学会代44回大会，研究発表抄録，日本武道学会，2011年，p. 22. (3) 嘉手苺徹：「空手の呼称の変遷にみる“沖縄の文化的アイデンティティ”のダイナミズムとゆらぎ」，復帰40年沖縄国際シンポジウム報告書，復帰40年沖縄国際シンポジウム報告書実行委員会，2012年，p. 73。

82 日本国語大辞典第2版編集委員会：日本国語大辞典 第2版，第9巻，小学館，2001年，p. 508-509。

し、船越と伊波の「手」言説の再検証の必要性を論じてはいるが、その検証には至っていない。

呼称の変遷についての嘉手苺の学会発表は、次の3つの論題で行われている。

- (1) 「空手の名称の変遷－①「手（ティー）から唐手（からて）へ」⁸³
- (2) 「空手の名称の変遷－②「唐手（からて）」から「空手道」への変容－」⁸⁴
- (3) 「空手の呼称の変遷にみる“沖縄の文化的アイデンティティ”のダイナミズムとゆらぎ」⁸⁵

で発表された要旨は、呼称の変遷が沖縄空手の創造と展開を象徴する様々な問題を内包していることを提起している。

(1)の発表では、空手の呼称の変遷を明らかにするには、①琉球伝来の「手（ティー）」に関わる問題、②中国武術伝来に関わる問題、③近代空手成立に関わる問題を明らかにする必要があると指摘している。特に、「手」に関する史料が見あたらないことから「手」の言説の再検証を指摘している。近世琉球以降、文献史料では、沖縄空手は「手ツクミ（ノ術）」、「拳法術、トツクロウ」、「唐手」、「支那手」、「手拳 又は唐手」、「鉄拳」、「無手勝流」、「無手空手」等として表わされるが、学校教育への導入によって「唐手」として収められ、明治後期から「唐手即ち空手」の表記も見られるとしている。

本発表は、文献史料から確認された呼称の変遷を辿ってはいるものの、これまでの「手」に対する再検証への問題意識は弱く、その位置から中国武術の伝播と近代空手の成立の問題などが提起されている。さらに、種々の呼称を分析する上で必要な呼称の持つ区別の問題は取り上げられていない。

(2)の発表では、「唐手」の呼称の初出に触れ、近世琉球から社会的に認知された沖縄と大学空手部を足がかりに普及していく本土では、「唐手（からて）」から「空手道」への変遷は異なり、様々な比較、検討が必要であることを指摘している。「空手道」の呼称は、本土、沖縄において一般化が進むが、流派を母体とする空手道の概念は、今日多様化しているのが実状であるとしている。また、空手道の呼称が一般化されつつある中で、沖縄戦に突入した時期に「唐手」の表記が、戦時中にも使用されたことを指摘してい

83 嘉手苺前掲書81, 空手の名称の変遷空手の名称の変遷－①「手（ティー）」から「唐手（からて）」への変容。

84 嘉手苺前掲書81, 空手の名称の変遷－②「唐手（からて）」から「空手道」への変容－。

85 嘉手苺前掲書81, 空手の呼称の変遷にみる“沖縄の文化的アイデンティティ”のダイナミズムとゆらぎ。

る。

しかし、唐手が、本土と沖縄において空手道へと改称しなければならなかった理由や戦時中の唐手の使用については、時代的な背景と日本の武道との関わりをもとにした考察が不十分である。

(3) の発表では、「空手の名称は〈手(ティー)〉・〈組合術〉・〈拳法〉・〈唐手(トーデー)〉・〈唐手(からて)〉・〈空手〉・〈空手道〉等々と変遷」⁸⁶してきたとされるが、空手の起源や中国拳法の伝播に関するとらえ方は、大正期以降に論じられた船越(富名腰)義珍、伊波普猷等の言説が現在でも根強く影響していることが重要な課題として指摘されている。空手の呼称の変遷を明らかにするには、史料の乏しい理由を考慮する必要があるが、沖縄で刊行された戦前の新聞や教育関係資料・雑誌等から唐手が教育的な価値を持つことによって、県各地に普及したことや本土や海外にも普及が促進したことを指摘している。また、これまで扱われなかった新聞記事、教育関係資料・雑誌等から船越義珍、伊波普猷等の言説を検証している。その結果、空手の呼称の変遷は、単線的に見られたのではなく、琉球・沖縄と日本、中国との関係性が複雑に反映され、明治国家の枠組みの中において、自己(沖縄)を積極的に確立するための「沖縄アイデンティティ」の形成の問題に関わっており、呼称の変遷の研究は、きわめて現代的な意義を持っていると結論づけている。空手の呼称の変遷が単線的に行われたのではないこと、沖縄のアイデンティティの問題を含んでいる指摘は重要である。

しかし、このような空手の呼称の変遷に関する研究について、琉球・沖縄の歴史、時代背景、呼称の持つ詳細な区別の問題、言葉の問題等が複合して生み出されていることや空手の諸相を明らかにする上で、様々な問題を象徴的に著していることは、未整理の部分が多く、総体的に着想・発想の段階にあり、史実の誤解の部分も見られる。本研究では、戦前期の単行本や論文、新聞や教育関係誌、口承などをさらに比較・検証し、実証的に戦前期までの沖縄空手の創造と展開を明らかにすることを試みている。

86 高宮城他, 前掲書77, p. 125。

第1章 琉球の徒手武芸 —多様化した琉球の武芸—

第1章 琉球の徒手武芸 —多様化した琉球の武芸—

第1節 はじめに

琉球で徒手の武術が発達したことについて、東恩納寛惇は、『琉球拳法唐手』¹の序文に、「武術発達の際路から考へて見ると、攻撃又は防衛の為には、何等かの武器に便るのが本始であつて、武器なしに、其の目的を達しようと思ふのは、余程思想の進んだ後の事であらねばならぬ。少くとも、武術と云ふものが消極的に、精神の修養又は身体の鍛錬等と云ふ第二義的に考へられて来た以後の事と思ふ」²と記している。琉球の徒手武芸は、本来の実用としての武術としての役割が薄れ、最も効率的な武器を用いず、精神の修養や身体の鍛錬等が第二義的に考えられた後に発達したと論じている。近世琉球は、薩摩藩の支配下にあり、古琉球のような国防の軍事体制がなくなり、軍隊を持たなかったことから、東恩納の指摘は的を射ていると考えられる。中国拳法が独自性を持って琉球化した重要な要因といえよう。

本研究では、琉球の徒手武芸は、技法の継承と鍛錬法として型を媒介にしていたかどうかを重要な質基準として、琉球の徒手武芸を考察していく³。

本章では、まず、島津侵攻後の琉球国において、首里王府は士族の武芸に何を求めたのか、王府が1667年に布達した『羽地仕置』⁴によって見ていく。王府の役人としての勤めを果たすため、士族が嗜むべき諸芸百搬が示され、その中に「馬乗方之事」⁵が含まれている。

また、『羽地仕置』がどのように実践されたのかを那覇の士族が残した「阿嘉直識遺

1 富名腰義珍：琉球拳法 唐手， 武俠社， 1922年， 281p.。

2 東恩納寛惇：序， 富名腰義珍：琉球拳法 唐手， p. 15。

3 寒川恒夫編：3 スポーツの起源と伝播， 教養としてのスポーツ人類学， 大修館書店， 2004年， pp. 26-28。

4 『羽地仕置』は、向象賢（羽地朝秀）の摂政期（1666～1673）に布達された文書を集成した文書集である（高良倉吉：羽地仕置， 沖縄大百科事典刊行事務局：沖縄大百科事典， 下巻， 沖縄タイムス社， 1983年， p. 241）。東恩納寛惇：仕置原文， 校注 羽地仕置， 東恩納寛惇全集2， 第一書房， 1978年， pp. 159-160。東恩納前掲書， 三 解題， pp. 221-231

5 沖縄県沖縄史料編集所：羽地仕置， 沖縄県史料 前近代1， 沖縄県教育委員会， 1981年， pp. 24-25。

言書」⁶（以下、「遺言書」と記す）を分析することによって、士族はどのような態度で武芸に望んでいたのかを考察する。武芸には中国拳法が琉球化したからむとうが含まれている。琉球化した中国拳法、剣術とやわらと同様に嗜まれる士族の武芸としてのからむとうの位置づけによって、琉球の徒手武芸の様々な側面を垣間見せてくれる。とくに、「遺言書」によってこれまで琉球への中国拳法の伝播を『大島筆記』に頼っていた見解は、さらに詳細な再検証が必要になると考える。

次に、『大島筆記』⁷を考察すると、中国拳法が琉球で披露されたことが記されている。沖縄空手が研究対象となって以降、『大島筆記』は中国拳法が伝播した裏づけとなる史料として扱われてきたが果たしてそうなのか。『大島筆記』は、東恩納寛惇⁸、真境名安興⁹、伊波普猷¹⁰等が沖縄空手の源流を説く際に『大島筆記』を取り上げてきた。その研究は、船越義珍¹¹、摩文仁賢和¹²、宮城長順¹³、仲宗根源和¹⁴等にも影響を及ぼしていった。しかし、これまで研究の比較、検討や検証作業はほとんどなされていないのが実

6 原題は「阿嘉親雲上直識愚息松金直秀へ相教候遺言之条々」。「阿嘉直識が一子直秀に書き残した教訓書である。2部からなり、第1部は1778年直識58歳、直秀6歳のときに書いた遺書で、第2部は5年後の83年1月に、前者を補うために書き足した部分である。この間に地頭所が阿嘉から大田に変わったため、第2部の署名は大田親雲上となっている」（小島瓊禮：阿嘉直識遺言書，沖縄大百科事典，上巻，p. 23）。

7 「戸部良熙著。1762年、琉球から薩摩へ向かった楫船が大風にあい、土佐藩の柏島に漂着、宿毛の大島に回航されたとき、藩の儒者戸部良熙が、使者の潮平盛成以下に尋問してまとめたもの」（池宮正治：大島筆記，沖縄大百科事典，上巻，pp. 394-395）。

8 東恩納前掲書2。東恩納寛惇：東恩納寛惇全集9，第一書房，p. 248。

9 真境名安興：沖縄一千年史，真境名安興全集，第1巻，琉球新報社，1993年，pp. 232-234。

10 伊波普猷：古琉球の武備を考察して「からて」の発達に及ぶ，伊波普猷全集，第5巻，平凡社，1974年，pp. 212-213。

11 富名腰前掲書1，第1章 唐手とは何ぞや，pp. 2-3。

12 摩文仁賢和・仲宗根源和：攻防自在護身拳法空手道入門別名空手独習の手引き，興武館1935年，p. 67。

13 宮城長順：唐手道概説（琉球拳法空手道沿革概要），糖華，第2号，大阪糖業倶楽部，1936年，p. 13

14 摩文仁賢和・仲宗根源和：攻防自在護身拳法空手道入門別名空手独習の手引き，興武館1935年，p. 67。

状といえよう。今日においてもそのことは変わっていない。本研究では、再検証によって浮かび上がる問題を考察する。

琉球人の武術は、薩摩藩士にどのようにとらえられていたのか。そのことを如実に示しているのが『薩遊紀行』¹⁵と『南島雑話』¹⁶である。『薩遊紀行』は、唐手の武術性や鍛錬法、薩摩藩士や肥後藩士から見た琉球の徒手武芸を知ることができる史料であり、時期的に『阿嘉直識遺言書』と『南島雑話』の間にあつて、近世琉球の徒手武術に関する数少ない文献史料を繋ぎ合わせて解することができる。また、琉球の徒手武芸の「秘密性」や継承のあり方の俗説等に迫っていくことができると考えられる。薩摩藩士は、琉球の徒手武芸を『薩遊紀行』では「手ツクミノ術」¹⁷と名づけている。また、『南島雑話』では「拳ツクニス法術・トツクロウ」¹⁸の呼称が添えられている。

1850年頃になると、琉球の徒手武芸は、「唐手」の呼称が使われてれるようになる。このことを示す3つの史料を考察する。

1つ目は、首里城正殿改築の祝賀として催された「木遣」¹⁹の聞き取り調査史料

2つ目は、尚泰王冊封後の祝宴に供されたとされる組踊の台本「二山和睦」²⁰

15 本史料は、1801年4月20日から5月30日までの間に熊本城を立ち、薩摩を旅した際に書かれた記録文である。その間に、肥後藩士や薩摩藩士、薩摩琉球館詰めの琉球人とあつて様々な話を聞き、交流を行っている。(漢那敬子：解題，史料紹介 岸秋正文庫文庫「薩遊紀行」，史料編集室紀要，沖縄県教育委員会 第31号，2006年，p. 215-218)。

16 恵原義盛：名越佐源太，沖縄大百科刊行事務局：沖縄大百科事典，下巻，沖縄タイムス社，1983年，p. 51。

17 漢那前掲書15，p. 233。

18 永井竜一：南島雑話補遺編5，鹿児島大学付属図書館蔵，1933年)

19 音楽家山内成彬が取材記録した史料。「木遣とは、材木を曳く時の音頭のことである」。「この木遣については口碑や文献に接したこともあまりなかったが、若いころ王城落成祝に出演した唯一の生存者たる90余歳の嘉数翁（大仲在）について採譜採録した」（山内盛彬：王城落成祝の木遣（チヤ yi）音頭，山内盛彬著作集，第2巻，沖縄タイムス社，1993年，p. 202-205)。

20 1866年、寅の御冠船の冊封使節団を歓待した翌年に催された御膳進上の組踊の演目（鈴木耕太：冊封の舞台に供された組踊，沖縄文化 第43号巻2号，沖縄県立芸術大学，2009年，p. 34-35)。

3つ目は、同祝宴の久米村人の上覧演目「三六九並諸芸番組」²¹である。

これらの史料は、それぞれが主に単独で内容が考察されてきたが、時期や内容は異なるものを関連づけて比較・考察することによって、これまで得られなかった新たな琉球の唐手像が浮き彫りになってくると考えられる。

第2節 日本の武芸と中国拳法の受容

第1項 首里王府の武芸奨励 — 『羽地仕置』 —

島津侵攻によって支配下に置かれて以降、首里王府はどのような性格を持ち、武芸はどう位置づけられたのか。

『羽地仕置』²²は、首里王府の摂政の役にあつた羽地朝秀が布達した文書集である。首里王府の士族はそれに則って政治を行い、後年にいたるまで継続された。1667年に出された次の布達は、当時の琉球における教育の根本方針となった²³。

その中に、

「 覚

| | |
|--------|--------|
| 一学文之事 | 一算勘之事 |
| 一筆法之事 | 一謡之事 |
| 一医道之事 | 一庖丁之事 |
| 一容職方之事 | 一馬乗方之事 |
| 一唐楽之事 | 一筆道之事 |
| 一茶道之事 | 一立花之事 |

右之芸若キ衆中達常々相嗜国司之用可立儀専要候右之内一芸ニ而茂不嗜方者縦無余

21 島袋全発：打花鼓，島袋全発著作集，おきなわ社，1956年，pp. 295-307。

22 高良倉吉は、「首里王府仕置」の解題において、「『羽地仕置』は向象賢（羽地按司朝秀）の1666年から1673年に布達された文書を集成したもので現存する史料の中では首里王府の政治路線をまとめた形で伝える最古のものである」と記している。（高良倉吉：解題，沖縄県沖縄史料編集所：沖縄県史料，前近代1，沖縄県教育委員会，1981年，p. 8）。

23 真境名安興：沖縄教育史要，真境名安興全集，第2巻，琉球新報社，1993年，p. 366。

儀雖為筋目被召遣間敷候間為心得前以触渡へく者也

四月廿三日

はねち

まふに

伊野波

くしかミ」²⁴

真境名は、「仕置書」の中には政務について微細に渉り、いろいろ緊要なことが書かれてあるが、これらは総て令達となって実行せられた²⁵という。この布達の全文については、首里王府の教育の根本方針となり、王府の奉公人として仕官する者の心構えや身につけるべき教養と位置づけられた。日本の曆を使用することを命じ、日本文化としての謡曲、茶道、立花等の芸道から学問、医術、算法、唐楽、乗馬等にいたるまで諸芸百般を奨励し、一芸一能のないものはたとえ名門の子弟といえども使途に就くことは許されずと厳達して、島津侵攻後の王府の立て直しを図っていった²⁶。

東恩納寛淳は、「大和芸能の奨励が薩摩との交際及び理解を深めるに十分役立った事は羽地仕置の奏功と云えよう²⁷と、日本の諸芸を学ぶことが薩摩との交流で大いに役立ち、羽地の功績の大きかったことを記している。

島村幸一は、「古琉球時代に上級士族に享受されていた日本、並に中国の学芸を若い一般士族達の学ぶべき学芸として提示し、任官の条件にしたものと理解されるもの」であり、「近世琉球期において日本の学芸は学ばれねばならない環境があったということであり、島津との交流のなかから自ずと流入した日本の文化をも含めて、相当程度に受容されていたことが考えられる²⁸としている。

これらの指摘は、布達によって王府の上級士族のみならず、一般士族まで日本と中国の諸芸が受容されていたことを示しており、武芸についても階層にかかわらず、幅広

24 史料編集所前掲書22, pp. 24-25。真境名前掲書23, p. 366。

25 真境名前掲書23, p. 366。

26 真境名前掲書23, p. 366。

27 東恩納寛淳：昔の風体に罷成らざるよう、校注羽地仕置、1952年、東恩納寛淳：東恩納寛淳全集2, 第一書房, 1978年, pp. 211-213。

28 島村幸一：琉球船、土佐漂着史料にみる日本文芸の享受、立正大学国語国文, 第46号, 立正大学国語国文学会, 2008年, pp. 64-65。

く嗜まれていたことがうかがわれる。

それでは、武芸との関わりにおいて『羽地仕置』は士族に何を求めていたのか。

真栄平房明は、「幕藩制国家の琉球支配の特質を考える上で、その根幹に関わる論点の一つは「武」をめぐる問題である」²⁹として、幕府が「武」を独占して維持するために出した「武器輸出禁止令と軍備のあり方」³⁰を再検証している。この研究から、鉄砲は特に厳しく取り締まられたことやその他の武器についても様々な条件が出され、薩摩藩士をはじめ、王府（士族）も厳しく取り締まったとしている。その結果として、「第1に、幕府法としての武器輸出禁令が広く琉球にも及び、拘束力を持ったこと、第2に、この法度を背景に薩摩藩は武具の管理統制を強力に推し進め、琉球の支配秩序をコントロールした」³¹としている。王府が国防を備え、武器を扱ったり、輸出、移動することを幕府は、厳しく取り締まった。その影響から「日本社会と比べると、琉球では武士でも帯刀しない非武装的な特徴をもつが、その根底には薩摩藩の政策による強力な武器統制があった」³²と考察している。

このことは、国防に関する武備の厳しい統制であり、琉球士族がまったく武器を持たず、武芸を禁じられていたとはいえ、それを示しているのが諸芸奨励の一項である。

「馬乗方之事」³³とは、直接的には馬術に関わることを示し、琉球には日本から馬術が伝わり、馬医や曲馬術を薩摩で学んでいる³⁴。沖縄の年中行事として各地で盛んに行われていた競馬（馬揃え）の伝統が栄えた理由も関わりがあるとしている³⁵。 （図一

5）



図一 5 瀨原の馬揃え

（那覇港（琉球貿易屏風），江戸時代図誌，第24巻，1977年，筑摩書房，p. 42. より転載）

29 真栄平房昭：16～17世紀における幕藩制支配，沖縄県史，第4巻，近世，2005年，p. 49。

30 同上書，pp. 49-53。

31 同上書，pp. 52-53。

32 同上書，pp. 49-52。

33 真境名前掲書23，p. 366。

34 真境名前掲書23，p. 380-381。

35 真境名前掲書23，p. 380-381。

また、馬乗は、馬術に関することだけを示しているのではなく、冊封使歓待の祝

宴における演目として披露されていた走馬、刀のジャグル、槍術、舞剣、弄刀等日本の武芸と中国武術も含まれていたと見られる³⁶。

琉球国において士族の武芸は、学問、芸道、乗馬等王府に仕官するための嗜みとして諸芸百般の一芸として奨励され、その結果日本の武芸と中国武術は士族に受容されていたことがわかる。

尚敬王を封ずるために訪れた徐葆光『中山伝信録』³⁷には、「長弓短箭」の解説として、琉球の弓矢について、次のように記している。

「弓の長さは7尺あまり。地面に立てると高さは屋檐ほどある。中国の矢にくらべて、一握ほど短い。矢を射るときは、必ず地面に立てる握りをつかむときは、それは弓のまん中ではなくて、下の狭い所をにぎる」³⁸。(図-6)



図-6 冊封使が見た琉球の弓

(出典 原田禹雄，徐葆光中山伝信録，榕樹書林，1999年，p. 504. より転載)

36 原田禹雄：張学礼 使琉球紀・中山紀略，榕樹書林，1998年，p. 86-87。真境名前掲書2 3，p. 381。1615（尚寧王26年）、王府時代の画家自了（城間清豊）の兄が「槍棒の法を学ぶ」とある（球陽研究会：球陽 読み下し編，角川書店，1974年，p176）。

37 原田禹雄：徐葆光 中山伝信録 新訳注版，榕樹書林，1999年，pp. 5-4-505。

38 同上書，pp. 504-505。

とある。中国の弓とは違い琉球独自の長矢が使用されていた。徐は、中国との比較において、琉球の弓の独自性を記しているのである。これは軍備の兵器というより、「士たる者の学ぶべき六芸」として嗜まれているものと、原田は注釈している³⁹。確かに、描かれた琉球人の服装や射的の様子には戦の緊張感は感じられない。国防としての武備としては、薩摩藩（幕府）に厳しく統制されているものの、王府は個々の士族の武芸としては奨励し、日本の武芸、中国武術は身近にあって嗜まれていたといえよう。いずれも士族の教養としての嗜みであり、個別には王府に使える役人としての心構えや護身術を目的に取り組みられていたとみることができる。

第2項 那覇士族の徒手武芸 — 「阿嘉直識遺言書」 —

『羽地仕置』⁴⁰から約100年後の1778年、那覇の士族阿嘉親雲上直識（以下、阿嘉と記す）は、生前息子に書き記した「阿嘉直識遺言書」^{41 42}（以下、「遺言書」とする）には、那覇士族が日本の武芸と中国武術の影響を受けつつ、武芸にどのように臨み、実践していたのかをうかがい知ることができる史料である。

「遺言書」の原本は、沖縄県立図書館に所蔵されていたが、沖縄戦で消滅した。当時図書館の主事であった島袋源一郎は、1941年、「遺言書」を活字化して『沖縄教育』⁴³に掲載した。東恩納寛惇は、その史料的価値から『沖縄教育』から、翌年『歴史と国文

39 同上書，p. 505。

40 真境名前掲書23，pp. 366-388。

41 東恩納寛惇：阿嘉直識遺言書，歴史と国文学，第27巻21号，太洋社，1942年，pp. 24-38。

42 東恩納寛惇：阿嘉直識遺言書，歴史随筆，東恩納寛惇全集5，第一書房，1978年，pp. 425-438。

43 阿嘉直識：阿嘉親雲上の遺言書，沖縄教育，沖縄県教育会，1941年，pp. 18-24。

学』⁴⁴に注解を施して発表した⁴⁵。戦後、1953年には、『琉球新報』に連載して報告している⁴⁶。さらに、1958年3月には『沖縄今昔』に付録として所収した^{47,48}。東恩納は、「遺言書」の子孫を長年探し求めていたことから、ついに、自身の母校（現沖縄県立首里高校）の校長をしていることを突き止め、1958年11月、母校で「全沖縄の青年子弟に対する遺言書でもある」との趣旨で生徒達のために講演を行い、講演テープが起こされ、学校誌に発表された^{49,50}。

阿嘉の先祖は、尚真王代に25歳で八重山征伐の大將となった「阿波根真五良」直張で、阿嘉はその10代目にあたる子孫で、「遺言書」は、阿嘉自身が13歳から実践した修業時代のことが表されているのである。「遺言書」は、1部が25項目、2部が4項目で全体が29項目の条文からなっている。その中で武芸に関わる内容が数項目あり、九項目の次の一文にも見られる。

「一、諸芸能稽古方の儀、漢学和学書札の法式文章書付の類、士の第一の芸能にて候間、日夜不怠様に可相学候、次に古実方仕付方謡の稽古、次に活花茶道示現流、心懸可相嗜候、示現流の儀御当地にては何ぞの御用にも不相立候得共、先祖より武芸の家にて、且は士の家に生れ、自分に差当りこれはの時または平日気持心持怠さる励に相成候間手足身を不痛様に余力の時分に稽古可致候、根本の稽古方の障に不成様に忍ひくに稽古可有之候、からむとうやはらなどは稽古に不及候、示現流の儀少々稽古いたし候とて傍輩

44 東恩納前掲書41, pp. 24-38。

45 「原本は沖縄県立図書館強度質の蔵に係り、先年島袋全発氏館長時代の採蒐である。私は、昭和14年帰省の折、同所で一見したが、卷子本に実直に認められてみたやうに記憶してゐる。其時には詳細味読するには至らなかつたが、昨16年の12月号沖縄教育誌にその全文が発表されたので読みかへして見ると、沖縄へ伝はつた国学の伝統及び旧時代に於ける士流の家庭並官場生活の実際を知る上に貴重な文献と思はれるので、註を加へて紹介する事にした」と、その経緯を述べている（東恩納同上書）。

46 東恩納寛惇：阿嘉親雲上遺言書，琉球新報，1953年4月24日～28日（東恩納前掲書41，東恩納寛惇全集5，pp. 439-447）。

47 東恩納寛惇：付録阿嘉直識遺言書，沖縄今昔，南方同胞援護会，1958年，pp. 168-191。

48 東恩納前掲書42，東恩納寛惇全集5，pp. 409-421。

49 東恩納寛惇：講演『阿嘉親雲上遺言書』について，養秀，第1号，1975年，pp. 38-59。

50 東恩納前掲書51，『阿嘉直識遺言書』について，東恩納寛惇全集5，pp. 448-472。

衆へ相交、言あらそひ打合なといたし、還て身をほろぼし大なる疵を求何分致後悔候とも益なく甚以不孝の至に候間、能々其慎を以稽古の嗜可致事」⁵¹。

士族（「士」）⁵²が身につけるべき中国と日本の学問、芸道等を掲げ、士族として必要な諸芸とその理由、臨む態度を詳細に直秀に書き示している。

士族として最も重要なことは、まず、漢学、和学に通じ、書状の様式や王府の公文の扱い方を覚え、書き方を身につけることが奉公人（士族）としての第一の使命であると説き、日夜怠らず学ぶように直秀を諭している。そして、生け花、茶道とともに、武芸の示現流、からむとう、やわらなどの芸道をあげ、先祖から武芸の家柄にあって、もしもの時や日頃の心構えとして日々怠らないようにと述べている。注目すべきは、示現流は、琉球では何の役にも立たないとみていることである。第一の使命の稽古を忘れずに、武芸は差し障りの無いように人目を避けて稽古を行うようにとしている。からむとう⁵³やわらは稽古をするにも及ばないとする。示現流の稽古は慢心せず、怪我をして第一義としての諸芸の稽古の妨げにならないように諭している⁵⁴。

この一条によって、1778年に、琉球の士族に3つの武芸が同時に嗜まれていたことが示されている。阿嘉は、示現流、からむとう、やわらの武芸をどのような態度で臨み、取り組んでいたのか、次のことが指摘できる。

(1) 武芸の家柄にある阿嘉家にとって嗜まれなければならない一芸であること

51 東恩納前掲書42, 東恩納寛惇全集 5, p. 428。

52 東恩納は「士と武士」の一文で、「沖縄では、士（さむらい）というのは平民に対する士族、武士（ぶし）というのは、士族平民の別なく、単に武芸者のことである。武士の第一義の覚悟であるべき武芸を武士の名と共に棚上げして、残りの道義面だけを取り出し、別に「さむらい」という名義を立ててこれを包括した。この辺に特殊な社会理念があったように思われる」としている（東恩納前掲書42, 士と武士（その1）, 東恩納寛惇全集 5, pp. 360-361）。

53 本研究では、「からむとう」を「唐元」「唐無刀」と当てると、「唐」は「中国」、「元」または「無刀」は、「中国由来」または「刀を身につけていないこと」、つまり琉球に伝播した中国拳法と仮説を立てることができる。（嘉手苺徹：空手の名称の変遷空手の名称の変遷①「手（ティー）」から「唐手（からて）」への変容, 日本武道学会第43回大会, 研究発表抄録, 日本武道学会, 2010年, p. 14. における配付資料）。

54 東恩納前掲書42, 4 学問諸芸, 東恩納寛惇全集 5, pp. 442-443。

- (2) 那覇士族にとって、役人の勤めを果たすことが第一義であり、武芸の実用性は重要視されていないこと
- (3) 武芸が士族の心構えの養成と護身術のために嗜んでいること
- (4) 武芸を稽古する際に稽古によって身を傷めることがないように心掛けるようこと
- (5) 稽古が複数で行われていることがうかがわれること
- (6) 武芸の稽古場があることがうかがわれること
- (7) 対人稽古の競い合いがうかがわれること

からむとう、やわらは、示現流との比較において稽古にも及ばないとしているのは、その臨む態度に見られるように、武芸の特性にあると思われる。やはらの稽古は身体を直接接触させて行うことからより怪我をしやすいことが考えられる。からむとうもやわらと同様に位置づけられる。阿嘉は、仲間と言い争ったり打ち合ったりして怪我をするとかえって身を滅ぼすことになると念を押している。ここには、近世の武士道を第一義とする武士の思想はみられない。「武人」の武芸観とは異なり、王府の役人として忠義を尽くすという「文人」⁵⁵としての武芸観が琉球士族にうかがえるのである。

島袋源一郎が『沖縄教育』で「遺言書」を紹介したときには注解を付していない。東恩納は、『歴史と国文学』で初めて注を施して、示現流について、「薩摩に行はれた自源流剣法の事か」と記し、からむとうは「不明」としている。やはらには注を付けていない⁵⁶。東恩納がからむとうに「不明」とした点には疑問が残る。示現流とやわらの間に示されたからむとうは前後の文脈から見ても武芸の一つであり、日本の武芸には当てはまらなると考えられる。

1953年、東恩納は、地元の新聞に、「阿嘉直識遺言書」の見出しで、5回にわたって連載記事を掲載した⁵⁷。全集には、「一、由来」「二、家系」「三、内容」「四、学問諸芸」「五、馬元欽の関羽像と伊江君」「六、史役制度」「七、大和横目」「八、余論」としてまとめられている⁵⁸。戦後になって、新たな時代の中で改めて史料の意義を問い、掲載

55 この「文人」は、近世において日本の武家社会の「武士」に対置する意味で用いている。仲原善忠：琉球王国の性格と武器，沖縄と小笠原，4号，1958年，pp. 38-43。仲原善忠：仲原善忠全集，第1巻，沖縄タイムス社，1977年。

56 東恩納は、『沖縄今昔』所収の「付録阿嘉直識遺言書」では、やはらは「柔」と注解が施されている。からむとうは、「不明」のままである。

57 東恩納前掲書46。

58 東恩納前掲書46。

の目的が史料の大略を紹介して、大方の注意を喚起したいことにあると記している。

ここで問題としたい武芸については、阿嘉が「先祖より武芸の家に生まれたたしなみに、示現流の剣法を稽古した。剣法は、ご当地にては直接役にも立つまいが、士分の家に生まれてはイザといふ時は勿論のこと、平常の心の落付の為にも、武芸の心掛け第一である。さりとて、これに慢心を起こし、身を損ねる事あつては不幸この上ないから諸稽古事の妨げにならぬやう内々で修練すべき事」⁵⁹と、読者の理解しやすい要約となっている。しかし、ここでは、からむとうとやわらが省かれ、示現流だけをとりあげていることである。

また、1957年には、「士と武士」と題する随筆を2回にわたって連載している⁶⁰。（その一）において、「沖縄では、士というのは平民に対する士族、武士というのは、士族平民の別なく、単に武芸者のことである。武士の第一の覚悟であるべき武芸を武士の名と共に棚上げして、残りの道義面だけを取り出し、別に「さむらい」という名義を立ててこれを包括した。この辺に特殊な社会理念があったように思われる」⁶¹としている。その上で、「示現流（薩摩の剣法）の儀、御当地にては何ぞの後生にも相立たず候え共、先祖より武芸の家にて、且つは士の家に生まれ、自分に差当り、これはの時、または平日の気持ち心持怠らざるはげみに相成候間、手足身を痛めざるように、余力の自分に稽古いたすべく候」⁶²と、からむとうとやわらを省いて紹介している。さらに、阿嘉の家系が八重山征伐九番手の大将であり、有名を輝かした直張10世の孫にあたること、蔡温の『御教条』に「士と申すもの、その筋目百姓とは抜群相かわり、常々、忠義の心を題目に存じ、国土風俗のため何篇気を付け、神妙相つとめ」⁶³にあることを引用して、「道義をはげみ社会の風紀を正す事を以て士導第一の心得とし、役義実直に勤めることを奉公人の忠義としたもので、武芸のことには及んでいない」⁶⁴と記している。つまり、先祖より武芸の家系にある阿嘉が嗜んだ武芸を示現流に象徴させて、同時代の王府の奉公人としての役割と武芸との関わりにおいて、その目的は平常心と武芸の心がけを第一と

59 東恩納前掲書45, 東恩納寛惇全集 5, p. 442。

60 東恩納寛惇：士と武士（その一）（その二）（沖縄と小笠原，財団法人南方同胞援護会，1957年），沖縄今昔，東恩納寛惇全集 5，第一書房，1978年，pp. 360-365。

61 同上書，士と武士（一），東恩納寛惇全集 5，pp. 360-361。

62 同上書，p. 361。

63 同上書。

64 同上書。

しているのである。同時代の蔡温も「奉公人の忠義」が大事で、「武芸のことには及んでいない」としている。

また、(その二)では、「沖縄伝来の空手は今日ほとんど世界的に認められ、徒手空拳の義を取って空手と呼ばれるが、本来は唐手で中国から来たものである」⁶⁵とし、「宝暦十二年(1762)の大島筆記に、近世、公相君というもの渡来して武芸を伝えたと見えているから、確かなことであろう」⁶⁶とも記している。

1958年には、「付録阿嘉直識遺言書」として再び掲載された⁶⁷⁶⁸。「遺言書」の各項は、句読点や部分的に現代語的に書き換え等が施されているが、内容は原文とほとんど同じである。しかし、第9条の注には、「示現流(じげんりゅう)瀬戸口備前守が創めた自源流剣法の事、薩摩で行われた」とより詳しい内容が付され、からむとうは「不明」、やはらには「柔術」と記している⁶⁹。

同年、東恩納は、母校で「阿嘉直識遺言書について」と題する講演を行っている。これは、当日の録音テープから翻刻されており、ほとんどが口語体であるが、各条文と解説文は原文を要約してまとめられている⁷⁰。ここでの第9条は、

「一つ、諸芸能稽古方の儀、漢学・和学・書の法式・文章書付けの類、士の第一の芸能にて候間、日夜怠らざる様に相学ぶべく候。次に古実力・仕付け方・謡ひの稽古、次に活花・茶道・示現流、心懸け相嗜むべく候。示現流の儀、御当地にては、何ぞの御用にも相立たず候へ共、先祖より武芸の家にて、且つは士の家に生れ、白分に差当りこれはの時、または平日気持ち心持ち怠らざる励みに相成り候間、手足身を痛めざる様に、余力の時分に稽古いたすべく候。根本の稽古方の障りにならざる様に、忍び忍びに稽古これあるべく候。やわらなどは稽古に及ばず候」⁷¹。

と論じられている。からむとうは削除され、武芸は、示現流とやわらだけが取り上げら

65 東恩納前掲書60, 士と武士(二), 東恩納寛惇全集5, pp. 364-365。

66 同上書, pp. 364-365。

67 東恩納前掲書47。

68 東恩納前掲書48。

69 東恩納前掲書47, p. 183。東恩納前掲書48, pp. 417-418。

70 東恩納前掲書42, 書誌, 東恩納寛惇全集5, p. 22。

71 東恩納前掲書42, 歴史随筆, 東恩納寛惇全集5, pp. 448-472。

れている。からむとうという武芸の名称は、日本と中国には表れてこない。からむとうは、琉球人が名づけた、阿嘉が名づけた徒手武芸のことと考えられる。

からむとうは、中国拳法の伝播と琉球の徒手武芸の起源を考察する上で、重要な問題である。それでは、何故、後の新聞や単行本においても、東恩納はからむとうを「不明」として、講演においてはからむとうを削除していったのであろうか。

東恩納は、富名腰義珍著『琉球拳法唐手』の序文で、「カラ手」の由来に関しては、自分は、之れまで深く調査した事はないが、支那伝来のものである事は、各種目（型）の名称からでも断言出来ると思う」（かっこは筆者加筆）とし、その時期を「慶長4年尚寧王が鄭道を遣はして、冊封を請うた時に、神宗は勅して、従来会典に定むる所の文臣派遣の例を改め廉勇の武臣を使する事を命じたのである。して見ると、冊封使等の一行に由って支那の武術が伝へられたとすると、慶長以後武臣派遣の慣例となってからと見る方が至当ではないか」⁷²と記している。ここで注目したいのは、「併し其の伝来の事情如何はカラ手其のもの内容に左程問題とはならない」とも記していることである。これは、中国由来ではあるが、『琉球拳法唐手』は中国拳法とはすでに別の武術として発達したことを強調していると考えられる。

「遺言書」が発見され、近世琉球の士族が「全身全霊を打ち込んで」書き残した内容は、「これによって、古沖縄の芸文の性格をすら知る事が出来るもので、山里永吉君が、昔の沖縄人はこれほどの教養があったものかと驚嘆したのも尤もである」と記している⁷³。東恩納が「遺言書」の論文で最も強調したかったのは、王府時代の士族の教養人たる姿であった。武芸はその学ぶべき一芸であった。「遺言書」に記された士族の武芸は教養の一部であったが、からむとうを除くことによって史実から離れてしまった部分があったことがうかがわれる。

「遺言書」が初めて紹介されたのは1941年であり、船越義珍が師範を務める慶應義塾体育会はすでに唐手から空手道へと改称し、沖縄でも、唐手家や関係者の統一した見解のもとに空手道への改称が実現している⁷⁴。沖縄における改称問題の詳細は後述するが、中国拳法の伝播の時期や沖縄空手との関わりについての歴史の解明は、当時の世相を反映した社会問題ともいえる状況にあったのである。

「遺言書」には次の一条もある。

72 東恩納前掲書42，東恩納寛惇全集 9，p. 248。

73 東恩納前掲書42，東恩納寛惇全集 5，pp. 473-474。

74 名称を“空手”に統一し 振興会を結成！，琉球新報，1936年10月26日。

「一示現流は衡氏久場親雲上知途へ相附、多年稽古いたし相嗜置候、私家の儀は先祖よりもののふの家にて候間、諸稽古掛て忍び、に余力の時分不怠様に可相嗜事」⁷⁵⁷⁶。

阿嘉は、示現流を琉球人の衡氏久場親雲上知途くぼべーちんちとに多年にわたって師事している。1721（享保6）年生まれの阿嘉の年齢を考慮すると、1700年代初頭には、示現流は琉球士族の武芸として嗜まれ、琉球人の師範が指導に当たっている。示現流が琉球に伝播したことや久場親雲上知途が修行した時期からすると1600年代に遡ってもおかしくない。

また、阿嘉家には次の武器、武具、武芸書が所蔵されていた。

「一刀一腰無銘心二目貫ニッ有也先祖より曾祖直好稽古被致置候示現流の書、天流鍔長刀之書、楠正成遺言の三巻の書鍔一本奥和泉守作にて候六寸懐劍一信国作直好より刀一腰氏興作脇差一本無銘弓矢かなて共直好求之 右家の家宝にいたし、子孫へ可相讓候（後略）」⁷⁷⁷⁸

曾祖直好の代に、

- (1) 刀一振り
- (2) 示現流の伝書
- (3) 天流槍長刀の伝書
- (4) 楠木正成の三巻の書
- (5) 和泉守作の槍一本
- (6) 信国作の六寸の懐劍
- (7) 弓矢かなて等

を先祖から家宝として子々孫々譲り渡すようにとしている。

このことは直好も示現流などの武芸を嗜んでいたことがうかがわれる。示現流の伝播や琉球人の師範、曾祖直好の状況を考慮すると、1667年の布達の頃には、日本の武芸は那覇士族に嗜まれ、武器、武具、伝書が家宝として出回っていたことになり、布達の内

75 東恩納前掲書41, p. 30。

76 東恩納前掲書42, p. 431。

77 東恩納前掲書41, p. 31。

78 東恩納前掲書42, p. 431

容ともよく符号する。

近世琉球以降、日本の諸芸の奨励と中国武術は島津侵攻後の早い時期から王府に仕える士族にとっては、個々の士族の嗜みとして武芸本来の実用に重きを置くのではなく、王府の役人としての勤めを第一義として、琉球独特の武芸として取り組まれていたといえよう。

また、琉球の徒手武芸としてからむとうが示現流やはらとともに『羽地仕置』が布達された頃に琉球の士族に嗜まれていたとすれば、中国拳法の伝播と琉球化を示す最古の文献史料であり、その内容から琉球の徒手武芸の独自性を考える上で貴重な史料と位置づけられるものと考えられる。

第3項 冊封体制下における中国人武術家の来琉 — 『大島筆記』 —

『大島筆記』⁷⁹は、1762（宝暦12）年7月、薩摩藩へ向けて出帆した琉球国の楳船が台風に遭遇し、土佐国宿毛湾大島浦に漂着して繫留され、潮平親雲上盛成を船主とする乗組員52名の琉球人から、土佐藩の儒者戸部良熙が1ヶ月余の間に聞き取った琉球と中国情報をまとめた漂着記録である⁸⁰。中国拳法の伝播に関することや関連す人物、空手の型等の解明に扱われてきた史料である。本書の「構成は、上下2巻と付録からなりたっている。その内容は「琉人漂着次第」に始まり、「琉球国体」「人物風俗」「年中大略」「官位之事」「朝服之事」「地名」「産物大要」「竜吾大略」「雑語上下」「付録」等の他、「再考」「図絵」「出会詩歌」「琉球歌」「琉球人倭歌」「雨夜物語」が記され、「宝暦十二年当時の琉球の事情や琉球における教養文化、琉球国とその冊封国である中国との関係などの事情に加えて、当時の日本における琉球情報とその理解などを知る貴重な聞き書きである」⁸¹としている。

聞き取られた内容の中で次の一項が、中国拳法の伝播を裏づける史料として唐手家や歴史家に引用され、今日でも定説のように扱われている。

79 宮本常一・原口虎雄・比嘉春潮：日本庶民生活史料集成 ，第1巻，短剣・紀行・地誌（南島編），三一書房，1968年，pp. 345-392。

80 横山学：宝暦十二年琉球国船漂着記録『大島筆記』諸本について，ノートルダム清心女子大学 生活文化研究所年報 Vol. 11，ノートルダム清心女子大学 生活文化研究所，1997年，p. 38。

81 同上書。

「一先年組合術 良熙謂、武備志載する所の拳法ときこゆ^{こう}の上手とて、本唐より公相君^{しょうきん} 是は称美の号なる由なり 弟子を数々つれ渡れり。其わぎ左右の手の内、何分一つは乳の方を押え、片手にてわぎをし、扱足をよくきかする術也。甚瘦く弱々としたる人でありしが、大力の者無理に取付たを、其儘倒したる事等有しなり」⁸²。

とある。楷船を指揮した53歳の潮平は、

「薩摩に在役せんとのことなる由。是より内本唐へも右之役にて切（折）々参り、福建へは数度、北京へも両度参たる由、江戸へも去る戊辰の歳、將軍宣下御悦の王子使者に附上りたると云へり。福州北京にて通事をも稽古したるとみへ、唐話に通達せり」⁸³

とあり、薩摩藩の琉球館への勤務したことがあり、江戸にも上っている。さらに、福州へ数度、北京にも2度渡り、公務を果たしている。これらの経歴から中国語も話せ、博識広聞の人物であることがうかがわれる。

『大島筆記』には、中国拳法以外に進貢船の武備や中国における武術の状況、日本の武芸に関することも聞き取られている⁸⁴。

一方の戸部は、この時50歳で、48歳のときに藩学の教授役となり、天文、医学、有職、歌道、仏典にわたって博覧該通及ぶ者がなかった⁸⁵といわれる人物であった。この史料は、「必ずしも言語による意思疎通が自由でない人びととの間での聞きとりに基づくものであるため、記述のなかに若干の誤りが散見される」⁸⁶とある。戸部は、聞き取りに

82 宮本他前掲書79, p. 367。

83 宮本他前掲書79, p. 349。

84 宮本他前掲書79, pp. 363-377。進貢船には、大砲、鉄砲、槍、大刀、弓矢等が備えられていた。また、中国の武術訓練についても聞き取られている。

85 宮本他前掲書, p. 346。

86 同上書。

当たって冊封使録『中山伝信録』⁸⁷を読み、明代の武術書『武備志』⁸⁸の知識も持ち合わせていた。

この一項は、公相君という人物が弟子を多数引き連れて琉球にやってきて、組合術を披露したと記されている。技法の特徴は、左右のうち片方の拳の何れかを胸元へ引き、すり足を効かせてもう一方の手で技を使っている。術者は痩せて弱々しくみえるが、力がありそうな者が無理矢理飛びつくとそのまま倒してしまうこともあった。

この漂着記録は、中国拳法が琉球へ伝播したことを裏づける史料として解され、東恩納寛惇、真境名安興、伊波普猷や船越義珍、宮城長順にも引用され、多くの推測をもたらしてきた⁸⁹。主に問題となってきたのは次のことである。

- (1) このとき初めて中国拳法が琉球に伝播した
- (2) 「先年」は、正使全魁が来琉した1752年のことである
- (3) 公相君とは高位の冊封使節団の一員であり武官である
- (4) 戸部は、『武備志』の知識から、組合術を拳法と読み取っている。または、拳法を組合術と記している
- (5) 組合術が披露された場所はどこか
- (6) 組合術の技法とは中国拳法のどの門派に属するものか
- (7) 「公相君」が今日に継承される「クーサンクー（公相君）」の型を伝えた
- (8) 潮平と戸部は、組合術が琉球においてどのような影響を及ぼしたかについて言及していないのはなぜか

等である。これらのことは、琉球の徒手武術がどのようなものであったか様々な史実に関わる重要な問題を孕んでいる。

87 徐葆光著。1721年刊。尚敬王の冊封副使として1719年に来琉したときの冊封使録（島尻勝太郎：中山伝信録，沖縄大百科事典，中巻，p. 783）。

88 茅元儀著。240巻から構成され、1621年（天啓1）に完成。巻236に琉球に関する記述があり、その中に「武具は堅固で、矢は二百歩にとどく。進止には金鼓を用いる」とある。（原田禹雄訳注：明代琉球史料集成，榕樹書林，2004年，p. 330）。また、巻91には、拳法図の套路（型）「三十二勢」がある（長澤規矩：和国本明清史料集 第4集，及古書院，1974年，pp. 933-937）。

89 東恩納前掲書42，東恩納寛惇全集9，p. 248。真境名前掲書23，真境名安興全集，第1集，pp. 232-234。伊波普猷：古琉球の武備を考察して「からて」の発達に及ぶ，をなり神の島，伊波普猷全集，第5巻，1974年，pp. 196-215。富名腰前掲書1，p. 2。宮城前掲書13。

(1) について

『大島筆記』の問題となる項には、「一先年組合術 良熙謂、武備志載する所の拳法ときこゆの上手とて、本唐より公相君こうしやうきん 是は称美の号なる由なり 弟子を数々つれ渡れり」として、

①中国より組合術の上手な公相君が多くの弟子を引き連れて来たこと

②良熙は、公相君の名は称美の号であるとしていること

が記されている。この内容から公相君という人物が初めて中国拳法を琉球に初めて伝播したとは明らかにされていない。

(2) について

「先年」を戸部はいつとして記録したのか。先年の語意は、一年前から過ぎ去った昔まで、過去を表す時間的な幅は広い⁹⁰。『大島筆記』の中でも度々使用されている語であり、その時期は、辞書の解説どおり最も近い「前年」から「過ぎ去った過去」まで様々である。この項の戸部の聞きとりからは、前後の項から見ても明確な時期は特定できないのではないのか。

確かに、潮平らが目撃できる冊封使節団は、漂着する直近の1756年に来流して1757年2月に帰国した全魁を正使とするときである。問題の項の前項及び前々項に全魁に関する記述がある。ここで注目したいのは、前項及び前々項では、良熙は来琉の時期を明確に示し、全魁に関わる内容を記載していることである。

前々項では、潮平自身が目撃した冊封使の話題が次のように記載されている。

「一去る丁丑の歳の冊封使が、ランチウを見たし、尾の三ツある魚じやと云て、通事へ申す。通事は海士あまへ申聞、扱海を捜す事じや、海士等が目まつ赤かにして、漸フカナ杯二三枚取り、夫を大きな鉢に入て、天使館へ持行しが、只どやどやどめき笑ふ音したるゆえ、潮平天使館近の役所詰也しが、何事ぞと直に行て、様子を聞に、魚が大に違つた也。好このみの魚は小き魚の尾の三ツ有の也。琉国もては三尾魚と云、夫を出して有た也、諸州の者が付来るゆえ、どうしても間違え有事也」⁹¹。

90 大槻文彦：言海，筑摩書房，2012年，p. 704。

91 宮本他前掲書79，p. 367。

とある。「一去る丁丑の歳の冊封使」とは、漂着したときの1757年（帰国時）の冊封使節団のことで、潮平は天使館近くの役所に勤めており、そのときに実際に目撃したことを語っている。

冊封使が「ランチョウ」を見たいと言ったので、琉球人の通事（通訳）は海士あまに頼み、海から取ってきた魚を持って行ったところ冊封使等がどよめき笑った。潮平が駆けつけ、理由を聞いたところでは、ランチョウは金魚のことで、琉球の通訳が聞き間違えたという話である。

また、前項には、

「一其時の冊封使の全魁と云が、自分の詩を数種板に刻み其板を琉国え持来、好に任せ押て遺た、其詩の句点等を求しゆえ、良熙つけ遺せし。（詩略）長白全魁（詩略）侍講臣全魁」（かっこ内は筆者加筆）⁹²。

とある。

潮平は、全魁が来流したときに残した詩を紹介している。その詩を写しとったものを持っており、それを良熙に見せている⁹³。良熙は詩の句点等を付け加え、項末に作者名として「長白全魁」と「侍講臣全魁」が付されている。ここで問題の公相君の項は、この2つの話題の後にもかかわらず、新たに、先年が使用され、潮平が目撃したことにも触れられていない。ここで、全魁来琉時と断定することが適切かどうかということである。

清朝最初の尚質王への冊封使は、1663年に張学礼を正使とする使節団である。張学礼の『使琉球紀』によると、随行した兵士は250余名であった。同じく張学礼『中山紀略』には、琉球滞在中に、正使らの宿舎と接する天妃廟の東側の演武場で、兵員は武技の訓練を行っている⁹⁴。張学礼後は、1683年に汪輯（1683年）を正使とする使節団、1719年に海宝を正使とする使節団、そして、全魁の4回である。海宝来琉の時は、潮平はまだ生まれていない。全魁を含めて冊封使節団の使録には、組合術や拳法に関連する記録は確認できない。（表－2）

92 宮本他前掲書79, p. 367.

93 島村前掲書28, pp. 66-67.

94 原田前掲書36, 中山紀略, p. 82-83.

| | 琉球王 | 渡来年 | 渡来年 | 王朝 | 冊封使正使 | 撰者 | 使録名 |
|----|-----|------|------|----|-------|--------|-------------|
| 1 | 武寧 | 1404 | 永楽2 | 明 | 時中 | | |
| 2 | 他魯每 | 1415 | 永楽13 | | 陳季芳 | | |
| 3 | 尚巴志 | 1425 | 洪熙元 | | 柴山 | | |
| 4 | 尚忠 | 1443 | 正統8 | | 余忭 | | |
| 5 | 尚思達 | 1448 | 正統13 | | 陳傳 | | |
| 6 | 尚金福 | 1452 | 景泰3 | | 喬毅 | | |
| 7 | 尚泰久 | 1456 | 景泰7 | | 敵誠 | | |
| 8 | 尚德 | 1463 | 天順7 | | 潘榮 | | |
| 9 | 尚円 | 1472 | 成化8 | | 官榮 | | |
| 10 | 尚真 | 1479 | 成化15 | | 董旻 | | |
| 11 | 尚清 | 1534 | 嘉靖13 | 清 | 陳侃 | 陳侃 | 使琉球録 |
| 12 | 尚元 | 1561 | 嘉靖40 | | 郭汝霖 | 郭汝霖 | 重編使琉球録 |
| 13 | 尚永 | 1576 | 万曆7 | | 蕭崇業 | 蕭崇業、謝杰 | 使琉球録 |
| 14 | 尚寧 | 1606 | 万曆34 | | 夏子陽 | 夏子陽 | 使琉球録 |
| 15 | 尚豊 | 1633 | 高禎6 | | 杜三策 | 胡靖揚 | 琉球記 |
| 16 | 尚質 | 1663 | 康熙2 | | 張学礼 | 張学礼 | 使琉球紀、中山紀略 |
| 17 | 尚貞 | 1683 | 康熙22 | | 汪楫 | 汪楫 | 使琉球雜録、中山沿革誌 |
| 18 | 尚敬 | 1719 | 康熙58 | | 海宝 | 徐葆光 | 中山伝信録 |
| 19 | 尚穆 | 1756 | 乾隆21 | | 全魁 | 周煌 | 琉球国志略 |
| 20 | 尚温 | 1800 | 嘉慶5 | | 趙文楷 | 李鼎元 | 使琉球記 |
| 21 | 尚灝 | 1808 | 嘉慶13 | | 齊鯤 | 費錫章 | 続琉球国志略 |
| 22 | 尚育 | 1838 | 道光18 | | 林鴻年 | 林鴻年 | 使琉球録 |
| 23 | 尚泰 | 1866 | 同治5 | | 趙新 | 趙新 | 続琉球国志略 |

表－２ 琉球王及び冊封使正使・使録一覧

(赤嶺誠紀：大航海時代の琉球，沖繩タイムス社，1988年.を参照して作成)

このようなことから、潮平が戸部に語った組合術の話は、全魁の来琉の時と断定するには無理があるのではない。潮平が生まれる前の冊封使節団の知識がもとになっているか、それ以外の情報の可能性も含めて再検討が必要だと考えられる。

(3) について

潮平らが漂着した1762年以前に来琉した公相君という中国人については、これは称美の号、つまり本名ではなく尊称であると戸部によって補足されている。弟子を引き連れて来琉して、組合術を披露していることから武官（兵士）の可能性は高いと思われる。しかし、尊称からするとどのような武官になるのか不明である。この点を明らかにしなければ冊封使節団の一員としての武官として位置づけるのは難しいといわざるを得ない。

(4) について

組合術は、「組合」う「術」の日本語としての語意がある⁹⁵。琉球において拳法が組合術として呼ばれていたのであればそのほかの記録に残されている可能性があるが、『大島筆記』以外では確認されていない。潮平は戸部の理解を得ようと、拳法の説明に組合術の語を使用し、戸部は『武備志』の知識から拳法と読み取ったのか、潮平が拳法の語を用いて説明したことを、戸部が日本語としての組合術に置き換え、『武備志』の知識を付け加えたのか判然としない。

(5) について

冊封使節団は、来琉すると那覇と久米村との境にある天子館とその付近に滞在した。久米村と接する辻村には、随行した兵士の演武場があった⁹⁶。兵員の武技の訓練はそこで行われ、公相君が引き連れた複数の兵士が演じたのであれば、演武場か天使館近くと考えられる。しかし、使節団の公相君に関する記録はこれまで確認されていない。

(6) について

公相君の使った技法は具体的である。武器を用いない拳法に対する潮平の証言は、驚きの様子もうかがわれない。また、潮平はこれがどのような門派に属するのか、公相君がどのような目的で披露したのかについてなど記録は極めて断片的である。この点についての考察が重要かと思われる。しかし、(8)の問題とも関わるが、潮平も戸部もこの時代に武器を用いない組合術が琉球で披露された意義は記されていない。

(7) について

『大島筆記』には、多くの諸本がある⁹⁷。その中の「公相君」は、漢字表記に読み仮名が振られている。そのいくつかを比較すると漢字表記は同じだが、次のように読み仮名が異なるものがある。

(1) 「公 相君」⁹⁸

95 「組合」は、「組み打ちをする。とっくみあう。格闘する」の語意があり、『狂言記』(1660)、『仮名草子・浮世物語』(1665)が引かれている(日本国語大辞典第2版編集委員会：日本国語大辞典、第2版、第4巻、小学館、2001年、p. 1001)。

96 原田前掲書36、中山紀略、pp. 82-83。

97 横山前掲書80、pp. 43-44。

98 『内閣文庫』、番号23769。

- (2) 「公相君」⁹⁹
 (3) 「公相君」¹⁰⁰
 (4) 「公相君」¹⁰¹
 (5) 「公相君」¹⁰²

他に、漢字表記は同じだが、読み仮名が振られていないものが2点ある。このように、筆写本によって読み仮名が異なる理由は不明だが、たとえば、中国語の発音を記録したのであれば、諸本に異同が生じていても不思議ではない。

『大島筆記』を扱った東恩納寛惇は「公相君」¹⁰³、末吉安恭は「公相君」¹⁰⁴、船越義珍は「公相君」¹⁰⁵または「クウシヤンクウ」¹⁰⁶や「公相君」¹⁰⁷と複数の読み仮名が使用され、後の刊行本では変化も見られる。

今日の「クーシャンクー」¹⁰⁸の型名は、『大島筆記』の「公相君」の漢字表記が使用される以前から片仮名で表記されている。それでは、型名の「クーシャンクー」と人物名の公相君と同一の型名として論じたのはだれであろうか。筆者は、伊波普猷ではないかと考えている。『大島筆記』の一文を解して、「「からて」の手の中にあるクーシャンクーは、公相君の転化したものである。古く「からて」を組合術といったことにも注意すべきことである」¹⁰⁹と記している。伊波は『大島筆記』から多くの推論を行っている。「公相君」による型の伝播説もその一つである。

(8) について

99 『大島筆記』、副書名：良熙潮平親雲上談話、江戸期写本、巻冊中、K200.8/TO13/2、沖縄県立図書館蔵。

100 『大島筆記』二、K09/H45/126、沖縄県立図書館蔵。

101 『大島筆記』坤、k09/h45/131、沖縄県立図書館蔵。

102 『大島筆記 全』、(3)、伊波普猷文庫、琉球大学附属図書館蔵。

103 東恩納前掲書42、東恩納寛惇全集9、p. 18。

104 莫夢生：唐手の伝来（下）、陽春雑筆、沖縄タイムス、1922年4月27日。

105 富名腰前掲書1、p. 2。

106 富名腰前掲書1、p. 6。

107 富名腰義珍：第2章 練習の心得、空手道教範、大倉廣文堂、1935年、p. 34。

108 財団法人全日本空手道連盟第二指定形。

109 伊波前掲書10、p. 213。

『大島筆記』には、組合術が披露された後、琉球でどのような影響を及ぼしたのかについて言及されていない。先述したように、この項の内容から中国拳法が初めて琉球に伝来したと断定するのは総計であると考え。武術としての技法の伝承には、一定の練習期間も必要である。仮に公相君が拳法を披露して、それを琉球人が学んだとした場合、その後、拳法がどのように受け継がれてきたかについては触れられていない。また、公相君の中国拳法伝播説と、同じ表記で異なる発音の型の継承は検証すべき問題が多くある。たとえば、近代沖縄の片仮名表記の型名に異同が見られることもよく分かっていない。また、組合術の呼称は、冊封使録や近世琉球の他の文献には見あたらず、当時の琉球に存在する武術の呼称としてもその他の文献や口承にも確認されていない。

それでは、なぜ、近代において唐手の源流を明らかにする際に、『大島筆記』が初めて中国拳法の伝播を示す史料として扱われたのであろうか。重要な2つの要因をあげることができよう。

1つ目に、近代沖縄において、18世紀半ば頃までの記録に中国拳法の伝播が示された史料や琉球の徒手武芸に関する記録はこの他に確認されていなかったことである。

2つ目に、唐手が体操科の一部として取り入れられ、国内に普及することによって、その源流を明らかにする必要があるが生じた。中国拳法の伝播を詳しく解説するためには、それを裏づける史料が必要であり、『大島筆記』に求めたのではないかということである。

しかし、『大島筆記』が書かれた頃に、戸部や潮平にとって、琉球の武芸は、聞き取られたこと以上の詳細な情報を記録する必要はなかった。それは、琉球の徒手武芸を公的な記録として書き残す価値を持たなかったのではないかと考えられる。それでは、『大島筆記』を貴重な史料として扱った近代沖縄の唐手家や歴史家はどのように論じているのか。船越は、『琉球拳法唐手』¹¹⁰において、『大島筆記』を唐手の伝来を示す史料として次のように引用している。

「おきなわ沖縄にこの「からて唐手」がいつ頃ごろからつたは伝つたかと云ふにい口碑のこうひ伝ふるつた所にところ依れば、いま今をさ去る約二百年やくに前のねん昔むかし首里赤田しゅりあかたのさく佐久川某がわぼうが、しな支那より「唐手」をからて稽古しけいこ帰り、かへ後「唐手のち佐久川」の名をひろ弘めりとも云はれ、またあるい又いま或は今から百四十年ぜん前と土佐人さじん戸部氏とべしのものせる大島筆記おおしまひつきに依ると、よ首里人しゅりじん潮平某しほぼの談だんとなりとて支那人しなじん公相君こうしやくんと云ふ者いが弟子ものを多た数すう引連れひきつ渡来とらいし、しゆ一種けんぼうの拳法つたを伝へたとも云はれ」¹¹¹

110 富名腰前掲書1, p. 2。

111 同上書。

としている。船越は、前後の経緯や内容についての考察は行っていない。東恩納寛惇は、『琉球拳法唐手』の序文で、

「冊封使等の一行に依って支那の武術が伝へられたとすると、慶長以後武臣派遣の慣例となつてからと見る方が至當ではないか」¹¹²

として、次のように論じている。

「大島筆記に伝へてある、公相君と云ふのが如何なる人物であつたか、今調べが付かないが、之れを『クーシャンクー』と發音して居るのから見ると、元禄11年大嶺親方が支那から将来した、土地君（農神）を今『ドーチーク』と發音して居るのから類推して清朝以後ではないかと思ふ」¹¹³。

と記している。東恩納は、

- (1) 公相君という人物について今調べがつかないこと
- (2) 公相君を「クーシャンクー」とすることについて、1698年に大嶺親方が将来した「土地君」を「ドーチーク」と發音することから類推して拳法が清朝以後に傳播したと推測している。

また、真境名は、『沖縄一千年史』¹¹⁴で『大島筆記』¹¹⁵のこの一項全文を引き、唐手の起源は、「此時より組合術を伝へしなるべし」と論じた。さらに「尚、拳法の伝來に就いては此他に記録を見」¹¹⁶ないとしている。しかし、『大島筆記』¹¹⁷の内容の詳細な考察は行っていない。

『大島筆記』の内容を考察して、「からて」との関わりで詳細に論じたのは伊波普猷

112 富名腰前掲書1, p18。

113 富名腰前掲書1, p. 2。

114 真境名前掲書9, pp. 232-233。

115 真境名前掲書9, p. 234。

116 同上書。

117 真境名前掲書9, pp. 232-234。

であった¹¹⁸。伊波は、まず、「からて」が「武備の衰退と逆比例して発達した」と推論し、次のように中国拳法の伝播を論じている。

『からて』はその名称の示す如く、支那伝来の拳法で、一時代までは『たうで』（一般にはたゞ『手』）といっていたが、^{ウナテカラテ}『無手空手』（てぶらの義）から類推して最近空手といふ字を宛てるやうになつた。琉球が初めて支那に通じたのは明の洪武の初年だから、其頃輸入した、と考へれば考へられないこともないが、身に寸鉄を帯びなくなつた琉球人、わけても明末進貢の序でに2年間も福建の柔遠駅（琉球館）に滞在して貿易に従事した連中が、護身術として学んで帰つたと見るのが穏当であらう¹¹⁹。

としている。14世紀半ば以降に琉球が中国（明）との交易関係が行われるようになって琉球に住み着いた渡来人によって伝播したことも考えられるとするが、冊封体制下に治まり進貢貿易で福建省に行った琉球人が滞在中に護身術として学び継承されたと主張している。その理由を島津氏侵攻後、武備がなくなつた琉球の事情にもよるものとしているのである。そして、『大島筆記』の一項の全文を引き、次のように考察している。

「これは潮平親雲上が目撃した事であるから、土佐に漂流する7年間即ち清の乾隆21年（宝暦6年、西暦1756年）の尚穆王の冊封の時にあつたことで、公相君は琉球で拳法が盛んであることを聞き、宣伝旁々やって来たであろう。「からて」の手の中にあるクーシャンクーは、公相君の転訛したものである。古く「からて」を組合術といったことも注意すべきことである」¹²⁰

と記している。ここで伊波の推論を整理すると、

- (1) 潮平親雲上が公相君を目撃したこと
- (2) 公相君が来琉したのは、尚穆王を封ずる正使全魁の時であること
- (3) 公相君が来琉した目的は、琉球で拳法が盛んであることを聞き、宣伝旁々やってきたこと
- (4) 「クーシャンクー」の型は公相君が転化したものであること

118 伊波前掲書10, pp. 210-211。

119 伊波前掲書10, pp. 196-215。

120 伊波前掲書10, p. 213。

(5) 「クーシャンクー」は公相君が伝えたこと

(6) 古く「からて」は、組合術といったこと

である。

伊波、東恩納、真境名ともに『大島筆記』を中国拳法が伝播したことを裏づける史料として扱っている。東恩納は、その時期を公相君の伝来に求めず、1698年に大嶺親方が将来した中国由来の農神「土地君」を「ドーチーク」と公相君を「クーシャンクー」と発音することから類推している。公相君の来琉と拳法の伝播については、文官派遣から武官へと代わった清朝以降だろうと推測している。伊波は、「クーシャンクー」を「公相君」が転化したものであるとしている。伊波は、上述したように6つの重要な指摘を行っているが、その理由等をあげては論じてはいない。伊波の推論は、すべて再検証すべき問題としてとらえておく必要があるのではないか。しかし、伊波の論じた内容は、今日では定説のように扱われ、引用され続けているのが実状である。

唐手の呼称については、王府時代から伝わる唐手を使わず、東恩納は「カラ手」¹²¹、伊波は、論文の表題にもあるように「からて」と呼称している。

『羽地仕置』によって首里王府の武芸に対する位置づけと、「阿嘉直識遺言書」や冊封使録によって、琉球士族がそれをどう実践したかを知ることができる。

近代沖縄の『大島筆記』の研究は、複雑な問題を孕んでいるといえよう。その理由は、唐手の起源が中国から伝播したことを検証、考察していくとことが消極的になり、唐手がどのように発達したかの「発達論」ともいうべき課題が重要視され、また、唐手の源流として琉球における武術の発祥を論じることに変わっていったともいえよう。このことは、「手」の言説として後段で論じていく。いずれにしても沖縄空手が、時代状況に影響されつつ呼称や型名、歴史等の問題に向き合っていたことがうかがわれる。

第4項 薩摩藩士が見た琉球の徒手武芸

瓦を突き砕く男 — 『薩遊紀行』 —

琉球独自の徒手武芸は、いつ頃から薩摩藩士や他藩士の知るところとなっていたのか。

121 東恩納が、船越の『琉球拳法唐手』の序文において、あえて「唐」を「カラ」としている。「唐」に替わる文字の使用を提案してもものと考えられる。

薩摩藩を旅した肥後藩士によって書かれた紀行文『薩遊紀行』¹²²には、突き手に優れた徒手武芸の存在とその特徴、さらに日本の武芸と比較してどのような位置にあったのかを知ることができる貴重な史料である。

肥後藩士は、1801年4月に熊本城を出発して、約1ヶ月半の旅行を行った。(図-7) 筆者の肥後藩士は、旅程で水原熊次郎という薩摩藩士が、薩摩藩の那覇在藩奉行所に2度、各々3年間勤務したときの実見談を聞いている。

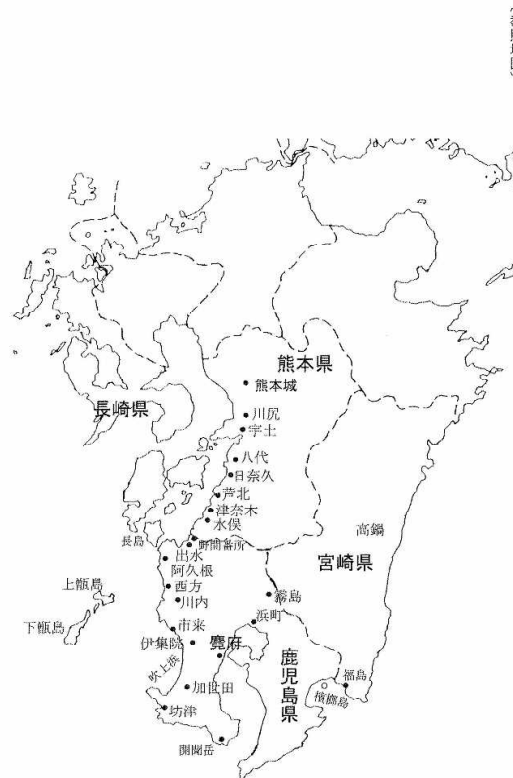


図-7 肥後藩士の旅程

(出典：岸秋正文庫『薩遊紀行』，史料編集室紀要，第31号，2006年，p. 219. より転載)

注目される内容は、水原から聞いた話の記録である。

「琉人剣術ヤワラノ稽古ハ手ヌルキモノナリ。唯突手ニ妙ヲ得タリト云。其仕形ハ拳

122 作者の肥後藩士は不明となっている。薩遊紀行，1801年，沖縄県立公文書館所蔵。解題では、作者の肥後藩士は不明となっている。小野まさ子・漢那敬子・田口恵・富田千夏：史料紹介，岸秋正文庫，薩遊紀行，史料編集室紀要，第31号，沖縄県教育委員会，P. 38，2006年。

ヲ持テ何ニテモ突破リ或ハ突殺ス名ツケテ手ツクミト云。右ノ手ツクミノ術ヲ為スモノヲ薩摩ナハツメノ奉行所へ召テ、瓦七枚重子ヲ突セラレシニ六枚迄ハ突碎シヨシ。人ノ顔ナトヲ突ケハ切タル如クニソゲル。上手ニナレハ指ヲ伸シテ突ヨシ」¹²³。

徒手武芸が突き手に優れていることが、水原によって語られている。素手武芸は何でも突き破ることができ、あるいは突き殺すこともできる琉球の武芸を薩摩藩士は、「手ツクミ」と名づけている。手ツクミノ術の使い手を那覇在番奉行所へ招いて、瓦7枚を重ねて突かせたところ、6枚までは砕け散ったとある。水原は、人の顔等を突けば削げ落ちるであろうとその殺傷性を見抜き、上手な者は指を伸ばして突くこともできると技法にも触れる内容である。また、琉球人の嗜む剣術ややわらの稽古についても語られており、その様子は手ぬるいとしている。

このことを整理すると、

- (1) 琉球人が剣術、柔術とともに、琉球の独特の徒手武芸を嗜んでいること
- (2) 琉球人の剣術、柔術の稽古は薩摩藩士が見たところ手ぬるいこと
- (4) 琉球人の徒手武芸は、突手に優れていること
- (5) 拳の威力は、瓦7枚を重ねて突かせたら6枚まで粉々に砕け散ったこと
- (6) 人の顔等を突けば、切れるように傷つくほどの殺傷性を備えていること
- (7) 上手になると指を伸ばして突く、貫手の技法を見抜いていること
- (8) 薩摩藩士は琉球の武術をよく知っており、肥後藩士に琉球事情として語っていること
- (9) 薩摩藩士は、琉球の突手に優れた武術を手ツクミノ術と呼んでいること

などである。

水野は、琉球人の手ツクミノ術について詳細な技法までよく把握している。琉球人の手ツクミノ術の使い手を那覇在番奉行所に呼んで瓦割りを披露させ、その実験談が他藩士の話題に上っているのである。しかし、手ツクミの呼称は『薩遊紀行』以外には確認されていない¹²⁴。

真境名は、「拳^{こぶし}のことを沖縄の方言で「テーツクン」といふて手で突くといふ意味

123 小野他前掲書122, p. 233。

124 「拳闘における技法は、よく訓練された者は、拳の一撃で大きな土瓶を粉碎し、人間をも殺すことができるだろう」（翻訳：嘉手苺徹）(E・W・Satow : Notes on Loochoo, THE ASIARIC SOCIETY OF JAPAN., LAKE, CAWFORD & CO.; KELLY & CO., 1873年, p. 6)。

を現はして拳の用法を象徴していることは注意すべきことである、コブシといふことは沖縄では、単に関節のことを意味する言葉で足のゴフシ手のゴフシ、指のゴフシ等いふて、つまり小節こぶしのことであらうと思はれる。夫れで今ではその語源が忘れられて、『手突テーツクンを突く』等武術家さへいふて居る。然ればこの武術が尚穆王時代百数十年前から始まったものとも思はれないやうな疑点もある。併しながらその一流派が支那から来たといふことは争そはれない事実であらう」¹²⁵と論じている。

テーツクンと手ツクミノ術が同様の意味で、琉球語と日本語の発音の違いによってズレが生じた問題があったとしても、剣術、やわらと併置される琉球の徒手武術に対して、水原がこれを「手ツクミ」と名づけたのはどうしてか。水原が琉球で勤務したのは各々3年の2度、6年間勤務している。とすれば、水原は、琉球人から徒手武芸の呼称を聞くことはなかったのか。それとも琉球の徒手武芸の特徴を捉えて命名したのであろうか。「遺言書」(1778年)でもみたように、日本の剣術、やはらはすでに琉球士族に嗜まれている。「遺言書」は私的な文書であり、その中でからむとうの呼称が使われていた。『薩遊紀行』では、水原は手ツクノ術を在番奉行所という公的な場所で目撃したことを話しているのである。このことは、この時期に琉球の徒手武芸には一般化された呼称はなかったのではないかという疑問も生じさせる。しかし、薩摩藩士も認知する武芸として嗜まれている以上、なんらかの呼称はあったに違いない。この問題については、後段で論じたい。

また、「遺言書」と同じように剣術、やわら、手ツクミノ術は士族の一芸として薩摩藩士に認知され、多くの藩士が同席する場で他藩士に語られている。『薩遊紀行』の末尾には、前後の文脈から詳細ははっきりしないが、「親雲上ノ柔術」¹²⁶の記述もある。水原が手ツクミノ術を実際に見たのは、1700年半ば以降であろう。琉球人に手ツクミノ術が定着して嗜まれるまでの期間を考慮すると、手ツクミの術はさらに遡って琉球に存在したことになるといえよう。

拳を鍛える男 — 『南島雑話』 —

手ツクミノ術の突きの技法(威力)はどのように磨かれたのか。『南島雑話』¹²⁷は現

125 真境名前掲書9, 真境名安興全集, 第4集, p. 385。

126 小野他前掲書122, p. 257。

127 宮本他前掲書79, p. 3。

在まで続く拳の鍛錬法をよく伝えている。

『南島雑話』は、1855年頃にまとめられた奄美大島の天文、地理、動植物から、島人の宗教、年中行事、衣食住、言語、冠婚葬祭、産業、行政のあらゆる分野にわたる内容が詳細な文章と精密な絵でまとめられた稿本である¹²⁸。薩摩藩士名越左源太が遠島中に島で見聞したことをまとめたとされている。近年の研究では、その成立には複雑な過程があり、薩摩藩士伊東助左衛門による1830年頃の元情報があったともされている¹²⁹。複数の写本があり、ここで取り上げる「拳法術（ツク子ス）」「トツクロウ」の絵図も複数の写本があり、巻藁を突く男と箱のような固形物で右拳を鍛える男が描かれている¹³⁰。（図－8）



図－8 拳を鍛える男の絵

（出典 永井竜一：南島雑和補遺篇，鹿児島県立図書館蔵，1933年。より転載）。

巻藁を突く男は、髪頭に簪をつけ、膝上の短い着物を着け、若者のようである。また、箱のような固形物に拳を当てる男は、顎髭を生やし、着物は膝より長く、巻藁を突く男より年長とみられる。絵に添えて、「拳法術（ツクネス）」「トツクロウ」と記載されて

128 河津梨枝：『南島雑話』の構成と成立背景に関する一考察，史料編集室紀要，29号，2004年，28p.。南島雑話は、多くの写本によって成り立っており、「その構成、成立背景に関する考察はまだ十分」とはいえず、ここで引用する絵図もいくつかのタイプがある。

129 河津前掲書128，pp. 1-2。

130 絵図は1人が描かれたものと2人が描かれたものなどがある。本研究は、2人が男がしっかり描かれている鹿児島県立図書館蔵を扱った。絵図の表題は嘉手苺徹が付した（永井竜一編：南島雑和補遺篇，鹿児島県立図書館蔵，1933年）。

いる。島津氏侵攻後、奄美大島は薩摩藩の直轄地となっている。

『薩遊紀行』¹³¹に記された、突きによって何でも突き破ることができ、あるいは突き殺すこともできる技法の特徴を持つ手ツクミノ術は、突き立てた柱状の板に藁を縛り付けたいわゆる巻藁や固形物を使って拳を鍛えることによって、その威力を身につけることが裏付けられていることである。このことは手ツクミノ術の技法の体系として重要な意味を持っている。

巻藁に拳を当てて鍛えることは、当てる部位、当て方を含めて一つの様式を持ち、武術的な意味を持ってなされる。そもそも拳による巻藁等の鍛えは、当て続けると拳の表面の皮膚が破れ、出血する。長期間にわたって拳を当て続け、局所に苦痛を伴う自己鍛錬法である。一定期間続けて表面の皮膚の部分が厚くなって痛まなくなっても、次に拳の関節深部から血が滲んでくることもある。それを承知で続けていくのである。つまり、当てる部位や当て方を間違っていると、拳だけでなく手首、肘、肩等体の他の部位を痛めてしまう危険性がある。

この鍛えを継続するためには、拳の鍛え方を理解し、拳にどのような変化が現れてくるかを理解して、実践していると考えられる。そのためには、未熟練者が熟練者の鍛えられた拳をみて、その威力を獲得する方法として、稽古の指導を受けていることを示唆している。

『南島雑話』の拳を巻藁で鍛える男は、左手を腰に据え、右拳を正面から突き出している。巻藁は、相手を想定して突いていると思われる。『大島筆記』の「其わざ左右の手の内、何分一つは乳の方を押え、片手にてわざをし」¹³²に通ずるところもある。どこで稽古を行ったのかは描かれていない。拳を当てる巻藁が直立していることから今日と同じようにがっしりと埋め込まれていると判断できる。また、屋内か屋外か、または屋根付きのもとで行ったのかは不明だが裸足で稽古を行っている。さらに、踏み出した足と突き手は同じ側で行っている。空手の突き手に特徴的な突き手が回転して甲の部分を上にならず、引き手からそのまま突きだした技となっている。技法上、甲を下にして伸びきった拳を巻藁に突き当てるのは、当たった瞬間の技の極めは、拳、肘、肩の緩みと固めがうまく連動しないと拳を痛めてしまうものと考えられる。つまり、突きの技法の巧みさが現れていると考えられる。

固形物に拳を当てる男は、拳の背面を当てようとしている。膝を揃えて座った姿勢で

131 小野他前掲書122, p. 233。

132 宮本他前掲書79, p. 367。

拳の背面を鍛えることは何を意味しているのか。拳を正面に突き当てるより当たる部分は狭く、痛みのあり方や当て方の技法は異なってくる。年長者と思われる男が行っていることから鍛錬の年数や熟練度が表現されている見ることも想定される。

『薩遊紀行』では、瓦を重ねて割ってみせるという薩摩藩士の期待に公然と応えたこと、より熟練を要する指先を鍛え込まないと行えない技法（貫手）も知られていたことがわかるが、拳を鍛える男達の鍛錬と十分重なることが分かる。

拳の鍛えは、それを武術的側面を表しているものの、鍛錬法に様式がうかがわれる。手ツクミノ術で示された拳の威力と指を伸ばして行う突き手を裏付ける『南島雑話』の絵に表された拳の鍛錬法は、依拠する「型」の存在が示唆されているのではないだろうか。つまり、型の部分稽古としての拳の鍛錬である。

その呼称を奄美大島の薩摩藩士は、「拳法術・^{ツクテス}トツクロウ」と記している。拳法術を「ツクテス」と読ませているが、中国由来の拳法と推測される。また、「トツクロウ」の呼称は『南島雑話』以外では見られない。

突き手に優れた瓦を砕く拳と巻藁や固形物で拳を鍛える特徴は同じである。しかし、いずれも長期間滞在した薩摩藩士が琉球の武術を実見し、その上で呼称として名づけているのである。

第3節 国事の祝宴に供される唐手

琉球の武術の存在は、中国拳法の伝播によって琉球化された徒手武芸として、『羽地仕置』の頃まで遡る可能性がある。それでは、何故、琉球人による初めて表れされたからむとうは他の史料に残されていないのだろうか。また、他称の呼称としての手ツクミノ術、^{ツクテス}拳法術、トツクロウ等はその後の記録に見られないのか。

『薩遊紀行』で瓦を割った琉球人の徒手武芸を手ツクミノ術と薩摩藩士は呼び、巻藁や固形物で拳を鍛える男が鍛錬の一部として様式を持った稽古を行っている。この時期の琉球の徒手武芸は、個別の型ごとに伝播して継承されていたのではないだろうか。琉球国時代の史料や口承には中国武術の門派として枠組みで伝承された痕跡を見つけることはできない。中国拳法の門派として体系づけられた武術としてではなく、それぞれの型が個別に、個人レベルで伝播して継承されたのではないか。

継承者はそれぞれが指導者について覚えた型を基本として稽古を行っていた。その型稽古に共通する鍛錬法として、拳を巻藁や固形物によって鍛え込んでいたのではないか。とすれば、多種の型は、日本の武芸（示現流や柔術等）を嗜む薩摩藩士にとっては、琉

球人が実践してる個別の中国語の型を見分けて、その型の名前を区別して覚えて呼ばなくてはならないことになる。仮想の敵を想定して行う各種の型の違いから、型の呼称を区別して琉球の徒手武芸を呼んでいたのであれば、その型名は琉球だけでなく、薩摩藩や琉球と関わりがあった他藩の文献史料にも残されていると思われるが、何れにも見あたらない。

『薩遊紀行』においては、瓦を打ち砕く技法から手ツクミノ術と呼び、『南島雑話』では、鍛えられた拳と中国由来の拳法と知って、拳法術、トツクロウツクテスと呼称をつけたのではないだろうか。

薩摩藩士によって名づけられた手ツクミノ術、拳法術、トツクロウ等の呼称は一般化されず、中国由来の拳法術や日本語の組合術として記録に残された。

第1項 王城落成祝い「木遣」における久米村人の唐手

それでは、琉球において自称の呼称はいつ頃から、どのような理由で使われたのかを見ていきたい。

唐手という呼称は、近世琉球の自称の呼称として、いくつかの記録に著されるようになる¹³³。1846年の「慶賀木遣」¹³⁴の模様を再現するため山内盛彬¹³⁵は、大正期に聞き取り調査を行い、「この木遣については口碑や文献に接したこともあまりなかったが、若いころ王城落成祝に出演した唯一の生存者たる90余歳の嘉数翁（大中住）について採譜採録」¹³⁶している。この調査記録に唐手が見られる¹³⁷。

133 山内前掲書19, pp. 204-205。

134 「王城を建築した時の落成慶賀の行われた芸能の総称」。山内前掲書19, p. 202。

135 山内盛彬は、沖縄県師範校生時代の唐手部員。在学中の明治40年に修学旅行で上京し、講道館を訪れ、嘉納治五郎や弟子達の面前で、唐手の演武を行った。嘉納治五郎の唐手に関する質問などに答えた1人であり、その報告書を学友会誌にまとめた。山内盛彬・諸見里朝保：唐手部記録，宮城仁之助：龍譚 創立40周年記念号，沖縄県師範学校学友会，1911年，pp. 183-185。

136 沖縄那覇市首里大中町。

137 山内盛彬は、大正のはじめごろ那覇の識者仲浜政模翁について学び、今年になって芸能家を父に持っていた宮城能造翁から一曲教わり、国頭の木遣は現地に行って調査した、とある。山内前掲書19, p. 202。

王府時代、最後に首里城正殿が改築されたときの落成祝典であり、首里王府のある沖縄島中で盛大に催された。嘉数翁はその祝典の行列に参加したという。

木遣は、現在（刊行当時）では、「王城落成の時の数多の上品な木遣芸能は全部廃れ、そのときのポピュラーであった百姓木遣の国頭捌理（クンジャンサバクイ）だけが後世まで親しまれ今日まで残ったので、それで木遣と云えば国頭捌理を意味するようになった」とある¹³⁸。その祝典の行列を山内は次のように記している。

「慶賀木遣の様子は、7、8歳から35、6歳までの首里那覇の男子の総出演で、老人達は警護の任に当った。勤労奉仕にも出た首里三平那覇泊久米の六団体が芸能をきそった。徳川時代の大名行列に模した行列に、郷土色に日本式中国式の芸能を交え、大旗を翻し、金鼓を鼓を打ちならし、色とりどりの扮装で、中山門から守礼門までにぎにぎしく行列した。指揮者の按司が馬上豊に麿を打振り、音頭頭の親雲上が声朗に唄い出すと、演者が一斉に踊り出すというオールパレードであった」¹³⁹。また、

「木遣の有る時は首里三平等、那覇四町、久米、泊総動員で勤労奉仕をすることになって居た、那覇は真和志之平等に、久米は南風之平等に、泊は西之平等に合体する慣はしになって居た」¹⁴⁰

ことから、王城落成式の祝賀会は、首里、那覇、久米村、泊の協力体制の下、日本風と中国風の武芸的な演目が行われていたという。この行列順序は、

- 「(1) 首里真和志平 士族・百姓
- (2) 那覇 士族・百姓
- (3) 首里南之平 士族・平民
- (4) 久米
- (5) 首里北之平 士族（クランの松）・平民

クランの松とは、大麿を巻いて飛んで行って整列し、法螺を吹いて芸を始める。

138 山内前掲書19, p. 202。

139 山内前掲書19, p. 203。

140 新崎盛珍：思出の沖縄，新崎盛珍著書出版記念会，複製再版，1976年，p. 38。

(6) 泊」

の順に行われている¹⁴¹。この行列の中で、芸能番組(演目)を行ったのは「真和志平、南之平、久米」である。首里と久米村から構成されるもので、次の内容で演じられている。

「行列番組

真和志平

- (1) 塵(二人五列で前後十人)
- (2) まとり(槍使いで袴を大きく張って歩む)
- (3) 鉄箱(按司の衣入れ、足を高く上げて歩む)
- (4) 鉄砲
- (5) 按司(按司家の少年が扮す)
- (6) 草履持ち
- (7) 弓持

南之平

- (1) 塵(音頭)
- (2) 按司(三人)
- (3) 弓(二人)
- (4) 鉄砲(二人)
- (5) 鉄箱持(一人)
- (6) 草履持(一人)
- (7) まとり(二人)

久米

- (1) 按司
- (2) 唐手組(パッサイ・クーサンクー)
- (3) 戦士(楯で戦う)

141 王都の首里は、近世期には首里を3区画に分け首里三平等(しゅいみひら)と称した。首里真和志(まーじ)之平(首里真和志平)、首里南風(ふえーぬ)之平(首里南之平)、首里西(にし)之平(首里北之平)で、「西」(にし)は北を意味する。下中直人：沖縄県の知名、日本歴史地名大系第48巻、平凡社、2002年、pp. 96-97。

(4) 打花鼓

(5) 女踊」¹⁴²。

真和志平、南之平と久米村が行ったは、19の行列演目である。

首里の真和志平の演目は、磨、まとり、鉄箱、鉄砲、按司、草履持ちで、同じく首里の南之平は、磨、按司、弓、鉄砲、鉄箱持ち、草履持ち、まとりである。

久米村は、按司、唐手組、戦士（盾で戦う）、打花鼓、女踊である。

この演目を見て分かるように、首里に日本風の武芸に関連するものがあり、久米村は中国式の武芸に関連する演目になっている。

久米村の行列の中で、戦士の盾で戦うとは、籐牌（ティンバー）のことと推測される。

注目すべきは、久米村の士族による「唐手組」として、唐手の型のパッサイ、クーサンクーを演じていることである。国王に供する演し物として、初めて自称としての唐手が使用され、演武された型名が明らかになっている。国事の祝賀に供される芸能として、初めて自称の唐手が登場し、その担い手は、久米村の若い士族で組織されていた。

また、1846年に唐手の型として、パッサイ、クーサンクーの型を久米村人（クニンダ）が多くの見手の前で演武していることである。

第2項 組踊「二山和睦」に登場する唐手

琉球国王は、中国から冊封使節団を迎え入れ、冊封を封ぜられた。冊封使を乗せた船を冠船、または御冠船といった。冊封使滞在中に厚く持てなす祝宴を御冠船踊といい、国王にとっては一生に一度の盛典であった。王府は、1719年の尚敬王冊封の御冠船踊を充実させるために、前年、玉城朝薫を踊奉行に任命し、琉球語で演じられる国劇（琉球の故事を題材とする）の組踊が編まれた¹⁴³。

組踊は、御冠船踊の重要な演目であり、王府が主催する重要な芸能であった。組踊は、国王が上覧する中で冊封使に供される。冊封使を中国に送り、無事に帰国したことを確認した後に、家臣が祝意を込めて国王に酒肴を捧げるための御膳進上でも催された。

組踊の「二山和睦」は、琉球国最後の尚泰王の冊封、いわゆる「寅の御冠船」（1866

142 山内前掲書19, pp. 204-205。

143 二山和睦, 1867年（組躍, 那覇市歴史博物館所蔵）。

年)を終えた翌年の「御膳進上」¹⁴⁴に用意された組踊である¹⁴⁵。1867年の台本には、

「大原に出て鎌手唐手鎗長刀不足ないん武芸の数々御嗜の御様子」¹⁴⁶

と「唐手」を稽古する場面が描かれている。(図-9)

The image shows a page of handwritten text from a stage script. The text is written in vertical columns, characteristic of traditional Japanese or Ryukyuan scripts. The characters are dense and cursive, typical of handwritten documents from that era. The text is arranged in two main sections, with a vertical line separating them. The right section contains a longer passage, while the left section contains a shorter passage. The handwriting is consistent throughout, suggesting it was written by the same person.

図-9 「二山和睦」の台本

(出典 二山和睦, 組躍, 1867年, 那覇市歴史博物館蔵. より転載)

「二山和睦」のあらすじは、古琉球期の三山時代に君主のため北山の捕虜となった南山の与座大主を、2人の息子千代松(13歳)と亀千代(12歳)が救いに行くという忠孝をテーマにした故事劇である。台本は漢字と平仮名の琉球語で書かれている。

ここでは、中国武術と日本の武芸と唐手が表されているが、どのように演じたのかは

144 池宮正治：御冠船踊一組踊と舞踊一，海洋博覧会記念公園管理財団，2000年，p. 9。

145 鈴木耕太：組躍，的討物の歌謡，琉球アジア社会文化研究 第9号，琉球アジア社会文化研究会，2006年，p. 33。

146 前掲書143。

っきりしない。唐手を演じるのは2人の息子である。父が幼い子に唐手や武芸を指南するというのは、将来君主の後ろ盾を果たさせるという思想的な背景が象徴されていると考えられる。注目されるのは、武器術としての鎌手と素手の唐手に「手」が付いていることである。語意としては、日本語の「技」「技法」のことであろう。琉球語で演じられる故事劇であるが、「手」に特別な琉球の徒手武術としての語意が与えられているとは考えにくい。

組踊という国事に供する特別な役割を演じることができるのは士族であり、矜持を持って演じている¹⁴⁷。唐手は、君主に身を捧げることを象徴する武芸が組踊という国事に供される芸能として、位置づけられているのである。

第3項 久米村人の「三六九並諸芸番組」

尚泰王冊封の祝宴は、その年に首里、那覇、泊では、日本の芸能や武芸、綱引等を催して祝意を表している。久米村¹⁴⁸では翌年3月に行われたが、その模様は「打花鼓」¹⁴⁹に詳しい。

『久米村雑抄』は、歴史家の島袋全発¹⁵⁰が沖縄県立図書館長時代に収集した久米村の史料に「打花鼓」¹⁵¹が含まれている。沖縄戦で灰燼に帰し、それまでに発表された文献に残されるのみとなった。島袋没後に『島袋全発著作集』¹⁵²として島袋の論文とともに、かろうじて残されていた史料とともに、これらをまとめて刊行されたものである。

147 池宮前掲書144, pp. 58-66。

148 久米村は、那覇市久米にあった中国からの渡来人の集落である。沖縄方言では「クニダ」と読む。

149 島袋前掲書21, pp. 295-307。

150 1888～1953年。京都帝国大学法学部卒業後、帰郷。「沖縄毎日新聞」に入社、真境名安興のあとに第3代沖縄県立沖縄図書館長に就任する。哲学・歴史・文学・時事など多彩な評論活動を展開した。琉球方言の存廃をめぐる当時の県知事当局の方言撲滅政策を批判したため、図書館長の職を放逐された（比屋根照夫：島袋全発，沖縄大百科事典，中巻，p. 341）。

151 島袋前掲書21, pp. 295-307。

152 島袋前掲書21, 320p.。

東恩納寛惇は、序文において、「打花鼓（ターフワークー）の一篇は、直接私に送ってきたもので貴重な文献と云える。打花鼓は今日で云えば、唐栄官話生の語劇で、その評判だけは、年配の者には、耳に熱して居り又仲毛芝居頃までは一部上映された事もある。然るに時代の流れるままに、中国との文化的交流が、若い人々の感覚にそぐわぬようになって、意識的にも、無意識的にも、疎外されて、記憶もだんだんうすれていったさえあるに、唐栄関係の史料は極めて乏しく、僅に残っていた久米村日記や親見世日記等の貴重な文献も、沖縄図書館と共に焼亡して了った今となつては、この方面の事すら、全発君の丹念に取っておいて呉れたこの一篇以外にはよりどころがない」¹⁵³と記している。中国との文化的交流が、若い人の感覚にそぐわないようになって、意識的にも、無意識的にも疎外されて、記憶もだんだん薄れてしまっているのに、久米村関係の史料は極めて乏しい上、わずかに残っていた「久米村日記」や「親見世日記」等の貴重な文献も、焼亡した。島袋の論文と遺稿集に残された史料は研究にとって重要であると評している。

唐手（空手）の創造や展開を明らかにする上で、中国文化に深く関わり、その文化を琉球へ持ち込んだ久米村人の近代沖縄以降の動向は、「琉球復国運動」への関わりと日本と中国との関係悪化によって、隠されてしまったところが見られる¹⁵⁴。今日においても新たな関連史料を見つけ出すことが課題となっている。同書は、1956年の刊行であるが、東恩納の序文の指摘にもあるように、遺稿集に残された史料は、掛け替えのないものであり、唐手を明らかにする上で貴重であることには変わりがない。これらの研究は今日でも進んでいないのが実状であろう。

島袋は、「打花鼓」の研究的な意義について、「やまと芸能との交渉に就いては、だんだん研究されたものがあるが、唐の文物との関係があまり考察されていないのは、聊か不思議の感がしないではない。両属の歴史は、芸術の上では、島人固有の文化に複雑さを加えて、少くとも外来舶載のそれを味う私達の感覚に、何らか寄与するものがなかったとは云えまい」¹⁵⁵と述べている。

島袋の「打花鼓」には、那覇四町人は、頭角を現す者が薩摩藩に行つて能や狂言等日本人の相手をするにに必要な技能を身につけることに対して、久米村の青年達は、中

153 島袋前掲書21, pp. 6-7。

154 沖縄の武術家 新垣小と東恩納, 琉球新報, 1914年1月24日。記事では、近世沖縄の武術家で久米村人の新垣世璋は、元東若狭町の人と紹介されている。

155 島袋前掲書21, p. 295。

国に渡り唐楽、唐踊等を学んで、身を立て一家をなす者もいたとある¹⁵⁶。

『親見世日記』には、

「那覇中から提出した、当局への請願書であって、5年乃至3年、謡・狂言の私費留学をなし、業を卒る者に就職の優先権を与えられしと云うのであるが、里主・御物城でも道理と認めたので、時の尚瀬王の上聞に達し、夫々留学させることになった」¹⁵⁷

と那覇の若者達の目標があることを説き、『久米村日記』には、久米村で那覇同様に出された、唐楽、唐踊等を学ぶため中国（福州）へ留学者が病気でだめになったが替わりの者として希望が出された請願書に対して、久米村の上役惣役、長史の賛成することになり実現することとなったとある¹⁵⁸。

また、久米村については、「唐歌楽並に唐踊」以外に、

「拳法、槍術、籐牌（ティンペー）、鉄尺等の武芸を、彼地で習得する物のあったこと勿論であるが、打花鼓（俗にはターファークー狂言とも云う。）とは唐劇の芸能の一つで、これを持って唐芝居全体の総名としていたのである」¹⁵⁹

として、中国武術を習得する許可を申し出て留学して学ぶ者もいた。

久米村では、毎月三、六、九の日にいわゆる「三六九（サンリュウキュウ）」と称する学芸会を行っていた。1966年には、尚泰王の冊封があり、その終了を祝賀する催しが翌年の3月、久米村の精粹をすぐって催されることになった¹⁶⁰。

この祝宴を催すにあたって、久米村の諸氏が集合して話し合い、前例通りの賀表や賀詩を供することでは軽々しいので、本御冠船踊では詩の朗読、中国語等の諸芸「三六九」、唐劇の打花鼓、席書等を催すことになった¹⁶¹。

また、首里、那覇、泊で武芸を供したので、久米村も加えることになった。当日は、

156 島袋前掲書21, p. 296。

157 島袋前掲書21, pp. 296-297。

158 島袋前掲書21, p. 297。

159 島袋前掲書21, p. 297。

160 島袋前掲書21, p. 298。

161 島袋前掲書21, pp. 298-300。

久米村仮総役をはじめ上役、師匠、学生等総勢110余名が早朝に久米村を出発し、城下を盛大に行列して、首里の御茶屋御殿で尚泰王の上覧に供したとある¹⁶²。諸芸のプログラムは「三六九並諸芸番組」¹⁶³と称し、全演目21番の内、武芸の演目が10番ある。これを抜き出すと、

| | |
|--------|------------------------|
| 「籐牌 | 真栄里筑親雲上 |
| 鉄尺並棒 | 新垣通事 |
| 十三歩 | 新垣通事 |
| 棒並唐手 | 真栄里筑親雲上 |
| | 新垣通事親雲上 |
| ちしやうきん | 新垣通事親雲上 |
| 籐牌並棒 | 富村筑親雲上 |
| | 新垣通事親雲上 |
| 鉄尺 | 真栄田地区親雲上 |
| 交手 | 真栄田筑親雲上 |
| | 新垣通事親雲上 |
| 車棒 | 池宮秀才 |
| 壱百〇八歩 | 富村筑親雲上」 ¹⁶⁴ |

とある。唐手のほか、籐牌、鉄尺、棒、十三歩、ちしやうきん、交手、車棒、壱百〇八歩があり、型と組手らしき演武、武器を扱った武術が含まれている。これがどのような技法で演じられたのか史料から詳細は分からない。

単種目演武者一人の場合は型を演じたのであろう。交手とは、素手の組手、鉄尺並棒、籐牌並棒は武器の攻防、棒並唐手は、武器と素手の唐手の攻防を演じたものと考えられる。また、すべての番組を終えて帰る渡中、国王の希望により王城の門前路上で再び武技を5番ほど演武したとある¹⁶⁵。久米村の士族にとって中国伝来の武芸は重要な演目

162 島袋前掲書21, pp. 298-300。

163 島袋前掲書21, p. 300。

164 島袋前掲書21, pp. 300-306。

165 島袋前掲書21, p. 300。

で、中国に渡って直接拳法、槍術、籐牌、鉄尺等を修得する者もいたという¹⁶⁶。

これまで見たように、唐手は、王城落成の祝賀行列、冊封後の組踊、祝賀行列等王府主催の祝宴に披露される士族の芸能としての側面を持っていた。国事に供される芸能としての役割を持つことになって、琉球の素手の武術は、唐手という自称の呼称が生み出されたものと推測される。「木遣」や「三六九並諸芸番組」の唐手や武器術、型名も久米村人の若い士族の芸能として演じられたために、その呼称が明らかになって記録に残されたものと推測される。

第4節 唐手の3つの側面

これまで限られた数の同時代の史料を新たな観点から考察を行い、中国拳法の伝播とその受容によって生じた琉球独自の徒手武術を唐手の形成以前と以後に時期を区分し、王府の武芸に対する位置づけから大きな変化が見られたとして考察を行ってきた。

琉球独自の自称の唐手はどのような側面をもっていたのか、これまでの考察を整理すると、3つの側面の重なりを持った全体像を持っていたことがうかがわれる。(図-10)

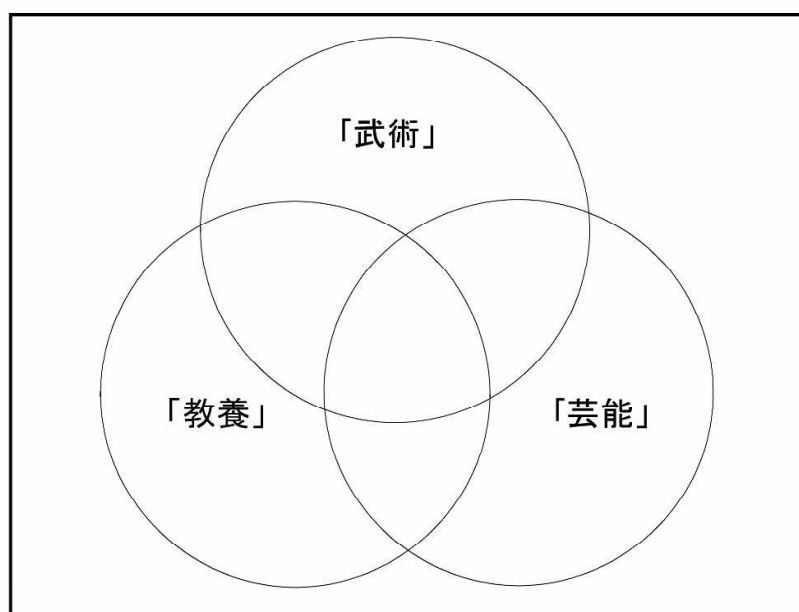


図-10 近世琉球の徒手武芸の全体像 (作成：嘉手苺徹)

166 島袋前掲書21, p. 296。

第1項 武術としての殺傷性

近世琉球には、琉球の徒手武芸の存在を示す史料がある。また、1816年に琉球を訪れたイギリス軍艦隊の乗組員によって記された史料や、1873年にイギリス人外交官がまとめた記録にも琉球の武芸の様子が描かれている。これらは、琉球の武芸の武術的な側面をよく表している。

1801年の『薩遊紀行』には、薩摩を旅した肥後藩士の紀行文によって、琉球人が、重ねた瓦六枚を拳で砕き、上手な者が指を伸ばして行う貫手の技法に発達することも薩摩藩士に知られていた¹⁶⁷。

19世紀半ば頃の『南島雑話』には、巻藁を突く男と箱のような固形物で右拳を鍛える男が描かれている¹⁶⁸。絵に添えて、「拳法術・トツクロウ」と記載されている。

1816年、イギリスの軍艦ライラ号が来琉した際の航海記には、艦で催された士官と琉球人の夕食会に拳闘の構えを見せた琉球人のことが記録されている¹⁶⁹。

1873年には、イギリス人外交官が、拳の一撃で大きな土瓶を粉碎し、人間をも殺すことができる琉球の武術を紹介している¹⁷⁰。

これらは、琉球の武芸の殺傷性を持つほどに拳を鍛える様子やイギリス人兵士に立ち向かおうとする琉球人の姿が描かれている。

第2項 教養としての武芸

近世琉球において、王府は武芸をどのように位置づけていたのか。1667年、琉球国の再興を図った摂政羽地朝秀（向象賢）は、『羽地仕置』を布達して、士族が12の諸芸を嗜むことを奨励した¹⁷¹。その中に「馬乗之事」を挙げている。これは、一芸一能のない者は、たとえ名門の出であっても仕官は許されないと厳達した。馬術は弓術とともに

167 小野他前掲書122, pp. 215-258。

168 永井前掲書130。

169 ベイジル・ホール著、春名徹訳：朝鮮・琉球航海記，岩波文庫，1986年，pp. 223-224。

170 E. W. Satow : Note on Leechoo, THE PHOENIX, A MONTHLY MAGAZINE for INDIA, BURMA, SIAM, CHINA, JAPAN & EASTERN ASIA, VOL. III. NO. 35. MAY, 1873年, (Hawaii Karate Museum (<http://museum.hikari.us/>), 2013年, 3月)。

171 史料編集所前掲書5, p. 24。

武芸一般のことを意味し、士族の教養（嗜み）として受け入れられていった。また、進貢貿易に乗り込む役人に対して3日間程度の鉄砲の訓練を課している。

布達から約百年後、那覇の士族阿嘉親雲上直識は、一子直秀に家訓の書を書き遺した¹⁷²。漢学、和学、書札の様式、文章書付けは、奉公人としての第一の使命であり、故実、仕付、謡を身につけ、立花、茶道、武芸にいたるまで日夜心懸けるよう、直秀を諭している。琉球において剣術は何の役にも立たないが、示現流、柔術等の武芸を士族の嗜みととらえ、身を傷めることなくほどほどに稽古を積むように言い渡している。王府は、日本の武士と異なり、王府に貢献する忠孝を備えた文人として身を立てるよう励むことであった¹⁷³。

18世紀の三司官蔡温は、渡中する役人が3日間程度しか鉄砲の訓練を行わないことを嘆き、鎗・長刀・弓・鉄砲等の稽古を日頃から十分に行わせるべきことを唱えている¹⁷⁴。琉球において武備は、薩摩藩（幕府）に強力に統制されており、国防の常備軍は必要性を持たなかった。その中であって、唐手は、軍備としてではなく、個々の士族の護身術や心構えに関わるものとして位置づけられていた。

第3項 芸能としての役割

唐手が初めて自称の呼称として記録に著されるようになる¹⁷⁵。木遣は、「首里三平等、那覇四町、久米、泊総動員で勤労奉仕をすることになって居た、那覇は真和志之平等に、久米は南風之平等に、泊は西之平等に合体する慣はしになって居たという」ことから、王城落成式の祝賀会は、首里、那覇、久米村、泊の協力体制の下、日本風と中国風の武芸的な演目が行われていた。1846年に王城落成の祝賀の場で、唐手の型として、パッサイ、クーサンクーの型を久米村人の若者が多くの見手の前で演武していることである。

1867年、最後の国王尚泰は、即位19年目にして冊封を授かった。この寅の御冠船に際して創られた組踊「二山和睦」の台本には、「鎌手」「鎗」「長刀」とともに「唐手」等

172 東恩納前掲書42, pp. 425-432。

173 仲原前掲書55, 仲原善忠全集, pp. 585-594。

174 崎浜秀明編著：独物語，蔡温全集，本邦書籍，1984年，p. 84。

175 山内前掲書19, pp. 204-205。

の武芸に励む様子が描かれ、自称の唐手と称されている。¹⁷⁶

同年、祝賀会が首里、那覇、泊で催され、久米村は翌年三月に行った。久米村仮総役をはじめ上役、師匠、学生等総勢百十余名が城下を盛大に行列して登城し、諸学芸、打花鼓（唐劇）、武芸を国王に供した。武芸の演目には、「鉄尺」「棒」「籐牌」「車棒」等中国伝来の武器術と「十三歩」「ちしやうきん」「老百〇八歩」の型、そして武器に対抗する徒手武芸の「唐手」、「交手」が挙げられている¹⁷⁷。

唐手は、国事としての祝賀に供される芸能としての側面を持つようになった。見手を前提とした芸能としての側面を持つことによって唐手の呼称が記録に残されていったことがわかる。

唐手は、以下の3つの側面を有する全体像を持っていたと考えられる。

- (1) 武術としての側面 殺傷性
- (2) 教養としての武芸
- (3) 芸能としての役割

この3つの側面の中で、芸能としての側面は、近代沖縄以降の唐手が創造される際に、特に重要な側面といえよう。この芸能としての側面は、近代沖縄への世替わりになると対立する2つの意義を持つことになった。

1つ目は、芸能としての側面は中国由来であったことである。王府は、華夷秩序の下で冊封関係を持つことによって進貢貿易を行い、琉球国を成り立たせていた。近世琉球において、唐手が中国由来であることが評価されるのであり、そのことが1つの矜持ともいうべき評価を受け、士族の教養と位置づけられ、武術としての側面ももっていたこと。

2つ目は、近代になると社会的な事状は一変した。琉球国は「琉球処分」によって冊封体制を絶たれ、統一国家日本の一地方となった。また、中国との関係悪化によって、中国由来の唐手は、全く逆の評価を受けることになり、同化教育によって脱中国文化ともいうべき、沖縄独自の風俗や慣習、芸能等の改良が喫緊の課題となっていった。

176 沖縄県立図書館史料編集室：沖縄県史料 前近代8 芸能I，沖縄県教育委員会，1995年，pp. 207-228。

177 島袋前掲書21，pp. 295-315。

第5節 小結

本章では、自称としての唐手の呼称が使用された理由とその経緯を追ってきた。

『羽地仕置』の布達によって、島津氏侵攻後の琉球王府の武芸に対する位置づけが、薩摩藩（幕府）に厳しく統制されることによって、琉球国の国家としての武備としては持つことを許されていなかった。しかし、武芸そのものがなくなったわけではなく、王府は、儀仗としての武器や個々の士族の護身術、奉公人としての心構えを身につけるための武芸として奨励していた。

日本の武芸や中国武術として馬医や馬術、弓術、槍術、弄刀等が使用されていたことが冊封使録によっても分かる。それは武備としてではなく、士族が役人として必要な教養ともいえるべき「六芸」としての嗜みであり、個別には王府に使える身分として、冊封使の祝宴や護身術、奉公人としての心構えを身につけるもの等として嗜まれていた。

『大島筆記』は、琉球において中国拳法が披露されたこと示す好史料である。東恩納、真境名、伊波らの論文では、中国拳法が伝播したとして扱われている。しかし、詳しい検討は行われておらず、実証性に乏しいといえよう。東恩納は、1698年に大嶺親方が将来した「土地君」を「ドーチーク」と発音することから類推して拳法が清朝以後に伝播したとしている。しかし、『大島筆記』の一項は、複雑な問題を孕んでいるといえよう。『大島筆記』を引用した論文が書かれた戦前期は、脱中国文化の世相の中で、中国由来の沖縄文化としての唐手をどのように認知させるかということが問題となっていたからである。

また、『羽地仕置』による王府の武芸に対する位置づけと那覇士族がそれをどう受けとめて実践していたかを「遺言書」や冊封使録によつてうかがい知ることができる。とくに、示現流ややはらとともに士族の一芸として嗜まれたからむとうが琉球の徒手武芸として位置づけられるなら、中国拳法の伝播の時期や琉球化の諸相を明らかにする貴重な史料と考えられる。からむとうは、琉球人によって初めて唱えられた自称の呼称ということもできよう。

『薩遊紀行』¹⁷⁸によって、琉球の突き手に優れた武芸の存在その特徴、日本の武芸と比較してどのような位置にあったのかを知ることができる。

真境名が論じたテーツクンと手ツクミノ術が琉球語と日本語のズレがあったにせよ同

178 解題では、作者の肥後藩士は他の史料には見あたらないことから不明としている。漢那前掲書15, p. 215。

一の語としてとらえるのは疑問が残る解説である。しかし、薩摩藩士は、日本の剣術、柔術が琉球人に嗜まれ、手ツクミノ術は琉球士族の一芸として認知されていた。手ツクミノ術について語った薩摩藩士水原が琉球で勤務したのは各々3年の2度にわたっている。とすれば、水原が手ツクミノ術を見たのは1700年代ということになる。

『南島雑話』の拳を鍛える男の絵図は、『薩遊紀行』¹⁷⁹に記された、突きによって何でも突き破ることができ、あるいは突き殺すこともできる技法の特徴を持つ手ツクミノ術は、突き立てた柱状の板に藁を縛り付けたいわゆる巻藁や固形物を使って拳を鍛えることによって、その威力を身につけることがうかがわれる。『大島筆記』の「其わざ左右の手の内、何分一つは乳の方を押え、片手にてわざをし」¹⁸⁰にも通ずるところもある。

『南島雑話』の拳の鍛えの絵図は、琉球の素手の武術の武術的側面を表しているものの、鍛錬法に様式が窺われる。『薩遊紀行』¹⁸¹の手ツクミで示された拳の威力と指を伸ばして行う突き手を裏付ける拳の鍛えの絵図に表された鍛錬法は、依拠する型の存在が示唆されているのではないだろうか。

また、突き手に優れた瓦を砕く拳と巻藁や固形物で拳を鍛える特徴は同じである。しかし、いずれも長期間滞在した薩摩藩士が琉球の武術を実見し、その上で呼称として名づけている。

琉球の素手の武術は、1850年代頃に自称の唐手の呼称が使われている。その理由は3つの史料から明らかになる。

1つ目は、首里城正殿改築の祝賀として催された「慶賀木遣」¹⁸²の聞き取り調査の資料（1846年）である。「木遣」には、国王に供する演し物として、自称としての唐手が使用され、演武された型名が明らかになっている。国事の祝賀に供される芸能として、初めて自称の唐手が登場し、その担い手は、久米村の若い士族で組織されていた。重要な点は、1846年に唐手の型として、後の首里士族らが主に習っていたパッサイ、クーサーンクーの型を久米村人の若者が多くの見手の面前で演武していることである。

179 小野他前掲書122, p. 233。

180 宮本他前掲書79, p367。

181 小野他前掲書122, p. 233。

182 「木遣とは、材木を曳く時の音頭のことである」「この木遣については口碑や文献に接したこともあまりなかったが、若いころ王城落成祝に出演した唯一の生存者たる90余歳の嘉数翁（大仲在）について財布採録した」。山内前掲書19, p. 202-205。

2つ目は、尚泰王冊封後の祝宴に供されたとされる組踊「二山和睦」¹⁸³(1867年)を台本を考察した。「二山和睦」は、琉球国最後の尚泰王の冊封、「寅の御冠船」(1866年)を終えた翌年の御膳進上¹⁸⁴に用意された組踊である¹⁸⁵。組踊は、御冠船踊の重要な演目であり、王府が冊封使節団を厚く持てなすための重要な芸能である。その台本の中に中国武術と日本の武芸と唐手が、士族の師弟演ずる武芸として登場しているのである。

3つ目は、久米村人の祝宴上覧演目の「三六九並諸芸番組」¹⁸⁶(1876年)である。久米村の士族が祝意を表すために行った諸芸のプログラム「三六九並諸芸番組」には、全演目21番の内、武芸の演目が10番ある。唐手のほか籐牌、鉄尺、棒、十三歩、ちしよきん、交手、車棒、壺百〇八歩があり、組手らしき演武、武器を扱った武芸が含まれている。

唐手は、王城落成の祝賀行列、冊封後の組踊、祝賀行列等王府主催の祝宴に披露される士族の芸能としての側面を持っていた。国事に供される芸能としての役割を持つことになって、琉球の徒手武芸は、唐手という自称の呼称が生まれることになった。

唐手の特徴をまとめると、①武術としての側面、②教養としての武芸、③芸能としての役割を持っているということが出来る。唐手は、国事としての祝賀に供される芸能としての側面を持つことによって、その呼称は記録に残された。芸能としての役割は、近代沖縄以降の唐手が創造される時に、特に重要な側面である。

近代になると社会的な事状は一変し、琉球国は琉球処分によって冊封体制を絶たれ、日本の一地方・沖縄県となった。また、日本と中国の関係悪化によって、中国由来の唐手は、全く逆の評価を受けることになる。近代沖縄の初期には、同化教育によって脱中国文化が進み、沖縄独自の唐手は、琉球国時代の士族の矜恃として見られていた役割を失わうことになった。

183 1866年、寅の御冠船の冊封使節団を歓待した翌年に催された御膳進上の組踊の演目。鈴木前掲書20, pp. 34-35)。

184 池宮前掲書144, p. 9。

185 鈴木前掲書20, p. 33。

186 島袋前掲書21, pp. 295-307。

第2章 惑う唐手の評価 ー変容する唐手と地域に根づく唐手ー

第2章 惑う唐手の評価 —変容する唐手と地域に根づく唐手—

第1節 はじめに

19世紀の半ば、欧米列強は東アジアへの進出を図り、琉球へたびたび訪れ、測量探査や修好、貿易を要求した。琉球は拒絶したが、イギリス、フランスは宣教師を送り込んだ。このような関与は琉球開国だけでなく、薩摩藩（日本）、中国（清）にとって領有権の含めた国際問題となっていた。しかし、イギリスと中国（清）のアヘン戦争に中国が敗れ、日本もいよいよ開国に至り、日本の幕藩体制は終焉し、中国（清）の華夷秩序も崩壊することとなったのである。

その後、琉球の帰属問題はうやむやとなり、1872年に、琉球国は琉球藩へと移行する。さらに、1879年には、明治政府の武力を背景とした琉球処分によって、松田道之を派遣して次の「達」を申し渡した¹。

1. 中国への進貢および皇帝即位の慶賀使派遣の禁止
2. 中国からの冊封の受け入れ差し止め
3. 明治年後を奉じ、年中儀礼は総て布告を遵守する
4. 刑法定律の実施のため担当者2、3名を人選して上京させる
5. 学事修業。事情通知のため少壮の者10名程度を上京させる
6. 福州琉球館の廃止
7. 征蕃の謝恩として藩王の上京
8. 鎮台分営の設置

この政府の「達」は、王府を震駭させた²。中国との朝貢・冊封関係に立脚した琉球では、旧士族らを中心に復国を嘆願する「琉球復国運動」が展開された。嘆願書の作成から、密航船の操作、中国側役人との通訳、漢文の読み書き等に携わる久米村人は重要な存在であり、旧士族の中でも運動への関わりは顕著であった³。親清派の救国運動派は「頑固党」と呼ばれ、新体制派の「開化党」と激しく反目していった。そして、1894年の日清戦争の勃発によって、中学校や師範学校に職員や生徒を中心とした義勇団が結成される世相を伊波普猷は次のように記している。

1 赤嶺守：琉球王国—東アジアノコーナーストーリー—，2004年，p. 197。

2 同上書。

3 同上書。

「支那の南洋艦隊が沖縄にやつて来るとの風説がたつたので、中学師範の生徒は義勇団を組織し、いざ鎌倉といふ時、首里城に駐屯してゐて第六師団の分遣隊を助けて、国家の為に戦ふことになつてゐた。他県から来た官公史や寄留商人たちは、同盟義会を組織し、万一南洋艦隊が見えたら、先づ後顧の憂となる中国系の久米村人を片付けてから、敵をむかへる手筈をきめてゐたといふことだが、所謂黄色い軍艦が来なかつたお蔭で、その三十六姓の後裔は、虐殺を免れた」⁴。

「黄色艦隊」の来襲は、単なる噂として一蹴されることはなく沖縄社会を畏怖させた。翌年、日清戦争に日本が勝利したことによって救国運動は終熄していったが、沖縄、日本、中国の関係が大きく変容する中、福州琉球館を拠点にした人的な往来は昭和戦前期まで続いていったのである⁵。

近代の沖縄空手に大きく影響を与えた東恩納寛量⁶（以下、寛量と記す）、上地完文⁷、本部朝勇⁸、宮城長順⁹らもこのような状況下にあつて中国へ渡っている。寛量の渡中の理由はよく分かっていないが、上地は徴兵忌避がきっかけであり、本部と宮城は旅券申請の目的を「商業」と記載している。しかし、中国における活動内容や滞在期間、修業内容を示す同時代の具体的な記録等はほとんど残されていない。

後多田は、「救国運動の初期のころには、日本による監視や捕縛、殺害の恐れも具体的にあつたため、護衛として武術家の存在も、通訳等とあわせて重要だった。武術家と救国運動との関連も重要であり、掘り起こしが必要だろう」¹⁰と述べている。

先述したように、唐手は、1860年前後の王国時代においては、中国由来の文化として、

4 伊波普猷：沖縄歴史物語，伊波普猷全集，第2巻，平凡社，1974年，p. 445.

5 「注 古琉球では、王府が通行や貿易に関連する仕事を中国系集団に委託した契約関係にあつたのに対し、近世琉球では、久米村人が琉球士族として琉球国王に奉公していた点に大きな違いがある」。深沢秋人：久米村の成立，沖縄県文化振興会資料編集室，沖縄県史，第3巻，古琉球，沖縄県教育委員会，2010年，p. 496。

6 東恩納盛男・嘉手苺徹：東恩納寛量，高宮城繁・新里勝彦・仲本政博編著：沖縄空手古武道事典，柏書房，2008年，pp. 501-503。

7 高宮城他前掲書6，桃原慶長：上地寛文，pp. 399-401。

8 高宮城他前掲書6，宮城鷹夫：本部朝勇，pp. 539-540。

9 高宮城他前掲書6，東恩納盛男・嘉手苺徹・高宮城繁：宮城長順，pp. 530-533。

10 後多田敦：琉球救国運動，Mugen 舎，2010年，p. 313。

士族にとって矜持ともいふべき武芸として評価されていたが、琉球処分後の琉球救国運動への参加と中国文化に対する見方が一変したことによって、1900年初等までは明治政府の同化教育においては、改良されるべき風俗として扱われていた。

久米村は琉球国の解体とともに、進貢貿易や中国文化導入の役割を失い、さらに、その存在すら表に出づらくなるように離散していくことになった。

空手道史を明らかにする上で、琉球処分以降、学校教育への導入までの時期は、近世琉球の唐手から近代沖縄の唐手（からて）へと質的に変容していく重要な時期として位置づけられる。

しかし、唐手から唐手（からて）が創造される間の約四半世紀に着眼して、質的な変容を遂げる時期として位置づけた研究は、管見の限りこれまでほとんどなされていないものと推測される。

本章では、1879年の沖縄県設置後から1905年頃までの沖縄県中学校へ唐手が正式に導入されるまでに、唐手が社会的にどのような評価を受けていたのかを当時の地元で刊行された新聞と教育関係誌の記事を中心として考察を加え、琉球処分以降の唐手の諸相を明らかにすることを目的とする。

第2節 就学率の変遷と唐手の体操化、運動会

沖縄県における近代の就学率は、他府県と比較して突出した特徴がある。明治政府は、まず、琉球国の解体を1872年に琉球国から琉球藩とする「廃琉」を行った¹¹。そのことによって、明治政府は日本国内として琉球藩を企図したが、琉球内部でも国際的にも琉球国が廃止されたと受け止められてはいなかった¹²。その後、明治政府の強権を背景にした強制的な琉球処分によって、琉球藩を廃止し沖縄県を設置した。沖縄県設置後の県庁の喫緊の問題は、他府県から来た行政人や軍人、教員と琉球語を話す沖縄の人々と言葉が通じないことであった¹³。沖縄では師範学校の設置に先立って「会話伝習所」¹⁴が

11 西里喜行：明治国家と琉球処分，沖縄県史，各論篇，第5巻，近代，p. 19-22。

12 同上書。

13 波平恒男：同化・差別・皇民化，沖縄県史，第5巻，近代，pp. 486-487。

14 本永守靖：会話伝習所，沖縄大百科刊行事務局：沖縄大百科事典，上巻，沖縄タイムス社，1983年，p. 675。

開設された。同化教育として標準語の指導ための教科書『沖縄対話』¹⁵が県庁によって編さんされ、学校教育における方言の使用を禁じ、標準語教育を一層強力に推し進める政策が取られたのである。

近藤は、『沖縄対話』が刊行され使用された意義を「沖縄人児童も、この科目を『内地語』と呼んでいたように、会話科で習う自らの生活での言葉とは別であると認識していた。学校は標準語が教えられ、用いられもする場として、沖縄において特別な言語空間であった。まさに『言語風俗ヲシテ本州ト同一ナラシムル』方法として学校教育は位置づいていた。そして言語を『同一』にすることは、『沖縄対話』の記述に見られるように、大和人が沖縄人を支配するという関係、さらに『進んだ』大和と『遅れた』沖縄という意識を教えることと一体であった」¹⁶と論じている。

沖縄県設置後の就学率の変化を沖縄平均と全国平均を比較してみると、1881年の就学率は、沖縄平均2.8%に対して全国平均43.0%、日清戦争前の1891年には、沖縄平均14.9%に対して全国平均50.3%、日清戦争の日本の勝利した翌年には、沖縄平均は31.2%に上昇したが、全国平均は64.2%であり、沖縄の急激な上昇がわかる。さらに、日露戦争前の1901年には、沖縄平均71.6%に対して、全国平均88.0%、日露戦争翌年の1906年には、沖縄平均90.1%に対して、全国平均96.7%に変化している¹⁷。唐手が学校教育へ正式に課される時期とも重なっている。

沖縄県のスタートの時点での就学拒否による割合、日清戦争後の急激な伸び率、そして日露戦争後になると、全国平均と約7%程に差が縮まり、ほとんど同じ普及率に上昇している。このような就学率に表れた実状は、明らかに他の地方とは異なる沖縄の歴史的な背景から生じたと考えられる。(表-3)

15 沖縄県学務課編。1880年発行。廃藩置県直後の沖縄で共通語を教えるために作られた最初の教科書。創設当初の師範学校や小学校において使用された。内容は、ごく日常的語句と会話文をとりあげて、共通語と方言（首里の貴族語）の対訳を並記したものである。本永守靖：『沖縄対話』、『沖縄大百科事典』上巻、p. 554。

16 近藤健一郎：『学校教育の実態』、『沖縄県史』第5巻、近代、pp. 200-201。

17 同上書。

(1879年(明治12)～1906年度(明治39))

| 年・年度 | 学齢児童数(人) | | | 就学児童数(人) | | | 就学率(%) | | | |
|------|----------|--------|--------|----------|--------|--------|--------|------|------|------|
| | 男 | 女 | 合計 | 男 | 女 | 合計 | 男 | 女 | 沖縄 | 全国 |
| 1879 | 27,895 | 25,312 | 53,207 | 2,163 | 0 | 2,163 | 7.8 | 0 | 4.1 | 41.2 |
| 1880 | 32,737 | 31,458 | 64,195 | 459 | 0 | 459 | 1.4 | 0 | 0.7 | 41.1 |
| 1881 | 34,305 | 32,570 | 66,875 | 1,881 | 0 | 1,881 | 5.5 | 0 | 2.8 | 43.0 |
| 1882 | 35,587 | 34,547 | 70,134 | 2,211 | 8 | 2,219 | 6.2 | 0.0 | 3.2 | 48.5 |
| 1883 | 36,567 | 35,391 | 71,958 | 2,044 | 8 | 2,052 | 5.6 | 0.0 | 2.9 | 51.0 |
| 1884 | 38,895 | 36,429 | 75,324 | 1,953 | 14 | 1,967 | 5.0 | 0.0 | 2.6 | 50.8 |
| 1885 | 36,127 | 32,662 | 68,789 | 2,187 | 38 | 2,225 | 6.1 | 0.1 | 3.2 | 49.6 |
| 1886 | 37,456 | 34,471 | 71,927 | 2,928 | 68 | 2,996 | 7.8 | 0.2 | 4.2 | 46.3 |
| 1891 | 38,398 | 36,891 | 75,289 | 9,010 | 2,219 | 11,229 | 23.5 | 6.0 | 14.9 | 50.3 |
| 1896 | 36,571 | 34,526 | 71,097 | 16,474 | 5,676 | 22,150 | 45.0 | 16.4 | 31.2 | 64.2 |
| 1901 | 37,308 | 35,446 | 72,754 | 30,988 | 21,129 | 52,117 | 83.1 | 59.6 | 71.6 | 88.0 |
| 1906 | 36,206 | 30,121 | 66,327 | 33,809 | 25,936 | 59,745 | 93.4 | 86.1 | 90.1 | 96.3 |

(史料)「学齢人員就学不就学表」、『文部省年報』各年版(史料名は年によって異なるが、1879～1883年のものに従った)。

表-3 沖縄における就学率-1879～1906年

(出典：沖縄県史，第5巻，近代，沖縄県教育委員会，p.198.より転載)

また、1882年には、沖縄県中学校では「体操はまだ民情に適さずとして教授しなかった」¹⁸。1885年になると、「体操科を実施し、また英語を加え教育課程の改善に努める」¹⁹と変わった。1887年になって初めて、「普通体操のほかに兵式体操を加え、熊本鎮台沖縄分遣隊の士官下士官にその教授を囑託」²⁰している。

この年の2月に、森文部大臣が教育視察で来県した。森は、県の師範学校や中学校、那覇の小学校を視察して、森の来沖に合わせて催された、県では初めての連合運動会を観覧している²¹。森の沖縄での動向は、記録が乏しいことから詳細は明らかではないが、この頃から運動会が、島尻郡、宮古郡でも開催されるようになっていった²²。森の来沖以降の活発な運動会の開催は、儀式としての教育勅語の奉読、君が代斉唱、万歳三唱等、演目として各種体操、教練、競争競技等が定着した²³。観客として訪れる地域の人々に

18 知念朝功：学校のあゆみ年表，養秀百年，養秀同窓会，1980年，p.564。

19 知念前掲書18，p.565。

20 知念前掲書18，p.566。

21 真栄城勉：明治期の沖縄県における運動会に関する歴史的研究，琉球大学教育教育学部紀要 第1部・第2部(42)，琉球大学教育学部，1993年，p.293。

22 真栄城前掲書21，pp.293-302。

23 真栄城前掲書21，pp.294-296。

も認知され、娯楽としても人々の関心を高めていった²⁴。

吉見は、森大臣の全国各地の巡視の目的と運動会について次のようにまとめている。

「学校行事としての運動会の発達と軍事演習の大規模化は、ともに1880年代を通じて並行的に起きた現象であった。じっさい、陸軍や海軍の演習を天皇あるいはこれに代わる人物が臨席して催すことは、1870年代からの奈良市や下津原での歩兵や砲兵の演習を別にすれば、ようやく1885年ごろから盛んになり始めている。同年3月には東京鎮台諸隊と海軍艦隊の連合演習、近衛兵諸隊連合演習、広島鎮台演習、熊本鎮台演習等が次々に実施されているし、87年にも、名古屋付近の武豊での陸海軍対抗演習が展覧されている。そして90年、それまでの軍事演習とは比較にならない本格的な演習が名古屋で実施される。すでに88年、鎮台を廃して師団を設置し、師団長は天皇に直属することが決められ、89年には天皇の統監する陸海軍合同演習の制度が整い、天皇を頂点とするこの国の軍事機構は大幅に体系化されつつあった。90年の大演習は、そうした帝国の軍隊が、その性能を天皇に対して証明していく一大イベントであった。明治国家は、こうして1880年代半ばに軍事と教育の両面でその規律＝訓練的な国民の訓育システムを急速に整備していった」²⁵。

さらに、「森有礼にとって学校は、将来の日本をになうべき児童たちがみずからの身体を近代国民国家の主体＝臣民にふさわしいそれへと調教していく場であり、同時にそうして訓育された身体が、国家のまなざしの前にもれなく晒されていく場所であった。運動会は、各地の学校を頻繁に巡視する森の身体を通じて代理的に行使される国家のまなざしと児童たちの調教されつつある身体との邂逅を、もっとも効果的な仕方で演出する仕掛けにほかならなかった」²⁶。

森大臣の沖縄巡視後、沖縄県視学官小川銀太郎の県内学校視察は、唐手の経験者が学校や壮丁の体格検査で秀抜であることから、唐手の体操科としての体育上の価値を認めた。このことが公教育への導入に影響を与え、唐手導入の重要な一因として取り上げられている²⁷。この点について、学校や壮丁の体格検査の結果と唐手との関わりについての記事を確認できてはいないが、武道の動向として次のことが報じられている。(図-11)

24 中学校運動会の概況，琉球新報，1898年5月1日。

25 吉見俊哉：運動会と日本近代，青弓社，1999年，p. 19。

26 吉見前掲書25，p. 28。

27 富名腰義珍：琉球拳法唐手，武侠社，1922年，pp. 9-10。

「昨夏は復藩運動者（即ち琉球藩再興の運動者）を出し、最後に〈原国〉氏が此般の遭難を見るに至れり。願ふに一朝夕の故にあらざるべし。抑も本県の拳骨を弄するは、他府県に於ける撃劍、槍術なり。一名唐手と称す其の技術の目に於いては『パッサイ』『クサンクン』『ナイハンチン』等の名ありて或琉球人士は古くより皆これを鍛錬し、以て有事に備ふる者即ち台湾土匪が学務部員を殺害セル槍棍及び刀劍と其用は毫も異なるところなし。県下に此輩の頑奴が今尚ほ跋扈跳梁して斯くの如き狼藉を為せり。真に危険と云わざるべからざる。原国氏は、県下那覇の人幸いに此の技術に通せり。故に辛じて性命を全うするを得たり。然れども数日の治療を経るにあらざれば肋骨の激痛は當に癒さざるべしと医師は之を診断せりと云ふ。因りて本会より慰問上を發し、且つ微品を贈呈せり」³⁰（かっこは筆者加筆）。

教師に対する暴力事件が、頑固派の人々によって唐手を用いた行われたことから、頑固派に対する非難と唐手を他府県の劍術や槍術に匹敵する武術と同じであるとして、台湾事件³¹を例にあげて、原住民による琉球人の惨殺に槍、棍、刀を用いたことと何ら変わらないとして厳しく糾弾している。唐手の武術性について、「真に危険」と槍玉にあげている。『琉球教育』の執筆者は政治的な立場から頑固派を糾弾しており、暴力を振るった旧士族の行動の事実関係は明らかではないが、唐手に対する見方は明らかに批判的である。

また、唐手の「技術の目」として、「パッサイ」「クウサンクン」「ナンハンチン」の型があげられている³²。「琉球人士」は王国時代より型を学び、護身の術としているとも述べている。

近代沖縄の社会状況を反映したこの事件は、4年後に中国（清）で義和団が起こしたもので同誌では「義和拳」³³の見出しでこの問題を次のように報じている。

30 前掲書29, pp. 154-155。

31 1871年末に、宮古島年貢運搬船が那覇からの帰途台湾に漂着した。その乗組員54人が台湾原住民によって略奪・殺害されるという惨事となった。この殺害事件の報復的措置として、1874年、日本がおこなった台湾出兵＝征台の役と終結にいたる一連の軍事・外交の過程が台湾事件である。金城正篤：台湾事件，沖縄大百科事典，中巻，p. 678。

32 前掲書29, pp. 170-171。

33 同上書。

「拳法の遠く本県即ち沖縄に流布せる鉄拳の如きは、或は之と同一の者に紛れなかるべしとある人は語り居れり。本県風俗改良の一端とも為すを得べければ渠れ義和拳と沖縄の鉄拳と其異同若くは弊害の有無は教育上宜しく心得居らざるべからざるなり。先年頑固の輩^{ヒヤー}が原国前首里訓導に負傷せしめたることは、本県教育歴史に現存せり。此輩^{コノヒヤー}が人に向て暴行せしも鉄拳の罪ならむか。併し正宗の名刀も其持主の心^{こころたしなみ}嗜一ツに依るべし。今一ツは支那的遊戯、鼓鑼打、綱引の如きは如何にも蛮風野俗あるを見る。漸次廃滅せむことを希望す。夫の垢面垢衣の下等人か身に垢臭を帯び喧憂を極むるか如き忽ち百鬼夜行^{ひやつきやぎよう}の図を路上に描く等の事は真に忌はしき風俗なり」³⁴。

義和拳と「沖縄の鉄拳」、すなわち唐手が同一のもので風俗改良に当たるとして、教育上、配慮すべきであると唱えている。先述の頑固派の暴力事件は、唐手を身につけていることに起因し、唐手という「風俗」をも問題にして、唐手の使い手は心得次第であると述べている。しかし、中国由来の遊戯、銅鑼打ち、綱引きは野蛮で廃止すべきであると記していることから沖縄の風俗、習慣等に対して蔑視する論調で示されているといえよう。頑固派への政治的な糾弾と中国由来の唐手に対して否定的な見方が色濃く反映していることが窺われる。義和団事件について、同誌は「清国義和団の動乱」³⁵によっても報じてもいる。

「尚ほ効く所に依れば義和団の徒党はよほど以前より北京に入り込み居りて銃眼を避くるの術と称して手拳^{てくぶし}又は唐手等^{からて}を揮り回はし、同国愚民を惑はし居れる由なれば俄かに斯る事態に立至りしも予て北京の内外に潜伏せる徒党一時に隆起して賊兵に与みせるか為めなるべしと云へり」³⁶。

ここでも義和拳を沖縄における手拳や唐手と見立てて報じている。中国由来で琉球化した唐手を中国における賊兵が使う義和拳と同様の武術とし、手拳に「てくぶし」、唐手に「からて」の読み仮名を振っている。「てくぶし」は琉球語読みで唐手を意味している。唐手には標準語の読み仮名を付け、あえて両者を使い分けている。

また、復国運動の中心人物であった旧首里士族の浦添朝忠が日清戦争後に中国から帰

34 前掲書29, pp. 170-171。

35 前掲書29, pp. 136-137。

36 同上書。

国して、首里区字桃原（現那覇市首里桃原町）で行った私的な教育活動について、『琉球新報』は「頑固派の児童教育」³⁷の見出しで次のように報じている。

「教育の必要は、流石の頑派連も多少気が付いたと見え、以前より同臭味の者共を語らひ、桃原なる浦添朝忠氏（旧按司家にして久しく清国に滞留し近年帰県せし同派の首領株）の邸内に集会し、7、8歳以上の学齡児童を勧誘し盛んに漢籍（四書類）算術習字唐手（支那流柔術の？）などの諸科目を教授せり。講師は何つれの馬の骨やは知らされとも、2、3名許りもある由にて生徒も亦5、60名以上あり。勿論これは例の門閥階級を棚に上げて士農工商何れの子弟も入学せしむる規程なりと云ふ。また勉めて子弟の歡心ををを買はむ為ならむか時々腰弁当などを提げて景色好き場所へ引率し運動会、遠足などの企てもありといへは常に彼等にありなれたる飲み食い一方の会合とは些かと変調子の趣向といふへし」³⁸。

就学拒否を訴え続ける浦添（頑派＝頑固派）は、自宅に学齡児童を集めて公教育に対抗して独自の教育を行った。教授内容は四書五経、算数、習字と唐手を指導している。新聞の論調は、教師の資格や入学の条件について疑問を呈し、浦添らの活動を報道している。唐手についても「支那流の柔術の？」と呼称の置き換えを行っている。『琉球教育』は、頑固派に対立する開化派の立場にあることから、記事の論調は浦添の活動に批判的である³⁹。

唐手の詳しい指導状況は不明だが、浦添らが私邸で行った集会に地域の学齡児童5、60名が参加しており、この時期に依然として頑固派に賛同する人々が多数いたことが窺われる。

37 頑固の児童教育、琉球新報、1898年6月13日。

38 同上書。

39 1893年に創刊された沖縄最初の新聞で、創刊者は尚泰王の四男尚順を中心に、高嶺朝教・太田朝敷・護得久朝惟・豊見城盛和ら首里の旧支配階級の青年派に属する20代の若者たちだった。高嶺と太田は第1回県費留学生として東都で学び、開化党派で、実際の新聞作りには、県知事奈良原繁が新聞の発刊許可の条件として入社せしめた野間伍造（主筆）と宮井悦之輔という他県人記者も加わって、両記者とも県知事の体のよい「目付」役とみられていた。大田昌秀：琉球新報、沖縄大百科事典、下巻、pp. 886-887。

また、辻遊郭⁴⁰内において50余歳の唐手指導者が弟子に掛け試し（腕試し）をさせている問題を、同紙は「乱暴漢の養成所」⁴¹の見出しで報じた。

「全く自己の腕試しの爲め無法を働く事と存候現ふ此等悪漢を集めて武芸を享受致候曲者は辻ウカンヌヒラーの空井戸の上の小路より入りて奥に住める前里某といへる50余歳の老人に有之候此老人は常々方々の無頼自宅に集め支那手（柔術の如き者）を教授し1日1人より2錢宛の教授料を徴収して活計を立て其門人なる暴漢中にて武術の進歩したる者を夜遊郭内の道に出して実地試験をなし他人と喧嘩を致させ候由にて聞も恐ろしき次第に御座候」⁴²。

50余歳の人物は、唐手の指導によって金銭を徴収し生計を立て、遊郭街で弟子に唐手を使わせて掛け試しをさせ、稽古の成果を脇で見ているのである。「悪漢」を集め、暴力を振るう人物を生み出しているとされている。この記事では、唐手を「武芸」、「支那手（柔術の如き者）」と記している。

ここで扱われる唐手は、暴力的行為として行われ、生計を得るためのものであり、唐手の理念や有意義な面等はほとんど問われていない。琉球処分以降、武術としての唐手は、暴力的に使用されたことが取り上げられ、教育者や新聞によって批判された。また、中国由来の理由から義和拳と同一視されたり、呼称の読み替えが表記される等改良されるべき風俗として位置づけられていた。

第4節 地域で継承される唐手

唐手は、一方では地域の年中行事や軍人の歓迎会の演目として披露されてもいた。これは、琉球国時代の唐手の芸能的側面が地域に受け継がれていたと見ることができる。

首里綾門の伝統的な年中行事としての大綱引後に首里区字儀保（現那覇市首里儀保町）で催された親睦会の模様を『琉球新報』は「綾上大綱引き後の大親睦会」⁴³との見出し

40 辻の遊郭が社交の場となっていた時代であり、「掛け試し」として通りすがりの猛者や唐手家同士が腕試しをした場所として知られている。

41 乱暴漢の養成所，琉球新報，1899年1月15日。

42 同上書。

43 赤田の弥勒，琉球新報，1898年8月19日。

で次のように報じている。

「赤平の綱曳の翌日大仲、桃原は去14日に山川は去16日に何れも村大親睦会を開きたる由なるが、儀保は一昨17日国頭邸に於いて大親睦会を開き、老壯幼打交りて酒を酌みかはし、酒間壯快なる数番の演説あり余興には悲歌慷慨の剣舞あり勇壯なる支那流の武術を演ずるあり而して門内には綾上大道に於て名誉を得たる儀保特有の軍配扇形の旗頭を立て会中の人、意気天を突き歓笑の声四方に響きたりしと聞く」⁴⁴。

唐手の呼称は、支那流の武術と置き換えて記されているが、地域行事の親睦会で演説や剣舞等とともに晴れの舞台の演目として、多くの観客の前で披露されている。

また、首里区字赤田（現那覇市首里赤田）で催された年中行事を同紙は、「赤田の弥勒」⁴⁵の見出しで次のように報じている。

「首里区字赤田に於ては例年旧7月16日には豊作祈願の為め弥勒の躍りありしか本年は其の余興として某較へ（鎧の手）唐手（支那柔術）其の他羽踊り杯の催しありとの事なれば見物人も余程雑沓を極むるならん」⁴⁶。

赤田で催された豊作祈願の弥勒の躍りの後、余興として棒比べ（槍の手）、唐手（支那柔術）、羽踊り、杯の催し等が見物人がごった返す中で催されている。

日本で徴兵令が公布されたのは、1873年である。沖縄県で実施されたのは、他府県より遅れて1898年であった。那覇区字泊（現那覇市泊）の出身で陸軍教導団へ志願兵として採用され、台湾守備隊より広島21連隊へ再役交代の途次帰郷した軍人の歓迎会の様子を同紙は、「屋宜曹長の歓迎会」⁴⁷の見出しで次のように報じている。

「当日の正賓たる曹長は起ちて一同に挨拶して日清戦争の実歴談を最も沈着丁寧に演べて会場なる小学校内には既に郡長代理、同字出身の中学生30余名、駐在巡查、曹長の父兄同字出身の現役兵、其他有志者等合して無慮400余名待受けて曹長を迎へたり頓が

44 同上書。

45 同上書。

46 同上書。

47 屋宜曹長の歓迎会，琉球新報，1898年10月21日。

て名城政成氏は起て閉会の趣旨を陳へたる後ち當日の正賓たる曹長は起て一同に挨拶して日清戦争の実歴談を最も沈着丁寧に演べて満場に感動を与え是より会員数番の演説了って酒宴に遷り余興には中学校生徒の撃剣と剣舞あり泊得意の唐手等ありしかば曹長は興に堪えずやありけん」⁴⁸。

軍人の帰郷に際して地元泊では、その歓迎会に郡長、警察官、現役兵、泊出身の中学生、その他有志等合わせて約400名が参加した。酒宴の余興として中学校生徒による撃剣、剣舞、そして泊得意の唐手が披露されている。同区の中学生在が唐手を継承し、嗜んでいることや同地区の唐手事情が窺われる。ここでは唐手の呼称の置き換えはない。

しかし、1904年の同紙には、「出征軍人及家族救護第一回剣舞大会」⁴⁹の見出しで、次のように報じられた。

「来ル十九日奥武山公園ニ於テ左ノ通り举行候條万障御操合セ奮テ御来会被下度此段廣告候也。明治三十七年四月十五日 沖繩義友会発起人高鳥貞 要項 一、期日及開会時限 来ル十九日(旧三月四日)(雨天順延)午後三時 炮一発 但余興ハ午前十一時ヨリ開始ス 一、会場奥武山公園 本日ハ特ニ大弓射的場ヲ設ケ、弓術ノ運動用ニ供ス 一、入場及入場料 入場ハ午前九時ヨリ入場料ハ凡テ奥武山公園入口ニ於テ申受クベシ 大人金九錢小人金参錢ツヽ 演芸次第 一ハーリー 一沖繩手踊 一西洋奇術 一風月楼芸妓ノ狂言 一沖繩唐手 一音楽 一開会炮一発 一福島將軍征露ノ唱歌 一剣術 一薩摩琵琶 一剣舞術 一閉会 午後七時炮一発以上」⁵⁰。

沖繩義友会が有志を募って発起、催した出征軍人とその家族を救護する剣舞大会には、プログラムには剣舞だけでなく、様々な演芸が行われ、沖繩唐手が含まれている。唐手に沖繩を冠していることに特徴がある。この時期には、唐手が広く地域行事で取り入れられていったことが推測される。

48 同上書。

49 出征軍人及家族救護第1回剣舞大会，琉球新報，1904年4月15日。

50 同上書。

第5節 学校行事で披露される唐手

1902年3月に催された沖縄師範学校の卒業生送別会で、唐手が演目として披露された。同学友会誌の「本会記事」⁵¹には、次の式次第が行われていることが紹介されている。

「本会記事 明治35年時4月 至8月

1 明治35年3月25日卒業生送別会順序左の如シ

1 開会の趣旨 2 送詞 3 唱歌 4 唐手 5 福引 6 簡易科生の唱歌 7 発句 8 即座演説 9 職員生徒の陰芸 10 蛍の光」⁵²。

また、唐手の演目についても次のように記されている。

「次は唐手 是は本県人の専有物で有りて他県人の真似し能はざる所にして子供の時より身守りとして練習し熟達すれば一撃以て柱を折るに至る。選手は富川盛重、當眞恵徳、野原直吉、名嘉幸徳の諸氏にして其身を据へ力を込め眼を凝らし時は猛獣の狂ひ来るが如く唯舌を巻くの外なかりし中にも並里八蔵氏の魔術には誰一人拍手喝采せざるものなかりき」⁵³。

唐手が送詩、唱歌、演説とともに卒業式の送別会の演目に取り入れられたことは、学校における教員や生徒らの唐手に対する評価をうかがうことができる。演武者5名は、すべて沖縄人県出身者で当年の卒業生である⁵⁴。富川は首里の士族、名嘉は那覇の士族、野原は島尻の平民、當間、波里は国頭の士族とあり、年齢や身分からすると、沖縄県設置頃の生まれで、出身地区や身分に関係なく子どもの頃から見守り（護身術）として嗜んでいた者もいる。幼少の頃から嗜んできた者が一撃で柱を折るほどであり、演武はあたかも猛獣が襲いかかってくるようでその迫力は舌を巻くばかりであるとして記していることや、唐手を「沖縄県人の専有物」として演武を誇りにとらえている様子がうかがわれる。

51 宮城仁之助：本会記事，龍潭，第1号，沖縄県師範学校内学友会，1902年，pp. 82-83。

52 同上書。

53 宮城前掲書51，p. 83。

54 宮城前掲書51，pp. 136-145。

同年、8月には連合運動会が開かれ、その模様が「名護兼久ノ演技」⁵⁵として、次のように紹介されている。

「今ヤ天下ノ書生暇ヲ得テ各自思イ思イノ遊ヲ試メリ光陰ハ黄金ナリトノ金言モアレバ天下幾万ノ書生ハ如何ニコノ六十日間ヲ黄金ヲ使用スベキカ平常寸陰モナク学課ニ追ワル、学生頓ニ莫大ノ金ヲ得テ狼狽ノ今日トナレリ殊ニ寄宿舎ニ込メラル、世ノ所謂窮屈書生ハ出デ、社会ノ風波ニ接シ利トナク害トナク凡ベテ感染シツ、アリ茲ニ於テ我ガ国頭郡ノ師範生ト講習生ト八月十三日連合シテ大運動会ヲ名護ニ開キ各自ノ氣ヲ鼓スルト共ニ炎々天ニ泣ク弱書生昨日モ今日モ淫酒ニ耽ケル生意氣男ヲ立テヨ進メヨト鞭チ一般人民ノ午睡ヲ覺サント勇ニ立チタル活発男児ノ志氣ハ凝固シテ大運動会トナレリイデヤ其ノ活劇ヲ見シガ概略記セン午前七時カラ三々五々相携エテ白身ノ健児ガ名護尋常高等小学校ニ集リ八時ヲ報ズルヤ忽チ白ノ大蛇ガ出来テ西ニ向ヒテ猛進シ初メ名護兼久馬場ニ着スルヤ分レテ源平トナリ競争セント屈ガンデ据ヘテ居ル運動場ノ入口ニハ緑竹ノ門ニ国旗ヲ交叉シ中央ニハ大竿ヲ立テ之ニ大国旗ヲ翻シ小国旗ヲ吊シタル二十間余リノカナビキ糸ヲ三方ニ引張大竿ノ下ニ白赤ノ幕ヲ張テ来賓席ニ充テ此处ニ喜入郡長ヲ初メ数十名ノ来賓ガ席ヲ満タシ演技ノ遅キヲ待タル、如シ愈九時十分トナルヤ例ノ徒歩競争ニ回目ニ新ラシキ連歩レース一回三ツ足ニ化ケタル所謂滑稽運動ナル一人三脚一回師範生ノイツモヨクヤル旗送り一回演技中後へ走ルガ如キハ実ニ滑稽ノ妙術デアツタソレカラ障害物競走初メハ縄ヲ飛ビ真グ網下ヲ潜リヌケノ次ニカマジーヲ潜リ終リニ提灯蠟燭寸ヲ取り散ラシテアルノヲ纏メテ火ヲ点シテ決勝点ニ至ルマデ此ノ技ノ始メカラ終マデ笑声オッホ、拍手パチ、デ見事デアツタ其レカラ又未タ曾テ見タコトノナイ連技レースニ移ツル二人ノ連レガ居テ初メハ二人三脚デ駆ケテ十間ヲ来タルト縄ガアル次デ各自足ヲ解イテ一人一脚ノ蛙飛トナリテ決勝点マデ一所懸命デ引キ続イテ来賓ノ徒歩競争トナツタ八字ヲ鼻下ニ記シタ先生方ガ無邪氣ニ一所懸命ニ駆ケヤツタノハ先ズ当日ノ花デシタ以上一休モセズ引換ハリ引換ハリ躊躇モセズニヤリ抜ケテ午前ハ過ギ昼食ヲシテ午後ニ移ル朝ハ風モナク国旗モ眠テ之レデ今日ノ運動会ハドウダラウカト心配シテ居タガ十一時カラ東風吹き初メ国旗ハパタ、勢ヲ添へ焼クガ如キ炎天ニ関ハラズ見物人ハ周囲ニ人ノ山ヲ築キ近年希有ノ人デ学生モ大人モ女モ男モ汗ダラケナリ所謂流汗瀧ヲナスト云フ塩梅デ一所懸命ニナツテ見物シテ居ルノモ演技ノ興ヲ添へ且ツ運動者ノ勇ヲ益々強ク

55 宮城前掲書51, pp. 81-82。

ナサシメタ零時半カラ又野球ノ試合ガアル四回デ紅軍ノ勝トナツタ先ズ之ハ目覚敷ヤツ
タト云フ訳ニハ参ラナカツタ次ニ擊劍十組ヲヤツタ内二組ハ来賓デ中ニハ目覚敷ヤツ
ケタモノモアリ怒鳴テ相手ヲ驚愕サスルモノモアリ最終ノ無手勝流ナドハ拍手喝采デ送
ラレタ之レガ済ムト直グ本県特有ノ相撲十組ヲ戦ワシ中ニハ四人ト試合ツタ強力モ居ッ
タ運動会ハ之レデ御仕舞ヲ告ゲテ散会シタスカル炎天デ朝カラ晩マデ続ケテ一人モ倦怠
ト云フ風ヲ見セズヤツテ抜ケタノハ真ニ現時ノ健児ト言フモ過言ナラジ為メニ喜入郡長
ヲ初メ来賓方ハ余程満足セラレタ様ニ見受ケラレタ」⁵⁶。

運動会の演目として唐手（無手勝流）⁵⁷の演目が確認されているのは、これが初出で
ある。まだ、学校教育への導入は正式には始まっていない。中心となる出場者は国頭郡
出身の師範学校生徒と講習生である。当時の国頭郡出身の生徒は合わせて81名⁵⁸、場所
は名護尋常高等小学校で、来賓は地区行政の長である喜入郡長はじめ数十名とある。運
動会参加者としては、後に開催される各地の運動会と比較すると規模は小さなものであ
る。しかし、郡長をはじめとする数十人の来賓の参観、見物人は「周囲に人の山を築き、
近年希有的人で学生も大人も女も男も」とあり、地域の人々も大勢駆けつけて見物して
いることから関心の高さが窺われる。プログラムは、記述された内容から以下の通りで
ある。

- ①徒歩競争
- ②連歩レース
- ③旗送り
- ④連技レース
- ⑤来賓の徒歩競争
- 以上が午前中、昼食後に開始
- ⑧野球の試合
- ⑨擊劍10組
- ⑩無手勝流
- ⑪本県特有の相撲

56 同上書。

57 唐手を無手勝流とする記録は、県内の記録では後に多く見られるようになることから唐
手の別称として使用されている。

58 宮城前掲書51, p. 98。

運動会は、朝8時に始まり晩までかかっている。観客は、1人も「倦怠という風」を見せず大好評に終えている。

注目したいのは、以下の点である。

- (1) 沖縄で徴兵制(1898年)が施行された後に開催されていること
- (2) 参加者は国頭郡出身の師範学校生徒と講習生であること
- (3) 確認される文献では、唐手が初めて運動会の演目となっていること
- (4) 「本県特有の」相撲が行われていること
- (5) 唐手を「無手勝流」と呼んでいること
- (6) 参観の人々は、唐手を初めて見たような記述はないこと
- (7) 体操や教練の種目が含まれていないこと
- (8) 来賓には、郡長や数十名が参加していること

会順には、運動会の儀式的な内容は記録されていない。運動会の目的は、「我ガ国頭郡ノ師範生ト講習生ト八月十三日連合シテ大運動会ヲ名護ニ開キ各自ノ氣ヲ鼓スルト共ニ炎々天ニ泣ク弱書生昨日モ今日モ淫酒ニ耽ケル生意氣男ヲ立テヨ進メヨト鞭チ一般人民ノ午睡ヲ覚サント勇ニ立チタル活発男児ノ志氣ハ凝固シテ大運動会トナレリ」とあるように、国頭出身の生徒たちに志気を高めるために檄を飛ばすことにあったことがうかがわれる。

それでは、唐手に出場した生徒らはどこで習ったのか。運動会のための練習をしていることは確かである。首里、那覇、その他の師範校生、講習生とは別に国頭郡出身の生徒の運動会練習が行われていたことになる。1902年には、唐手はすでに師範学校において指導が行われ、運動会の演目となっていたことになる。演目については「其レカラ又未タ曾テ見タコトノナイ連技レース」とあるが、「無手勝流」は「拍手喝采デ送ラレタ」とあり、人々が初めて見たものではなく、地方の名護ですでに地域の人々によく知られていることがうかがわれる。『龍譚』はこの年に刊行されている。

国頭郡では、1889年には「生徒の意気発揚為め羽地間切伊佐川馬場に於てぶんない各小学校連合大運動会」が開かれている。参加した生徒総数は500名であった⁵⁹。国頭独自の運動会の状況は分かっていない。

唐手が学校教育に採用された時期について、船越義珍は次のように記している。

59 沖縄県で初めて運動会が開催されたのは、1887年である。文部大臣森有礼が来沖した時に、那覇で連合運動会が開催され、来賓として参観している。真栄城前掲書21, p. 293。

「今から十数年前小川銀太郎氏が沖縄県に視学官をして居られる頃、学校の身体検査や、壮丁の体格検査の際、特に秀抜なる体格を有する者に就いて、其原因を調査した結果、主として、「唐手」の練習に在り、而も入門日尚浅きに過ぎぬ事実が発見されて、教育界を動かし、終に当局に具申して、県下中等学校の体育科に採用せられ、爾来今日まで、青年子弟の体育に驚く可き能率を示してゐるのである」⁶⁰。

船越は年月を特定していないので、正確な時期は不明だが、十数年前というのは1900年代初頭まで遡ることはできる。小川銀太郎は、沖縄県尋常師範学校長を1896年6月から1899年6月まで在職し、その後県視学官に任命されている⁶¹。この頃の新聞には、1901年10月に、小川は中頭郡役所内で開催中の間切長及び校長会議に参加して、体育に関する注意等について中頭郡の事例をもとに演説を行っている⁶²。このときに体育的な見地から唐手について話があったのかどうかは不明である。また、宮城長順は、『琉球拳法唐手道概説』⁶³において、

「明治34年4月、首里尋常小学校に体操科の一部として唐手を課す。是を以て団体的指導の嚆矢となす」⁶⁴。

と記している。宮城が記した内容は、小川視学官の学校視察と講演があった時期と重なっていることから、1901（明治34）年は、小学校に何らかの理由で導入された可能性は高い。師範学校では翌年の送別会にも唐手は演目にあがっている。同誌には、「送別会」⁶⁵の見出しで次のように掲載されている。

「本県人士独占の芸たる唐手は始まりつ真栄城朝亮、知念三郎氏等の巧妙壮快なる手腕拍手の声百雷の落つるが如し。次で今日正賓の一人たる上江洲由謹氏は上手にもあら

60 富名腰前掲書27, pp. 9-10。

61 安里源秀：沖縄師範学校歴代学校長，龍潭百年，龍潭同窓会，1981年，p. 33。

62 小川銀太郎の巡視，琉球新報，1901年10月23日。

63 宮城長順：唐手道概説（琉球拳法唐手道沿革概要），糖華，大阪糖業倶楽部，1936年，p. 14。

64 宮城前掲書63, p. 14。

65 宮城前掲書51, 第2号, pp. 145-146。

ず下手にもあらずと自白せる一種異様の唐手を巧みに演じて満場大笑を博」⁶⁶。

したとある。「沖縄県人士の独占の芸たる唐手」は、真栄城朝亮、知念三郎、上江洲由謹らが演じて好評を博している。いずれにしろ、1890年末頃までの社会的評価は、蔑まれる唐手であったが、地域行事の祝宴での演武等の記事としても新聞や雑誌に報じられている。1901～1902年頃には小学校への体操科や地方の運動会の演目に採用されていた⁶⁷⁶⁸。

1902年には、『武術家優遇例』⁶⁹が地元の新聞で報じられ、特に各称号規程の中には、「5条 範士には就寝25円以内の年金を贈与す」⁷⁰とある。唐手は大日本武徳会の示す武術には含まれていないが、唐手家にとって注目される内容であったに違いない。

第6節 小結

近世琉球の唐手は、琉球処分後、琉球王国が解体されたことによって、士族の嗜みとしての教養としての側面、国事の祝宴に供される芸能としての側面を失うことになった。

沖縄県になると唐手を取り巻く社会的状況の変化から、蔑まれる唐手、地域に根づく唐手、学校で演じられる唐手として記録が残されるようになった。

これまで確認された同時期の史料を考察した結果、この時期は、近代沖縄において、唐手の転換期として位置づけられる。唐手は、県庁（明治政府）の同化教育、皇民化教育、によって「改良すべき風俗」として位置づけられた。運動会が、軍事教育を進める上で国民の「訓育システム」として導入された。学校では、親親派（頑固党）と親日派（開化党）の対立によって、教師へ唐手を用いたことからの暴力との結びつきや独自に民間教育に取り入れられたことが糾弾された。地域では、旧士族らしき人物が金銭を徴収して唐手を教え、暴力を振るわせた。このように蔑まれる一方、地域の綱引や豊年祭の年中行事や軍人の歓迎会、出征軍人家族救護大会等で多くの人々の娯楽として披露された。また、沖縄県師範学校の送別会や同校の運動会の演目として学校行事に取り入れ

66 宮城前掲書51, 第2号, p. 146。

67 宮城前掲書51, 第1号, p. 83。

68 宮城前掲書51, 第1号, pp. 81-82。

69 武徳会武術家優遇例, 琉球新報, 1902年5月23日。

70 同上書。

られていった。詳細は明らかではないが、小学校の体操科にも取り入れられていったうかがわれる。

これらの経緯は、唐手の呼称の変遷にも表れている。記事の中では蔑まれ・地域に根づく唐手は呼称が置き換えられ、「支那流の柔術の?」、「支那手（柔術の如き者）」「支那柔術」、「支那柔術」、「無手勝流」等とされ、唐手に対する呼称は定まっていない。しかし、唐手は、学校行事の送別会や軍人の歓迎会では、「本県人の独占物」、「本県人士独占の芸たる唐手」、「泊得意の唐手」などと沖縄県人の誇るべき呼称として扱われている様子がうかがわれる。唐手の評価は揺らぎ、一方では沖縄の文化的なアイデンティティを発現する武術として位置づけられていたのである。

これらの記録が残された史料としての『琉球新報』は1893年に創刊されたが、沖縄戦の戦禍によって焼失・散逸した。本土の所蔵機関や個人所蔵のものが再び集められた。沖縄の歴史解明には、これらが貴重な史料となっている。ここでは、1898年以降から1905年頃までの唐手に関して記載された記事と同じように収集された教育関係誌の記事を主に取り上げている。しかし、『琉球新報』は、創刊後の5年間については確認されておらず、その中に、唐手に関する記事が掲載されていたかどうかははっきりしない。1896年の学友会の記事を見ても1898年になって、いきなり新聞に唐手が取り上げられたとは考えにくい。

唐手の社会的評価の揺らぎは、唐手とは何かを模索されていることを示唆している。琉球国時代の唐手は、3つの側面の重なりとしての全体像を持っていた。しかし、琉球処分以降になると、唐手が疎まれるように報じられたり、地域行事や学校の運動会・卒業生送別会で沖縄の文化的なアイデンティティを発現するかのようにならなげな場で演じられている。このような唐手は、武術的側面や勇ましさをとらえてのことであり、琉球国時代の士族の教養的側面や国事の祝宴に供する芸能的側面としての幅広い唐手のあり方が見直されてのことではなかったものと考えられる。これは、琉球復国運動に象徴された沖縄の旧士族の活動や日清戦争に至る経緯から日本と中国との関係、沖縄の置かれた状況を反映して、琉球化した中国由来の文化を蔑視し、急激な同化教育、皇民化教育、軍国主義教育のもとに直接的には沖縄語が排除され、風俗改良運動が行われたことに要因があったと考えられる。それは、明治政府の施策を受けてのことだが、沖縄内部でも琉球国時代の唐手に対する見方はすでに変容を遂げていた。

第3章 新たな唐手の創造 ―沖縄における唐手の近代化―

第3章 新たな唐手の創造 — 沖縄県における唐手の近代化 —

第1節 はじめに

1905年、唐手は沖縄県中学校に体操科の一部として正式に導入された。翌年には師範学校へも「正科の如く」導入され、生徒だけでなく職員も唐手を行った。唐手は、教科の一部として近代化され、県下各地域へ普及していった。

唐手はどのように再評価され、沖縄で学校教育へ導入されていったのか、その目的は何かを探っていく。唐手の近代化を進める牽引役となった人物は、糸洲安恒や安里安恒、東恩納寛量らとその門下生、沖縄最初の志願兵で軍人となり、後に師範学校や中学校の体操教師となった屋部憲通¹や花城長茂らがいる。また、船越義珍、許田重発、真栄城朝亮、徳田安文、大城朝恕、城間真繁、親泊（遠山）寛賢らも学校で指導にあたった。地域では、琉球国時代から唐手を仕込まれた人々が指導に関わっていった。

唐手は、近代国家日本へ組み込まれた沖縄の人々の文化的アイデンティティを発現するかのように、学校や地域行事を中心に盛んに取り組むようになっていたり、日本の武道の再評価と相まって教育上の価値が見出されていった。また、本土でも知られるようになると、新奇の武術として沖縄県中学生が大日本武徳会の武道大会で特別演武として型を披露し、多くの武術家や一般の観客から好評を博している。修学旅行で上京した師範校生も講道館を訪ね嘉納治五郎講道館館長の特別の計らいで高段者の前で型の演武や試割を行い、嘉納館長との交流を行っている。一方では、沖縄人の指導者等も本土の各種演武会へ参加するようになった。

このような経緯の中で、船越義珍は「運動体育展覧会」で、沖縄県を代表して唐手を紹介している。嘉納治五郎館長や教育者など支援者からの要請を受け、そのまま在京して本格的な普及活動が始まったのである。しかし、沖縄と本土の状況が異なることから唐手は、沖縄と本土で複線的に発展していくこととなった。

本章では、まず、唐手が沖縄県内で学校教育へ導入されたことによって、県内で行政

1 生没年は、1866～1937年。屋部は陸軍教導団に志願入隊後、日清・日露戦争に従軍した。沖縄県立中学校及び沖縄師範学校で兵式教練や体操教練を指導した。1919年、米国視察を命ぜられ渡米、帰路、1927年ハワイへ寄って、唐手の講演や実演など指導を行った。1936年、沖縄県空手振興空手振興会の創設に参画し指導部長となる。龍潭，国民精神総動員号，第33号，沖縄県師範学校学友会，1938年，pp. 114-121。

主導で唐手の近代化が進み、県内各地に普及していったことを明らかにする。唐手の呼称は、言葉の問題から「からて」と読まれるようになり、技法の体系化などが進んだ。

一方、唐手は社会的認知が高まるにつれ、その価値や歴史を明らかにし、技法や団体での練習法の体系化が必要となり、見手（観客）を意識した演武法が必要となっていった。唐手は一体何なのかを言葉で解説する必要も出てきた。呼称については、表記、読み方、語義、そして、自称や他称の問題などが複雑に絡んで意味を含み込んで解説を行っていった。

第2節 唐手の再評価

第1項 学校教育への唐手の導入

唐手は、公教育の体操科の一部として価値を見いだされたことによって、新たな時代を迎えることになった。新聞には、次のように中学校へ取り入れられることになった経緯が記されている²。

「昨年来同校職員は唐手に採るべきものあらんことを思ひ立ち、直ちに着手したるに今や其成績宜しく唯だ一の惜むべきことに教師の方にて秩序的の説明乏しき為め十分納得し兼ねる廉あれと何れ熟練を積むの後充分なる理由を教員にて發明せん計画なりと。我輩は希望す今の世国の如何を問はず有りとはゆる現象は之を把えて研究すれば技術上体育上精神上大に裨補する所あれば唐手の方も亦大に利益する所あるべし。吾輩は柔術に手を染めつつある西洋人の未だ着手せざる先に、県下中学校にありて此事の起れるを大に喜ぶものなりと。他には教員自身の元氣にも大に影響する所あるべきを信ず」³。

と報じられた。記者は、教師の説明が不十分で納得しなかったと指摘しつつも、今後、唐手が学校教育において技術・体育・精神上の価値あるものになると期待を込めて記している。また、西洋人はすでに柔術を習い始めたが、唐手に着手する前に県下の中学校

2 中学校職員の唐手，琉球新報，1905年2月5日。

3 同上書。

に導入されたことは嬉ばしく、教員にも大いに影響があるだろうとつけ加えている⁴。

この時期の学校における唐手指導者は、体操教師として花城長茂⁵や屋部憲通がいる。中学校の花城、師範学校の屋部憲通は唐手指導者としても名が知れらていた。中心的な役割を果たしたのが、花城、屋部が師事した糸洲安恒であった⁶。

第2項 糸洲安恒「唐手十箇条」⁷に示された唐手の近代化

近代沖縄において唐手を学校教育に導入することを提言したとされる糸洲安恒のいわゆる「唐手十箇条」（以下、「十ヶ条」と記す）は、沖縄における唐手の近代化の方向を示し、沖縄空手の指導者や弟子達に影響を及ぼした貴重な史料である⁸。（引用に当たっては、旧字は新字に改めるとともに概ね通行の漢字にして、明らかな欠け字はカッコで補い、誤字は訂正した。また、文意は変えないように適宜句読点を入れて整えた）「十ヶ条」は全文は、次の通りである。

「唐手ハ儒仏道ヨリ出候モノニ非ズ。往古、昭林流、昭霊流ト云（ウ）二派、支那ヨ

4 この経緯について、県立中学校の沿革には、明治「38年唐手稽古 1月沖縄特有の拳法唐手の稽古を始む。去年の末より職員一同教師に就きて研究せしが教育上価値あるを認め本年度よりは一般生徒に課すこととせり」とある。宮城亀：(二)県立中学校沿革，沖縄教育，義務教育延長記念，第31号，1908年，p. 33。

5 花城長茂は、1897年に沖縄県尋常中学校教諭心得となっている。ハワイ州立大学・西塚邦雄編：琉球教育，復刻版，第2巻、第13号，本邦書籍，1980年，p. 92。屋部憲通は1906年に沖縄県師範学校教諭心得兼書記として赴任し、どちらも体操教練を受け持っている。前掲書1，p. 116-117。

6 糸洲は、1905年1月から正式に県中学校へ迎えられ、唐手の指導に携わっている。前掲書4と沖縄県立首里高等学校：学校沿革史，複製版，沖縄県立首里高等学校，2001年。しかし、それ以前から生徒達へ指導を行っており、唐手の体操化への研究に関与していたもの考えられる。徳田安貞：唐手雑感，養秀，養秀同窓会，1961年，p. 90-91。

7 糸洲が県学務課へ唐手の導入を提言したとされる書。宮城篤正：糸洲安恒，沖縄大百科事典刊行事務局：沖縄大百科事典，上巻，沖縄タイムス社，p. 207。

8 「唐手十箇条」は脱字や誤字が多く見られ、提言書そのものではなく、草稿ではないかと考えられる。

リ伝来（シ）タルモ（ノ）ニシテ、両派各々長ズル所ア（リ）テ、其儘（そのまま）保存シテ潤色ヲ加フ可ラザルヲ要トス。仍而（よって）、心得ノ條々左記ス。

- 一、唐手ハ体育ヲ養成スルノミナラズ、何レノ時君親ノ為メニハ身命ヲモ惜オシマズ、義勇公ニ奉ズルノ旨意ニシテ、決シテ一人ノ敵ト戦ウ旨意ニ非ズ。就テハ、万一盜賊又ハ乱法人ニ逢ウ時ハ、成丈ケ打チハズスベシ。盟テ、拳足ヲ以テ人ヲ傷フ可ラザルヲ要旨トスベキ事。
- 二、唐手ハ専一ニ筋骨ヲ強（ク）シ、体ヲ鉄石ノ如ク凝（リ）堅メ、又、手足ヲ鎗鋒ニ代用スル目的トスルモノナレバ、自然ト勇武ノ氣象ヲ發揮セシム。就テハ、小学校時代ヨリ練習致サセ候ワバ、他日兵士ニ充ルノ時、他ノ諸芸ニ応用ズルノ便利ヲ得テ、前途軍人社会ノ一助ニモ可相成ト存ジ候。最モ、ウエルリントン侯ガナポレオン一世ニ克（ク）捷セシ時、曰（ク）、今日ノ戦勝ハ我国各学校ノ遊戯場ニ於テ勝テルト云々。実ニ格言トモ云ウ可キ乎。
- 三、唐手ハ急速ニハ熟練致シ難ク、所謂、牛ノ歩ノ寄り（遅）クトモ、終ニ千里ノ外ニ達スト云ウ格言ノ如ク、每日一、二時間位、精入り練習致シ候ワバ、三、四年ノ間ニハ、通常ノ人ト骨格異リ、唐手ノ蘊奥ヲ極メル者、多数出来致ト可（キ）存（ジ）候事。
- 四、唐手ハ拳足ヲ要目トスルモノナレバ、常ニ卷藁ニテ充分練習シ、肩ヲ下ゲ、肺ヲ開キ、強クカヲ取り、又、足モ強ク踏ミ付ケ、丹田ニ氣ヲ沈（メ）テ、練習スベキ。最モ、度数モ片手ニー（度）、二百回程モ衝クベキ事。
- 五、唐手ノ立様ハ、腰ヲ真直ニ立テ、肩ヲ下ゲ、カヲ取り、足ニカヲ入レ踏立テ、丹田ニ氣ヲ沈メ、上下引合スル様ニ凝（リ）堅（メ）ルヲ要トスベキ事。
- 六、唐手表芸ハ数多く練習シ、一々手数ノ旨意ヲ聞キ届ケ、是ハ如何ナル場合ニ用フベキカヲ確定シテ練習スベシ。且、入受ハズシ、取手ノ法有レ之。是又口伝多シ。
- 七、唐手表芸ハ、是レハ体ヲ養フニ適當スルカ、又、用ヲ養ウニ適當スルカヲ予テ確定シテ練習スベキ事。
- 八、唐手練習ノ時ハ戦場ニ出ル氣勢ニテ、目ヲイカラシ、肩ヲ下ゲ、体ヲ堅メ、又、受ケタリ突キタリスル時モ現実ニ敵手ヲ受ケ、又、敵ニ突当ル氣勢ノ見エル様ニ常々練習スレバ、自然ト戦場ニ其妙、相現ワルモノニナリ、克々注意スベキ事。
- 九、唐手ノ練習ハ、体力不相応ニ余リカヲ取（リ）過シケレバ、上部ニ氣アガリテ面ヲアカミ（メ）、又、眼ヲ赤ミ（メ）、身体ノ害ニ成ルモノナレバ、克々注意スベキ事。
- 十、唐手熟練ノ人ハ、往古ヨリ多寿ナルモノ多シ。其原因ヲ尋ルニ、筋骨ヲ発達セシ

メ、消化器ヲ助け、血液循環ヲ好クシ、多寿ナル者多シ。就テハ、自今以後、唐手ハ体育ノ土台トシテ小学校時代ヨリ学課ニ編入り広く練習致サセ候ワバ、追々致ニ熟練一人ニテ十人勝ツ輩モ沢山可レ致ニ出来一ト存候事。

右十ヶ條ノ旨意ヲ以テ、師範中学校ニ於テ練習致サセ、前途師範ヲ卒業各地方学校ヘ教鞭ヲ採ルノ際ニハ、細敷御示論各地方小学校ニ於テ精密教授致サセ候ワバ、十年以内ニハ全国一般ヘ流布致シ、本県人民ノ為而已（ノミ）ナラズ、軍人社会ノ一助ニモ相成可申哉ト筆記シテ備ニ高覧一候也。

明治四十一年戊申十月 糸洲安恒」⁹。

「十ヶ條」の思想は、「何レノ時君親ノ為メニハ身命ヲモ惜オシマズ、義勇公ニ奉ズルノ旨意ニシテ」とあり、「他日兵士ニ充ルノ時、他ノ諸芸ニ応用ズルノ便利ヲ得テ、前途軍人社会ノ一助ニモ可相成ト存ジ候」とあるように、「教育ニ関スル勅語」（「教育勅語」と「陸海軍軍人ニ下シ給ヘル勅諭」（「軍人勅諭」）に基づいている。近代武道の指針とも言うべき、唐手そのものの理念は示されていない。

内容は、前文で唐手の出自は、儒教、仏教、道教の宗教から出たものではなく、「昭林流」「昭霊流」という2派が中国から伝播したとしている。加えて、両派は各々長所を持っているので、そのまま保存して潤色を加えてはならないとしている。

1, 2条で、唐手が体育を養成することをあげ、土台となる思想を示し、3～10条に唐手の練習の心構え、練習方法、基本姿勢などの練習に関わることが述べられている。

「十ヶ條」では、唐手表芸、卷藁、立様、取手、口伝という用語が用いられている。近世琉球から継承されてきた沖縄語の唐手の指導用語はほとんど見られない。唐手表芸は型、立様は立ち方や姿勢、取手は組手と置き換えが考えられる¹⁰。糸洲は、学校教育に導入することによって、指導者が育成され、10年以内には沖縄だけでなく全国に普及して、県民だけでなく軍人社会に貢献すると論じている。

学校で唐手を練習するために第3条から第10条にまとめられた内容は以下の点である。

3条では、唐手の練習は、戦場に出て敵を倒す気持ちをもって行うこと。

4条では、唐手は拳足を要目とし、常に卷藁で一、二百回ほど突くこと。

5条では、唐手の立ち方は、腰を真っぐに立て、肩を下げ、力を抜き、足を踏み立て、

9 仲宗根源和：空手道大観，東京図書，1938年，pp. 62-64。

10 金城裕：唐手から空手へ，日本武道館，2011年，pp. 47-52。

丹田に気を静めること。

6条では、唐手の型は何度も練習して、その技の意味をよく考えて練習すること。組手はたくさんあるが、口伝となっているのでそれを理解して練習すること。

7条では、唐手の型は、体力を養成するのか、使い方を練習するのかをよく理解して練習すること。

8条では、唐手の練習の時は、戦場で実際に戦う氣勢をもつこと。

9条では、唐手の練習は、自分の体力に合わせて行うこと。

10条では、唐手の熟練者は、昔から長寿の者が多い。このことから体育として小学校から行わせれば、熟達すると1人で10人に勝てる者も出てくるであろうこと。

指導に当たって、「取手ノ法有レ之。是又口傳多シ」とあるように、実技は、糸洲等教授者の直接の指導を通して理解されるものとしている。

このように唐手の技法の体系化、近代化が模索された文献史料の考察は、実技の分析とともに多様な観点からの考察が必要であると考えられる。

ところで、「十ヶ条」の全文が出たのは、仲宗根源和の『空手道大観』¹¹であり、自筆の口絵として掲載されている。原稿は9枚の写真に撮られており、「近代の拳聖・糸洲安恒先生の遺稿（花城長茂先生蔵）」¹²の見出しがついている。原稿の日付の30年後

11 仲宗根前掲書9, 414p。

12 仲宗根前掲書9, pp. 62-64。

ということになる。摩文仁賢和著『攻防自在護身術空手拳法』¹³や仲宗根源和著『武道極意物語』¹⁴などに、「十ヶ条」の一部が掲載されている¹⁵。(図-12)。



図-12 糸洲十箇条

(出典 仲宗根源和：口絵，空手道大観，東京図書，1938年，pp. 62-63. より転載)

第3項 徳田安貞「唐手」にみる安里安恒の武術観

同時代の史料として、糸洲に学んだ沖縄県中学生徳田安貞は、1909年刊行の学友会紙『球陽』に「唐手」¹⁶の論文を書いている。これは、「十箇条」が要約された内容構成になっていることから、糸洲は「十ヶ条」をもとに学校で指導を行っていたことが示されている。徳田の論文は次の通りである。

「唐手

第四学年 徳田安貞

男子たるものはいつでも安全に身を保ち難いので、時には無理に人からやられる事が

13 「糸洲派流祖恩師糸洲安恒先生遺訓」として、「唐手十箇条」の中から4項目の内容を記している。摩文仁は「空手は儒仏道より出でたるものなり」と逆の意味に記している。摩文仁賢和：攻防自在護身術空手拳法，大南洋社，1934年，pp. 135-136。

14 空手道大観から採録した3項目の内容が取り上げられている。仲宗根源和：武道極意物語，東京図書，1938年，p. 503。

15 摩文仁賢：攻防自在護身術空手拳法，大南洋社，1934年，pp. 135-136。

16 徳田安貞：唐手，球陽，第18号，沖縄県立中学校学友会，1909年，pp. 22-26。

ある。其時に當って、腕の覚がないものは、あはれ悲しい、状態に陥らざるを得ないのである。だから武術の必要が起って来るのである。唐手は実に空手で身に寸鉄を帯びずに、敵を制し得るのである。これは沖縄固有の武術で、ありとあらゆる武術を舍み、他の武術の様に身に武具を着けない。拳足が武具の代用となるのである。練習するにも人手を煩はしたり、餘計な場所が要ることはない。家の内外を問はず、何處でも六畳敷位の平坦の場所があれば、一人でしかも僅かの時間で練習することが出来ます。左に掲ぐる所の談話は、唐手の達人糸洲翁の談である、聊か記して武術の心得ある方々の参考に供します。

○唐手は儒仏道より出たるものにあらず。往古昭林流（体に力を入れるもの）昭靈流（体を機敏にするもの）と云ふ二派支那より傳來したるものにして、両派各々長ずる所あり。されば其儘保存して潤色を加へざるを可とす。仍て心得となるべき箇條を左に記す。

○唐手は体育を養成するのみならず、君親の為に身命をも惜まず、義勇公に奉ずる旨意にして、決して一人の敵と戦ふ旨意にあらず。万一盜賊又は亂暴人等に逢ふ時は、成る成るべく受け流して、其場を避くべし。盟て拳足を以て人を傷ふべからざるを要旨とすべし。

○唐手は筋骨を強くし、體を鐵石の如く凝り堅め、又手足を鎗鋒に代用するを目的とするものなれば、自然と勇武の氣象を發揮せしむ。就ては小学校時代より練習すれば、他日兵士となる時、他の諸芸に應用するの便利を得て、後々軍隊教育の助となるものなり。彼のウェリントン侯がナポレオン一世に克捷せし時に日く、今日の戦勝は我国各学校の遊戯場に基せり。実に味ふべき格言と云ふべし。

○唐手は急速に熟練する事難く、所謂牛の歩みの遅くとも、終には千里の外に達すと云ふ格言の如く、毎日一二時間位精神こめて練習すれば、三四年の後には通常の人と骨格異り、遂には唐手の蘊奥を極め得る者多く輩出するに至るべし。

○唐手は拳足を要具とするものなれば、常に卷藁にて充分に練習し、又足を強く踏み付け、丹田（臍の下）に気を沈めて、練習すべく最も度教も片手に一二百回程衝くべし。

○唐手の立ち様は腰を真直ぐに立て、肩を下げ、胸を張り、足に力を入れて踏み立て、丹田に気を沈め上下引合する様に凝り堅むべし。

○唐手表芸は数多練習し、一々手数の旨意を解し、是れは如何なる場合に用ふべきかを確定して練習すべく、且入受はづし、取手の法（柔道の投げ業の如きもの）等ありて是又口傳多し。

○唐手表芸は体を養ふに適當するか、又用を便ずるに適當するかを予て吟味し、然る後

練習すべし。

- 唐手練習の時は恰も戦場に立ちたるが如し、氣勢を張り、肩を下げ、體を堅め、又受けたり。突きたりする時も現実に敵手を受け、又敵に突き當る氣勢にて、常に練習すれば、自然と職場に立ちたる時、其妙相現はるゝものなり。克々注意すべきなり。
- 唐手の練習は体力不相応に余り力を過ぐれば、頭部に逆上して眼面赤くなり、身体の害になり、又武術に違ふものなれば克々注意すべし。
- 唐手の道に長じたる人は、往古より長寿なるもの多し。其原因を尋ぬるに、筋骨を発達せしめ、消化器を養ひ、血液の循環を盛ならしむるが故なり。就ては今後唐手を体育上の土台として、小学時代より体操科に編入し、廣く練習せしむれば體育上有効なるのみならず、其術も著しく上達すべき事と思ふ。

糸洲翁の唐手談を読みて

安里翁

- 一、唐手をば筋骨つよく凝り堅め 身を鐵石になすものぞかし
- 二、唐手をば衝くも蹴るをも熟練し 手足を鎗の鋒と成すべし
- 三、唐手をば数年たゆまず熟練し 骨格つよく凝りかたひべし
- 四、肩をさげ腰を真直ぐ踏立てて 足に力を強くとりべし
- 五、唐手をば気を丹田に沈みへて浮ばぬやうに 注意あるべし
- 六、体用をかねて熟練せざりなば 唐手の道を誤るるなり
- 七、唐手をば燕のように早やかなるも 當てがきかねば盆なかりけり
- 八、唐手をば各派の手数を練習し 一々旨意をたしかむるべし
- 九、勝手とてさだめし術はなかりけり 奇正の妙を得るが勝つべし
- 十、唐手をば奇正の変化しらざれば 力ありとも甲斐なかりけり¹⁷

徳田の論文では、前文で「唐手は実に空手で身に寸鉄を帯びずに、敵を制し得る」と、唐手の定義が記されている。この「空手」は素手を意味している¹⁸。糸洲は唐手の呼称しか使っていないからである。唐手の目的は、「男子たるものはいつでも安全に身を保

17 徳田前掲書 6, pp. 22-26。

18 徳田は、戦後、回顧録「唐手雑感」の中で、「唐手と題して発表し唐手は実に空手である」ことから「唐手の名付親」であると記している。徳田前掲書 6, p. 91。ここに、呼称の変遷の難しさがよく表われている。どのような語義で用いたかの問題が述べられないからである。

ち難いので、時には無理に人からやられる事がある。其時に當って、腕の覚がないものは、あはれ悲しい状態に陥らざるを得ないのである。だから武術の必要が起って来る」として、護身術としての効用を説いている。また、唐手を「沖縄固有の武術」と位置づけ、その特徴を次のようにまとめている。

- (1) ありとあらゆる徒手武術を含むこと
- (2) 武具を着けず、拳足が武具の代用となること
- (3) 練習は6畳程度の平坦な場所があればいいこと
- (4) わずかの時間でできること

徳田の論文は、「十ヶ条」をかみ砕いた内容となっている。徳田は論文を書くに当たって、「唐手の達人糸洲翁の談」として「武術の心得ある方々の参考に供」するとしている。文末には、安里（安恒）が「糸洲翁の唐手談を読みて」として作った10首の短歌が添えられている。船越の師事した安里安恒は、この短歌以外には、船越が『琉球新報』に「沖縄の武技」（安里安恒談）として掲載した記事や単行本に紹介した安里の人物像、糸洲が亡くなった時の新聞記事「糸洲武勇伝」以外に、自著は残されていない。「十ヶ条」の趣旨を汲み取って安里が作った唐手の短歌という意義は大きい。安里が唐手を学校教育の導入に当たって、関わっていたことが示されているからである。しかし、どのように関わったのかは今日でもはっきりしたことは分かっていない。糸洲や花城の資料などの確認された史料との比較や糸洲と安里の関わりを知る上で貴重なものといえよう。

徳田の本文は、「十ヶ条」とは異なる記述が以下の通りいくつかある。

- (1) 「十ヶ条」前文では、昭林流、昭霊流の流派名だけが記されているが、昭林流（体に力を入れるもの）、昭霊流（体を機敏にするもの）と解説があること
- (2) 「十ヶ条」2条では、唐手は「前途軍人社会ノ一助ニモ可相成」とあるが、「軍隊教育の助となる」としていること
- (3) 「十ヶ条」4条と5条の要目が混在している。4条の巻藁の練習における「肩ヲ下ゲ、肺ヲ開キ、強クカヲ取り」が次項の「唐手の立ち様」に「胸ヲ開キ」となって挿入されていること
- (4) 「十ヶ条」6条では、取手そのものの解説はなく、「口伝多シ」となっているが「取手の法（柔道の投げ業の如きもの）」と詳細が付されていること
- (5) 「十ヶ条」8条では、「唐手練習ノ時ハ戦場ニ出ル氣勢ニテ目ヲイカラシ」とあるが、「唐手練習の時は恰も戦場に立ちたるが如し」となっている。「目ヲイカラシ」は欠如していること

(6)「十ヶ条」9条では、「上部二気アガリ」が「頭部に逆上して顔面赤くなり」と記されていること

徳田の論文は、生徒の立場から「十ヶ条」を理解し、内容をまとめたものと考えられる。「十ヶ条」が後世の沖縄空手の発展に及ぼした影響は大きく、現在でも流派を超えて、指導者の格言として取り入れられたり、専門書、論文に引用されている。唐手が公教育に導入されることによって、広く社会的認知を得て、県下各地に普及する足がかりとなったことは先に述べたとおりである。

この「十ヶ条」を歌に詠んだのが安里安恒の「糸洲翁の唐手談を読みて」である。安里の歌は、糸洲の理念とほぼ同様の内容である。糸洲が中心的な役割を果たし、中学校、師範学校へ唐手の導入に関わった際に、安里も協力者として関わっていたことがうかがわれる。当時、学校教育における安里の指導はほとんど記録は残されていないが、糸洲と安里の一致した理念を読み取ることができる。

第4項 花城長茂¹⁹の「空手組手」

花城が残した中学校の指導内容が記された史料である。花城は、中学校の運動会や連合運動会で体操の指導を行っているが、中でも唐手指導の担当者であったと考えられる。その指導は花城を中心として行われたと推測される。

また、学校で指導が開始される前に国学²⁰跡や花城、屋部の自宅で指導を行っていた²¹。『空手道大観』の口絵に掲載された「空手組手」は、2つの意義がある。

1つ目は、花城が「空手組手」によって、空手の呼称を初めて使ったとされること

2つ目は、空手組手が当時の唐手の指導資料とされること、である。

「空手」の文字を1905年に使用した裏づけとなることは、後段で詳述するように、花

19 花城長茂は、沖縄に徴兵令が施行される前の1890年、陸軍教導団へ志願兵として入団し、日清戦争に従軍した。退役後は、1897年2月に沖縄県尋常中学校の助教諭となっている。ハワイ前掲書5。

20 1798年、尚温によって創立され、廢藩置県後には県庁所轄となった。1880年、首里中学校と改称、1886年、沖縄尋常中学校に改められた。花城が赴任したときは、沖縄県尋常中学校と改名されていた。知念朝功：学校のあゆみ年表，養秀百年，養秀同窓会，1980年，p. 56 6。

21 徳田前掲書6，p. 90。

城自身がこのことを語っている。しかし、「空手」が空手に代わる固有名詞の意味を付与されていたのか明らかではない。

ここでは、花城が残した指導資料について考察を加えたい。花城の指導資料はこの他には残されておらず、貴重な史料といえよう。口絵と全文を掲載すると、次の通りである。(図-13)

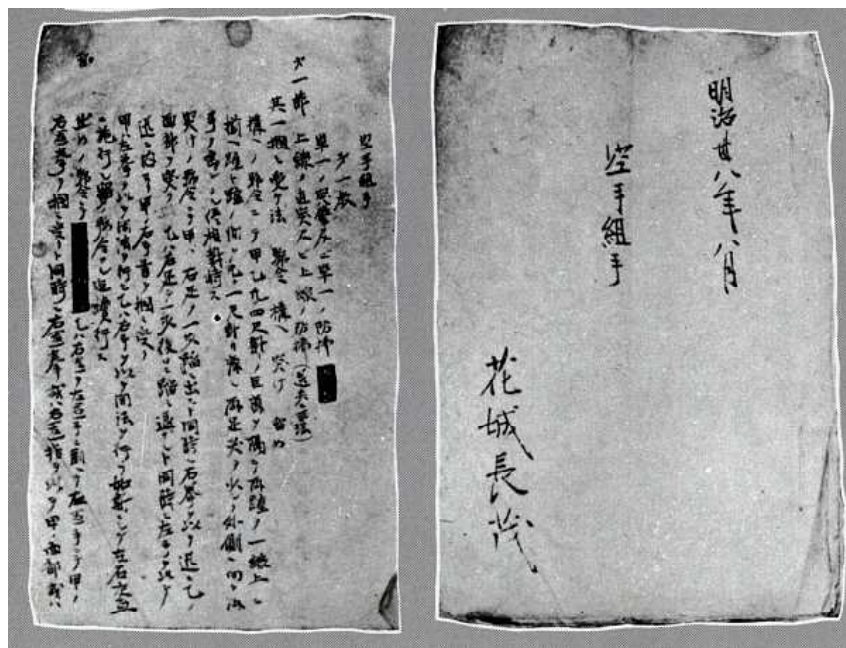


図-13 花城長茂の「空手組手」

(出典：仲宗根源和，口絵，空手道大観，東京図書，1938年，p. 64. より転載)

「空手組手

第一教

単一ノ突き及ビ単一ノ防拂

第一節 上線ノ直突及ビ上線ノ防払 (選兵○三法)

其一 掴ミ受ケ法 號令 構へ 突け 留め

構へノ號令ニテ甲乙凡ソ四尺計リノ距離ヲ隔テ両踵ヲ一線上ニ揃へ踵ト踵ノ間ヲ凡ソ一尺計リ離シ兩足尖ヲ少シク外側ヘ向ケ両手ノ離シタル俛相封時ス

突けノ號令ニテ 甲ハ右足ヲ一步踏ミ出スト同時ニ右拳ヲ以テ迅ニ乙ノ面部ヲ突ク乙ハ右足ニテ一步後口ニ踏ミ退ザルト同時ニ左手ヲ以テ迅ニ内ヨリ甲ノ右手首ヲ掴ミ受ク

甲ハ左拳ヲ以テ開法ヲ行ヒ乙ハ右手ヲ以テ開法ヲ行フ如何ニシテ左右交互ニ施行シ留メノ號令アル迄続行ス

止めノ號令ニテ乙ハ右（左）ヲ左（右）手ニ副ヘテ左（右）手ニテ甲ノ右（左）拳
ヲ搦ミ受ケト同時ニ右（左）拳或ハ右（左）指ヲ以テ甲ノ面部或ハ」²²。

「空手組手」は、どのような目的で作成され、どこで指導されたのだろうか。史料を見ると、「第一教」、「第一部」となっているので全体の一部である。自筆で書かれ、訂正と削除、漢字、片仮名、平仮名が混じっているのが草稿もしくは自己の指導記録と考えられる。2人組の約束組手で、団体演武として想定し、向かい合って左右の突きと受けを号令に合わせて行っている。立ち位置や相手との距離、突き、受けの方法が他の指導者や生徒達にも分かるように記されている。

この年11月11日に「連合運動会」が那覇の湯原で催されている。参加校は、幼稚園2校、小学校7校、中学校2校、師範学校1校、各種学校4校で、プログラムは第41回までである。唐手は花城が勤める中学2，3年生が演武を行っている²³。指導記録はこの連合運動会に活用されたことがうかがわれる。（表－4）

22 原文は、「花城長茂先生の墨蹟（空手）の文字を明治38年に使用せられた特筆記念すべき文献」の見出しが添えられている。内容は、口絵を拡大して解読している。仲宗根前掲書9，p.64。金城裕：唐手から空手へ，日本武道館，2011年，pp.299-301。

23 連合運動会，琉球新報，1905年11月11日。

| 回 | 演目 | 出場者 |
|-----|----------------|-----------------|
| 第1 | 遊技 忠魂義連 | 那覇尋常小1、2年 |
| | 遊技 たこ | 首里尋常2、1年 |
| 第2 | 遊技 鳩ボツボ洗濯 | 首里尋常女1、2年 |
| | 遊技 亀と兎、浦島太郎 | 松山小2、1年 |
| 第3 | 遊技 うれしい今日、幼年祭 | 泊小1、2年 |
| | 遊技 からゝ山、調練 | 那覇幼稚園全体 |
| | 遊技 からゝ山、赤筋シャツポ | 首里幼稚園 |
| 第4 | 遊技体操 見渡せば、亀と兎 | 甲辰小1、2年 |
| | 遊技 美容術 | 首里尋常小男3、4年 |
| 第5 | 遊戯 体操 | 附属小全体 |
| 第6 | 遊技 美容術 | 那覇各小学校(尋常小3、4年) |
| 第7 | 遊技 秋日本の景色 | 松山小3、4年 |
| | 遊技 方形行進 | 首里尋常恩納3、4年 |
| 第8 | 徒手体操 | 中学校1年 |
| 第9 | 体操 各隊異色の美容術 | 首里高等小男全体 |
| 第10 | 体操 美容術 | 那覇高等小男全体 |
| 第11 | 円形遊戯 | 天妃小全体 |
| 第12 | 徒歩競争 | 甲辰2、1年 |
| 第13 | 首踵徒歩競争 | 甲辰3、4年 |
| 第14 | 二人連絡船 | 松山小1、2年 |
| 第15 | 裁縫用具整頓 | 松山小3、4年 |
| 第16 | 徒歩競争 | 泊小3、4年 |
| 第17 | 徒歩競争 | 那覇尋常小3、4年 |
| 第18 | 徒歩競争 | 附属小全体 |
| 第19 | 福拾競争 | 首里尋常小男全体 |
| 第20 | 福拾競争 | 首里尋常小女全体 |
| 第21 | 日英同盟競争 | 首里高等小男全体 |
| 第22 | 支度競争 | 首里尋常小女全体 |
| 第23 | 二人連スプーンレース | 天妃小(選抜) |
| 第24 | 徒歩競争四百米男 | 那覇小(選抜) |
| 第25 | 徒歩四百米突 | 同上 |
| 第26 | 中隊教練 | 中学4、5年 |
| 第27 | 遊技 ショツアス | 首里高小女全体、首里工芸全体 |
| 第28 | 体操徒手 | 商業校 |
| | 製作演習 | 首里徒弟全体 |
| 第29 | 綱引 | 養秀中全体 |
| 第30 | 遊技 | 高等小女全体、聴講生全体 |
| 第31 | 唐手 | 県中学2、3年 |
| 第32 | 中隊教練 | 師範校全体 |
| 第33 | スプーンレース | 工芸学校3年 |
| 第34 | 鷹取競争 | 高等女学校(選抜) |
| 第35 | 徒歩競争 六百米突 | 首里徒弟校選手 |
| 第36 | 徒歩競争 千米突 | 養秀選手 |
| 第37 | 徒歩競争 千米突 | 医生選手 |
| 第38 | 徒歩競争 六百米突 | 商業校選手 |
| 第39 | 徒歩競争 千米突 | 師範選手 |
| 第40 | 徒歩競争 六百米 | 中学選手 |
| 第41 | 徒歩競争 千米突 | 中学選手 |

表－4 連合運動会のプログラム

出典：琉球新報，1905年11月11日の記事より作成)

この連合運動会後に、同紙に「運動会雑感」の見出しで、唐手の演武について次のような感想が掲載された²⁴。

「唐手は一種の体操見た様に仕込まれ号令を以て活動する所従来とは異なる以てちと異様の感を起して何となしに可笑しく相成りたり是れ全く唐手を技芸とのみ考へ体育といふ方面に想ひ至らざりし結果にして徒手体操を為し居ると思へは又愉快のものなり或人は号令よりは太鼓か適當すといへるは我輩も同感に思ふ所なり然し常に教授をする上より考へれば号令の必要も存するなるべし来賓の望みにより一人、出て、為したる唐手は真の技芸として余程面白く感したり」²⁵。

24 運動会雑感，琉球新報，1905年年11月13日。

25 同上書。

この記者の感想は次のことを指摘している。

- (1) 体操として仕組まれていること
- (2) 号令によって行われていること
- (3) 演武法が従来と異なり、「異様」な印象を持ち可笑しく思ったこと
- (4) (3)は、唐手を「技芸」とのみ考え「体育」のことに思いが至っていないこと
- (5) 号令よりは太鼓がいいが、常日頃教授するのであれば号令の必要があること
- (6) 来賓の意見として、団体演武よりは個人演武の方が真の「技芸」といえること

である。このことから学校教育に導入された唐手が個人指導中心から団体指導となり、号令や体育としてのあり方、旧来との比較など変容している。学校の指導法に対して様々な意見が出ており、唐手のあり方が模索されている。このように唐手は、指導法や演武法が体系化され、体育の目的に沿って近代化が進んでいることがうかがわれる。

花城の「空手組手」は、連合運動会での指導法が試行されたものではないかと推測される。残念なことに、内容についての解説がなく、わずか1頁の史料しか掲載されていない。県立中学校に続いて翌年、師範学校でも唐手が導入された。西村校長は、「師範学校沿革略」²⁶で次のように理由を記している。

「近頃の学生は一般に柔軟で安直コノミ郎道を賤み勇気に乏しく石の力が弱く軽佻浮薄の風がありますから本校生徒には此等の悪習に陥らしめないやうにすると同時に体力を練り併せて武士道精神を養はんとしては隔週一回全生徒を集めて合同修身を行ふのみならず本年4月からは一週間に二回の外は外出することを禁じて撃剣、柔道、唐手、水泳、テニスを殆んど正科の如くにやらせ克奨励の方法として職員も之に加はり又時々将来会を開いて居ります」²⁷

として、中学校同様「正科の如く」導入し、職員も加わらせて、撃剣、柔道、水泳、テニスなどともに実施している。その目的も「体力を練り併せて武士道精神を養はん」と記している。

26 師範学校沿革略(三)，琉球新報，1906年6月27日。

27 同上書。

第3節 県内各地に普及する唐手

行政主導で学校教育に導入され、各地の人々にもよく知れわたるようになった唐手は、その年から県内各地の学校の運動会や連合運動会、地域行事などに急速に取り入れられていった。

中学校や師範学校への導入の詳しい経緯はよく分かっていないが、唐手の評価が定まっていない時期から、様々な位置づけで地方の運動会や学校・地域行事等の演目になっている。行事は、時代を反映して「尚武の気象」の養成や参観する県民への影響も意図して催されている²⁸。学校へ導入された理由は、運動会、連合運動会が学校教育を通して軍国主義教育を図る目的として影響を及ぼしているからである²⁹。また、日露戦争の勝利によって、全国的な武道の再評価が促進されたように、素手の武術としての唐手が十分それに応えることを期した軍部と県庁に対して、唐手家や関係者が「本県独自の芸たる唐手」³⁰の発展と武術として認められることを願って応えたのは想像に難くない。

唐手の導入時の取材を行った記者は、教員らが唐手について秩序立てた説明が不足していることや技術、体育、精神の面から研究を重ねていくことが必要だと指摘していた³¹。

このときの中学校の学校長は大久保周八で、1902年に同校に赴任している³²。唐手を導入する3年前に赴任³³し、翌年には柔道場の設置を民間の有志に呼びかけて寄付を募り、中学校内に尚武館と命名した柔道場を落成させ、武道教育の奨励に意欲的に取り組んでいる³⁴。新聞には「中学校の道場開き」³⁵の見出しで、次のように報じられている。

28 宮城仁之助，龍潭，第1号，沖縄県師範学校内学友会，1902年，pp. 81-83。綾門大綱後の大親睦会，琉球新報，1898年8月19日。

29 真栄城勉：明治期の沖縄県における運動会に関する歴史的研究，琉球大学教育学部紀要第1部・第2部(42)，琉球大学教育学部，1992年，pp. 295-296。

30 宮城前掲書28，p. 83。

31 前掲書2。

32 知念前掲書20，p. 573。

33 宮城前掲書4，p. 33。

34 同上書。

35 中学校の道場開き，琉球新報，1906年11月1日。

「県立中学校が職員生徒の寄付金を以て柔術の道場を建築せしとは既にしばしば報道し置きたる所なるが此程内外の装飾も悉く完成したるを以て本日午後1時より奈良原知事、岸本、和田両事務官以下知名の人々を招待して招待して開場式を催し余興として生徒の柔術及び撃剣の試合数番を演ずべしと」³⁶、

と記している。この時には、唐手の演武は行われていない。学校長、保護者、一般の関係者だけでなく知事や事務官も来賓として参加していることから、道場創設は学校、地域、行政にとって関心の高い事業であった。

唐手の導入には、前年の12月頃から職員一同も唐手指導者について研究を行い、教育上価値あると認め、1905年1月より一般生徒に課したとしている³⁷。

この研究会の講師には、当時大家として知られた糸洲安恒、安里安恒、東恩納寛量らの名が伝わっているが、中学校の花城長茂や師範学校の屋部憲通は現役の体操教師として在職している。研究会の内容については、行政文書等の記録がほとんど残されていないこともあってよく分かっていない。また、地域の有名な唐手家らも唐手導入のための研究に協力していたことがうかがわれる³⁸。

糸洲が武道教師として中学校の嘱託となったのは、記録では1905年³⁹で、すでに70代半ばであった。糸洲に師事していた屋部や花城は、現職の体操教師として教鞭をとっており、実質的な指導や研究会の運営は、屋部や花城を中心に進められたと考えられる。王府時代の旧首里士族糸洲は、研究会のまとめ役になっていたと考えられる。ピンアン（一～五段）、ナイハンチ二・三段は糸洲の創作と伝えられている⁴⁰。

36 同上書。

37 宮城前掲書4， p. 33。

38 安里安恒談(松涛)：沖縄の武技(上)，琉球新報，1914年1月17日。

39 養秀同窓会：沖縄県立第一中学校と剣道，1994年， p. 17。

40 ピンアン(平安)には元型があり、それを再構成したとも伝えられている。「平安の如きは近代の武人糸洲氏がその子弟の教材に資せんため創案せられたもの」(本部朝基：沖縄拳法唐手術組手編，唐手術普及会，1926年， p. 6)。「平安ピンアンという型は糸洲先生が創作された型だといふことでありますが・・・はじめの頃はチャンナンと云っていたさうで、糸洲先生がまだ此型をチャンナンとう名称で呼んで居られた頃に教へを受けた人は現在でもチャンナン称して伝えて居ります」。摩文仁賢和・仲宗根源和：攻防自在護身拳法空手道入門，京文社書店，1938年， p. 74。

1905年に県立中学校に導入されて以降、わずか1、2年で県下各地の学校の運動会や地域の様々な行事の演目に唐手が含まれるようになっていった。(表-5)

| 西暦 | 月 | 日 | 見出し(開催日) | 紙・誌名 | 場所 | 行事名 | 演武者 | 地区 |
|------|----|----|----------------------------|------|---------------|---------|--------------|-------|
| 1905 | 2 | 5 | 首里通俗談話会(2月5日) | 琉球新報 | 首里 | 談話会 | 中学生、師範校生 | 那覇・首里 |
| 1905 | 3 | 9 | 那覇首里臨時総合運動会(3月8日) | 琉球新報 | 湯原 | 運動会 | 中学生 | 那覇・首里 |
| 1905 | 3 | 29 | 師範高等女学校証書授与式(3月27日) | 琉球新報 | 首里城内仮校舎 | 卒業式 | 師範校生 | 那覇・首里 |
| 1905 | 5 | 15 | 養秀学校の開校式(5月10日) | 琉球新報 | 中学校 | 開校式 | 中学生 | 那覇・首里 |
| 1905 | 8 | 19 | 中学の同窓親睦会(8月17日) | 琉球新報 | 中学校 | 親睦会 | 中学校卒業生 | 那覇・首里 |
| 1905 | 11 | 11 | 連合運動会(11月11日) | 琉球新報 | 湯原 | 運動会 | 中学生 | 那覇・首里 |
| 1905 | 12 | 1 | 中学養秀連合大運動会(12月5日) | 琉球新報 | 中学校 | 運動会 | 中学生、養秀校生 | 那覇・首里 |
| 1905 | 12 | 5 | 久米島通信(11月30日) | 琉球新報 | 中学校 | 運動会 | 中学生 | 那覇・首里 |
| 1905 | 12 | 21 | 師範高女両校の学芸会(12月20日) | 琉球新報 | 師範学校 | 学芸会 | 師範校生 | 那覇・首里 |
| 1906 | 1 | 20 | 県立中学校及私立養秀学校連合運動会(1月5日) | 琉球教育 | 中学校 | 運動会 | 中学生、養秀校生 | 那覇・首里 |
| 1906 | 3 | 20 | 中学校の近況(冬休み) | 琉球教育 | 中学校 | 寒稽古 | 中学生 | 那覇・首里 |
| 1906 | 4 | 15 | 兼報(3月26日) | 沖縄教育 | 師範学校 | 卒業式 | 師範校生 | 那覇・首里 |
| 1906 | 6 | 22 | 師範学校の創立記念式(6月21日) | 琉球新報 | 師範学校 | 開校式 | 師範校生 | 那覇・首里 |
| 1906 | 10 | 6 | 湯原の両区各校運動会(10月6日) | 琉球新報 | 湯原 | 運動会 | 中学生 | 那覇・首里 |
| 1906 | 10 | 28 | 師範高女の連合大運動会(10月27日) | 琉球新報 | 湯原 | 運動会 | 師範校生 | 那覇・首里 |
| 1906 | 11 | 1 | 中学校の道場開き(11月1日) | 琉球新報 | 中学校柔道場 | 道場開き | 中学生 | 那覇・首里 |
| 1906 | 11 | 15 | 中学校兼報(11月6日) | 沖縄教育 | 湯原 | 運動会 | 中学生、師範校生 | 那覇・首里 |
| 1907 | 2 | 3 | 北條侍従の学校巡視(2月5日) | 琉球新報 | 附属小学校、中学校、師範校 | 学校巡視 | 小学生、中学生、師範校生 | 那覇・首里 |
| 1907 | 2 | 14 | 久米島通信 泉生(毎週夜会) | 琉球新報 | 青年会(15~25歳) | 青年会の夜学会 | 15~25歳の青年 | 久米島 |
| 1907 | 3 | 27 | 師範学校の卒業式(3月26日) | 琉球新報 | 師範学校 | 卒業式 | 師範校生 | 那覇・首里 |
| 1907 | 3 | 27 | 宜野湾校の卒業式(3月25日) | 琉球新報 | 宜野湾小学校 | 卒業式 | 小学生 | 中頭 |
| 1907 | 3 | 29 | 読谷山電信局開始式(3月26日) | 琉球新報 | 古堅尋常小学校 | 開始式 | 野国村から | 中頭 |
| 1907 | 3 | 30 | 本部長の学芸会(3月26日) | 琉球新報 | 本部尋常高等小学校 | 学芸会 | 小学生 | 国頭 |
| 1907 | 5 | 31 | 文喜研究区内運動会の景況(5月27日) | 琉球新報 | 真壁間切り宇江城馬場 | 運動会 | 小学生 | 島尻 |
| 1907 | 6 | 19 | 師範学校記念会余興(6月20日) | 琉球新報 | 師範校 | 開校式 | 師範校生 | 那覇・首里 |
| 1907 | 8 | 9 | 国頭郡青年会 運動会景況(8月9日) | 琉球新報 | 名護内兼久馬場 | 運動会 | 青年会 | 国頭 |
| 1907 | 8 | 13 | 中学校の同窓会(8月17日) | 琉球新報 | 中学校 | 同窓会 | 中学校卒業生 | 那覇・首里 |
| 1907 | 8 | 28 | 中頭郡青年会(8月30日) | 琉球新報 | 真教寺 | 青年会 | 師範校生、中学生、農学校 | 中頭 |
| 1907 | 9 | 5 | 明治39年陸上大運動会記録(1906年11月23日) | 球陽 | 中学校 | 運動会 | 中学生 | 那覇・首里 |
| 1907 | 10 | 3 | 久米島通信(下)(8月22日) | 琉球新報 | 久米島仲地村 | 学芸会 | 青年会 | 久米島 |
| 1907 | 10 | 11 | 泉崎男子部学芸会運動会(10月17日) | 沖縄新聞 | 甲辰学校 | 学芸会 | 泉崎男子部 | 那覇・首里 |
| 1907 | 10 | 19 | 島尻郡青年会総会(10月20日) | 琉球新報 | 小隼小学校 | 総会 | 青年会 | 島尻 |
| 1907 | 11 | 5 | 本部長の学芸会(11月30日) | 琉球新報 | 本部小学校 | 学芸会 | 小学生 | 国頭 |
| 1907 | 11 | 9 | 学校日誌(11月9日) | 学校日誌 | 久米島小学校 | 集会 | 小学生 | 久米島 |
| 1907 | 11 | 25 | 中学養秀総合大運動会(11月23日) | 琉球新報 | 中学校 | 運動会 | 中学生、養秀校生 | 那覇・首里 |
| 1907 | 11 | 28 | 西原小学校運動会の記(11月22日) | 琉球新報 | 西原小学校 | 運動会 | 小学生 | 中頭 |
| 1907 | 12 | 7 | 中頭郡青年倶楽部(8月15日) | 琉球新報 | 普天間 | 発会式 | 参加者 | 中頭 |

表-5 唐手の普及状況

(1905年から1907年までの琉球新報の記事と学友会誌等を参照して、嘉手苅徹が作成)

この表を見ると、唐手が採用される行事は多様化し、各地に広がって人々の娯楽ともなっていた。内容を分析すると、

- (1) 学校行事では、運動会、卒業式、学芸会等
- (2) 地域行事では、同窓会、青年会、会所式等
- (3) 開催場所は、首里、那覇が多いが、地区別で見ると沖縄本島全域に広がっている。
- (4) 離島では、久米島の史料がある。
- (5) 3年間を月別で通してみると、年間を通して行われている。

唐手の記事は、同一の行事に対して予告や終了後の記事、さらに運動会や批評等があると複数回にわたって報じられ、関心の高さがうかがえる。唐手に関する記録は、1905年以降、様々な記録となって残されるようになっていった。

また、本土の教育関係者、皇族、軍人、研究者、作家等の来沖の際には頻繁に演武が披露され、本土の新聞や雑誌等にも紹介されるようになっていった。

唐手が正式に公教育に導入されたことは教育活動として公認されたことになり、評価は高まっていった。

第4節 師範学校の「唐手奨励会」と「唐手大会」

師範学校では、定期的に「唐手奨励会」や「唐手大会」を催している。次の記事は奨励会の様子を報じている。

「唐手奨励会」

唐手の体育上必要なことは既に世人の認識せし如くなるが、沖縄師範学校に於ても昨年来新たに唐手部として撃剣部、柔道部、テニス部と平行し、それ、研究中なるが既報の如、去7日は授業后より全校講堂に於て本年度の奨励会を施行したり。校長以下書記に至るまで悉く列席の上、不断生徒の習練せし手腕を3人若くは1人宛交々演せしに、其さま勇壯観る人として覚えず喝来せしめたる中にも屋部会長の示範手は流石は専攻だけありて見る人威心せざる者はなかりと。

当日報告の大要は

- 1、昨年は身体がこりて力の入れ所が解せなかったが今回はそれが判然する様になった
- 2、然し目と手足と心の一致せないのはまだまだ練習を要すること
- 3、それは対物なく空にやるからである。目前に敵を控へたる如き意気含でやるが肝要
- 4、2人以上整列してやる時は体操の如く一揃へに出来ないのが当然何となれば身体異

なればなり強いて一整なさんと労するなかれ

5、要するに昨年よりすると比較的長足の進歩といはざるべからず

当日施行唐手種類

一、ナイハンチ、クーサンクー、五十四歩、パッサイ、ピンアン、ヂーン、ヂッテ、チントー、チンテー、ローハイ、サンチン、セーサン、ワンドー、試合2組右終わりで、夫れ、賞品を授与したり」⁴¹

と記されている。この記事から確認できることを以下に示すと、

- (1) 唐手が「体育上必要なること」は人々に知れわたっているとしていること
- (2) 師範校では、1907年から新たに唐手部として研究していること
- (3) 本年度の奨励会を施行していることから、先述の紹介通り、たびたび奨励会を開催していること
- (4) 校長以下職員が観覧のもと、実施していること
- (5) 屋部憲通が師範の型を見せていること
- (6) 前年度と比較して、成果と問題点をあげていること
- (7) 奨励会で実施された型が13種あること
- (8) 組手も2組行われていること
- (9) 終了後に賞品を授与していること、などである。

これらは、師範校における唐手の指導法の研究やその実施方法、唐手の体系化の実状が示されている。当日の参観者に一般の人々が含まれていたのかどうか、この記事からははっきりしない。

唐手の体育的な価値は、職員だけでなく一般の人々にもすでに知られているとしている。また、「正科の如く」実施されており、奨励会も定期的に行われ唐手部も結成されている⁴²。奨励会後には講評として成果と課題がまとめられている。中でも(4)については、本来、個人技であった唐手が教科の体操として集団で指導が行われ、団体演武が披露されている。このことは、唐手のあり方(技法や稽古法など)まで影響を及ぼしたと考えられる。また、方法ははっきりしないが組手の試合も行われている。

確認された記録では、近世琉球からこの時期までに、「パッサイ」「クーサンクー(クウサンクン)」「ナイハンチン」「サンチン」「十三歩」「壺百〇八歩」などの型が見られ

41 唐手奨励会，琉球新報，1908年2月10日。

42 前掲書26。

たが、ここで13種の型が示されている。

師範学校では、指導法の研究も兼ねて「唐手大会」も行われていった。その様子は次の記事として報じられている⁴³。

「師範校唐手大会

昨日午後二時より同校中庭に於て既記の如く生徒の唐手大会を開けり。師範者は屋部憲通氏にして、最初に生徒の唐手80組まで催せられ、其の外に組手も4組ほどありて後、来賓として中学生徒の唐手5組を演じ、最後に斯道の名手として当日来会せる富名腰義珍氏の「セーサン」、喜友名氏の「パッサイ」、屋部憲通氏の「五十四歩」、糸数氏の「ナイハンチン」等ありて閉会したり。これらは何れも本県の唐手界に於いて既に名声あるものにて、当日の試演の如き容易に見るべからざるものなりき。唐手の種類はナイハンチ、ピンアン、チントー、ワンスー、パッサイ、トンスー、クーサンクー、ローハイ、五十四歩、ヂッテ、ナンテー、ヂー、セーサン、ワンダウ、ヂューム等の15種にして生徒の中優等者として授賞されたるもの左の如し。(略)」⁴⁴。

「唐手大会」としていることから優劣を競った大会として行われている。この記事から確認できることは次の点である。

- (1) 生徒の唐手80組、来賓として中学生が5組出場した大会であること
- (2) 大会後に、「斯道の名手」として船越の「セーサン」、喜友名の「パッサイ」、屋部の「五十四歩」、糸数の「ナイハンチン」等が師範演武として行われていること
- (3) 型は15種が紹介されて2種増えているが、「サンチン」のようにここでは含まれていない型も有る。また、奨励会とは、同じ型名と思われるものもあること
- (4) 優等者は表彰されていること
- (5) 内容はっきりしないが、組手が4組行われていること

などである。

唐手大会は、生徒達が演武を披露し表彰されることによって唐手への興味・関心を高め、有名な唐手の師範演武を見て学んでいったことがうかがわれる。また、教員だけでなく地域の指導者らも関わって唐手研究が進んでいる。演武された型は多種にわたって

43 師範学校の唐手大会，琉球新報，1911年1月25日。

44 同上書。

おり、奨励会で紹介された型名と異なるものもある。

第5節 京都武徳殿と講道館における生徒の唐手演武

1908(明治41)年、「第10回青年大演武会」に柔道と剣道の試合のため出場した沖縄県中学校生6名は、嘉納治五郎や参観者の前で唐手の特別演武を行った。この大会は、37都府県1海外から「演武者は、総て千九百余人の多きに達し創立以来未曾有の盛会なり」⁴⁵と報じられている。大会の様子は大阪時事新報で「青年演武大会」⁴⁶の見出しで次のように報じられた。

「柔道部演技に移りて遠く沖縄より来会せし同県中学生6名及び玉城武太1人立の唐手の型あり。これは同地特有の武技にして内地人の目には珍しければ、輝く太陽に焼焦げて宛ら仁王に似たる勇ましの体と阿吽の声と呼吸を測れる刹那の掛声とは、多大の興味を以て迎へられ喝采鳴りも止まず。次で柔道の二百五十組の試合を終わりとる」⁴⁷。

とある。唐手は柔道の部で特別演武として出演して披露され、型の演武に対して「喝采鳴りも止まず」として好評だったことがうかがわれる。2日後の同紙にも「琉球の無手勝流」⁴⁸の記事として、次のように掲載された。沖縄における唐手の実状や大会の様子も詳しく紹介しているので全文を引く。

「琉球の無手勝流

此れが真に鉄拳＝三角飛奇術＝一拳で牛馬を殴り殺す＝伝来は支那

京都武徳会青年大会に於て、柔道試合に先ち内地人には頗る目新しい琉球唯一の武技唐手の型数番を沖縄中学の生徒によって演ぜられた。是れは先きに同県の中学生が修学旅行の爲め京都へ来たとき、一寸と武徳殿で演じたのを幹部の役員連が見て内地の柔道とは趣を異にし、又西洋の拳法などとも行き方が違って仲々味のある勇ましい業だとぞ

45 杉本善郎：武徳誌，第3編，第6号，武徳誌発行所，1908年，p. 47。

46 青年演武大会，大阪時事新報，1908年8月7日。

47 琉球の無手勝流，大阪時事新報，1908年8月9日。

48 同上書。

っこん惚れこんだ。「是非とも夏の演武大会には」との交渉があつてきてそれを玉城武太氏他一名が八重の潮路を越して沖縄三界から遙々と入浴、一風変わった此技術を満天下に紹介する訳になつたので、潮焦げに焦げて銅を展べたやうな腕に所々肉瘤が持ち上がり、全身総て之れを筋肉の団塊かと思はれる位観覧者の誰かゞ運慶の造り損ねた仁王にそっくりだといったやうな身体をぐっと反り身に突き立って、阿吽の呼吸を合わせた時などは嘉納博士も片唾を呑んで注視して居た。唐手即ち空手にも通じ、所謂無手勝流の本物で、武器といへば石塊のやうに使ひ固めた左右の拳二個と両足これさへあれば何でも御座れて突く、殴る、蹴る、攻撃防御何れにも応用出来る。沖縄では手^て拳^{こぶし}と唱へて、昔は男も女も盛んにやったものだが、今では女で稽古をする者は少ないさうだ。同中学では2年生に正科として之れを課し3年以上は随意として、ある小学校でも体操科の時間に練習をやらして居る所もある。練習の初めは巻藁と云つて、材木に藁か草鞋のやうなものを被せるか或は布片を巻き付けた上を拳個と指頭でぐんゝと突く。一時は骨も肉も碎けるほどの痛さを忍んで漸く関節と肩頭が固まると力をつける稽古をする。夫れは2つの瓶に鉛とか小石とかを入れ、淵を指先で摘まんで持ち回るのでさうな。夫れからポツゝ型を習ひ始める。尚飛び方といふのがあつて、上へ飛び上がる法前後左右に飛ぶ法三角に飛ぶ法等種々ある。而して此三角びと云ふのが仲々難かしいたとは水面へでも不意に突き落された場合があると、此熟練さへ足つて居れば空で三角に戻つて、元の岸へ飛び返ることが出来る。是れに就いて那覇の町に唐手を稽古して居た或男が他の業は随分熟達したが、三角飛びの呼吸がどうしても解らぬ。是れは一ツ実地を見るに如くはないと先生を誘き出して、同地波之上神社の海岸絶壁の上に立ち、不意に吽と掛け声して先生を突き放した。所が先生は早速三角飛びを応用して翻りと元の岸へ戻る之れを見た件の男は「了解つた」と横手を打つて其の儘逃げ出したといふ関口彌太郎の武者修行談にもありさうな噺がある。此外天井の棧を持って宙釣りしたり坐つた儘飛び上がつて天井を足蹴にしたり、石垣を横さまに走つたりする際どい術もあつて、其の数は幾十種の上に出るさうだ。拳の力の強いことゝいつたら七分や一寸の板を破る位はほんの手解きで、握り固めた拳個で胸板に一ツでもあてられやうものなら少なくとも三年の寿命が縮むといひ慣はし、ズツと強いものになると牛馬の眉間を一撃して倒すものさへある。此術の始まり就ては確かな典所はないが、俗説によると慶長年間島津氏が琉球を征服したときに他日の反乱をふせぐ手段として在らゆる武器を悉く没収した結果、土人が護身の法すらない其処であるものが支那に往采して其国の拳法なるものを伝來したの

だいふて居る」⁴⁹。

記者は演武だけでなく、多くの質問を行って記事を書いたと思われる。まず、唐手は「琉球の無手勝流」としていいる。ここで演じられた型名は記されていないが、中学生の玉城武太が行った型を「勇ましの体と阿吽の声と呼吸を測れる刹那の掛声」「身体をぐっと反り身に突き立って、阿吽の呼吸を合わせた」と説明していることから「サンチン」の型と推測される。この記事から記者の取材した内容から確認できることは以下の点である。

- (1) 唐手は、「琉球の無手勝流」と呼称されていること
- (2) 「これが真に鉄拳＝三角飛奇術＝一拳で牛馬を殴り殺す＝伝来は支那」の見出しに特徴が表されていること
- (3) 主催者の要望で演武が依頼されたこと
- (4) 「一風変わった此技術を満天下に紹介する」目的であったこと
- (5) サンチンの型の「阿吽の呼吸を合わせた時などは嘉納博士も片唾を呑んで注視して居た」こと
- (6) 唐手即ち空手にも通じ、左右の拳二個と両足が武器で、突く、殴る、蹴る、攻撃防御何れにも応用が出来るととらえていること
- (7) 沖縄では手^{てこぶし}拳と唱へて、昔は男も女も盛んにやったが、今では女で稽古をする者は少ないこと
- (8) 同中学では二年生に正科として之れを課し三年以上は随意として導入していること
- (9) ある小学校でも体操科の時間に練習をさせて居る所もあること
- (10) 練習ははじめ巻藁を突き、瓶を指先で摘まんで鍛え、その後型を習い始めること
- (11) 唐手には、前後左右に飛ぶ三角びの技があること
- (12) 拳で七分や一寸の板を破り、胸板にあてられると三年の寿命が縮むこと
- (13) 強いのにになると牛馬の眉間を一撃して倒す者もいること
- (14) 唐手の歴史は、慶長年間島津氏の侵攻によって武器を悉く没収した結果、中国から拳法が伝播したこと、などである。

この内容から、読み取れることは多く、記者が沖縄の唐手を興味深く取材を行ったことがうかがわれる。呼称や現実的でない技法等も記されている。講道館長の嘉納博士が

49 同上書。

型を見て「固唾を呑んで注視していた」ことは、1927年に来沖して、唐手家との交流や視察を行い、柔道の講演を行ったことにも影響があったことが推測される。また、唐手の練習の順序が示されていること、沖縄で唐手を男女が盛んにやっていたが、同時期には女性は少なくなったこと、中学校では2年生が正科で、3年生は随意として導入されていることなどは、他の記録にはほとんど見ることはない。

翌年の大会でも特別演武は行われている。参加は38都府県から2,144名が参加し、昨年以上の盛会であった。中学生3名が「クウサンクウ大」「サンチン」「クサンクウ」を披露したと型名が明記されている⁵⁰。前年度のような詳細な新聞記事は見られないが、東京朝日新聞は、次の記事を掲載している。

「沖縄中学徳田安貞空手本部多畑昇太郎稲葉太郎の武徳会のランドリ型を演じ終つて選抜勝負を行へり」(振り仮名は、ほとんどの漢字に付いているが他は筆者が削除した)⁵¹。

とある。記者は、「徳田安貞空手」と書いているので確認を怠ったと思われる。

また、1911(明治44)年には、講道館館長嘉納の特別の計らいで、県立師範学校生6名と引率の教師が講道館を訪ねている。2時間ほど滞在し、嘉納師範や高段者の面前で唐手の型と板の試割を披露している。この報告記事が学友会誌に「唐手部記録」として掲載された。訪問の時の経緯や講道館での嘉納師範とのやり取りや他の高段者の反応がまとめられており全文を引用する。

「唐手部記録」

記録係 山内盛彬 諸見里朝保

唐手は昔から本県に於て盛に行はれたものだが、本校に之が学友会の運動部の一部として置かれたのは去る39年の事今日まで年を越す事些か5歳、併しながら其の進歩の速度は実に偉大なるもので役員諸氏の奮励努力は以て本部の声価を外部に発露せしめて遺憾なくも廿世紀的新体操法なるを世人に紹介し、今や唐手部の名声は月と共に驚天動地の勢を以て県下否他府県にまで伝はらんとする機運に際会して居る。例年2回開催すべき本部の奨励会は1学期に於て兎や角の都合で其時期を失ひ2学期にも亦閑院宮

50 杉本前掲書前掲45, 第4編, 第9号, 1909年, P. 89。

51 武徳会柔術試合(京都), 東京朝日新聞, 1909年8月10日。

両殿下御来県等の事ありて自然に其機を失しもう 3 学期でなくて開会の運びに至らぬ様な状態に陥て来た、そこで唐手部員の落胆は云ふも更ら吾等記録者は儚なくも筆を持ちて其記すべき材料の編集に多大の苦痛と煩悶を重ねた結果唐手史上特筆大書すべき一事項を録して以て其責を塞ぐ。一事項とは何ぞ本年 4 月修学旅行の 3 学年が本部に於て柔道元祖嘉納先生をして歎賞辟易せしめたる一事である、今旅行日記の一部を記して之を諸君に分つ。 4 月 18 日 月曜日 晴天 午後 1 時 30 分江戸川橋電車終点で下車して待つ 事 30 分、人員は大抵揃ったのちで直ちに嘉納先生宅に向った、10 町程も来たら東京は最う府下になって何もつまらなくなる、人間と云ひ建物と云ひ至極質朴風で片田舎の一寸した町みた様になって来た、僕は市中の繁を避けて恁んな所に這入り異様な感を起した。賛辞柔道元祖嘉納先生門前について又待たされる 事卅分暫くして人力車に挽かれて来る一紳士がある 誰か知らん之が嘉納先生ならんとは、吾が中村先生早くもそれと悟り車前近く打ち寄って立礼せば先生早速車の棍棒を下させて云々の挨拶をされた、其言語風采如何にも悠然とし真の偉人の相を抱き傍観徒らに心を顫ふ様な気になった。

一同に導かれて講道館の道場に入った、道場の広さは殆んど吾が講堂の二倍程もあらう中央の一段高い指南席に屏風が立てられてあつて其上の壁上に柔道元祖嘉納先生の盛装せる半身像掲げてあるばかり他には何等の装飾なく悉く白壁のみである、廳（やが）て衣服一切木綿づくめの先生がにこ、然と入り来り続いて奥様や塾生等も押し寄せ来初めて吾等の唐手を要求せられたので僕(記録者)が初めに唐手の経歴や状況等を概略説明し終て六名の演技者を出て御目にかけて、その勇士の面々は 前原 信明 平田 喜真 全城 睦良 山内 盛彬 島袋 盛敏 伊礼門恒禎

先生は大満足、一々質問の矢を発せられると一同に本気になって出来得る限り之に答へる、すると先生もこれに釣り込まれて色々唐手の真似をなさる、先生がそう垂気になったのを幸に此方は之につけ込んで唐手の柔道に優れるを説く、先生は暫く悟ったものの如く「いやそんな事はない」と云はれる「ぢや柔道では人に手から振られた際には奈何しますか」と問へば「何だ人の手を振られたから之に降参を云はせず済むものか」と云ふ言の終るや否や自らつと立ちて僕の手を刀まかせに振られた、さあ恁うなると僕に仕方がこい、先方は日本一の柔道家と来て居る自分とは云へば唐手には何の経験も持たぬ素人である、僕はとうと悲鳴をあげて其まま泣寝入りすると垣内に大笑ひとなった、負けぬ性の平田君之を見て齒痒かりしと見て飛び立って来て先生に手を振ぢさせて之を拳骨で殴り落さうとしたが先生は平田の拳が参らぬ内に既に平田の全身を押し潰し居られる、平田君の顔は泣き出し相にまで皺が寄つた、一同は又た腹を抱へて大笑した、

それから先生は自分の天下になったと思はれたのか悠々柔道に就いて大気焔を吐かる、時しも琉球特有の拳骨は正に偉人嘉納先生をして僻易三舎を退けしめたのである。僕が「一体琉球の拳と云ふのは柱を折る位なら朝飯前の仕事である」と云ったら、先生は「何卒此柱は折れても構はぬから折って呉れ、永代の記念とするから」と言はれたので吾がくらすの一勇士金城君は奮然として飛び立ち、手にはんげちを巻きながら鷹揚にも柱の前に寄り付いた、すると其側に座を占められた悠々柱が折れて家が崩れるものと早合点身を遠く彼方に退けられたのであった、金城君の勇気は成程感ずべきである。されど惜しむべし彼の拳骨は未だにこの柱を折る迄修養せられて居ない。そこで僕はすぐそれと見て取って「吾等は未だ修養中の者ですからこんな柱を折る事は出来ません。私等の先生なら大丈夫ですけれども私等には只動揺を与へるばかりです。今日は柱の代りに何か厚い板でも割らして下さい」。早速塾生が一つの7分板を持って来た。金城君之なら何でもないと云ふ至って平然な態度で拳を握りしめ身構へしたかと思ふ一刹那一撃ばつの音を立てて板は5つ6つの細片になって四方に散乱した。拍手喝采は雷の如く響き渡って同君の勇を賞したのであった。次に伊礼門君も一枚の板を同じく苦もなく打ち破って見せたので流石の先生之には敵し難しと思はれたのかやや感服の色を表された。困った事には後に碁盤を割りて呉れと持って来た。「いや之は丁重な品ですから勿体ない」と言へば先生ニヤリと打ち笑ひ「ナーニこんなのがあったら人間が柔儒に流れるから遠慮なく打ち割って呉れ」ああ此一言古今の大金言ではなからうか?! 碁盤を割るのはさて惜いて一行は導れて紅緑山荘に入り茶菓を喫し先生の宅を辞したのは5時。ああ!!! 前途有望なる我唐手部は今や帝国の中心たる東都の真中にまで紹介せられ体育王嘉納先生の賛辞を受けた。吾人は諸君と共に相提携して抜を練り術を進めて以って唐手なるものが近き将来に於て世界的体育法として普く天下に紹介せらるるの日を待たんかな、諸君奮励せよ」⁵²。

この3回の中学生や師範校生の本土での演武は、生徒たちが単に唐手を紹介したというだけの出来事ではなかった。嘉納治五郎講道館館長や本土の多くの武術家、一般の参観者が見守る中で唐手の型演武が行われたからである。大日本武徳会主催の「青年武道大会」は、2千人の参加者があった。また、講道館を訪ねた師範校生は、嘉納師範と直接会って型の演武や板の試割を行い、嘉納師範の質問にも一生懸命答えている。講道館の高段者もいて生徒達は貴重な経験を得たと思われる。唐手は、武道の総本山ともいう

52 宮城前掲書28, 創立40周年記念, 1911年, pp. 183-185.

べき講道館で披露されたことによって唐手の存在が一層明らかになった。

第6節 本土への普及

第1項 唐手の全体像の模索

1913年、船越は、「唐手は武芸の骨髄なり」⁵³（以下、「武芸の骨髄」と記す）と題する論文を新聞紙上に発表した。この内容が後の船越の文献の土台となっている。全文は次の通りである。

「唐手の伝来 唐手の流儀 唐手の種類 既往と現今 将来は如何

現今吾が沖縄に於て体育上唐手が柔道剣道と鼎立して盛に演ぜられつつあるは世人の熟知せらるる通りなるが、この唐手なるものが何時頃より始まりて亦如何なる効力を有するかは世人が共に聞かんと欲する所ならん。依って余は自分が多年研究した事と及び先輩諸先生方より聞き取りたる節とを総合して、同好の諸賢に分たんとう乞ふ多少の資する所あらば幸甚。

唐手の伝来

吾が沖縄に於ける唐手は何時の頃より伝はりしか伝記の徴すべきものなければ諸説まちまちなれども、伊波文学士の沖縄偉人伝日支両思潮輸入の頃に依ると確か西暦14世紀の末、英傑尚巴志王三山（中山南山北山）を統一して、久しく断絶した日支両国の交通を回復された其頃ではないかと想はる。何となれば15世紀の始め尚真王に至っては諸大名を首里に集め、中央集権となりあらゆる武器は悉く取り上げられ世は全く太平となった。而して暫らく平和に慣れた民は、慶長十四年島津氏の琉球征伐でひどい目に逢はされた。それで無手勝流唐手の必要を痛切に感じたので、蜂に劍烏賊に墨汗の警戒色あるが如く、護身用として必要上唐手の練習をやらねばならぬ立場となつたのであらう。

唐手の流儀

世人往々首里手とか那覇手とか泊手とか特別に存するかの如く称ふる者あれども、其流儀の由つて来たる所以を明らかにすれば自づと其惑ひを解かん。これは昔より昭霊流と

53 松涛：唐手は武芸の骨髄なり，琉球新報，1913年1月9日。

昭林流と云ふ二流に分かれている。前は体に重きを置き、後は術に重きを置ける流派なり。「ワイシンサン」は前に属し「イワー」は後に属す。「ワイシンサン」は身体肥満の荒武者にて「イワー」は背がすらりとした機敏闊達の男なり。那覇は昭霊流の流れを汲み首里は昭林流を踏む。泊はその二者を折衷したる所謂中間の手にして一流をなせり。其他神手とか田舎の舞方等あれども神手は津堅手にして、舞方は沖縄固有のものなりと口碑に伝ふ。

唐手の種類

以上諸流の中には百余種もあるが、現今吾が沖縄で流行の手はサンチン、セーサン、ナイハンチ、ピンアン、パッサイ、クーサンクー、五十四歩、チントー、チンテー、ジーン、ジッテ、ワンスー、ワンドー、ペッチューリン等あるが皆右の二流を脱せない。

既往と現今

往古は戦乱時代の余波を受けて成るべく秘密に他人に知られざる様にと努めて稽古をなすにも練習をするにも朝は暗い中より晩は暮れてから場所も極く秘密に附すの慣ひなるが、明治34、5年の頃よりは公然師範中学で体操同様にやることになり、毎年其結果を文部省に報告することになった。今や社会の一大問題となり現に天聡に迄達し、海軍省の研究問題にまで上っている。何と喜ばしき現象ではないか。

将来は如何

吾人はこの喜ばしき現象を益々将来に發揮せしめんには安里、糸洲、東恩納の諸大家が丈夫である中に何とか方法を設けて、県当局と共に善後策を講せざるべからず。最もた易い方法は一部二部の出身を配るに唐手に嗜みのある者を工合好く配置し最寄り最寄り時々会合が出来る様にすれば暇ある毎に互に研究をなし将来の発展を期すること疑なかるべし

要するにあらゆる武芸の中には何れも欠点ありて體育上不均一の譲りは免れざるも独り唐手に於ては円満に発達するのみならずイザ鎌倉と云ふ暁には確かに不断の練習が現実するのである漢那庸森曰く

陰陽無レ始動静不レ現

非ニ知レ道人一誰能知レ是焉

恩河朝祐氏は以上の句を取り尚ほ唐手に熟達した人を三十字詩に讀みて曰く

影とめは形裏とめは表

定めないんものや武士の手なみ」⁵⁴。

船越は、「自分が多年研究した事と先輩諸先生方より聞き取りたる節とを総合」したとして、「現今吾が沖縄に於て體育上唐手が柔道剣道と鼎立して盛に演ぜられつつあるは世人の熟知せらるる通りなるがこの唐手なるものが何時頃より始まりて亦如何なる効力を有するかは世人が共に聞かんと欲する所ならん」として、「唐手」が「體育上」、柔道や剣道と同じように盛んに学校等に取り入れられるようになり、社会的な認知を得ることができた。「唐手」はいつ頃始まって、どのような効力を発揮するのかということがはつきりせず、人々からもそのことについての質問が多いので、先輩や諸先生方より聞き取ったことを総合して同好の諸氏に提示したいと理由を述べている。

「武芸の骨髓」は、「唐手の伝来」、「唐手の流儀」、「唐手の種類」、「既往と現今」「將來は如何」の5つの見出しで構成されるわずか1,400字にも満たない論文である。しかし、沖縄空手の全体像を著した初めての論文である。船越は、多年にわたって研究したことや先輩や諸先生らから聞きとったことを総合してまとめたと記しているが、交流のあった伊波普猷、東恩納寛惇、真境名安興の歴史研究が本論文への影響があったことがうかがえる⁵⁵。とくに注目されるのは、次のことである。

「世人往々首里手とか那覇手とか泊手とか特別に存するかの如く称ふる者あれども、其流儀の由って来たる所以を明らかにすれば自づと其惑ひを解かん。これは昔より昭霊流と昭林流と云ふ二流に分かれている。前は体に重きを置き後は術に重きを置ける流派なり」⁵⁶とし、唐手の流儀を「首里手」「那覇手」「泊手」という人々がいるが、唐手は「昭霊流」「昭林流」という2派の系統が中国から伝来したことを理解したら、3つの地区によって名づけられた流儀の迷いは解けるであろうとしている⁵⁷。

『ワイシンサン』は前（昭霊流）に属し『イワー』は後（昭林流）に属す。『ワイシンサン』は身体肥満の荒武者にて、『イワー』は背がすらりとした機敏闊達の男なり。

54 同上書。

55 船越は、論文で基本とする歴史観を伊波の研究をもとにしており、また、東恩納、伊波、真境名も船越の言説や論文を引用している。唐手の歴史や型の継承など、口承に依拠する部分があることも要因である。

56 前掲書53。

57 糸洲安恒は「唐手十箇条」で「往古、昭林流、昭霊流と云（ふ）二派、支那より伝来（し）たるも（の）」と説いた。

那覇は昭霊流の流れを汲み、首里は昭林流を踏む。泊はその二者を折衷したる所謂中間の手にして一流をなせり。其他神手とか田舎の舞方等あれども神手は津堅手にして、舞方は沖縄固有のものなりと口碑に伝ふ（かっこは筆写加筆）と記している。

「首里手」「那覇手」「泊手」といわれている流儀は、「昭霊流」「昭林流」の二派のことであり、「昭霊流」が「体に重きを置き」、「昭林流」が「術に重きを置ける流派なり」として、「昭霊流」は「ワイシンザン」、「昭林流」は「イワー」という二人の中国人によって伝えられた流派であると論じているのである。「那覇」が「昭霊流」、「首里」は「昭林流」、「泊」は「昭霊流」と「昭林流」を折衷した中間の「手」として「一流」を成したとしている。

船越は「首里手」、「那覇手」、「泊手」、そして「手」という言葉を使って、人々の間でいわれている唐手の流儀のとらえ方に対して、それぞれ「首里」「那覇」「泊」と地区名に戻して、唐手は昔から「昭霊流」「昭林流」の二流であると正している。

「首里手」「那覇手」「泊手」「手」「田舎の舞方」「神手」「津堅手」の言葉を使い、起源となる二派の特徴とそれを伝えた中国人「ワイシンサン」「イワー」をあげて、首里、那覇、泊地区の特徴を説き、地方の津堅（津堅手）や田舎の舞方（沖縄固有）にも言及している。

このように見てくると、唐手と「手」、「流儀」、「流派」、「種類」、「型」の意味は明確に区別されていないことがわかる。唐手と「手」「型」は同じ意味で使われており、「唐手の流儀」は「流派」、「唐手の種類」は「型」を意味している。船越の論文では、唐手は、手、型、流儀、種類が同義として使用されており、言葉の定義は未整理のまま行われている。

翌年に発表された「沖縄の武技 唐手に就いて 安里安恒氏談（松濤）」⁵⁸（以下、「安里談」と記す）は、さらに詳細に沖縄空手の全体像が示された。この3回の連載は、船越が師事した安里安恒の談として船越がまとめている。前年の「武芸の骨髄」で船越が「先輩諸先生方より聞き取りたる節とを総合して」としているのは、自身の師事する安里が中心となっていたことは明らかであろう。

安里談は、「唐手の起原」「歴代の武術家」「唐手の流儀」「唐手の種類」「直接伝授を受けた人」「組手」「段のものの分解」「練習中の心得」「唐手と学問との関係」「目下の欠点」「戦闘法」の見出しで、歴史、人物、流儀、種類、組手、型の分解、心得、学問

58 安里安恒談（松濤）：沖縄の武技，琉球新報(1)～(3)，1914年1月17日は(1)，同18日は(2)，同19日は(3)。

との関係、欠点、戦闘法についてを前年の「武芸の骨髄」⁵⁹で説いた唐手の全体像から、「安里談」としてさらに新たな課題を立てて、詳しく論じられている。

ここでは、呼称の変遷に関連して、「武芸の骨髄」と「安里談」にどのような異同があるかを比較していく。

「安里談」の「唐手の起源」では、「唐手の起原に就いては、巷説紛々で自分もしばしば設問を受けることなるが、想ふにこれは沖縄固有の武芸にして田舎の舞方なるものが、所謂唐手の未だ発達せざる時代のそのままであらう。見よ女子の喧嘩の時につかみ合をなし、子供の鬭争の時に鉄拳を振り廻はすが如き是等は皆沖縄開祖以来の遺伝性に基づくものにして、本県人は生れながらにこの性あるではないか」⁶⁰としている。

「唐手の起源」は、「沖縄固有の武芸にして田舎の舞方」が「唐手の未だ発達せざる時代のそのままであらう」としている。その現れとして沖縄の「女子の喧嘩」や「子供の鬭争」の仕方には「沖縄開祖以来の遺伝性に基づくもの本県人は生れながらにこの性あるではないか」と述べている。「田舎の舞方」が沖縄空手の起源とする考えを明確にしている。また、「安里談」の「唐手の流儀」において、

「唐手の流儀には昭霊流と昭林流の二通りあるが、前は体軀肥満にして休力豊富なる偉大の男がやるべきものにして、『アソン』（武官）はこれに属し、後は体力貧弱にして術に重きを置く瘦方の男が多くやるべきものにして、『ワイシンザン』（武官）はこの流儀であった」

としている。しかし、前説の「ワイシンサン」が「ワイシンザン」と濁音になり、渡来人は「武官」となっている。さらに、「ワイシンザン」は、「昭霊流」から「昭林流」と入れ変わり、「体力貧弱にして術に重きを置く瘦方の男」の流儀（流派）となっている。この流儀を中学校の生徒の現状に当てはめ、

「那覇で稽古したのは多く昭霊流で、首里で稽古したのは多く昭林流である。何が故に斯くの如き傾向を来たしたかと云ふに、那覇は重に体力に注意し首里は重に術に偏した

59 船越は、論文で基本とする歴史観を歴史家らの研究からもとにしており、また、東恩納、伊波、真境名も船越の言説や論文を引用している。これは、唐手については、口承に依拠することが多々あることも理由となっている。

60 安里前掲書58, 1914年1月17日。

からであらう」

と、那覇で稽古をした生徒が昭霊流（体力を重視）で、首里で稽古をした生徒は昭林流（術を重視）で、那覇＝昭霊流＝体力を重視、首里＝昭林流＝術を重視という特徴が生徒にも表れているとしているのである。

「武芸の骨髄」の「唐手の種類」は、「諸流の中には百余種」あり、流行の手として「サンチン、セーサン、ナイハンチ、ピンアン、パッサイ、クーサンクー、五十四歩、チントー、チンテー、ジーン、ジッテ、ワンスー、ワンドー、ペッチューリン等ある」と14種の型名を挙げている。しかし、「安里談」では、型は「数十種」とし、「其中より五六種選択してよく練習しさえすればそれで充分だ。体を固める向には「ナイハンチ」と「セーサン」が好からう。棒を受けるものは「パッサイ」に限る。早きを取るには「クンサンクン」がよいので、上段中段下段の区別を判然したのは「ジッテ」である。而して実用向には「セーサン」と泊の「パッサイ」が余程利くやうにある」として、7種の型を取り上げその特徴を述べている。

「安里談」では、「直接伝授を受けた人」の見出しで、「支那に往き、或は本県にて直接支那人より伝授を受けた人が多数ある」として、新たに登場した「アソン（武官）」、昭霊流から昭林流に変わった「ワイシンザン（武官）」、昭林流から昭霊流に位置づけられた「イワー」は武官とは記されていない。その上で、それぞれの中国人から習った琉球人と伝授を受けた型名が示されている。ここで挙げられた型名は「チントー」「チンテー」「ジーン」「ジッテ」である。

唐手の呼称とともに、流儀（流派）、種類（型）、そして「手」はその後呼称と同じように、語意が明確になり、片仮名による型名の表記が異なる等複雑な問題を孕んでいった。

第2項 「手」の言説

「手」は、日本語の「手」を唐手と同じように沖縄語（首里方言）で呼ぶことによって沖縄固有の徒手武術として主張するものである。この呼称を固有名詞として初めて論じたのは、確認したところでは「武芸の骨髄」と「安里談」である。

『沖縄語事典』⁶¹では、「手」の語意として、「④唐手。拳法の術。イ.唐手を使う。また、唐手の技を演ずる」⁶²とある。ここでは、唐手の起源を論じる歴史的な経緯には触れていない。しかし、「手」は空手道と呼称される以前の呼称として、戦前期に使われた唐手、拳法の術、また、唐手を使うことを意味すると解されている。

船越は論文にした「武芸の骨髄」と「安里談」には、「手」を唐手の起源として述べてはいない。しかし、「武芸の骨髄」では「舞方は沖縄固有のものなりと口碑伝ふ」とし、「安里談」では「沖縄固有の武芸にして田舎の舞方なるものが所謂唐手の未だ発達せざる時代のそのままであらう」と論じられている。

船越が論じた「手」の語意は、後に船越が刊行した専門書では変わっていく（唐手＝手＝型の語意を明確にして分類するようになる）が、唐手家や歴史家によって船越の唐手の起源に関する主張が引用され様々な解釈が生じるようになり、船越自身も自ら主張していた考えを変えて説いていった。

第3項 富名腰（船越）義珍の上京

船越は、唐手の紹介するため沖縄県を代表して上京する。そのことは次のように地元の新報で報じられている。

「中央に紹介さるる 沖縄の武術 [上]

運動体育展覧会 昨日出品さ□

東京博物館に於いて開かるる文部省主催の運動体育展覧会へ本県より沖縄尚武会会長富名腰義珍氏が出品準備中なることは既報の通りなるが最早総ての準備と整へたれば県を介して昨日の□義便にて発送したが其内容左の如し

(一) 沖縄の武術として大福一軸

(二) 唐手の型として中幅一軸

(三) 武器と組手として中幅一軸

都合右の三幅なるが折角中央に沖縄武術を紹介することなればとて書もわざわざ本県一

61 国立国語研究所，沖縄語事典，国立国語研究所史料集5，大蔵省，1976年，p. 517。

62 同上書。

流の青年書家謝花雲石氏に依頼して万事万端注意払へりと」⁶³。(□は欠損によって不明な部分)

船越は上京するにあたって、沖縄の武術として、「唐手の伝来」「唐手の流□」(以下欠損)、「唐手の種類」「唐手の特徴」「唐手の組手」「唐手教授記」「唐手の榮譽」について三幅の掛け軸を用意し紹介する予定であることが記されている。県としても運動体育展覧会で唐手が紹介されることに期待を寄せていることがうかがわれる。

第7節 小結

近代沖縄において、唐手は行政主導で公教育に導入され、新たな唐手として創造されていったのである。このことが琉球処分以降に様々な社会的評価を受けて揺れていたことからわずか数年で人々に広く認知される唐手として県下全域に普及していった。唐手は琉球語読みの唐とーでいー手から標準語の唐からて手として学校を中心に一般化されていった。

再評価の背景には、県庁による同化教育、皇民化教育、軍事教育の目的に沿って近代化が進められたことが要因としてある。糸洲が学校教育への導入を提言するため県の学務課へ提出したとされる「唐手十箇条」は、教育勅語や軍人勅諭の基本理念をもとに、初めて唐手の歴史や練習する際の心構え、その効果、稽古法、指導者の養成等についてまとめられている。時代を反映していることもあるが、糸洲は沖縄空手による多くの人材育成と沖縄固有の武術としての唐手を全国へ普及するという沖縄の文化的アイデンティティの主張を強く意識していることもうかがわれる。

県中学校の花城長茂の「空手組手」の指導資料は、ごく一部を『空手道大観』の口絵に見ることができる。体操の授業や運動会の指導資料と推測されるが集団指導の確立を模索していることがうかがわれる。この時期の学校における他の指導資料は、運動会や行事のプログラム以外ほとんど残されていないが、授業や個別指導を受けた徳田安貞の論文や回顧録等の体験記等によってうかがい知ることができる。また、県師範学校には屋部憲通がおり、行政の後押しもあり「尚武の気象」を目的として「殆ど正科の如く」導入され、部活動も行われた。師範学校では、唐手奨励会や唐手大会が定期的に行われ、指導法の研究や地域の唐手指導者らの協力が見られた。中学校、師範学校への導入後、

63 この新聞は、下部は欠落しており全体は確認できない。中央に紹介される沖縄の武術(上)、沖縄タイムス、1922年4月23日。

各地の各種学校でも指導が行われ、とくに連合運動会の演目の一つとして定着していった。

沖縄空手は、京都武徳殿や講道館において中学生と師範校生によって嘉納治五郎行動館長や武道家等、多くの観衆の前で演武が披露され、軍人、皇族、教育者、行政関係者等にも知られるようになり、社会的認知が進んでいった。沖縄空手を嗜んで本土で仕事についた者や指導のために本土へ渡る唐手家もみられるようになった。

これらの経緯を経て、船越義珍は沖縄県を代表して、唐手を紹介するために上京した。船越は、沖縄で初めて唐手の全体像を明らかにしようとした。唐手の先達や師事した安里安恒や糸洲安恒をはじめとする王府時代を経験した唐手家から聞き取り調査を行ったり、沖縄学の研究者等との交流によって地元の新聞に論文を掲載した。

このような交流の中で研究を進めた船越は、唐手を説明するために、糸洲安興の「唐手十箇条」にみられた「昭林流」「昭霊流」の二派の来流や新たに「首里手」「那覇手」「泊手」「手」「舞方」等の言葉を使って、唐手の歴史や流儀（流派）、種目（型）などについて解説を施した。また、唐手の伝播については、「沖縄固有の武芸」として「舞方」をあげた。

第4章 空手道への志向 ー本土への同化と対抗ー

第4章 空手道への志向 —本土への同化と対抗—

第1節 はじめに

近代沖縄¹において、唐手²（空手道）の型が記録に登場するのは、明治29年の学友会誌『琉球教育』³である。その時代に行われていた「パッサイ」「クウサンクン」「ナイハンチン」の型名が登場する。しかし、型の挙動やその特徴等について詳しく記されてはなく、型がどのような技法の組み合わせによって成り立っていたのか、また、どのような演武法で練習が行われていたのか等詳しいことはわかっていない。

本章では、沖縄空手の創造と展開において、船越義珍が上京後に呼称の変遷と型の体系化をどのように行ったのか、唐手は日本の武道を志向してどのように体系化されていたのかを整理して考察していく。

また、宮城長順は、「剛柔流拳法」⁴、「唐手道概説（琉球拳法沿革概要）」⁵、「法剛柔吞吐—空手雑藁—」⁶の論文を残している。何れも小冊子や講演録であるが、斯界を代

1 明治政府は、琉球国を日本の近代国家のなかに強制的に組み込み、1872年に琉球国を琉球藩とし、1879年には廃藩置県を断行して沖縄県を設置した。この一連の政治過程を「琉球処分」という（沖縄大百科事典(下)、沖縄タイムス社、p. 882-883, 1983年）。そのため沖縄の近代は琉球処分が起点となる。

2 「唐手」は琉球語（首里方言）では「たうて」と読まれ、沖縄県となって、新聞や学友会誌などで、標準語読みの「からて」と読み仮名が振られるようになった。標準語の呼び名や空手道の改称については、唐手から空手道への変容において、日本、琉球・沖縄、中国との関係性から呼称の重要な問題を含んでいるが、稿を改めて論じる。

3 本会々員原国政勝氏の危難，ハワイ州立大学・西塚邦雄編：琉球教育，第1巻，本邦書籍，復刻版，1980年，pp. 153-155。

4 宮城長順：剛柔流拳法，手稿，1932年，7p.。表紙に、「寄贈 世昭和八月廿九日 瀬名波達徳君 長順」とある。

5 宮城長順：唐手道概説（琉球拳法空手道沿革概要），糖華，第2号，大阪糖業倶楽部，1936年，pp. 13-15。

6 宮城長順：法剛柔吞吐—空手雑藁—，月刊文化沖縄，第3巻第6号，月刊文化沖縄社，1942年，pp. 4-7。

表する役職⁷にも就いていたことから、論文の内容の変遷には、沖縄空手の動向をうかがい知ることができる。また、宮城は、1920年代半ば以降、県を代表する斯界の重職にあって、沖縄空手に対する体系化をどのように行ったのかを考察していく。

さらに、空手道と型の改称が単なる呼称の変更ではなく、脱中国文化と沖縄と本土で複線的発展を遂げていった諸相について見ていく。その具体的な動向が1936年に地元の新聞社主催で催された「空手座談会」⁸である。その成果をまとめた仲宗根源和著『空手道大観』の刊行にまとめられた内容から考察していく。

第2節 唐手（空手道）における「型の構成」

第1項 船越義珍による型の体系化

船越によって初めて唐手の専門書として上梓された『琉球拳法唐手』⁹（大正11年、以下本文では『琉球拳法』と記す）、3年後に刊行された『鍊胆護身唐手術』¹⁰（大正14年、以下本文では『唐手術』と記す）、唐手が空手道と改称されて刊行された『空手道教範』¹¹（昭和10年、以下本文では『空手道』と記す）の3冊には、船越が基本型とし

7 沖縄県唐手部長、大日本武徳会沖縄支部常議員の要職を務め、沖縄県体育協会、県師範学校、商業学校、巡査養成所などの武道教師及び唐手講師に就いている。

8 琉球新報社主催の県内の空手道大家と関係者が参加して催された座談会。この後、会の様子は13回にわたって連載された。

9 富名腰義珍：琉球拳法唐手， 武俠社， 1922年， 283p.。内容構成は、グラビア、序、第1章唐手とは何ぞや、第2章唐手の価値、第3章唐手の練習と教授法、第4章唐手の組織、第5章基本及び型、付録からなっている。沖縄県立図書館所蔵の初版を参照。

10 富名腰義珍：鍊胆護身唐手術， 広文堂， 1925年， 304p.。『琉球拳法』と比較して目次が詳細になり、序を含めて訂正、加筆が見られる。また、挿絵がすべて本人を中心とした写真に変わった。内容構成はグラビア、序、第1編唐手とは何ぞや、第2編唐手の組織、第3編唐手の基本及び型、第4編唐手研究余録となっている。沖縄県立公文書館所蔵の初版を参照。

11 富名腰義珍：空手道教範， 大倉広文堂， 1935年， 302p.。内容構成はグラビア、序、第1編総論、第2編空手の組織、第3編型、第4編組手、第5編女子護身術、第6編人体急所、付録となっている。その後、『増補空手道教範』が1941年に広文堂書店から刊行。ハワイ大学所蔵「Hawaii Karate Museum」（http://www.hawaii.edu/asiaref/okinawa/digital_archives/karate_museum.html）の初版を参照。

て集録された15の型が解説されている。ここでは、船越の型の体系化について比較・分析を試みている¹²。

琉球国時代の唐手を継承した船越は、①型をどのようにとらえて体系化して文献に論述していったのか、②これらの諸本ではどのように変遷したのかを考察して、近代における唐手（空手道）の型が時代の要請を反映してどのように創造されていったのかを明らかにすることが目的である。また、これらの課題を明らかにすることは、沖縄空手の型の源流を知る上でも、新たな問題点を明らかにするためにも示唆を得ることができるものとする。

近代沖縄までの唐手には、伝書の類いはこれまで確認されていない。琉球国時代の徒手の武芸、唐手は、近代沖縄においてどのように変容したのか、地域の人々の間で普及した唐手にもどのような影響を及ぼしていったのか等については文献が乏しいこともあり、研究は十分に進んでいないのが実状であろう。

船越は、『琉球拳法』によって、初めて唐手の型の詳細を論述する手法を生み出したといえよう。以降、実技としての型は挙動に対して挿絵・図(写真)を用いて解説されるようになった。

船越は、1868（明治元）年の生まれである。自らの唐手の継承について「豊見城親方は崎山の教えを承けた大家であり、安里（安恒）は松村（宗棍）の流れを汲んだ名人であり、糸洲（安恒）は城間の後を継いだ達人であった。そして安里・糸洲の両先生は著者が多年薫陶を受けた恩師である」¹³（括弧内は筆者が挿入）と記している。いわゆる「首里手」の松村宗棍の弟子の安里と糸洲に師事した船越は、円熟期の54歳の時に上京、そのまま在京して唐手（空手道）の普及に尽力した。船越は、琉球国が解体された「琉球処分」を少年期に体験し、学校教育への唐手導入時に体育の体操教師と唐手の指導者

12 本節は、嘉手苺徹：近代における空手道（唐手）の型の創造に関する一考察－富名腰義珍の著作における「型の構成」を手がかりにして－，武道学研究，第49巻第2号，日本武道学会，2016年．に修正加筆を行った。

13 富名腰前掲書11，p. 10。

として中心的な役割を担った屋部憲通や花城長茂と同世代である¹⁴。3冊の刊行本には、琉球国時代の唐手と近代沖縄の唐手（空手道）に関することが混在して著されている。

『琉球拳法』と『唐手術』では、「唐手」「型」「手」は、同一の語意として扱われている¹⁵¹⁶。また、唐手は型のことを意味し、手は「沖縄元来の手」¹⁷¹⁸と説いている。しかし『空手道』になると、唐手と型の改称が行われた¹⁹。型は技を練るものと位置づけられ、空手道の理念、沿革、型の目的、技法の解釈、稽古法及び教授法等の研究を進めて体系化し、見手の存在を意識した演武法が工夫され、空手道の流儀を特徴づけるものとして確立されていった²⁰。

第2項 「型の構成」の仕組み

船越は、『琉球拳法』『唐手術』『空手道』において、まず型を複数の技が集約された一連のまとまりとしてとらえている。このことについて本研究では、船越が体系化を図った型の全体像を「型の構成」として論じている（図-14）。

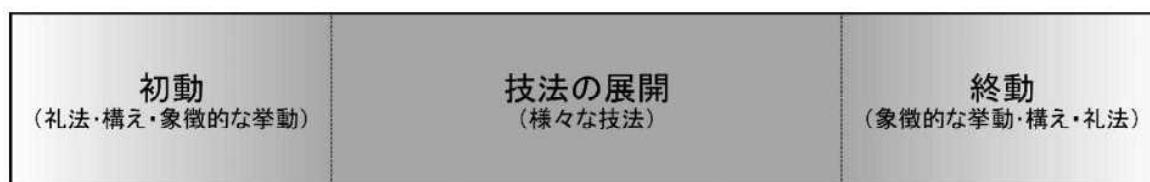


図-14 型の構成 （作成：嘉手苅徹）

14 屋部憲通(1866～1937)と花城長茂(1869～1945)は、ともに沖縄の最初の軍人として、陸軍教導団に志願兵として入隊。日清・日露戦争に従軍した。また、屋部は沖縄県師範学校と沖縄県立中学校（後の県立第一中学校）、花城は沖縄県尋常中学校（後の県立第一中学校）の体操教師として赴任した。両者とも唐手が学校教育へ導入された明治30年ごろから昭和期まで中心的役割を担い、それぞれ指導に関わっていった。

15 富名腰前掲書9, pp. 1-7。

16 富名腰前掲書10, pp. 2-7。

17 富名腰前掲書9, pp. 3。

18 富名腰前掲書10, p. 4。

19 富名腰前掲書11, pp. 1-3。

20 富名腰前掲書11, pp. 10-11。

このように見ると、船越が取り上げた15の型はいずれも始まりの挙動があり、複数の技が展開され、終末の挙動によって終了する。つまり型の構成は、始まりの挙動としての「初動」、複数の技が展開される「技法の展開」、終末の挙動としての「終動」の3つの局面によって成り立っている。

型の構成で中核となるのは、複数の武技が集約された技法の展開の部分である。船越は、「唐手の価値」を『琉球拳法』と『唐手術』では、「体育」「護身術」「精神修養」「唐手の栄誉」²¹²²の4つの側面、『空手道』では「体育」「護身術」「精神修養」²³の3つの側面から説いていった。しかしその土台にあるのは、実技としての唐手である。型の練習を通して、唐手の価値は成り立っているといえよう。

型の初動と終動に含まれる「礼法」「構え」「象徴的な挙動」は、次第に様式を整えて体系化されていった。その変容を考察することによって、問題に迫っていくことができるものと考えられる。ここでの礼法は後段で詳述するが、近代日本において導入された体操の様式と、日本式の礼法が型の構成の一部として取り入れられていった。

初動と終動の構えは、「用意の姿勢」や「元の姿勢」（終わりの構え）のことをいう。技法の展開は、武技がつなぎ合わさった型の中心部分である。象徴的な挙動とは、構えか武技なのかが曖昧な挙動として位置づけることができよう。

一つの型全体を鳥瞰的にとらえ、型の構成の初動、終動に着目して唐手（空手道）の型を考察した研究は、筆者の調べた範囲では、これまでほとんどなかったものと考えられる。

『琉球拳法唐手』の画期性

船越は「現今流行の手」²⁴として31種の型名を挙げ、15種を「基本及び型」²⁵として主な挙動に挿絵と解説を施している。型は、「多少型を異にして二種になったものもある」²⁶とも述べている。指導者の型の解釈によって、技法がわずかに異なって

21 富名腰前掲書9, pp. 9-14。

22 富名腰前掲書10, pp. 8-13。

23 富名腰前掲書11, pp. 14-18

24 富名腰前掲書9, pp. 6-7。

25 富名腰前掲書9, p. 61。

26 富名腰前掲書9, p. 7。

も別種の型として扱われることがあると解している。また、「何人にも直ぐ解るように全部挿絵をもって動作の変化を示した」²⁷とある。動作の変化を示すとは、一つの型の連結した挙動を適宜区切っているのであり、これに解説を施している。型の構成については(表-6)に示した。挙げられた順序に沿って、型名、挙動数、演武時間、型の構成として初動、技法の展開、終動を一覧表にしている。その主な特徴は次の通りである。

ピンアン初段から五段、ナイハンチ二段・三段、セーシャン、パッサイ大、チントウの10種の型は、始めに一礼することが示されている。初動が明記された型は礼法の後に構えを行っており、すべての型に当てはまる。

初動の構えは6種あり、次のとおりである。(1)平安(ピンアン)初段の構え。「用意の姿勢は八字立ちにて直立す、爪先の間はおよそ一尺五寸、手を握りながら左より一、二と開く」²⁸とある。この構えはピンアン初段から五段、公相君、ナイハンチ二段・三段、セーシャン、パッサイ大、チントウの10種がある。セーシャン、パッサイ大、チントウについては、閉足姿勢に立って一礼するとある。ピンアン初段とナイハンチ初段は、団体練習の場合に一礼を行うとある²⁹³⁰。(2)ナイハンチ初段の構え。「用意の姿勢は図の如く、武器は何も持ちませんぞといふ意を表示している」³¹とある。(3)公相君の構え。「用意には八字立ちとなる(足先の広さ約一尺四五寸)。開き方は手を組むと同時に左より

27 富名腰前掲書9, p. 61。

28 富名腰前掲書9, p. 63。

29 同上書。

30 富名腰前掲書9, p. 93。

31 富名腰前掲書9, p. 93。

| 型番 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 |
|--------------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 型名 | ビゾン 初段 | ナイフチ 初段 | 公相居 | ビゾン 二段 | ビゾン 三段 | ビゾン 四段 | ビゾン 五段 | ナイフチ 二段 | ナイフチ 三段 | セーヤン | ハツヤイ(大) | ワシユウ | チンロウ | ジツチ | ジヤン |
| 型数 | 26拳動 | 32拳動 | 60拳動 | 21拳動 | 24拳動 | 27拳動 | 23拳動 | 26拳動 | 36拳動 | 41拳動 | 43拳動 | 40拳動 | 44拳動 | 24拳動 | 47拳動 |
| 演武 時間 | 約2分間 | 約2分間 | 約2分間 | 約2分間 | 約2分間 | 約2分間 | 約2分間 | 約2分間 | 約2分間 | 約2分間 | 約2分間 | 約2分間 | 約2分間 | 約2分間 | 約2分間 |
| 立礼 (団体練習) | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 立礼 | 立礼 | — | 立礼 | — | — |
| 初動 | 「用意の姿勢は八 字立ちにて直立す 爪先の間は尺そ一 尺五寸、手を握りな ら五寸より一、二と 握り、(団体練習の場 合はビゾンと同じ 場合は大開脚に開く 令にて閉足姿勢と なり、一礼の兼行脚 にて右の動作に移 る)」 | 「用意の姿勢は固 どなる(足先の爪先 約一尺四寸半)開 き、手を握り、(団 体練習の場)は尺 約一尺五寸、二と 握り、(団体練習の場 合はビゾンと同じ 場合は大開脚に開く 令にて閉足姿勢と なり、一礼の兼行脚 にて右の動作に移 る)」 | 「用意の姿勢は八 字立ちにて直立す 爪先の間は尺そ一 尺五寸、手を握りな ら五寸より一、二と 握り、(団体練習の場 合はビゾンと同じ 場合は大開脚に開く 令にて閉足姿勢と なり、一礼の兼行脚 にて右の動作に移 る)」 | 「用意の姿勢は八 字立ちにて直立す 爪先の間は尺そ一 尺五寸、手を握りな ら五寸より一、二と 握り、(団体練習の場 合はビゾンと同じ 場合は大開脚に開く 令にて閉足姿勢と なり、一礼の兼行脚 にて右の動作に移 る)」 | 「用意の姿勢は八 字立ちにて直立す 爪先の間は尺そ一 尺五寸、手を握りな ら五寸より一、二と 握り、(団体練習の場 合はビゾンと同じ 場合は大開脚に開く 令にて閉足姿勢と なり、一礼の兼行脚 にて右の動作に移 る)」 | 「用意の姿勢は八 字立ちにて直立す 爪先の間は尺そ一 尺五寸、手を握りな ら五寸より一、二と 握り、(団体練習の場 合はビゾンと同じ 場合は大開脚に開く 令にて閉足姿勢と なり、一礼の兼行脚 にて右の動作に移 る)」 | 「用意の姿勢は八 字立ちにて直立す 爪先の間は尺そ一 尺五寸、手を握りな ら五寸より一、二と 握り、(団体練習の場 合はビゾンと同じ 場合は大開脚に開く 令にて閉足姿勢と なり、一礼の兼行脚 にて右の動作に移 る)」 | 「用意の姿勢は八 字立ちにて直立す 爪先の間は尺そ一 尺五寸、手を握りな ら五寸より一、二と 握り、(団体練習の場 合はビゾンと同じ 場合は大開脚に開く 令にて閉足姿勢と なり、一礼の兼行脚 にて右の動作に移 る)」 | 「用意の姿勢は八 字立ちにて直立す 爪先の間は尺そ一 尺五寸、手を握りな ら五寸より一、二と 握り、(団体練習の場 合はビゾンと同じ 場合は大開脚に開く 令にて閉足姿勢と なり、一礼の兼行脚 にて右の動作に移 る)」 | 「用意の姿勢は八 字立ちにて直立す 爪先の間は尺そ一 尺五寸、手を握りな ら五寸より一、二と 握り、(団体練習の場 合はビゾンと同じ 場合は大開脚に開く 令にて閉足姿勢と なり、一礼の兼行脚 にて右の動作に移 る)」 | 「用意の姿勢は八 字立ちにて直立す 爪先の間は尺そ一 尺五寸、手を握りな ら五寸より一、二と 握り、(団体練習の場 合はビゾンと同じ 場合は大開脚に開く 令にて閉足姿勢と なり、一礼の兼行脚 にて右の動作に移 る)」 | 「用意の姿勢は八 字立ちにて直立す 爪先の間は尺そ一 尺五寸、手を握りな ら五寸より一、二と 握り、(団体練習の場 合はビゾンと同じ 場合は大開脚に開く 令にて閉足姿勢と なり、一礼の兼行脚 にて右の動作に移 る)」 | 「用意の姿勢は八 字立ちにて直立す 爪先の間は尺そ一 尺五寸、手を握りな ら五寸より一、二と 握り、(団体練習の場 合はビゾンと同じ 場合は大開脚に開く 令にて閉足姿勢と なり、一礼の兼行脚 にて右の動作に移 る)」 | 「用意の姿勢は八 字立ちにて直立す 爪先の間は尺そ一 尺五寸、手を握りな ら五寸より一、二と 握り、(団体練習の場 合はビゾンと同じ 場合は大開脚に開く 令にて閉足姿勢と なり、一礼の兼行脚 にて右の動作に移 る)」 | 「用意の姿勢は八 字立ちにて直立す 爪先の間は尺そ一 尺五寸、手を握りな ら五寸より一、二と 握り、(団体練習の場 合はビゾンと同じ 場合は大開脚に開く 令にて閉足姿勢と なり、一礼の兼行脚 にて右の動作に移 る)」 |
| 終動 | 「(団体練習の場合 は直前で元の姿勢 に戻し、一礼の後 解散)」 | 「(団体練習の場合 は直前で元の姿勢 に戻し、一礼の後 解散)」 | 「(団体練習の場合 は直前で元の姿勢 に戻し、一礼の後 解散)」 | 「(団体練習の場合 は直前で元の姿勢 に戻し、一礼の後 解散)」 | 「(団体練習の場合 は直前で元の姿勢 に戻し、一礼の後 解散)」 | 「(団体練習の場合 は直前で元の姿勢 に戻し、一礼の後 解散)」 | 「(団体練習の場合 は直前で元の姿勢 に戻し、一礼の後 解散)」 | 「(団体練習の場合 は直前で元の姿勢 に戻し、一礼の後 解散)」 | 「(団体練習の場合 は直前で元の姿勢 に戻し、一礼の後 解散)」 | 「(団体練習の場合 は直前で元の姿勢 に戻し、一礼の後 解散)」 | 「(団体練習の場合 は直前で元の姿勢 に戻し、一礼の後 解散)」 | 「(団体練習の場合 は直前で元の姿勢 に戻し、一礼の後 解散)」 | 「(団体練習の場合 は直前で元の姿勢 に戻し、一礼の後 解散)」 | 「(団体練習の場合 は直前で元の姿勢 に戻し、一礼の後 解散)」 | 「(団体練習の場合 は直前で元の姿勢 に戻し、一礼の後 解散)」 |

型の構成

技法の展開

表一六 『琉球拳法唐手』の型の構成

(出典 富名腰義珍：琉球拳法唐手，武俠社，1922年。より嘉手苺徹作成)

一、二と開く」³²とある。(4)パッサイ大の構え。「閉足姿勢にて立ち一礼、用意にて八字立の開脚姿勢となる」³³とあり、「図は右手を握り左掌に包むが如き心持」³⁴とある。(5)ワンシュウの構え。「用意、閉足姿勢、左手は五指を伸ばし指先を前に向け、右拳を掌に当て正面を見る」³⁵とある。(6)ジッテの構え。「用意にて閉足姿勢、右拳を左掌で包み胸前に取る」³⁶とある。同様にジオンも「用意にて右拳を左掌で包み胸前にとる」³⁷とある。

ただし、パッサイ大、ワンシュウ、ジッテ（・ジオン）については、手の位置や方向に違いはあるものの、右拳を左掌で囲む構えは同種ととらえることができ、4種の型は同じ特徴をもつと分類される。

終動の構えは4種類あって、次のとおりである。(1)ピンアン初段の構え。これは初動の構えに戻る。初動の構えに戻る型は、ピンアン初段から五段、ナイハンチ二段・三段、セーション、チントウの9種がある。(2)ナイハンチ初段の構え。「両手を下ろし、しばらく右を見つめてから顔を正面に復す」³⁸とある。(3)ワンシュウの構え。初動の構えに戻る。(4)ジッテの構え。「止め。右足を軸として二分の一を回転し元の姿勢に復す」³⁹とあり、初動の構えに戻る。パッサイ大、チントウ、ジオンの終動の構えには、挿絵と解説がない。

初動と終動の構えには、元に戻る型と異なる構えで終わる型がある。元に戻る型は、ピンアン初段から五段、公相君、ナイハンチ二段・三段、ワンシュウ、ジッテの10種であり解説がない。異なるのはナイハンチ初段と公相君の2種である。

型の構えは、取るべき姿勢や身体各部の位置、挙動の仕方について解説されている。型の構成の中では初動と終動に含まれ、礼法と技法の展開の間にあって、象徴的な挙動としてとらえられる。しかし、ナイハンチ初段の「用意の姿勢は図の如く、武器は何も

32 富名腰前掲書 9, p. 135。

33 富名腰前掲書 9, p. 242。

34 同上書。

35 富名腰前掲書 9, p. 248。

36 富名腰前掲書 9, p. 261。

37 富名腰前掲書 9, p. 266。

38 富名腰前掲書 9, p. 132。

39 富名腰前掲書 9, p. 265。

持ちませんぞといふ意を表示している」⁴⁰とあり、武技としての心構え的な意味づけとなっている。

また、初動と終動の構えには右拳を左掌で包んだり、右拳を左掌に当てるものがある。パッサイ大の初動の構えは、「右手を握り左掌に包むが如き心持ち」⁴¹と解説し、手甲は下に向けられている。ワンシュウは「右拳を掌に当て正面を見る」⁴²とある。ジッテとジオンは「右拳を左掌で包み胸前に取る」⁴³とある。これらは右拳を左掌で包んだり、添え当てる挙動であり、体の前面の据え置く位置はパッサイ大が金的の前、ワンシュウが鳩尾（みぞおち）の前、ジッテとジオンが胸前である。初動の構えでも指摘したように、同種の挙動が位置的に変化した構えとみることができる。これは、南方の門派（流派）に多いとされる抱拳礼式に酷似した挙動ととらえられる⁴⁴。中国拳法では練習や型の開始の際に、開門式や閉門式が門派を特徴づけるものとしてある⁴⁵。唐手について、明治期から大正期にかけてこれらの挙動について解説された文献は管見の限り見あたらない。

ピンアンの初動では、「団体練習の場合は大間隔に展開し、気をつけの号令にて閉足姿勢となり、一礼の後用意にて右の動作に移る」⁴⁶とある。指導者や見手を前提として、団体練習の仕方として号令と礼法があり、終動にも礼法の解説がある。他にナイハンチ初段・二段と公相君にも終動に礼法と団体練習の解説がある。

『鍊胆護身唐手術』への発展

『唐手術』の刊行は、船越がはしがきで述べているように、『琉球拳法』の「再版着手中にあの大震災に遭遇し、勢いそのままに放置してきた。しかしその後、各地の有志より頻々として要求があるので、ここに訂正増補し、かつ挿絵の全部を写真版とし、全

40 富名腰前掲書9, p. 93。

41 富名腰前掲書9, p. 242。

42 富名腰前掲書9, p. 248。

43 富名腰前掲書9, p. 261。

44 松田隆智：中国武術，新人物往来者，1972年，pp. 73-74。

45 松田前掲書44, pp. 71-75。

46 富名腰前掲書9, p. 63。

本書では「現今流行の手」⁴⁸として「三進」⁴⁹（三戦）が加わり、32種の型名を挙げている。船越の選択した15種の型は同じである。本書の型の構成について（表-7）に示した。その主な特徴は次のとおりである。

(1) パッサイ大がパッサイとなった。(2) ワンシュウの初動の構えが「用意閉足姿勢で、左手は五指を伸ばし指先を前に向け、右拳を掌に当て正面を見る」⁵⁰となっているが、両手の位置が体側に変化したにもかかわらず、解説には反映されていない。(3) ナイハンチ初段の終動の構えが、他のピンアンの終動の構えと同じになった。(4) 公相君の終動の構えが、ピンアンの終動の構えと同じになった。(5) パッサイ、チントウの終動の構えの解説に「止め、直れ、元の姿勢に復す」⁵¹⁵²とある。そのため初動の構えは前著と同じ6種で終動の構えは5種、終動の構えが元に戻る型は12種である。

本書ではパッサイの呼称の記述の仕方、ナイハンチ、公相君の終動の構えの変更、パッサイ、チントウの終動の解説に加筆があった他は、礼法、団体練習、右拳を左掌で包む構えに関する特徴は『琉球拳法』と同じである。

『空手道教範』の到達点

『唐手術』から『空手道』が刊行されるまで10年を経ている。船越は刊行の目的について、「一昨年来、寸暇を割いて、多年の懸案となっていた小著の改訂に着手したが、13年間における研究と体験とによって改められた技や呼称も多く、かつ前著がいかにも不備と思われるので、断然稿をあらためて執筆し、約1年余の歳月を費やしてここにこの書を公にする次第である」⁵³と記している。また『空手』の何たるかを解せぬ人々にも、独習し得る様にと心掛けて、きわめて平易・懇切を旨とし、総論・組織・基本型・組手・女子護身術・人体急所解説と綱目を分けて図示解説したから、初学者のための空手の独習書としてはほとんど完璧に近いものとの自信を持っている」⁵⁴と、十余年間の空手道研究を集大成して初心者用の空手独習書として完璧なものに仕上がったと自負し

48 富名腰前掲書10, pp. 6-7。

49 同上書。

50 富名腰前掲書10, p. 248。

51 富名腰前掲書10, p. 247。

52 富名腰前掲書10, p. 263。

53 富名腰前掲書11, p. 2。

54 同上書。

ている。

本書では先に述べように、唐手の呼称と型名が改称されている。唐手の呼称については「唐と空」⁵⁵の見出しを立て、次のように理由を述べている。「空手は沖縄固有の武術である。従来は『唐手』の字を用いていた為に、動もすると支那拳法と混同され勝ちであったが、沖縄に培われること一千年、其の間幾多の名人によって研究され、幾多の達人によって琢磨され、遂に今日の如き渾然たる一大武術となるまでに発達したのであるから、立派な沖縄固有の武術というべきであろう」⁵⁶として、沖縄固有の武術が多くの琉球・沖縄の名人、達人らによって研究が積み重ねられ、一大武術に発達したことを称えている。また「著者も旧慣に従って従来は『唐手』の字を用いて来たが、支那拳法と同一視される事があり、沖縄の武術『から手』と言わんよりも、既に日本の武術『から手』となっている今日、『唐手』の字を当てる事は甚だ不見識、且つ、不適當と思われるので、世と推し移ると言う意味を以て、今後は『唐』字を廃して『空』字に改める事にした」⁵⁷としている。沖縄固有の武術が一大武術となり、日本の武術空手となったことを理由に唐手から空手への改称を行い、次章の「術より道へ」⁵⁸で「心と技と内外兼ね備って始めて完全なる『空手道』と言える」⁵⁹として、「道」の理念を備えることが重要であるとして空手道こそが「真の空手」⁶⁰と説いている。

また、基本型として挙げた15種の型の改称について、「立派にわが国の『空手』になり切っているものに、強いて支那風の不可解な呼称を襲用したくないので、不適當と思われるものは、或いは古老の形容を斟酌し、或いは著者の卑見をもって改称」⁶¹し、日本独自の呼称に改称したとしている。

本書では基本型として位置づけた15種だけを取り上げている⁶²。これらの型の構成については(表-8)に示した。

55 富名腰前掲書11, pp. 2-3。

56 富名腰前掲書11, p. 2。

57 富名腰前掲書11, pp. 2-3。

58 富名腰前掲書11, pp. 3-8。

59 富名腰前掲書11, p. 6。

60 富名腰前掲書11, pp. 6-8。

61 富名腰前掲書11, p. 33。

62 富名腰前掲書11, pp. 10-11。

第1番目の基本型に挙げられた平安初段（船越は、以前まではピンアン二段としていた。以下、括弧内の型名は旧称）に、「型の前後には必ず礼を行う。礼の方式は、場の中央よりしばしば下手に、演武しようとする型の演武線によって適當の位置を定め、閉足立ちにて、両手は自然に垂れて軽く腿に接するくらいに置き、上体を少しく前に屈して（屈しすぎるのは不可）第16図の如く礼をする」⁶³とある。礼法が詳しく説明され、すべての初動と終動に決められた礼法を行うことが明示されている。観空（公相君）では、「あたかも小笠原流の礼をするときの手の組方に似ている」⁶⁴とある。日本古来の歴史の古い弓馬礼法の家門に例を取っている⁶⁵。

本書では基本型の掲載順序の変更、初動及びの終動の構えの挙動や解説において改訂がみられる。

基本型と教授上の順序は、平安（ピンアン）、抜塞（バツサイ）、観空（公相君）、燕飛（ワンシュウ）、岩鶴（チントウ）、十手（ジッテ）、半月（セーション）、騎馬立（ナイハンチ）、慈恩（ジオン）となった⁶⁶。平安は初段と二段が入れ替わった。「型の難易と教授上の順序」⁶⁷から改めたと理由を記している。

初動の構えは、『鍊胆護身』と同じ6種あり挙動は同じである。改訂されたのは、次の解説である。(1)平安初段は、「礼を終わったら、左右の拳を握りながら、左足から先に、次に右足を開き、左右爪先の間隔が約一尺五寸くらいになる」⁶⁸とし、最初の号令は、「普通教授者が掛けるが、時には自分自身でかけるもよい」⁶⁹と、挙動の仕方が細かく規定され、号令は団体練習と個人練習が想定されている。五段までの構えの挙動は同じだが、平安三段では、「両拳を自然に垂れて腿の前に置く」⁷⁰と説明を加えている。(2)抜塞初段は、「左掌は右拳をつかまずに軽く曲げておく。金的を護るが如き心持ち」⁷¹となった。(3)観空（公相君）は、「両肘を伸ばし、両手を金的の前に斜めに重

63 富名腰前掲書11, p. 43。

64 富名腰前掲書11, p. 95。

65 二木謙一・入江康平・加藤寛共編：日本史小百科，東京堂出版，1994年，pp. 33-34。

66 富名腰前掲書11, pp. 33-35。

67 富名腰前掲書11, p. 34。

68 富名腰前掲書11, pp. 43-44。

69 富名腰前掲書11, p. 44。

70 富名腰前掲書11, p. 64。

71 富名腰前掲書11, p. 84。

ねる（四指を揃えて伸ばし、拇指は少し離して伸ばし、四指の先と、拇指の先とを右を上重ねる）手甲外向。あたかも小笠原流の礼をするときの手の組み方に似ている」⁷²となった。(4)騎馬立初段は、「閉足立にて左右の掌を開いて、左を上、金的を護るが如き位置に重ねる」⁷³「両掌を開いたのは、武器を持たぬことを表示して居る。また金的を守る意味にて両掌は体から少し離れた方がよい」⁷⁴と武技的な構えの解説を記している。(5)騎馬立二段・三段、半月、岩鶴は、八字立ちで、両拳を腿の前に自然に垂れる平安初段の初動の構えと同じである。

終動の構えで観空（公相君）は、「右足を軸として右回りに、左足を左第一線上に移しながら、上体を屈して右拳(甲下)にて下段を内より払う如く回しながら、左足の地に着く時、両拳は腿の前に自然に垂れる。平安初段の用意の姿勢に同じ」⁷⁵と、平安初段の終動の構えに変更された。また、鉄騎立初段が「直れの号令とともに、左足は動かさず右足を引いて先ずユックリと手足を元の用意の姿勢に復し、次いで顔も静かに正面を向く」⁷⁶とあり、初動の構えに戻るので、終動の構えも5種となった。そのため、観空以外は、終動の構えは初動に戻るとなった。

また、初動の構えで、拔塞初段の「金的を護るが如き心持ち」⁷⁷や、騎馬立初段の「金的を護るが如き位置に重ね」⁷⁸、「金的を守る意味にて両掌は体から少し離れた方がよい」⁷⁹等は、初動の構えが武技として転化したといえよう。

さらに、拔塞碎初段は、「閉足姿勢にて左掌の上に右拳を置く。左掌は右拳を掴まずに軽く曲げておく」⁸⁰とある。十手では、「閉足立にて、右拳に左掌を軽くかぶせ、額の前七八寸の所に構える。(注)脇下をひろく、やや肘を張る」⁸¹とあり、汪輯では、「閉

72 富名腰前掲書11, p. 94。

73 富名腰前掲書11, p. 106。

74 同上書。

75 富名腰前掲書11, pp. 105-106。

76 富名腰前掲書11, p. 125。

77 富名腰前掲書11, p. 84。

78 富名腰前掲書11, p. 106。

79 同上書。

80 富名腰前掲書11, p. 84。

81 富名腰前掲書11, p. 147。

足立で、左掌（甲左）を腰に、右拳（甲前）を左掌に当てる」⁸²と、『鍊胆護身』にはなかった両手の位置が具体的に示されている。慈恩は、「十手の用意の姿勢と同様で、閉足姿勢にて右拳を左掌で包むが如く当て、胸前にとる。高さは目より見下ろすくらい」⁸³となっている。これらは、構えや曖昧な象徴的な挙動に対して、独自の意味づけがなされていったものとみることができる。

終動の構えは5種ある。観空が「平安初段の用意の姿勢に同じ」⁸⁴と改訂された以外は、終動の構えは、すべて元の姿勢に戻るとなった。しかし、挙動の仕方は新たな説明が施されている。

たとえば、平安初段の終動の構えは、「直れの動作はユックリと落ち着いて行う」⁸⁵とあるように、挙動の速さと心構えが示されている。これは同二段に、「左足を引いてユックリと元の用意の姿勢に復する」、同三段に、「両拳を静かに腿の前に下ろして」、同五段に、「左右の拳もユックリと引いて」とあるように演武法としての意味づけといえるのではないか。このような説明は、抜塞初段、騎馬立初段、同二段、同三段、半月、十手、燕飛等にもみられる。本書では、練習上の3要諦として「力の強弱」「対の伸縮」「技の緩急」をあげている。この3要諦を会得するには、「まずその型の特徴、及びその手のその手の意味を正しく理解しなければできないものではない。言い換えれば、この三要諦が呑み込めて、しかる後に始めて型を正しく使い得るということになる」⁸⁶と記している。

本書において、礼法が型の演武の中で明確に位置づけられ、構えや象徴的な挙動には、新たな意味づけを施し、空手道の型の創造が明確に示され体系化されていったといえよう。

第3項 型の構成の変容

これまで船越の3冊の著作によって、型の構成に着目して主な特徴を比較・分析した。型の構成の考察にあたり、船越は型の伝播と伝承者及び継承者についてどのように論じ

82 富名腰前掲書11, p. 155。

83 富名腰前掲書11, p. 176。

84 富名腰前掲書11, pp. 105-106。

85 富名腰前掲書11, p. 57。

86 富名腰前掲書11, pp. 39-40。

てきたのか。(表-9)では、船越が「現今流行の手」、「基本型」として3冊の単行本で取り上げた型を体系化するにあたり整理したものである。

これまでみてきたように、「現今沖縄で流行の手」⁸⁷⁸⁸として『琉球拳法』では31種、『唐手術』では32種の型名をあげている。その中から15種の型を取り上げきたが、『空手道』では、唐手の呼称と型名の改称を行うとともに、「手」の呼称を「沖縄手」と記すようになり、自らが基本型として取り上げてきた15種だけを掲載している。これは、

| | 『琉球拳法唐手』(1922) | 『鍊胆護身唐手術』(1925) | 『空手道教範』(1935) |
|----|----------------------|--------------------|----------------------|
| 1 | ○ ピンアン初段・平安初段(昭林流) | ピンアン初段・平安初段(少林流) | 1 平安[ピンアン]初段(少林流) |
| 2 | ○ ピンアン二段(昭林流) | ピンアン二段(少林流) | 2 平安[ピンアン]二段(少林流) |
| 3 | ○ ピンアン三段(昭林流) | ピンアン三段(少林流) | 3 平安[ピンアン]三段(少林流) |
| 4 | ○ ピンアン四段(昭林流) | ピンアン四段(少林流) | 4 平安[ピンアン]四段(少林流) |
| 5 | ○ ピンアン五段(昭林流) | ピンアン五段(少林流) | 5 平安[ピンアン]五段(少林流) |
| 6 | ○ ナイハンチ初段(昭霊流) | ナイハンチ初段(昭霊流) | 6 抜粋[パッサイ]初段(少林流) |
| 7 | ○ ナイハンチ二段(昭霊流) | ナイハンチ二段(昭霊流) | 7 観空[公相君](少林流) |
| 8 | ○ ナイハンチ三段(昭霊流) | ナイハンチ三段(昭霊流) | 8 鉄騎立[ナイハンチ]初段(昭霊流) |
| 9 | ○ パッサイ大(昭林流) | パッサイ大(少林流) | 9 鉄騎立[ナイハンチ]二段(昭霊流) |
| 10 | - パッサイ小 | パッサイ小 | 10 鉄騎立[ナイハンチ]三段(昭霊流) |
| 11 | ○ 公相君〈くうしゃんくう〉大(昭林流) | 公相君〈くうしゃんくう〉大(少林流) | 11 半月[セーション](昭霊流) |
| 12 | - 公相君〈くうしゃんくう〉小(昭林流) | 公相君〈くうしゃんくう〉小(少林流) | 12 十手[ジッテ](昭霊流) |
| 13 | - 五十四歩(ほ) | 五十四歩(ほ) | 13 燕飛[ワンシュウ](少林流) |
| 14 | ○ セーション(昭霊流) | セーション(昭霊流) | 14 岩鶴[チントウ](少林流) |
| 15 | ○ チントウ(昭霊流) | チントウ(少林流) | 15 慈恩[ジオン](昭霊流) |
| 16 | チンテー | チンテー | |
| 17 | - ジーン | ジーン | |
| 18 | ○ ジッテ(昭霊流) | ジッテ(少林流) | |
| 19 | ○ ジオン(昭霊流) | ジオン(昭霊流) | |
| 20 | ○ ワンシュウ・汪輯(昭霊流) | ワンシュウ・汪輯(昭霊流) | |
| 21 | - ワンダウ | ワンダウ | |
| 22 | - ローハイ | ローハイ | |
| 23 | ジュウム | ジュウム | |
| 24 | - ワンドウ | ワンドウ | |
| 25 | - ソーチン | ソーチン | |
| 26 | - 二十四 | 二十四 | |
| 27 | - 三十六 | 三十六 | |
| 28 | - 一百零(れい)八 | 一百零(れい)八 | |
| 29 | - ワンクワン | ワンクワン | |
| 30 | - コカン | コカン | |
| 31 | - 雲手(うんしゅ) | 雲手(うんしゅ) | |
| 32 | - | 三進(しん) | |

①この一覧表は、船越の3冊の刊行本であげられた型名を整理したものである。
 ②〈 〉内は呼び名
 ③○印は、船越が『琉球拳法唐手』と『鍊胆護身唐手術』で選択した15種の型である。
 ④『空手道教範』では、基本型の15種に変更はないが、型は改称されている。
 ⑤『空手道教範』の[]内は旧作成：嘉手苅徹

表-9 船越による型名の変遷一覧

『空手道』が刊行された1930年代初頭には剛柔流をはじめとする流派が発生し⁸⁹、それぞれの保有する型が示されるようになったことが要因と考えられる。船越率いる流派は

87 富名腰前掲書9, pp.6-7。

88 富名腰前掲書10, pp.6-7。

89 宮城前掲書4, 7p.。

松濤館流として確立されていった⁹⁰。また関東、関西を中心に本土での普及が進み、沖縄の空手と日本の武道として確立しつつある空手道の区別が必要となったためではないかと推測される。ここでいう手は、日本語としての武術や武技の技法として解される⁹¹。

糸洲安恒は、いわゆる「唐手十箇条」⁹²で、「唐手は儒仏道より出で候ものにあらず。往古、昭林流、昭霊流という2派、支那より伝来したるものにして、両派各々長ずる所あり。そのまま保存して潤色を加えべからざるを要とす」⁹³として、①唐手が儒教、仏教、道教から発生したものでないこと、②昭霊流、昭林流という2流派が中国より伝播したこと、③2派にはそれぞれ特長があり、そのまま変更を加えることなく伝えていくべきことを説いている。船越は、15の型を師事した糸洲や安里安恒の説いた昭霊流と昭林流（『唐手術』『空手道』では少林流）に分類した。

船越は「唐手は武芸の骨髓なり」⁹⁴以降、昭霊流と昭林流について「前は、体に重きを置き、後は、術に重きを置く流派」⁹⁵であると説いている。それを伝えたのは来琉した武官「ワイシンサン」と「イワー」で、昭霊流のワイシンサンは「身体肥満の荒武者」であり、イワーは「背がすらりとした機敏闊達な男」⁹⁶としている。「那覇は、昭霊流の流れを汲み、首里は、昭林流を踏む。泊はその二者を折衷したいわゆる中間の手にして一流をなせり」⁹⁷としている。中国武官の身体的特徴と武技との関連、さらに、世間でいわれる「首里手」「那覇手」「泊手」⁹⁸の3つの流儀と2派との関係も論じている。3つの流儀は、中国から伝播した昭霊流と昭林流の2派に収斂するものであって、世間で言われるところの3つの流儀には、船越は否定的な見解を示している。また、「その他神手とか田舎の舞方等あれども神手は津堅手にして舞方は沖縄固有のものなり」と口碑

90 高宮城繁・新里勝彦・仲本政博編著：沖縄空手古武道事典，柏書房，2008年，pp. 172-175。

91 嘉手苧徹：「手」から「唐手」へ，島村幸一編：琉球 交差する歴史と文化，勉誠出版，pp. 360-362，2014年。

92 仲宗根源和：空手道大観，東京図書，1938年，pp. 62-64。

93 仲宗根前掲書92，p. 62。

94 松濤：唐手は武芸の骨髓なり，琉球新報，1913年1月9日。

95 同上書。

96 同上書。

97 同上書。

98 同上書。

に伝う」⁹⁹とも記して、「舞方」「神手」「津堅手」¹⁰⁰の呼称も口碑として伝わっていると述べている。

「沖縄の武技」¹⁰¹では、「現今我が沖縄で中等学校の生徒等がやるのを見ると那覇で稽古したのは多く昭霊流で、首里で稽古したのは多く昭林流である。何が故にかくのごとき傾向を来たしたかというに、那覇は主に体力に注意し、首里は主に術に偏したからであらう。法にはいずれも皆よりどころがあるからあれが良い、これが悪いということとはできない。そこで一言注意せねばならぬことは被教育者の体力と気質とを見て施すことである」¹⁰²と論じている。すでに学校で唐手を習っている中学生は、那覇で稽古した者の多くは昭霊流であり、首里で稽古をした者の多くは昭林流であるといい、指導者は、2派の一長一短を十分考慮して学生の体力と気質を見て指導を行うべきだと注意を促している。

船越は、15の型を昭霊流と昭（少）林流に分類している。3つを比較すると、型の分類の入れ替えがみられるもののほぼ同じである。この分類法と2派の特長は、『空手道』が刊行された後に、摩文仁賢和と仲宗根源和¹⁰³、宮城長順¹⁰⁴によって分類法の内容の異同や実状にそぐわないとの趣旨で批判される。しかし、船越は、亡くなる前年に刊行した自叙伝『空手道一路』¹⁰⁵まで、一貫してこの分類法と2派の特徴を説き続けている。

第4項 中国拳法書「武備誌」とその影響

それでは、船越が型の体系化するにあたり、中国拳法の型（套路）は唐手（空手道）にどのような影響を及ぼしたのか。ここでは、沖縄に古くから伝わる中国拳法の史料を

99 同上書。

100 同上書。

101 安里安恒談（松涛）（1）（2）（3）：琉球新報，（1）は1914年1月17日，（2）は18日，（3）は19日。

102 安里前掲書101，（2）。

103 摩文仁賢和・仲宗根源和：攻防拳法空手道入門，空手研究社興武館，1935年，pp. 70-73。

104 宮城前掲書5，pp. 13-15。

105 船越義珍：空手道一路，産業経済新聞社，1956年，pp. 59-61。

もとに考察してみる。

本部朝基は、「琉球拳法唐手は、基本と組手の二つに分かつことができる。基本とは、唐手の基をなすので、俗に型と称え・・・組手は、琉球においては、古来より行われたのであるが、いまだ一定した型というものなく、なお文献にも残っていない・・・組手に対する参考書と称するものも多くは支那の武人が編成したものを書写して武人仲間に珍重がられたもので、琉球独特の組手は実にいまだ編成されていない」¹⁰⁶と述べている。

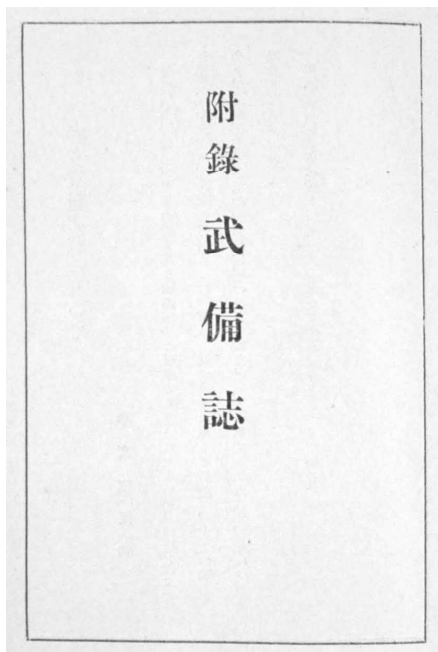


図-15 『十八の研究』に付録として掲載された「武備誌」の書名

(出典：摩文仁賢和，攻防自在空手拳法 十八の研究，唐手研究社興武館，1934年，p. 81. より転載)

当時の唐手家らに、組手の参考書として珍重がられていた中国拳法の組手の書物とは

106 本部朝基：沖縄拳法唐手術 組手編，唐手術普及会，1926年，pp. 11-12。

何か。これらの中には、沖縄に伝わる「武備誌」¹⁰⁷は空手家が含まれていたと考えられる。「武備誌」は、唐手家の間で複数の写本が伝えられた（図-15）。

摩文仁が集録した「武備誌」¹⁰⁸には、「拳足筋骨立様（邵霊寺流）」¹⁰⁹として男1人が立して構える拳法の武技らしき挿絵が34枚ある。挿絵は番号が振られ、頭髮は2枚を除き散切り頭で上半身裸になって靴を履き様々な姿勢を保っている。この中で第7図は頭髮のほぼ全体をそり上げ、数カ所髪を丸めてまとめている。第27図は琉球風の髪型に簪（かんざし）を挿している。頭髮を除けば中国風である（図-16）。

また、「九天風火院三田都師師」¹¹⁰と名が付された挿絵には「組手編」とされ、2人の男の攻防の28枚の拳法図譜も掲載されている。男は弁髪を登頂でまとめ、上半身裸で下半身を膝まで中国風のズボンをもとい、膝下は脚絆で覆い靴を履いている。26枚目の図譜の1人だけが丸坊主である。これは「拳足筋骨立様」とは異なり、2人で組手を行う図譜である。摩文仁は「武備誌」を「我が師糸洲安恒が支那の武備誌という拳法の書

107 いわゆる「沖縄伝武備志」と呼ばれている中国拳法白鶴拳系の史料である。高宮城繁（上地完英監修：精説沖縄空手道—その歴史と技法，第3編，1997年，p. 223）は、茅元儀の『武備志』を参考にして「沖縄伝『武備志』は、著者名も付されていず発行所もない。従って、出所の詳細については不明」としてこの史料名を用いた。しかし、摩文仁賢和著『攻防自在・空手拳法 十八の研究』（空手研究社興武館，1934年，pp. 82-175）に「付録武備誌」の呼称を見ることができる。『精説沖縄空手道』の巻末には、約400点の参考文献があるが、当時稀覯本であった『十八の研究』は入手できなかったためか含まれていない。つまり「武備誌」という史料名は確認できていなかったものと推察される。そのため、高宮城は、沖縄伝「武備志」の史料名を用いた。以降「沖縄伝武備志」の呼称が広く使用されていった。このような理由から拙稿では「武備誌」の史料名を用いている。「武備誌」についての研究書は、次の2冊の訳注本が刊行されている。楊名時監修・大塚忠彦翻訳：沖縄伝武備志，ベースボールマガジン社，1986年，230p.。渡嘉敷唯賢：沖縄空手秘伝「武備志新釈」，文進印刷，1995年，264p.。また、盧姜威：沖縄伝武備志の研究，沖縄県立大学博士論文，2011年，194p. がある。

108 摩文仁賢和：攻防自在・空手拳法 十八の研究，東京興武館，p. 83-176，1934年。

109 摩文仁前掲書108，pp. 93-127。

110 摩文仁前掲書108，pp. 147-175。

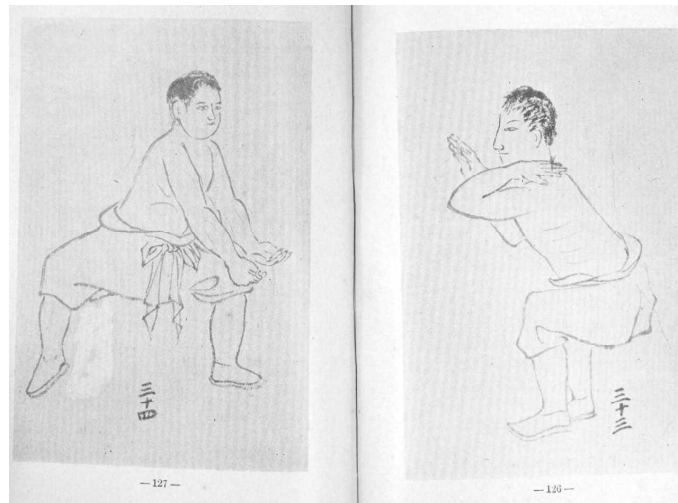


図-16 「武備誌」の中に見られる散切り頭の絵図

(出典 摩文仁賢和：攻防自在空手拳法 十八の研究，唐手研究社興武館，1934年，pp. 126-127. より転載)

籍より写されたものを、拝借してこれを写し¹¹¹たとしている。

この「拳足筋骨立様」には解説が付されていないためどのような技法を意味しているのか、絵図から詳しい技法を読み取るのは困難であるが、明らかに日本風に修正・加筆されたと推測される。「組手編」の28枚の拳法図譜は、「武備誌」の訳注本に掲載された「拳法・48勢図」¹¹²または「白鶴拳勝敗四十八法」¹¹³に含まれる48図の一部であり、2人で行う組手の型を表している(図-17)。ここで注目したいのは、2つの訳注本の図譜は一つの型としての連続性、構成の規則性は見られず、それぞれが独立した48の組手となって描かれていることである。抱拳礼式の絵や図譜も見られない。つまり、船越が『琉球拳法』を刊行した際に、3つの局面から型の体系化を行った構成は「武備誌」には見られない。

また、明代に戚継光によって表されたとされる『紀効新書』の「拳経捷要篇」には、中国拳法の三十二勢が著されている¹¹⁴。これは、茅元儀著『武備志』に転載されてい

111 摩文仁前掲書108, p. 84。

112 前掲書107, 沖縄伝武備志, pp. 56-103。

113 前掲書107, 武備志新釈, pp. 249-261。

114 戚継光：紀効新書，卷之5，江戸書林，1846年，pp. 18-25，沖縄県立図書館蔵。



図-17 中国拳法の組手の絵図

(出典 摩文仁賢和：攻防自在空手拳法 十八の研究，唐手研究社興武館，1934年，pp. 148-149. より転載)

る¹¹⁵。これらは、琉球と中国との交流の中ですでに琉球に伝わっていたのか、琉球国時代から近代に活躍した唐手家らの手に渡っていたのか明らかではなく、船越が『琉球拳法』で型を体系化するときの関わりはよくわかっていない。

型の構成において『琉球拳法』では、初動と終動はほとんど武技として意味をなさない解説が施されていた。抱拳礼式に酷似した挙動の構えは、清代の南方の拳法に門派や宗派を示すものとしての意味があったが、船越の15の型にはそのような意味づけは行われていない。

『空手道』で象徴的な挙動の説明が詳しくなったのは、武技的な意味づけとして流派の統一性を模索したことが一因とみることでもある。その背景には、日中関係が緊迫する中で、船越による唐手から空手道への改称と型名の日本独自の改称があった。このことは、沖縄固有の武術が日本の空手道として発達したことへの賞賛と中国拳法から離れて、脱中国文化が明確になったことがあげられる。

琉球国時代、武芸は個人教授または集団でも指導を受けることあったと推測される

115 戚継光：武備志，巻91，中国兵書集成，中国兵書集成編委会編，解放軍出版社，1987年，pp. 3800-3715，早稲田大学附属図書館蔵。

¹¹⁶。近代沖縄の学校教育に導入された頃から、団体練習の方法が沖縄県では模索されていった。船越が上京し、大学や様々な組織で指導が開始されると、初心者への指導法や一斉指導の教授法は、ますます必要性が高まった。大学空手部を足がかりに普及を促進した船越は、体操の様式や日本の武道に含まれる礼法を取り入れ、演武の際の間隔の取り方、気をつけの姿勢、号令に合わせた教授法等を体系化していった。また、見手の存在を前提とした演武法が確立されていった。明治期以降、唐手（空手道）の演武会や競技会が盛んになるにつれ、見せる演武法は一層重要な意味を持つようになり、『空手道』では、さらに、立ち方、身体各部の位置や距離、挙動の早さ（合わせ方）等までも細かく規定されるようになったのである。

第5項 空手道の体育化と武道化

船越の15種の型は、型の構成としての初動、技法の展開、終動という3つの局面から成り立っている。

型の構成の初動と終動に、体育の様式と日本式の礼法が明確に位置づけられ、「礼に始まり礼に終わる」という空手道の理念とともに演武法が整えられていった。これは、見手の存在を意識した演武法の確立が初動と終動だけでなく、新たな技法の創造にも影響を与えていったといえよう。

初動、終動の構えは、1)八字立ちで、両拳を垂らした構え、2)両掌をほぼ金的前で重ねた構え、3)右拳を左掌で包み込む構えの3つに整えられた。また、これらの構えの中で、抜砕初段、観空、騎馬立初段のように、もともと技法としては位置づけられていなかったが、武術的な意味づけが付与され技法へと転化したものもある。

団体練習の教授法は見手の存在を意識して、練習者の間隔の取り方、気をつけの姿勢、号令に合わせた挙動や技法と礼法等が整えられていった。

抱拳礼式についての解釈は船越の15種の型にはなく、初動の一部として型の象徴的な挙動や技法へ転化して残されてきたものと推察される。また、大正・昭和期に沖縄の唐手家たちの参考となった中国拳法の「武備誌」には、3つの局面の構成は見られなかった。

以上、型の構成の考察によって、船越は中国拳法の伝播後、琉球化した唐手を脱中国

116 東恩納寛惇：阿嘉直識遺言書，東恩納寛惇全集，第5巻，第一書房，1978年，pp. 425-432)。義村朝義：自伝武道記，月刊文化沖縄，9月号，月刊文化沖縄社，1941年，pp. 21-22。

文化を明確にしつつ、近代の体育化と日本の武道化を推進して空手道の型を創造していったことが明らかとなった。

第3節 沖縄空手の統一と日本の武道化

第1項 東恩納寛量の伝えたサンチンの型

宮城長順が剛柔流の保有型の全体を示した記録はこれまで見つからない。しかし、摩文仁賢和・仲宗根源和共著『空手道入門』では、「東恩納系統の型（現在の剛柔流）三戦、^{さんちん}三戦、^{てんしやう}転掌、^{せーさん}十三、^{せーパイ}セーエンチン、^{サンセールー}十八、^{スパーリンパイ}三十八、^{ベツチユーリン}一百〇八（又の名 百歩連）、ソーチン、サイファー、クルルンファー 等を数へることが出来ます」とあることから、1941年に編まれたとされる撃碎第一、撃碎第二、さらに宮城が改編した三戦を加えると今日の剛柔流と同数の保有型となる。

三戦は、剛柔流では、基本型として取り組まれている。宮城の編み出した三戦は、師の東恩納寛量（以下、寛量と記す）の三戦とは異なり、三步前進して三步後退する間に数種類の技法を繰り返すものである。演武中は、突きと引き手（受け）、諸手の貫手（受け）、回し受け（諸手掌底当て）、三戦立ち等、挙動としては限られているが、姿勢や呼吸法、全身の筋力の入れと抜き、運足、視線、そして締めによる鍛錬、集中力等多くの課題が師範によって試されることになる。この型の演武では常に精一杯の取り組みが要求される。三戦の型には様々な演武法があり、時を経て三戦そのものが大きく変容し、基本の型に対する位置づけも変わってきた。

宮城や寛量の演ずる型の写真や動画は、残念ながら確認されていないので、三戦の原姿を見ることはできないのだが、今日世界中の剛柔流愛好者によって受け継がれている。

三戦によって剛柔流の愛好者は何を受け取っているのだろうか。世界中に普及した三戦が、剛柔流の基本型として確立されていく時期に、誰がどのような場所や場面で行っていたのか、また、宮城は基本型の三戦をどのように論じていたのか等について考察し、空手道の型の変遷が持つ意味を明らかにする。

寛量は、琉球国末期の1853年に生まれ、琉球王国が崩壊し、沖縄県に変わった激動期に渡清して、福建地方に伝わる南派の拳法を学んでいる。往時の首里士族で幼少時から厳父に学問、諸芸を課されたとされる義村朝義は、1882年、松村宗棍に「五十四歩」「クウサンクウ」を学び、その後1887年頃、寛量から「サンシン」（ママ）を基本に「ペッ

チューリン」を習得したと記している¹¹⁷。宮城が東恩納の門に入るのは1902年、14歳の時である。沖縄県中学校（現首里高等学校）に唐手が取り入れられる1905年、当時一中生だった首里出身の徳田安貞は、地域で花城長茂と屋部憲通に「ナイファンチ」を習い、時々那覇の寛量の自宅へ通って「サンチン」を習ったと回顧している¹¹⁸。

明治期においては、松村宗棍の流れを汲む旧士族の義村や糸洲安恒、寛量の門下生という枠に縛られずに、若者達は三戦の稽古に励んでいたことがわかる。

1906年以降、唐手は急速に沖縄県全域に普及した。体育や課外活動、運動会、卒業式、学芸会等の学校行事や地域の祝賀会等で披露されるようになった。唐手は社会的に広く認知され、特に体育としての価値が認められた。小・中学校、師範学校の生徒たちは、学校で唐手を習うことになった。1908年、沖縄県師範学校で指導法の改善等を目的に「唐手奨励会」が催された。ナイハンチ、クーサンクー、五十四歩等ともに三戦が生徒によって演じられている。

京都武徳殿で演じられたサンチン

同年、沖縄県中学校の生徒が修学旅行で京都を訪ねた。そのとき、京都武徳殿で唐手の型を武徳会関係者に紹介したことがきっかけで、夏に催された京都武徳殿「青年演武大会」に派遣された。6名の旧制中学校生徒が唐手の演武を行った様子が地元の新聞で報じられている。

「身体をぐっと反り身に突き立って阿吽の呼吸を合わせた時などは嘉納博士も固唾を呑んで注視て居た」¹¹⁹。

「固唾を呑んで注視」した講道館長の嘉納治五郎はどのような感想を持ったのであろうか。型名は確認できていないが、反り身に突き立つ姿勢や阿吽を合わせる呼吸法から三戦の型と考えられる。唐手は好評を博し、翌年の大会にも3名の中学生が唐手の型を特別に行っている。このプログラムには、「サンチン」「クウサンクウ大・小」の演武

117 義村前掲書116, p. 22。

118 徳田安貞：唐手雑感，養秀，養秀同窓会，1961年，p. 90。

119 琉球の無手勝流，大阪時事新報，1908年8月9日。

名が記載されている¹²⁰。このとき「クウサンクウ大」を演武したのが徳田であった。大日本武徳会主催の本大会は、申込者が初めて2,000名を超え、多くの武道関係者、参観者の見守る中で行われている¹²¹。

唐手は、「新奇の武術」とはいえ、すでに京都武徳殿に全国から参加した多くの競技者らに知られ始めていたことが分かる。

東恩納道場の練習風景

大正初年頃、那覇にある東恩納道場の稽古風景を描いた一文がある。寛量がどのような指導を行ったのか、三戦がどのように取り組まれていたのかを垣間見ることができる。

「サンチンといえば、誰でも知っているように真裸になって、息を吐いたり吸ったりして前後に行き戻りする唐手の基本の型である。背後に教師がいて一足一投毎に両手で両肩を叩き姿勢を直しながら前後する動作で、先生の道場ではその基本が特に激しく習練された。砂の入った高さ二尺位の口の細い甕を両の掌で握りしめ、それを水平に下げた格好で幾回も往復する練習を見て、唐手がいかに困難な修業であるか子供心に驚嘆した」¹²²。

ここでの基本型三戦の演武法は、現在の稽古の仕方に通ずるところがある。上半身裸で行い、際だった呼吸法と前後に運足を繰り返す、背後から師範が姿勢を直しながら指導を行っている。補助運動の器具として瓶（カーミ）を両手に掌握し、中に砂を入れて重さを調節することも受け継がれている。

第2項 船越義珍、本部朝基、摩文仁賢和のサンチン

1913年、船越は、唐手の伝来、流儀、型の種類、既往と現今、将来についてをまとめた「唐手は武藝の骨髓なり」の論考では、当時、型は百種類ほどがあるとし、よく行われている15種の型の中に「サンチン」を含めている。また、船越は1925年に刊行した『鍊

120 杉本善郎：武徳誌，第4編，9号，武徳誌発行所，1909年，p. 89。

121 杉本前掲書120，pp. 68-69。

122 金城三郎：東恩納先生のこと，金城裕：月刊空手道，合本複刻，榕樹書林，1997年，pp. 58-59。

胆護身拳法唐手』にも、「現今流行の型」として三戦をあげており、「三進」の文字を当てている。1926年に、本部朝基が出した『沖縄拳法唐手術 組手編』¹²³では、古来より琉球で行われている型の一つに「サンチン」をあげている。摩文仁賢和は、1934年に、上梓した『攻防自在 護身術空手拳法』¹²⁴の中で、基本型として口絵と解説を加えて掲載している。

第3項 移民と海外への普及

空手が海外へ本格的に普及され始めるのは、1960年代以降である。しかし、先駆的役割を果たしたのが沖縄県師範学校で体操教練を指導した屋部憲通である。1927年、屋部は体育視察のため米本国へ派遣されている。帰路ハワイの沖縄県人会の招きで数ヶ月滞在して唐手の紹介、普及に努めた。屋部の講演や実演はハワイ各地で催されたが、実演会では移民した会員による「サンチン」の演武も行われている¹²⁵。7年後の1934年、宮城は、ハワイの邦字新聞社に「斯界の権威」として招かれ、約10ヶ月滞在して「剛柔流唐手拳法に就いて」を演題とする講演や「三戦」、「転掌」の実演や指導を各地で行っている¹²⁶。

第4節 宮城長順の論考の変遷

宮城が生前に残した唐手（空手道）の論文は、管見の限りでは3編確認されている。これらは1932年、36年、41年に出され、宮城は44歳、46歳、53歳である。

1930年、宮城の高弟新里仁安は、明治神宮奉納武道大会に出場して三戦を演武した。当初、上半身裸になることを主催者に断られたが、「唐手術の真価を見せる為には是非裸でなければならぬ」¹²⁷と頑張ったので許され演じたところ、好評を博している。このとき新里は流派を問われ、答えに窮したという。その後、宮城は沖縄に伝わる「武備誌」に記載された一句から剛柔流と命名したといわれている。同年、宮城は沖縄県体育

123 本部朝基：沖縄拳法唐手術組手編，唐手術普及会，1926年，58p。

124 摩文仁賢和：攻防自在 護身術空手拳法，大南洋社，1934年，pp. 57-78。

125 沖縄唐手大会の順序，ハワイ報知，1927年7月2日（<http://museum.hikari.us/>）。

126 唐手講演会，日布時事，1934年5月10日（<http://museum.hikari.us/>）。

127 満場の観衆を感服させた唐手術の威力，沖縄朝日新聞，1930年11月11日。

協会唐手部長、1934年、大日本武徳会沖縄支部常議員に就任し、沖縄唐手界の中心的な役割を担っている¹²⁸。

宮城は、沖縄県巡査養成所武道教師嘱託、那覇市立商業学校武道教師嘱託等を務め、県外においては京都帝国大学、立命館大学、関西大学等の招聘を受けて講習会等を行い、唐手部が結成された¹²⁹。

「剛柔流拳法」¹³⁰と流派の発生

宮城が記した「剛柔流拳法」は、表紙を含めて8頁のガリ版刷りの手稿である。表紙には、師範学校で指導した瀬名波達徳への寄贈と記されている。内容は、流派の説明、型の説明、予備運動、基本型（三戦並に転掌）、補助運動、開手の型、拳法の基本運動三戦の説明、の項立てとなっていて、流派としての「剛柔流唐手拳法」について論じている。

「剛柔流拳法」では、1828年、「文政11（支那清朝道光8）年の項、支那拳法福建派の系統を継ぎ追時研鑽を積み剛柔流拳法となす」としている。しかし、宮城の師事した東恩納寛量が福州で修行を積み、帰国後弟子達に継承したということ以外、どのように受け継がれたのか詳細は不明なことが多い。

その特徴は「基本型三戦並に転掌に依り心身の作用を帰納統一し、尚一層開手型を以て演繹補導して攻防の実を得るにあり」¹³¹と説き、三戦と転掌を基本型としている。転掌は、中国拳法の六機手をもとに宮城が編んだ型である。

また、剛柔流の型を2つに分類し、基本型によって「心身の作用」¹³²を帰納統一し、開手型によって演繹補導して「攻防の実を得る」¹³³と説いている。

予備運動については「身体各部の運動を行ひ筋肉の柔軟を図り、兼ねてその強靱性と耐久力を養成して、尚ほ唐手の基本型たる三戦と転掌を誘導理解せしむ」¹³⁴とし、基

128 ハワイ前掲書125, 1934年5月7日。

129 ハワイ前掲書125, 1934年5月7日。

130 宮城前掲書4, 8p.。

131 宮城前掲書4, p. 1。

132 同上書。

133 同上書。

134 同上書。

本型に導き、理解させるために身体各部の運動を行い、筋肉の柔軟性、強靱性、耐久力を養成するとして、体育的な見地に立って運動の目的が論じられている。

基本型の目的は、定められた姿勢を取って、呼吸と力の入れ抜きを調和させ、堅固な体格と「武道的気概」¹³⁵を養成する一方、開手型は、攻防の技を連結して種々の演武線を描いた運動であり、術の目的に適合する「心気と体力とを運用転換して解きと結びとの原理を納得」¹³⁶させるとある。

三戦の目的は、体力と武道的気概、つまり精神的な側面の養成に重点が置かれている。そして、三戦を土台にして、攻防の技が連結した開手型によって、「解きと結びの原理」を理解させることであると論じている。

補助運動とは、「開手型を修得完成せしめんが為に行ふ運動にして、全身各部の特趣を帯びたる動作をなし、而して其の外に身体各部の力量を充実せしめんが為め、種々の器具を使用して運動をなさしむ」¹³⁷として、器具を用いた運動によって、身体各部の筋力を充実させ、開手型を修得、完成させるために行う運動と位置づけている。

このように、剛柔流の実技を予備運動、基本型、補助運動、開手型の4つによって体系づけ、拳法の基本運動三戦の説明に4ページを当て、三戦の挙動を5つの運動に区分して解説している¹³⁸。

剛柔流の構えは、手掌を急所前で重ねた後に第一挙動に入る方法と、諸手の拳を固めながら平行立ちになった後に入る2つの方法がある。ここでは後者の方法を取り、その構えを「体操科の不動の姿勢」¹³⁹と言っている。

身体各部の呼称を使い、その位置関係を長さや角度で示し、定められた姿勢、各部の力の込め具合と抜き具合、挙動を行う際の注意点等に着眼してまとめている¹⁴⁰。

たとえば、「体操科の不動の姿勢」から、文頭で紹介した、諸手で突き出し脇を締める第一の挙動は、次のように説いている。

「握拳して手掌部は上方に向け、腕を曲げ右上肢は左上肢の如く握拳し拇指側を前方

135 宮城前掲書4, p. 2。

136 同上書。

137 同上書。

138 宮城前掲書4, pp. 3-7。

139 宮城前掲書4, p. 3。

140 宮城前掲書4, pp. 3-7。

に向け、腕を曲げ手首にて左肘を擦過し、腕は拳固が肩の高さ位に屈し（この時肘と側胸の離れは約一握り、拳と肩との離れはやや直角をなす）上腕と前腕は直角、肘と側胸とは約一握り位にして、小指球が三角筋の外側面とやや直線なる様に左右の腕を開き、双肩を下げ胸部を開く（初学者は往々胸郭を圧迫するを以てこの所に注意すべし）」¹⁴¹

と記している。

沖縄語の口伝によって東恩納から受け継いだ術技を、宮城は具体的で、客観的にとらえることができるよう記述を試みたことが推察される。

「唐手道概説（琉球拳法唐手道沿革概要）」¹⁴²と沖縄空手の統一

「唐手道概説」は、副題「琉球拳法唐手道沿革概要」にみられるように、唐手道を概説している。この論文は、1934（昭和9）年3月23日と1936（昭和11）年1月28日のものがある。

1934年版¹⁴³は、表紙ととびらが手書きとなっている。表紙は、「唐手道概説」で、とびらは「昭和九年参月式拾参日 唐手道概説 宮城長順稿」となっている。本文は、タイプで打った活字になっており、「琉球拳法唐手道沿革概要」の表題から始まっているが、欠け字があり、手書きで訂正、挿入している部分が若干ある。

1936年版¹⁴⁴は、「此の稿は、昭和11年1月28日堺筋明治商店4階講堂に於て『唐手道に就て』の御講演及び実演を為された際特に倶楽部員の為め御寄稿されたものである。大日本武徳会沖縄県支部常議員 宮城長順稿」¹⁴⁵とあり、「唐手道概説」と異同が見られる。しかし、主要なところでは、いずれも沖縄空手の歴史、現況、技法の解説と技法の指導法、将来の展望を論じている。そのため、その異同については項を改めて論じたい。本研究では、1936年に『糖華』に発表された論文をもとに他の論文との比較を行いたい。

141 宮城前掲書4, p. 3。

142 宮城前掲書5, 3p.。

143 宮城長順：唐手道概説，喜宝院所蔵，1934年，17p.。表紙ととびらを合わせると総19頁。

144 宮城前掲書5, 3p.。

145 宮城前掲書5, p. 13。

論文の内容は、(1) 緒言 (2) 唐手渡来について (3) 過去に於ける唐手界 (4) 現在の唐手指導状況 (5) 唐手の流派に就いて (6) 唐手の特徴 (7) 唐手道の将来 (8) 唐手指導方法から構成されている。

緒言において、唐手を「身に寸鉄を帯びず、平時に於ては心胆を錬り、急に際しては身を護るの術也。即ち多くの場合、肉弾を以て敵を倒す事を原則とす。然りといえども機に臨み、変に応じ器物を併用する事また無きに非ず」¹⁴⁶と定義づけている。徒手の護身術だが、武器を併用する場合もあり、「道の妙諦は一般武道と合い通ずる教外別伝、不立文字の極致に於て会得せらるべきもの」¹⁴⁷として、道を究めることにおいて一般の武道に合い通ずると説いている。

拳法の渡来については、淵源を支那に発すると断言しているが、一般に唱えられている説として「三説あり。曰く三十六姓輸入説、曰く大島筆記説、曰く慶長後輸入説」¹⁴⁸と紹介し、(1) 14世紀末に伝来した、(2) 1762年に記された大島筆記の「組合術」によって伝来した (3) 島津氏の琉球侵攻後の「禁武政策」によって琉球の徒手武芸が発生したことをあげている。これらのことから、外来の中国拳法が在来の「手」と合流して異常の発達を遂げ、現在更に改善、進展をしていると見る方が妥当であろうとしている。

そして、「古くは一般に『手』と称したり。この時代に於ては、唐手即ち手の稽古は多く秘密の間に行はれて、更に『型』の種類によりては師匠より最も武才優秀なる高弟にのみ伝授され、もし適任者なきときは何人にもこれを授けず、遂に師匠一代を以て空しく隠滅に帰せしめし」¹⁴⁹、「明治の中葉頃より斯道大家の決起と時代に適応する指導方針により、従来秘密主義は廃滅して公開主義に進展するやにわかには社会の認むるところとなり始めて斯道発展の曙光を見るに至れり。以来日進月歩の文化に伴ひ、唐手もまた体育価値並に修養的価値の確認を得て、学校の科目の中に採用せしめられるに及び始めて完全に社会的評価を勝ち得たり」¹⁵⁰として、「手」から学校教育に導入される時期の唐手の移り変わりを概観している。

古くは「手」と呼ばれ、その時代は稽古が秘密裏に行われ、師匠が弟子を厳選して型

146 宮城前掲書 5, p. 13。

147 同上書。

148 同上書。

149 宮城前掲書 5, pp. 13-14。

150 宮城前掲書 5, p. 14。

を伝授したため、場合によっては失伝することもあったが、公開主義に変わって社会が認めるようになると体育的な価値、修養的な価値が評価されて学校の科目にも取り入れるようになり、社会的な評価を勝ち取ることができた。これは当時の指導者らの努力と時代に適応した指導方針がうまくいったためであると論じている。

また、唐手の指導状況について「昔日唐手の指南方針は主体を護身の術に置き、わずかに『唐手に先手なし』との標語によって修養的内容を示したるも、実際に於ては常にその方面に関する精進を怠りしやに見聞す。しかるに時代の推移と共に漸次指導方針を改善し、今や従来の体主心従と称する誤伝を解消して、武道本来の面目に遭遇する事を期し、ここに拳禅一致、心主体従を以て信条とするに至れり」¹⁵¹としている。

昔日、唐手は護身術の習得に重きが置かれていたので、「唐手に先手なし」と修養的な内容が掲げられているものの、実際にはその努力はまだ及ばないのが実状である。このような指導方針を改善するために、従来の「体主心従」の誤った伝承を解消して、武道本来の拳禅を一致させた「心主体従」を信条にするようになってきた¹⁵²と、斯界の指導方針が変わってきたことを訴えている。

唐手の流派については、「種々説をなすものあれども何れも確実なる考証なく、殆ど漠然たる憶測にして正に暗中摸索の觀あり。其中一般に流布せる説として昭林流、昭靈流に分類し、前者は體質肥満骨格偉大なるものに適し、後者は之に反し骨格矮小体力貧弱にして楊柳の如く痩せ細りたるものに適すとあれども幾多の方面よりの考察と闡明に依りその誤見足ること明なり。その間に処し信すべき唯一のものは、文政11年の交（清朝道光8年）、支那福建派の系統を継承し追時研鑽を積み剛柔流唐手拳法となせるもののみ、而してその正統を汲める一団今尚ほ本格的に伝承せられて現存す」¹⁵³と説いている。

一般的に流布している「昭林流」「昭靈流」の分類によって、前者を體質肥満で体格が大きい者に適し、後者を逆に体格が小さくやせ細った者に適しているという見方は、明らかに誤見であると否定している。そして、流派として系統が明らかなのは、福建派を受け継いできた「剛柔流唐手拳法」だけであり、現在でも本格的に伝承されていると論じている。

唐手の稽古の特徴については、場所をとらないこと、独習ができること、時間を多く

151 宮城前掲書5, p. 14.

152 同上書。

153 宮城前掲書5, pp. 14-15.

必要としないこと、年齢や性別、体質に合わせて適当な型を選んで適宜できること、費用がかからないこと、強健術としても効果があること、堅忍不拔の人格を養成できることの7つをあげている¹⁵⁴。

将来的な展望として、他の武術と同一程度に試合ができるように道を開いて、一般武道の精神に合流させることが必要であると説く。すでに唐手は、関東、関西だけではなく、北は北海道から南は台湾まで全国的に研究熱が高まっているばかりでなく、大学を卒業して渡欧して普及に専念する者があることやハワイにおいても研究が盛んであり、今や日本独特の武道から世界的武道として進展しつつあるとみている¹⁵⁵。

また、「すべて人は立場上趣味嗜好が異なり、従って筋肉の使用法によりその発育状態も様々である。故に最初は唐手運動に入り易い筋肉に仕立てるため予備運動を行ひ、次に基本型、補助運動、開手型、組手練習と云う風に指導をなす」¹⁵⁶と説いている。

唐手道の発展について、全体的な構想のもとに、唐手指導法は、唐手を「唐手運動」として、体育としての観点を明確にして、予備運動、基本型、補助運動、開手型、そして組手練習の5つに体系化を図っている。唐手の門に入る者の趣味、嗜好の違い、発達段階に目を向け、5つの指導は個別に行われるのではなく、密接に関連していると論じている。

予備運動については「身体各部の運動（説明省略）筋肉の柔軟を図り、兼ねてその強靱性と耐久力を養成し、唐手の基本型たる三戦並に転掌及びナイファンチを誘導理解せしめ、而して各型練習後再々これを行ひ、筋肉の整理調節をはかり呼吸運動をなして静かに休養せしむ」¹⁵⁷として、各型の練習後にも予備運動を行い、筋肉の整理、調節をはかつて最後には呼吸運動を取り入れて静かに休養する等、生理学的に適った運動を取り入れていることが窺われる。

基本型では「三戦並に転掌及びナイファンチは共に基本型にして、その目的は身体をして定められたる姿勢を取り氣息の吞吐と力の入れ抜きを調和させ、堅固なる骨格と武道的氣概を養成」¹⁵⁸するとして、三戦、転掌とナイファンチを基本型と位置づけ、姿勢、呼吸法、力の入れ抜きとその調和によって、堅固な骨格と武道的氣概を養成するこ

154 宮城前掲書5, p. 15。

155 同上書。

156 同上書。

157 同上書。

158 同上書。

とが目的と論じている。

補助運動については、開手型を修得、完成させるための運動として、「総体的力量」と「局部的力量」の2つの面を充実させるために、種々の器具を使用して行うとしている¹⁵⁹。

開手型について、具体的な呼称は略されているが「当今2、30種あり。その呼称も創案者により色々あり」と指摘し、「各型は幾多の攻防の術が織り込まれ程良く連結せられたるものにして様々の演武線を描き操体運動をなす。而してその動作は術の目的に適合する様に気力と体力を有効に運用転換して解きと結びとの原理を修得せしむ」¹⁶⁰と論じている。

組手練習は「既に修得せる色々の開手型に組み立てたる攻防の型を解き放ちその業の本旨を弁えて実際に近き様武道的気概を以て再に一層徹底的に練習をなすものなり」¹⁶¹として、開手型に組み立てられた攻防の型に含まれる技の本旨をわきまえて、実際に近いように武道的気概をもって、徹底的に練習することと説いている。

文末には要約を示して「基本型たる三戦並に転掌及びナイファンチにより心身の作用を帰納統一しなほ一層開手型及び組手練習を以て演繹指導しその攻防の実を得て武道精神の確立を期するにあり」¹⁶²とまとめている。

「攻防の実を得る」ことによって、究極的には「武道精神の確立」を期することになると結び、指導方針の改善で論じられた「体主心従」から「心主体従」への変更がはっきりと示されている。

「法剛柔吞吐」¹⁶³に表れる沖縄空手の文化的アイデンティティ

「唐手道概説」から8年後に描かれた論文である。唐手は空手道と呼称を変え、日本の武道として全国に普及し、流派が結成された。大日本武徳会において空手道は認められ、空手道に関する専門書もこの時期まで10冊以上刊行されている。

「いつの間にか唐手が空手になった。何れにしる、現在、琉球独特の拳法として全国

159 宮城前掲書5, p. 15。

160 同上書。

161 同上書。

162 同上書。

163 宮城前掲書6, 4p.。

に流布喧伝され、今や押しも押されもせぬ存在として大日本武徳会において認められ、堂々、日本武道の班に列したのは御同慶の至りであるが、その伝来は訪ねるまでもなく、支那、即ち唐に発していることにまちがひはない。それがわが郷土において、いろいろ歪曲された点もあるかと思われるが、一方には、土地の特殊性に化育され、発達した跡も亦、十分認められてよいと思う。由是觀之、唐手が空手に改称されたされたのもあながち無理ではない」¹⁶⁴。

空手と呼称が変わり、琉球独特の拳法が大日本武徳会に認められることによって日本武道の一つになったことは喜ばしいこととしながらも、伝来が中国拳法に発しているが沖縄で歪曲されたところがあると指摘している。唐手は、沖縄という土地の特殊性から生み出され、発達してきたことから空手と名を変えたことは認められるとしている。そして、誤解を解くかように次のように論じる。

「空手の系統を觀ずるに、大別して、南方系と北方系があるようである。そうして、これを技法の上からすると、南方系は、主として上体手業が発達し、而して柔であり静あり。対敵態勢はに於ては、防御的であるに反し、北方系は、主として下体足技が発達し、而して剛であり、動である。対敵態勢に於て攻撃的である。前者は、進んで突き退いて防ぐ、後者は、進んで蹴りなお進んで倒すのである。もちろん、両者とも、突き蹴り、倒し、投げるのにかわりはないが、要するに眼目の相違である」¹⁶⁵。

宮城は、中国武術を研究するために1915（大正4年）と1918年に福州、1936（昭和11）年には上海を訪れて、現地の武術家と親睦を図っている¹⁶⁶。空手の系統には南方系と北方系があるが、突き蹴り、倒し、投げるという技に変わりはなく、眼目の相違であると論じている。

空手を世界的な武道に進展させるために、体育的な見地に立って術技を体系化し、武道精神の確立を目指した宮城にとって、空手の源流を解き明かすことは重要な問題であったに違いない。

「閉手とは基本型を言う。道に入るに先だち、体をつくり、心を錬るのである。私共の剛柔流では、言う所の（三戦）（サンチン）をもってこれに当てている。詳しく言うと、立ち上がって、足をふん張り、手を構え、体を持して呼吸を整えた時の、金剛身不

164 宮城前掲書6, p. 4.

165 宮城前掲書6, p. 5.

166 高宮城繁・新里勝彦・仲本政博・：沖縄空手古武道事典，柏書房，2008年，pp. 531-532。

惜心命の妙境が、既にサンチンの決まった形である。その静的態勢から、一步動的態勢に移った場合には、八歩連（ペPPERレン）という別称があるが、普通、静動の型をひっくるめて、サンチンと唱えている。この時の心力の集点は、臍下、後頭、臀部で、これを、丹田集力、後頭集力、臀筋集力という。わかり易くいうと、顎を引いて後頭を立て、鳩尾を落として丹田に入れる力を蓄え、臀部を引き締めるのであるが、この3つの集力は、元来、離ればなれのものではなく、不可分の関係をもっている。それから今一つ眉間集力というもののあることだけを付け加えて置く。聞くところによると、座禅やその他の座法の要点も、全くこれと同一だということである。翻って沖縄における空手道を見ると、昔も今も、閉手型を軽視した傾きがあるのではないかと、私は思っているが、どうであろうか。したがって、基本が定まらぬために、開手型の技がいくら妙を極めても、そこに、画竜点睛の憾みがあるのは、やむを得ない」¹⁶⁷。

基本型を「閉手型」と命名し、足を踏ん張り、手を構え、体（姿勢）を維持して呼吸を整えた時（金剛身不惜心命の妙境）が、三戦の決まった形であるとする。そして、三戦は「静的態勢」であるが、「動的態勢」に移った時に「八歩連（ペPPERレン）」という別称があり、静動の型をひっくるめて三戦と説く。さらに、三戦には、「臍下集力」「後頭集力」「臀部集力」の3つの「心力の集点」があり、これは、顎を引いて後頭を立て、鳩尾を落として丹田に入れる力を蓄え、臀部を引き締めるのであるが、この3つの集力は、元来、離ればなれのものではなく、不可分の関係にあると論じている。

このように閉手型の重要性を訴えるが、沖縄の空手道は、これまで閉手型が軽視されてきたのではないかと苦言を呈し、閉手型を書道の篆書、隸書、楷書、開手型を行書、草書にたとえて、「篆隸楷は静的で、行草は動的である。したがってどれが基本であり、そこから立ち上がって、一步一步すすまねばならぬかという事も自ら明らかになるであろう」¹⁶⁸と問いかけている。

三戦は、術技として修練を積んだ東恩納寛量が宮城長順に授け、近代における体育と武道を志向して、剛柔流の基本型としての三戦を新たに編み出した。空手道への改称が行われ、日本の武道へと志向しつつも宮城は、自らの流派の系統とそれを土台にして体系化された沖縄空手の文化的アイデンティティを主張していることがうかがわれる。

167 宮城前掲書6, pp. 5-6。

168 宮城前掲書6, p. 6。

第4節 琉球新報社主催「空手座談会」¹⁶⁹

第1項 「空手座談会」が催された背景

戦時下にあつて、沖縄ではすでに空手の社会的認知度が高く、行政主導で学校への導入がなされていたことから、時代の要請に十分適うものとして政治家や教育者、軍人、マスコミ等から関心を持たれていた。

1936年10月、「県下の達人網羅し座談会に賑ふ」¹⁷⁰という見出しで「空手座談会」（以下、「座談会」と記す）が催された（図-18）。参加者は、当時の空手大家8名、来賓6名、作家1名、主催した琉球新報社から4名の19名の関係者が参加している¹⁷¹。その内容は、翌日に「座談会」開催の記事が掲載され、全13回に分けて報じられていった。



図-18 「空手座談会」を報じる記事

(琉球新報、1936年10月26日より転載)

169 琉球新報社主催の県内の空手道大家と関係者が参加して催された座談会。この後、会の様子は13回にわたって連載された。

170 琉球新報、1936年10月26日。

171 名称を“空手”に統一し 振興会を結成！ 県下の達人網羅し座談会賑ふ、琉球新報、1936年10月26日。翌日の連載2回目（10月27日付け）にも紹介がある。

開催報告記事 1936年10月26日（月）開催報告記事

「名称を”空手”に統一し 振興会を結成!

県下の達人網羅し座談会賑う

本社主催、空手研究会後援の唐手座談会は昨日二五日午後四時半より昭和会館で開催された。出席者は唐手道の大家喜屋武朝徳、坂名城朝茂、本部朝基、小祿朝貞、許田重發、宮城長順、城間眞繁、知花朝信の各氏の外佐藤学務部長、島袋図書館長、護得久保安課長、北警務課長、古川体育主事、司令部副官福島少佐、並びに目下来県中の安藤盛氏、主催側より太田社長又吉主筆、山口理事、空手研究会の仲宗根源和氏以上

又吉本社主筆開会の挨拶を述べ仲宗根氏の司会で座談が進められ先ず唐手の名称統一問題につき各氏より意見が出たが唐手の名称はこれという根拠もないから今後の唐手普及発達のため唐手に統一するがよいと意見一致し、ついで唐手の振興方法については種々論ぜられたが、これは、唐手道を振興さすために「空手振興協会」といったようなものを組織することにこれ亦満場意見一致を見たので近く実行委員をあげて結成することになった。午後六時半頃昭和会館の座談会を（終えた。）¹⁷²

空手界の問題だが、実に多彩な顔ぶれで行われている。唐手大家はもちろんであるが、マスコミ主催であることからニュース的価値を持ち、行政、軍部、警察、教育、作家等が一堂に会して統一した見解をまとめている。その背景と意義に、触れておきたい。

「座談会」の連載記事は全文が発見されるまで、戦後に刊行された空手の単行本に一部分が削除され、書き換えなども行われて掲載されていた¹⁷³。その連載のすべてが沖縄県公文書館へ寄贈された文書から発見された¹⁷⁴。「座談会」は、沖縄の空手界でどのようなことが問題となっていたのか、さらに、空手界の動向を通して戦時下にあった沖縄の社会状況を知ることができる貴重な史料といえよう。

当時の時代背景は、日本の軍国主義化が進み、翌年の1937年に日中戦争が勃発してい

172 名称を”空手”に統一し 振興会を結成!, 琉球新報、1936年10月26日。

173 遠山寛賢：奥義秘術 空手道，鶴書房，1956年，197p.。遠山寛賢：護身・錬胆 空手道，鶴新書，1956年，197p.。遠山寛賢：空手道大宝鑑，鶴書房，1960年，437p.。

174 幻の「空手座談会」発見，琉球新報，2006年9月23日。「逸話、武勇伝多彩に」「従来説に変更も」等の見出しが付いている。

る。沖縄では、1930年に沖縄県体育協会の組織改編によって唐手部が設置され、1933年には、大日本武徳会の沖縄支部も認定されている。当時唐手部部長であった宮城長順は、早速唐手の登録を行っている。また、唐手（空手）の振興に関する記事や論文等が専門雑誌や一般紙に掲載され、空手の専門書等の刊行が活発に行われている¹⁷⁵。

「座談会」のテーマは、唐手道の振興を図るため、呼称の改称、県内の統一的組織の結成、統一型の制定、空手道の基本理念、歴史の問題、小学校への導入強化、段位制の全国的な統一、練習着、述語の統制、沖縄県庁の空手に対する姿勢などが話し合われた。

また、宮城長順と本部朝基の武勇伝について各々3回ずつの連載も掲載された。その中心的な話題は、宮城が空手を科学的な判断でとらえることや武勇伝そのものを否定することを主眼に語っている。一方、本部は、青年空手家も参加して、本部が少年の頃から松村宗棍、佐久間、松茂良興作、国頭親雲上、糸洲安恒等と実戦的な稽古をした時のエピソードを紹介し、50代になって京都で外国人拳闘家と戦ったことを中心に語っている。

「座談会」の最も重要な課題は、呼称を空手道に改称して統一することであった。そのことは、呼称の問題だけで、連載の3回を当てていることにも表れている。また、空手振興を図るため県内の統一組織の創設にあった。その結果は、「座談会」連載の報告記事にも記されている。参加者の全員一致で、空手道への改称と「空手振興協会」（仮称）を創設することで統一した見解が示されている。

連載記事は、最初に「座談会」が催されたことが報じられ、その後、9回の連載、さらに、特別に3回の連載が追加され全13回となっている。「座談会」の内容は、次の4部に分かれている。

1部は、空手への改称問題であり、唐手の呼称の歴史的な経緯を含めて、3回にわたって改称についての議論を行っている¹⁷⁶。

2部は、普及を促進するために多種多様に分かれた型の統一と新たな型を制定すること、まとまった組織として「空手振興協会」（仮称）の設立が必要なこと、小学校での指導強化や段位制の整備等について語っている¹⁷⁷。

175 1930年以降、36年の「空手座談会」までに、空手の単行本が10冊ほどが刊行されている。戦前期に刊行された空手関係の単行本の3分の1に相当する。

176 「空手座談会」連載の見出しは「本社主催・空手座談会」となっている。第1回は10月27日、第2回は28日、第3回は30日。

177 第4回は10月31日、第5回は11月1日、第6回は11月2日。

3部は、宮城長順の武勇伝¹⁷⁸。

4部は、本部朝基の武勇伝¹⁷⁹。

連載の各回の見出しは、次の内容である。

連載（1）1936年10月27日（火）

「学生に向かない 唐手の名称 空手空拳より「空手」に」

連載（2）1936年10月28日（水）

「席者揃って 改称に賛成 武徳会でも問題化す」

連載（3）1936年10月30日（金）

「唐手の文字は 沖縄の造語 積極的な武術「空手」

連載（4）1936年10月31日（土）

「型を統一して 普及を図れ 古式と基本の両型に」

連載（5）1936年11月1日（日）

「空手振興会の 設立に賛成 流派は指導法で区別」

連載（6）1936年11月2日（月）

「先ず小学児童へ 教授せよ！ 「段」も全国的に統一」

連載（7）1936年11月6日（火）

「私の武勇傳は真赤な嘘！ 宮城氏、デマを打消す」

連載（8）1936年11月7日（水）

「身許の知れない謎の達人！ 気醜で若者を威圧す」

連載（完）1936年11月8日（木）

「松村の奇智で難を免かる 武人は武人を知る」

○武士・本部朝基翁に「実戦談」を聴く！

青年唐手家・座談会

連載（1）1936年11月9日（月）

「ナイハンチの昔と今の差異 昔の唐手の先生方の話 今の武術家と昔の武術家

連載（2）1936年11月10日（火）

「昔の武士の修練ぶり！ 十円賭けて受手で勝った話 松茂良へ一本歯血出させた話

178 第7回は11月6日、第8回は11月7日、完（第9回）は11月8日。

179 「青年唐手家・座談会」連載第1回は11月9日、連載第2回は11月10日、連載第3回は11月11日。

連載（3）1936年11月11日（水）

「覆面で友達をからかった話 那覇の武士を走らせた話 捧組に囲まれ村芝居の騒動
外人拳闘家と実戦して倒した話」

ここでは、主に呼称の変遷に関わる1部を原文に添って取り上げ、参加者が呼称問題について、どのような発言を行って協議したのかを論じたい。

第2項 空手の呼称はなぜ統一されねばならなかったのか

連載（1）1936年10月27日（火）¹⁸⁰

「学生に向かない 唐手の名称

空手空拳より「空手」に

出席者

空手師範

花城朝茂氏、喜屋武朝徳氏、本部朝基氏、宮城長順氏、許田重發氏、知花朝信氏、
城間真繁氏、小禄朝禎氏、空手研究家仲宗根源和氏

来賓

学務部長佐藤幸一氏、県立図書館長島袋全發氏、連隊区司令部副官福島橋馬氏、県
警務課長北栄造氏、県保安課長護得久朝昌氏、県体育主事古川義三郎氏

作家

安藤盛氏

本社

太田社長、又吉主筆、山口理事、玉城記者

△又吉氏

本日はお忙しいところをご出席くださりまして有難う御座います、かくお集まりをお願い致したのは東京の空手研究社の仲宗根源和氏と本社とのコンビのもとに空手座談会を催したのであります。最近東京に於いては空手が流行して居りますが、その流行の裏には邪道も少なくないようであります。それ故に空手の真髓並に其達人達の御苦心の足跡を検討して本格的なものを伝えたいのであります。同時に達人、先輩方の苦心して研究された御苦心の跡を識りたいためであります。どうか御腹蔵なく御発表を御願います。本日は喜屋武、本部、宮城、其の他現代そうそうたる名人達が御揃いであります。

180 本社主催・空手座談会（一）、琉球新報社、1936年10月27日。

すから空手の実際を示して頂いたら最も幸いです。話の進め方については仲宗根氏に御願ひしたいと思ひます。

△太田氏

どうぞ仲宗根君

△仲宗根氏

いま太田先生と又吉先生から御話がありましたが私のような末輩が甚だ恐縮ではありますが、話の端緒を作りまして順々に御話を願ひたいのであります。私は2ヶ月前帰県しまして各方面の方々とお会いして空手に関するご意見を伺ひましたが空手の大家の集团的機関がなかつたのを遺憾にしておりました。幸ひ琉球新報社のご好意によりかかる機関を作る好機会を得ましたことを感謝している次第であります。

申すまでもなく刻下の非常時に際し国民体位の向上には積極的に努力しなければなりません。強健なる身体と強固なる意志を養うために空手は最も適切有効なる体育であり武道でありますから大いに奨励さるべきものであります。この意味於いてと又一面日本精神の涵養という意味をも含めて、私は数年来空手の普及に努力して来て居りますが本日は先輩諸氏の腹蔵なきご意見を聞かして頂いてこれを機会に空手を全国に波及するようになりたいと思つて居るのであります。

先ず又吉氏より話されたことを順々に進めて行きたいと思ひます。それでは空手の名称の問題につき話を進めることに致しましてこれに就いて私の見聞している範囲につき申し上げることに致します。最初空手が東京で紹介された時は「唐手」となつていたのであります。これは異国的に珍しいといふので段々普及されて行きましたが学校ではこの字がいけないといふので一時仮名で「から手」と書き大日本から手研究会と仮名で書いたものであります。これは過渡的な字の使い方でありまして。最近「空手道」として一般に使用されて居ります。東京では大体の大学は「空手部」と称して居りますが、まだ二、三個所は習慣的に「唐手部」と唱えて居ります。唐手を空手とするのは空手空拳の意味からであります。唐手といふ文字を用いますと今日の大学生や中学生には反感が起り面白くないのであります。故に日本武道としての将来の発展のために空手道といふ字に統一して中央と歩調を共にして進んで行つたらよくはないかと考へます。皆さんのご意見をご発表願ひます」¹⁸¹。

口火を切つたのは、仲宗根である。新聞社主催だが「座談会」を仕掛けた人物である

181 同上書。

ことがうかがわれる。仲宗根は、すでに空手道への改称の結論めいたことを話している。仲宗根の発現をまとめると、以下の内容である。

1. 国民体位の向上
2. 体育であり武道である
3. 日本精神の涵養

さらに、東京での唐手の普及状況と大学空手部の話をきっかけにして、「日本武道としての将来のために空手道という字に統一して歩調を共にする」ことを強調している。

連載（2）1936年10月28日（水）¹⁸²

「席者揃って 改称に賛成 武徳会でも問題化す

△花城氏

昔は空手と云わず唐手（トウデ）又は単に手（テー）といった。空手空拳で闘うという意味である。

△太田氏

我々も唐手（トーデー）といった。

△島袋氏

仲宗根さん、空手を最近空手道とっているが、之は柔道、剣道のように精神が主となって道の字をつけたのですか。

△仲宗根氏

それは精神修養の意味から使っているようです。

△太田氏

宮城さんなどは唐手という文字を使っているのですか。

△宮城氏

一般に唐手とっているのでそう使っていますが、これは軽い意味のものです。私の所へ空手を習いに来る者は「手（テー）を教えて下さい」といって来ます。それから見て従来は手（テー）といったようです。文字の内容から「空手」がよいと思います。島袋さんの云われたように柔道も柔術から柔道と名称が変化したが、支那では拳法のことを昔は白打といった。名称はかくのごとく時代によって変わる。私は空手というより

182 本社主催・空手座談会（二），琉球新報社，1936年10月28日。

は空手道という方がよいと思う。これに就いては以前に武徳会支部でも委員間に問題となったことがある。その後はこの問題は保留されているが、支部では「唐手道」と称している。近く振興会の組織も出来るから充実した名称としたい。

△小禄氏

宮城さんは空手を研究するためわざわざ支那へ行ったのですか。

△宮城氏

最初から稽古する気持ちでやったのではなく勝れた拳法であると知って習ったのです。

△小禄氏

本県には以前から固有な拳法があったのですか。

△宮城氏

何れの民族にもそれはあった。それが本県では手（テー）である。柔道、剣道、ボクシングと同様に改善進歩されて来た。

△許田氏

私も仲宗根さんの説に賛成です。一般県民はまだ唐手として通用しているから県内の空手研究家に図り研究会でも十分研究してからのことにして此場で即座に決めるのはどうかと思います。

△宮城氏

ここで直ぐ決めるというではありません。

△又吉氏

ご自分の信念を述べて下さい。

△花城氏

私の古い帳面にはみな空手と書いてある。

△古川氏

吾々の方でも中央へ大いに宣伝したいと思う。本場の方で流派の分かれているのは統一して全県下的に空手振興会を組織して県下中等学校や振興会の如きもので決議して全県下に普及すると共に第二、第三の普及方法を講じて貰いたい。

△仲宗根氏

許田さんのご意見もよくわかります。どう云う人に問い合わせる名称を決定するのか、または多数決でやるのか、または積極的に空手を研究している人々の間で決定するのですか。私はただ中央が空手と称しているからそれに従うというわけではありません。しかし学生達が夏季休みに地方へ公演に出掛け地方有力者や新聞社の後援で各地で空手実演

をやっているが、これは全国的に空手を普及するには就て甚だ有力であります。

これらの若い人達は「唐手」という字は歴史的に存在を認めて居るだけで、実際には空手道として自分達の力によって発展するものと自信を持ってかかっている。此の若い人達の数と実行力とが空手の将来を決定するものと思う。故に文字も「唐手」という字を一日にも早く「空手」に改めて行き、保守的に保存するという気持ちだけでなく、積極的に進展させると云う意味で考えて頂きたいと思います。

△許田氏

大勢がそうなれば空手とするのも悪くないでしょう」¹⁸³

昔の呼称として、花城と太田は「唐手（トーデー）」「手（テー）」を使用したことを述べ、島袋は「空手道」の「道」という精神の問題を指摘している。宮城も唐手は「軽い意味」として、「手（テー）」がよく使われているが、「空手」がよいと主張している。また、柔術が柔道へと変わった経緯もあり、名称は時代によって変化するとしている。

ここで注目されるのは、沖縄には以前から「固有な拳法」があったのかとの質問に、宮城は「手（テー）」がそうであると答えている。仲宗根は、若い人達が唐手を歴史的な存在として認めているだけで、実際には空手道として自分達の力によって発展するものと自信を持ってかかっていると指摘している。そして、文字も唐手という字を一日も早く「空手」に改めて、積極的に進展させると云う意味で考えていただきたいと述べている。

連載（3）1936年10月30日（金）¹⁸⁴

「唐手の文字は 沖縄の造語 積極的な武術「空手」

△城間氏

私は中等学校生徒を指導している体験から御話すると唐手の文字は生徒は喜ばない。それで私は拳法と書いてカラテと読ました。武器を使用しない武道という意味から空手と書くのがよいと思う。之なら現在、将来も奨励して差し支えないと思います。

△護得久氏

私は武徳会支部に関係していますので一言述べさせていただきます。空手は昭和8年に武

183 同上書。

184 同上書。

徳会支部から武道として承認されていますが、その際宮城先生は唐手と書かれたようです。それで若し空手と改称するなら武徳会支部でも改めて書き直して許可を受けねばなりません。支部の方では早速これを承認して手書きをするようにしたいと思っていますから決定は本部の承認を受ける必要があると思います。

△太田氏

中央に流行ったものは自然一般化する。那覇のアンシンビラが今ではハブ坂となり三味線も最近では蛇皮線というようになった。中央で称していることが自然とそれになって了う。言葉は矢張りそんなもので、中央で好むと云うし又中学校でもそうであるから「空手」とするのが便利ですな。

県民には面白くないかも知れないが唐の字で書いたものは沖縄の地方的なもの、空の字で書いたものは一般的に日本武道としての空手というように区別されると将来本家をとられることになる。矢張り空手とするのがよい。

△仲宗根氏

今まで御話になった方々は沖縄に永く居られた人ばかりであります。最近来られた学務部長さんのご意見をひとつ述べて頂きます。

△佐藤氏

空手についてはよく存じませんが、唐手とういうのは専門の先生方の御意見によって見ても余り根拠がないようですから空手がよいと思います。

△古川氏

他県から来た者には空手と書く方が魅力がある。私は早稲田で書いた立て看板を見たことがあります。其の時それが積極的な武術であるように感じました。しかし当地へ来て唐手の字を見せられて其の魅力が幾分消えました。

△仲宗根氏

今度は司令部の方の御意見を承りたいと思います。

△福島氏

空の字の方が実際とよく合致するようです。唐の字は知らない人には見当が付きません。

△仲宗根氏

こんなことがありました。自動車を引っ張ったりする或力持ちが小島流唐手術と看板を揚げて見せ物に利用しているのを見たことがあります。

△太田氏

空の字を嫌いな者は居ないが唐の字は嫌いだという人がある。

△宮城氏

私が布哇に行った頃のことですが、唐手というと支那人が親しみを持つようですね。

△古川氏

昨年体育協会では従来の弓道部を改めたことがあります。唐手を空手に改称するのも手続きとして難しいことはない。

△北氏

私は当地へ来るまでは空の字とっていました。

△安藤氏

文字をむやみに変えることはいけないと思います。例えば台湾や樺太あたりの地名は大部分変わっていますが土地の名称を変えると跡で調べる際に困ります。こうなったら吾々の商売があがったりです。

△太田氏

唐手とは元来この人がつけたものです。

△安藤氏

支那の小林寺派拳法が柔道と唐手の元祖だと思えますから唐手でも差し支えないでしょうが、然し私は日本主義の立場から空手に変えることに賛成であります。大衆文芸は歴史を考える必要があるのでこんな事を云うのです。

△仲宗根氏

柔道や空手の元祖を支那の小林寺拳法に求めるのは間違いです。三上於兔吉氏の小説に空手を唐手術として半異人の武術と書いてあります。空手について全然理解のないことを示しています」¹⁸⁵

本土では、「空」の理念を論じた慶應義塾体育会¹⁸⁶、摩文仁賢和¹⁸⁷、仲宗根源和¹⁸⁸、

185 本社主催・空手座談会（三）、琉球新報、1936年10月30日。

186 「空」に就いて、こぶし、慶應義塾空手研究会、1930年、pp. 2-11。

187 摩文仁前掲書108。書名と本文で、空手、空手道を使用している。

188 摩文仁賢和・仲宗根源和：攻防自在護身拳法 空手道入門、空手研究社興武館、1935年。書名と本文で空手、空手道を使用している。

船越義珍¹⁸⁹がすでに空手と型の改称を行っていた。また、流派も創設された¹⁹⁰。空手振興の方策を関係者が一堂に会して「空手座談会」を催したのである。

ここで最も注目されるのは太田の次の発言である。

「県民には面白くないかも知れないが唐の字で書いたものは沖縄の地方的なもの、空の字で書いたものは一般的に日本武道としての空手というように区別されると将来本家をとられることになる。矢張り空手とするのがよい」。中国由来を示す「唐」への嫌気や唐手の起源、見世物の唐手は日本全体の問題であるが、空手発祥の地沖縄の本音が語られている。

このような考えのもと、空手道への改称が統一した見解としてまとめられた。これを機に、空手道の呼称は沖縄と一般化され、県下の空手組織統一のため、「空手振興協会」（仮称）が結成されることになった。

第3項 沖縄における空手道の課題

「空の字で書いたものは一般的に日本武道としての空手というように区別されると将来本家をとられることになる」¹⁹¹という太田の発言は、沖縄の斯界と関係者の本音であり、日本の時代的背景・社会的状況を反映して、脱中国文化と日本の武道界に歩調を合わせ、空手道へと志向していったことがうかがわれる。

このことは、沖縄空手という立場と日本武道としての空手道の確立を目指すという2つの志向が同時に言い表されていると考えられる。唐手は中国由来を想起させることが問題となったが、近代沖縄で唐手が創造された頃、沖縄の唐手家や歴史家は、王府時代から琉球化した武術が唐手であり、琉球の徒手武芸、唐手は中国由来と論じていた。しかし、沖縄の空手家やそれを支える関係者や本土から派遣された役人や軍人、警察、マスコミなど各界の総意として沖縄空手の歴史的経緯がとらえ直されて、改称問題を論じていったのである。

空手が日本の武道として位置づけられるためには、改称は単なる呼称の変更の問題ではなく、政治的・社会的な時代状況を反映して行われた。

189 富名腰前掲書11, pp. 1-3。

190 剛柔流（1930年）、パンガキヌーン（1932年）、昭林流（1933年）、糸東流（1934年）などがあった（結成年については諸説がある）。

191 前掲書182。

第6節 仲宗根源和著『空手道大観』の刊行

第1項 刊行の意義と呼称の問題

本書は、1936年に催された琉球新報社主催の「空手座談会」の話し合いを経て、その成果として、仲宗根の執筆と編集のもとに、空手大家が加わって上梓されたと考えられる。『空手道大観』は、「武道は日本精神の培養基である」の序文の書き出しに見られるように、全文を通して武士道由来の日本の武道としての確立を目指して論じられている。沖縄空手を日本の武道として体系化し、日本精神の涵養を明確に打ち出している。

『空手道大観』が刊行された直後、講道館が発行する『柔道』¹⁹²に広告が掲載された。広告文は、次の通りである。(図-19)

| | |
|--|---|
| <p>◇著快きし久望待家道武國全◇</p> <p>社究研手空 主幹</p> <p>仲宗根源和の二大力作</p> | |
| <p>空手道大観</p> <p>四六倍大判和装本硬入 五號墨摺版名付印刷詳明 口繪二百個特繪千三百個 特價金・七圓也</p> <p>空手は現代武 道家の常識也</p> | <p>武道極意物語</p> <p>◇菊大判五百六十頁◇絶布製箱入背金文字◇特價金七圓也◇送料内地三錢外地六錢</p> <p>武道の修業は業だけでは駄目である。是非とも精神的方面の修養と相俟たなければい けない。武道の原理、其の趣意は剣道にも柔道にも相通する。本書は日本武道史上著 名な各流派の歴史と趣意を小説よりも面白く読みながら其の趣意を悟得せしむる快著</p> <p>内容目次――◇神陰流の巻◇ト傳流の巻◇御生流の巻◇一刀流の巻◇二天一流の巻◇ 直心影流の巻◇無刀流の巻◇北辰一刀流の巻◇心形刀流の巻◇鏡新明流の巻◇勝流 所の巻◇柔道柔術の巻◇無名達人の巻◇蹴流名人達人の巻◇空手道の巻◇神道無念流 の巻――説明數二百三十項目、いづれも興味津々として讀みずらぬ意味真に深長</p> |
| <p>喜納治五郎先生曰く「空手術は政防共に自在なり。或く全國に宣傳普及せらるべし」 岡子賢松將軍曰く「空手術は其構成、演練、簡にして行ひ易く、深くして變化に富む 空手は健康法、護身術、偵察法として最も理想的。劍道家や柔道家が空手を棄てずれ ばそれこそ是に金縛である。本書は空手を獨習せんとする人々には絶対に必要である</p> | |
| <p>(柳本春留局は金代)すまし致本送時即第次込申御キガハ</p> <p>番六五五〇六京東特振 町榮有・内ノ丸・市京東</p> <p>行發社會式株書圖京東</p> | |

図-19 『柔道』に掲載された『空手道大観』の広告

(出典：野村寛一，柔道，第9巻第9号，講道館，1938年，p. 51. より転載)

192 野村寛一：柔道，第9巻，第9号，講道館，1938年，p. 51。

この広告に見られる空手(道)、空手術の呼称の混在した状況は、沖縄で新界の改称が統一見解として出されて以降も、空手と空手道の呼称は不明確なまま、一般化されていないことがうかがえる。

「嘉納治五郎先生曰く『空手術は攻防ともに自在なり。広く全国に宣伝普及せらるべし』岡千賀松将軍曰く『空手術は其構成、演練、寛にして行ひ易く、深くして変化に富む空手は健康法、護身術、鍛錬法として最も理想的。剣道家や柔道家が空手を兼修すればこそ鬼に金棒である。本書は空手を独習せんとする人々には絶対に必要である』」¹⁹³。

空手道の呼称は、講道館長嘉納師範も岡将軍も共に「空手術」と記している。仲宗根自身も「空手研究社主宰」の肩書きを持ち、「空手は現代武道家の常識也」と宣伝し、自著『武道極意物語』では「空手道の巻」を使っている。

第2項 沖縄空手の理念と技法

『空手道大観』は、花城長茂、城間真繁、摩文仁賢和、知花朝信、大塚彦紀、平信賢の演武写真や糸洲安恒「唐手十箇条」、松村宗棍の墨蹟、花城「空手組手」の指導資料、船越義珍の「空手二十箇条」等も写真で紹介されている。空手道と棒術の型名は「慈恩」「拔砦」「壮鎮」「金剛の型（旧名周氏の棍）」として改称されている。また、新たに沖縄県空手道振興協会指導部制定とする「空手道基本型」（十二段）を発表している。これらは実演を挿絵で表し、解説が施されている。和道流開祖の大塚彦紀の「短剣捕表七本の形」の演武（写真及び挿絵）と解説は、本土の空手界との関わりがうかがわれ、平真賢の棒術金剛の型（旧名周氏の棍）の演武と解説は、本書に武器術を含めて扱っている。

これらは、戦前期の沖縄空手の近代化の到達点が著わされていると考えられる。

理由ははっきりしないが、「座談会」に参加した喜屋武朝徳、沖縄県体育協会の唐手部部長宮城長順、上地流開祖の上地完文の型やその解説は所収されていない。そのことからすると戦前期の沖縄空手の全体像を知る上では不十分といわざるを得ない。

一方、空手道の全国的普及をうかがわせるかのように裁判所員の空手道修練風景、慶應義塾大学空手部昇段式、早稲田大学空手部・拓殖大学空手部員・沖縄県立第二中学校生の集団演習・首里市第一小学生の集団演習風景の写真が所収されている。

型の演武の解説は、演武者の氏名が記されているが、技法の表記法や文章が統一されていることから筆者の仲宗根が大きく関与してまとめられたものと推測される。

193 同上書。

第6節 小結

沖縄空手は、沖縄と本土で複線的発展を遂げていった。糸洲以降、沖縄空手は学校教育と地域で近代化が進められていった。一方、船越義珍は関東における大学空手部を足がかりして、近代化を一層促進していった。また、摩文仁賢和、本部朝基、宮城長順等の沖縄空手の指導者たちも関西の大学空手部や道場経営を通して普及を推し進め、空手道の近代化が模索されていった。

船越が指導を行った型の体系化を型の構成を手がかりにして追うことによって、近代の体育化と武道化が図られており、技法が変容していったことが明らかになった。これは、「沖縄固有の武術」から「日本の武術空手」を唱えたことや「空」の理念によって空手道の呼称と型の改称が行われたことを示している。

宮城は、唐手を予備運動、基本型、補助運動、開手型、そして組手の5つに体系化を図っていった。そして、「攻防の実を得る」ことによって、究極的な目的を「武道精神の確立」におき、指導方針の改善で論じられた「体主心従」から「心主体従」への変更を論じている。

「空手座談会」は、呼称の改称と統一的な組織の創設が最も重要な目的であった。そのことは空手家だけでなく、各界からの参加者の意見が反映して実現していった。

この成果をまとめ上げたのが空手家ではない仲宗根源和による『空手道大観』であった。空手道は日本武道であり武士道由来と位置づけ、「武道は日本精神の培養基である」としている。「座談会」から「沖縄県空手道振興協会」が創立され、「空手道基本型」は十二段からなり、本書に所収された。

第5章 再出した「唐手」の呼称 — 「戦技」としての「唐手」 —

第5章 再出した「唐手」の呼称 「戦技」としての「唐手」－

第1節 はじめに

日本は軍国主義による中国、東アジアの国々への侵略戦争への道を歩み始めた。武道もその影響を強く受け、武術的側面が一層見直されていった。武道として「道」の概念は軍国主義教育によって、いかに戦争に役立てていくかが重要な課題となった。

沖縄は、日中戦争、アジア・太平洋戦争の終末に「本土防衛」の決戦地となった。戦時下で、空手道の呼称は、地元や大手新聞社の報道や大本営陸軍部発行の『国民徹底抗戦』で、空手道は敵を倒すための武術として、また敵に負けない精神修養の武道として位置づけられて、再び「唐手」の呼称が使用されていった。

第2節 沖縄戦と「唐手」

1941年、日本軍のハワイ真珠湾への奇襲攻撃によって始まった連合国（アメリカ、イギリス、オランダ等）軍とのアジア・太平洋戦争は、当初日本が優勢に進めていたが苦戦となり、日本は敗退が続いていった。国際情勢を反映した日本軍の侵略戦争の最終局面にあつて、沖縄は「本土防衛」のための凄惨な地上戦へと突き進んでいったのである。

一方学校教育と社会教育の軍国主義化は進み、沖縄県は、1939年度から「戦時体制に即応した『教育綱領』と『社会教育綱領』を策定して戦時下の沖縄教育の目標を次のように定めた」¹。

「教育綱領」（昭和14年6月制定）として、「(1)国体観念の明徴。(2)国語教育の徹底。(3)国民体位の向上。(4)科学教育の振興。(5)実践力の強化」のように定め、また、「社会教育綱領」（昭和14年8月制定）として、「国体観念を明媚にし国民精神の高揚を記す。(2)時局認識を深くし国策遂行の徹底には努（はげ）む。(3)大和協力勤儉力行以て県勢の振興を期す。(4)家族制度の美風を堅持し家庭教育の振興に努む。(5)体力を錬磨し進取明達の気風を涵養す」と定めている²。

沖縄県の施策として学校教育は、「軍国主義がほぼ完成される時期を迎え、『国体観

1 大城将保：沖縄戦，金城正篤・上原兼善・秋山勝仲地哲夫・大城将保：沖縄県の百年，山川出版社，2005年，p. 188。

2 前掲，沖縄県の百年，p. 188。

念の明徴』が教育の根本指導理念」と定められた。

また、青年学校は、全国では1935年に一斉に設立されたが、予備軍教育の役割を担うようになり、沖縄県では、1943年4月から県内全域に設置された。

さらに、1944年3月に公布された「決戦教育要綱」によって、学徒は全国的に国民防衛の一翼に組み入れられ、軍事工場への勤労働員の要員となった。

沖縄県では、沖縄守備軍（第32軍）が編成され、生徒達は、学徒勤労働員の陣頭に立つこととなった。

このような時局にあって、『空手道大観』刊行後の沖縄で空手がどのような影響を受けていったのか、次の記事には、空手が学校教育に再び導入を強化されて行く様子を知ることができる。記事の見出しは、「学童体育はこれで… 空手術を準正科に」として、「琉球・首里市第一校の体育」の紹介を報じている。沖縄は、「琉球」と表記され、すでに空手道の呼称が一般化されつつある中で、「空手術」が使用されている。

「南島琉球の特技として発達した空手術は今や全国的に広まり、男子のみならず女学校などでも護身術のひとつとして授けている向きも少なくない、今次事変で郷土の勇士が雄々しく出征してその第一線にたつや忽ち空手の威力を発揮して空拳よく敵将を倒したといふ武勇伝なども紹介され、沖縄県下の各学校ではこれこそ真の非常時型体育運動として準正科に採用した」³と体育科への採用の理由を述べている。

また、「精神的方面から見るとその型の指導によって胆力がすわり、沈着にしてかつ意思が強固となり体力に自信ができて来る、また一方肉体的方面から見れば軟弱な体質が強靱性のものとなり、体力を増進するの効が顕著で、しかも僅少なる時間と狭隘なる場所をもて事足りるのみならず相手を必要としない、また男女をとはず、室内外でできるから晴雨に関係しない長所がある」⁴として、空手の特徴とその効果が示されている。

学校長は、準正科とした動機について次のように述べている。

「本校が学童に課したのは体育運動としていろいろな長所と簡易性を持っているばかりでなく精神修養に資することが多いのでこれを正科の体操時の時の外に課外として課したのである、学童は喜んでこの空手術習得に一生懸命である」⁵。空手は、体育的効果と精神修養があるとしている。

さらに、「掛声も勇ましく裸体で活発な攻防術を練る学童の空手練習の影響はどうで

3 空手術を準成果に、東京朝日新聞、1940年3月17日。

4 同上書。

5 同上書。

あるか」⁶との記者の問いかけに、同校長は、「体格がよくなり体力が増進し更に沈着にして動作が機敏となる好結果をもたらしてゐる、学生は5年以上が適し、大人のする様な型をせず無理のないものを選んでゐるがなるべく速に全国小学校に普及させたいものだ」⁷と語っている。この様子は、北部地区の小学校で実施され、「本部校学童の空手猛訓練」の見出しで掲載された写真によく表れている⁸。(図-20)

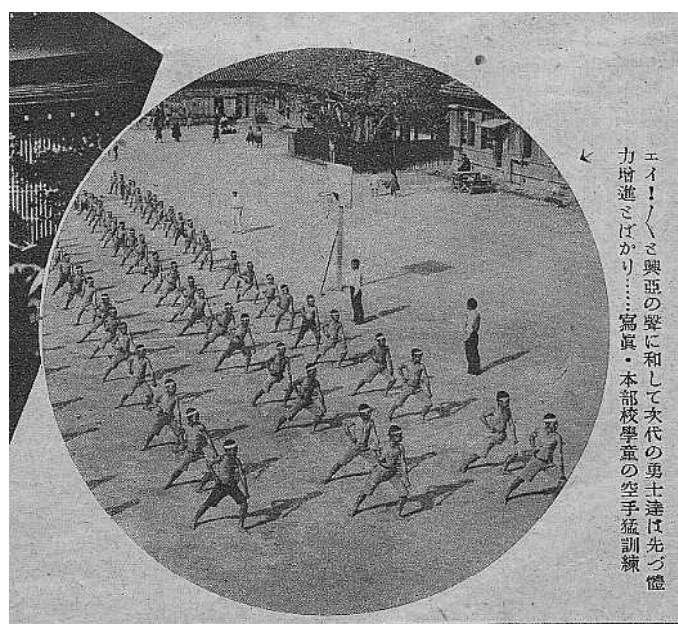


図-20 本部小学校児童の空手猛訓練風景
(出典：沖縄朝日新聞，1934年6月24日．より転載)

第3節 戦時下における大手新聞社の報道と『国民抗戦必携』

沖縄県は、アジア・太平洋戦争の末期に、日本本土最後の砦となり、1945年3月26日に米軍が慶良間諸島に上陸を開始した。さらに、その5日後の31日には、米軍は南西諸島全域の占領を宣言した。沖縄戦の特徴は、

第1に、「長い、激しい、地上戦闘という側面」があったこと

第2に、「県民の根こそぎ動員による戦闘協力」体制となったこと

第3に、「日本兵による住民虐殺、『集団自決』の強要、スパイ嫌疑事件、食料強奪、

6 同上書。

7 同上書。

8 同上書。

避難壕追い出し等の軍民摩擦事件が多発した」こと

第4に、「正規軍人を上まわる県民の犠牲者数」があったこと

第5に、「米軍占領が長期におよび恒久基地化が固定したこと」

であった⁹。このような沖縄戦の結果に至る戦局は、武道として位置づけられていた空手道の学校教育への導入、社会体育、地域行事等への体育的な普及、武道の普及どころではなく、沖縄社会は、軍民一体となって米軍を迎え撃つという悲劇的なことを強いられていったのである。すでに日本の武道として、主に関東、関西の大学を足がかりに各地に普及していた空手道は、沖縄では全く異なった状況にあった。

沖縄で、1936年の琉球新報社主催「座談会」で斯界の大家や関係者が一堂に会して催されて以降、唐手から空手道への改称によって、沖縄だけでなく本土の大学空手道部や刊行物にも日本武道としての呼称として使用されていた。

しかし、沖縄戦時には、空手の呼称やその位置づけに変化が表れている。軍国主義教育の面から見ると、武道は、日本精神を涵養するのに役立たせることが重要な課題となっていた。このことをよく表しているのが、米軍上陸後3日目の新聞報道である。

朝日新聞では、「合言葉は一人十殺 竹槍なくば唐手で 老幼も起つ沖縄県民 討つぞ盲爆の仇 敵100万引受ける覚悟」¹⁰の見出しで、地上戦に突入した「南西諸島」からの報告として次のように報じられた。

「今月初旬に全青壯年を一丸とした義勇軍の結成式が那覇市の官弊小社波上宮の広場で行はれた、私は他に要務があつて出席できなかつたが『一人十殺』を合言葉として戦意の沸騰ぶりはいひ現しやうのないほどであつたさうだ鉄砲がないなら竹槍でいかう、竹槍が折れたら唐手でいかう—この決意だ」。

このように、「唐手」は戦意高揚の象徴となった。

東京新聞では、富田常雄が「武魂」の記事を「敵は沖縄に上陸を始めた」の書き出しで2回連載の沖縄県民への檄文を連載した。その呼称は「唐手」と記している。

富田は（一）では、「今日の戦は科学兵器の戦ひであつて、ただ肉攻を以てしては如何んともし難いものではあるが、最後の一線に至つて物を言ふものは魂である。日本人伝統の武魂である。この闘魂を最も逞しく身に付けた人々が沖縄人であると云ふも過言ではあるまい。沖縄人の生活の中にしみ込んだものに徒手空拳の武術唐手がある」とし

9 金城正篤・上原兼善・秋山勝・仲地哲夫・大城将保：沖縄県の百年，山川出版社，2005年，pp. 225-228。

10 竹槍なくば唐手で，東京朝日新聞，1945年3月29日。

て「恐るべき拳法の発達となり、同時に彼等の魂にまで剛術唐手の不退転、不屈の強靱な根が植えつけられ、育てられたのである」と記している¹¹。

さらに、(二)では、「唐手は、拳一つで石も砕く、二本の指先で厚板を割る。足のひと蹴りで相手の頭蓋骨を割る」と殺傷力の高さが論じられ、「唐手は堂々たる武道であり、唐手に先手なしと称せられる様に、どこまでも防御に発する術だ。だが、発すれば、これは必殺の術であり、武器に等しい人間の飛び道具である・・・私は奴等米鬼が日本武術の恐るべきを肝に命じて、沖縄から退散せざるを得ぬ日が来るのを信じて居る」と記している¹²。

地上戦において、悲惨な状況が展開されつつある沖縄で、「唐手」の武術的側面を遺憾なく発揮して米軍を撃退することを信じていると檄を飛ばしている。

読売新聞には、記者が門司から電話取材を行って、九州にいる母親から宮古郡にいる息子に送った激励の手紙を紹介している。この記事の見出しは、「父は唐手、母も手榴弾 私達の屍を乗り越えて増産せよ 肉親へ送る沖縄便り」と記されている。

厳しい状況を乗り越えることを願い、「私も手榴弾の投げ方を覚えました。お父さんは唐手のご自慢、胸の筋金はまだ、弛んでをらぬと腕を撫し、老後に死花を咲かせることが出来るとむっつりやの日頃に似合ず上機嫌であります」¹³

このように、沖縄戦開始直後に本土の大手新聞では、沖縄の空手道に対して「唐手」の呼称が一斉に使われ、武術としてどのように敵軍と戦うかを記している。

これは、大本営陸軍部が刊行した『国民抗戦必携』¹⁴により明確に示されている。冊子が刊行され、一般に配布されるにあたってその概要が『朝日新聞』に4回にわたり連載された¹⁵。第1回目に、冊子刊行の目的が次のように記されている。

「大本営陸軍部ではこのほど『国民抗戦必携』と『国民築城必携』を刊行して一般に配布することになったが、これ全国民就中、国民義勇隊に敵と戦ふ方式を示したもので

11 富田常雄：唐手武魂(一)，東京新聞，1945年4月3日。

12 富田前掲書11，(二)，1945年4月4日。

13 父は唐手母は手榴弾，読売新聞，1945年5月14日。

14 1945年4月25日に一般住民の戦闘動員のために大本営陸軍部が刊行した冊子。沖縄戦基に「一億総特攻」，沖縄タイムス，2010年5月13日。

15 国民抗戦必携①②③④，東京朝日新聞，①は1945年6月10日、②は11日、③は12日、④は13日。

ある」としている¹⁶。そして、2回目には、「白兵戦闘と格闘」について、「格闘になったなら『みぞおち』を突くか、鞆丸を蹴る、あるひは唐手、柔道の手を用ひて絞殺する、一人一殺でもよい、とにかくあらゆる手を用ひてなんとしてゞも敵を殺さねばならない」と記している¹⁷。この冊子には挿絵があり、具体的に示されている。

第4節 小結

「空手座談会」によって、沖縄空手は日本の武道を志向して空手道と改称した。しかし、戦況が悪化して地上戦に突入した沖縄県の状況に対して、本土の大手新聞は沖縄県民への檄文を掲載し、大本営陸軍部は『国民抗戦必携』を刊行した。その中では再び「唐手」の呼称が使用された。「唐手」の呼称には、白兵戦闘術として武術的側面が強く込められている点である。これは、「唐手」とともに柔道にも同じ位置づけがなされている。(図-21)



図-21 『国民抗戦必携』で使用された唐手の呼称
(出典：沖縄タイムス，2010年5月13日．より転載)

沖縄空手の呼称の変遷は、時代の要請を受け、表記や読み方、文字の定義づけだけで

16 前掲書15，①。

17 前掲書15，②。

なく沖縄や本土の斯界や関係者、政治家、軍部、行政など様々な立場の意見や方針を反映して「唐手」の呼称が再出したと考えられる。

終章 一まとめと課題一

終章 ーまとめと課題ー

本研究では、古琉球から近代沖縄において、沖縄空手がどのように創造され、展開されてきたのかを呼称の変遷を手がかりにして考察を行った。呼称が沖縄空手の創造と展開を明らかにするうえで重要な手がかりとなるのは、呼称の変遷が沖縄空手の創造と展開を象徴的に表しているからである。

琉球独特の徒手武芸は、近世琉球以降に型を媒介に継承されてきた武術である。那覇の士族が首里王府の布達を受けて実践してきた示現流ややわらとともに嗜んだからむとうの史料がそのことをよく示している。からむとうは、琉球人が名づけた自称の呼称と考えられる。しかし、この呼称は、他の史料では確認されていない。

からむとうが中国拳法が琉球化して琉球の武芸となったことを裏づけていると仮説を立てたのは、まず、示現流とやわらとともに那覇士族が一芸として嗜んでいたことにある。首里王府の性格を反映して、実用的な武術としたのではなく、「文人」としての第一義を持ちつつ、王府の役人としての心構えや護身術を目的としていたからである。

また、近世琉球の徒手武芸の史料を明らかにする史料は少ない。からむとうが著された「阿嘉直識遺言書」(1778年)は、島津侵攻後に、首里王府から布達された『羽地仕置』(1667年)、中国拳法が披露されたことを示す『大島筆記』(1763年)、薩摩藩士が名づけた、瓦を割る琉球士族の手ツクミが記された『薩遊紀行』、拳を鍛える男の絵図が描かれた『南島雑話』(1855年)が、これまでの沖縄空手の歴史研究では個別に考察がなされてきた。本研究では、これらの史料を関連づけて検証することによって、琉球の徒手武芸の存在と諸相を垣間見ることができたのではないかと考えている。19世紀半ば頃までの史料には、冊封使の使録や英国の軍人や外交官が書いた記録等があり、琉球の徒手武芸の存在をうかがい知ることができる。

19世紀半ば以降の琉球の徒手武芸は、唐手という自称の呼称が生み出され、近代沖縄では一般化されていった。近世琉球から近代沖縄の時代は、大きな世代わりとなるが、琉球の徒手武芸が育まれてきた背景は日本の一地方とは異なる独特の歴史的な時代背景を持っていた。

唐手の特徴を見ると、3つの側面の重なりを持つことが分かった。1つ目は、武術としての殺傷性を持つこと、2つ目は、教養としての武芸、3つ目は、芸能としての役割を持ち、それが重なり合った全体像を持っていた。

日本国家の一地方になった沖縄県は、強権を伴った「廃藩置県」によって、「琉球復

国運動」が盛んに行われ、唐手は、複雑な問題を孕んだまま継承されていった。その様子を新聞や教育関係誌は記事として残している。そこからうかがわれる唐手像は、疎まれる唐手、地域に継承される唐手、学校行事で披露される唐手であった。このとき唐手の社会的評価は、様々に揺れ動いていたと考えられる。

唐手の社会的評価が見直されるのは、学校教育の体操科の一部として実施されることや運動会、学芸会等の学校行事への導入であった。公教育の教材として取り入れられたことは、人々に広く認知され、沖縄で急速に県内全域で実施される契機となった。さらに、世相を反映して、同化教育、軍国主義教育に取り込まれていった。学生等の本土での唐手の演武や本土から来沖して視察に訪れた軍人、皇族等への「尚武の気象」を示す演武披露は、同時に、本土へ普及していくことにもなった。

本土へ普及した唐手は、学校教育を足がかりに普及した沖縄と大学空手部を中心に普及が進んだ状況とは異なっていた。唐手は、複線的発展を遂げて、沖縄と本土で近代化が促進されていったが、いずれも日本の武道としての確立を目指して取り組まれていった。流派が発生し、空手道の呼称の一般化と統一組織の創設は、武士道由来の日本の武道として歴史が見直されていった。

このことが象徴されているのが空手道の呼称と型名の改称であった。呼称の変遷は、表記、呼び名、「空」の定義や自称か他称かという複合した条件から名づけられていったのである。

近代の終焉となったアジア・太平洋戦争では、沖縄は地上戦となる戦禍に見舞われた。米国を主とする軍隊が上陸し、多くの一般住民も巻き添えになって約20万人が沖縄戦で没した。地上戦となったそのときに、再び「唐手」の呼称が武術的側面を強く込められて使用された。

このような呼称の変遷を沖縄空手の創造と展開を知る上で概観すると次のようにまとめることができる。(図-22)

沖縄戦の戦禍によって多くの人材や文物を失い、その中には、沖縄空手の指導者も多く見られた。戦後、沖縄空手の普及活動は中断することになった。さらに、沖縄は日本から分断され27年間に及ぶ米軍統治下に置かれ、空手道の動向も日本本土とは異なる経過を辿ることになった。

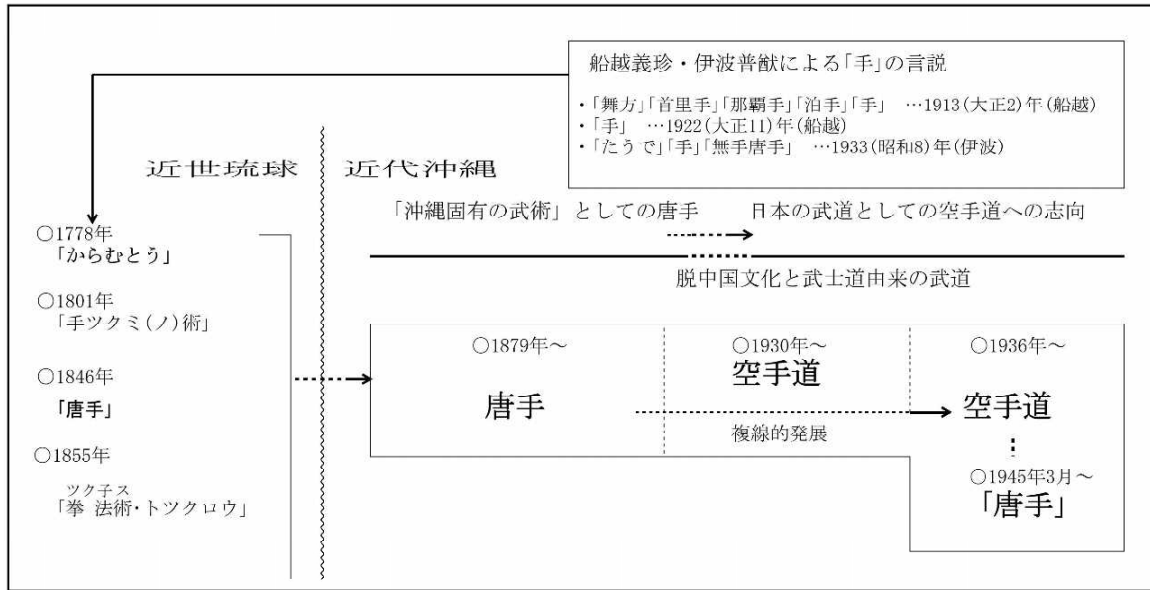


図-22 沖縄空手の呼称の変遷 (作成：嘉手苺徹)

沖縄空手は、空手発祥の地としての文化的アイデンティティを示しつつも、本土で展開された日本の武道としての空手道を志向しつつ、理念の構築や近代化の方向に対して複線的発展から同位置のルールに統一されつつあった。

空手道史にとってこのような経緯は、多くの課題の解明が進まないまま、戦前期に論じられてきた言説や論考を今日でもそのまま引用している状況にあるのが実状である。

今後の課題として、沖縄学の伊波普猷、東恩納寛惇、真境名安興、仲原善忠等の空手史に関連する論文をその当時の時代的背景を鑑みて、再検証する必要がある。また、戦前期の空手家や関係者等に伝わる口承や論文を近年復刻された単行本、新聞、教育関係誌等とさらに詳細に比較・分析することによって、史実を明らかにする作業が挙げられる。その際に、空手道史の研究は、近世琉球の唐手を基盤として創造されてきたことから、沖縄独特の歴史と風土に育まれた沖縄空手の創造と展開を踏まえつつ、複線的発展を遂げて来た観点から考察する必要がある。

文献

- ・阿嘉直識（島袋源一郎）：阿嘉親雲上の遺言書，沖縄教育，沖縄県教育会，1941年。
- ・阿嘉直識：阿嘉親雲上の遺言書，沖縄教育，沖縄県教育会，1941年。
- ・赤嶺守：琉球王国 東アジアのコーナーストーン，講談社，2004年。
- ・赤嶺守：琉球士族の反抗，沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室：沖縄県史 各論編，第5巻 近代，沖縄県教育委員会，2011年。
- ・安里源秀：沖縄師範学校歴代学校長，龍潭百年，龍潭同窓会，1981年。
- ・安里進：はじめに，総論「古琉球」概念の再検討，沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室：沖縄県史 各論編，第3巻 古琉球，沖縄県教育委員会，2010年。
- ・新崎盛珍：思出の沖縄，新崎盛珍著書出版記念会，複製再版，1976年。
- ・尹曦炳：からて，韓武館出版部，1947年。
- ・池宮正治：御冠船踊－組踊と舞踊－，海洋博覧会記念公園管理財団，2000年。
- ・池宮正治：大島筆記，沖縄大百科事典刊行事務局：沖縄大百科事典，上巻，沖縄タイムス社，1983年。
- ・井上俊：武道の誕生，吉川弘文館，2004年。
- ・伊波普猷：沖縄歴史物語，伊波普猷全集，第2巻，平凡社，1974年。
- ・伊波普猷：古琉球の武備を考察して「からて」の発達に及ぶ，をなり神の島，伊波普猷全集，第5巻，1974年。
- ・伊波普猷：古琉球の武備を考察して「からて」の発達に及ぶ，伊波普猷全集，第5巻，平凡社，1974年。
- ・上地完英監修：精説沖縄空手道－その歴史と技法，上地流空手道協会，1977年。
- ・植村常次郎：船越義珍先生還暦詩文集，大日本唐手研究会，1933年。
- ・E・W・Satow：Notes on Loochoo, THE ASIATIC SOCIETY OF JAPAN. , LAKE, CAWFORD & CO.; KELLY & CO., 1873年。
- ・恵原義盛：名越佐源太，沖縄大百科事典刊行事務局：沖縄大百科事典，下巻，沖縄タイムス社，1983年。
- ・『大島筆記 全』，(3)，伊波普猷文庫，琉球大学附属図書館蔵。
- ・『大島筆記』，坤，k09/h45/131，沖縄県立図書館蔵。
- ・『大島筆記』，二，K09/H45/126，沖縄県立図書館蔵。
- ・『大嶋筆記』，副書名：良熙潮平親雲上談話，江戸期写本，巻冊中，K200.8 /TO13/2，沖縄県立図書館蔵。
- ・大城将保：沖縄戦，金城正篤・上原兼善・秋山勝仲地哲夫・大城将保：沖縄県の百年，山川出版社，2005年。
- ・大田昌秀：沖縄人とは何か，サン印刷，1980年。

- ・大田昌秀：琉球新報，沖繩大百科事典刊行事務局：沖繩大百科事典，下巻，沖繩タイムス社，1983年。
- ・大槻文彦：言海，筑摩書房，2012年。
- ・沖繩県：中期「しまくとぅば」普及推進行動計画，沖繩県，2013年
- ・沖繩県沖繩史料編集所：羽地仕置，沖繩県史料 前近代1，沖繩県教育委員会，1981年。
- ・沖繩県体育協会史編集委員会：沖繩県体育協会史，沖繩県体育協会，1995年。
- ・沖繩県文化振興会公文書管理部史料編集室：沖繩県史 資料編7，伊江親方日々記，1999年。
- ・沖繩県立首里高等学校：学校沿革史，複製版，沖繩県立首里高等学校，2001年。
- ・沖繩県立図書館史料編集室：沖繩県史料 前近代8 芸能I，沖繩県教育委員会，1995年。
- ・嘉手苺徹：「空手の呼称の変遷にみる“沖繩の文化的アイデンティティ”のダイナミズムとゆらぎ」，復帰40年沖繩国際シンポジウム報告書，復帰40年沖繩国際シンポジウム報告書実行委員会，2012年。
- ・嘉手苺徹：「手」から「唐手」へ，島村幸一編：琉球 交差する歴史と文化，勉誠出版，2014年。
- ・嘉手苺徹：近代における空手道（唐手）の型の創造に関する一考察－富名腰義珍の著作における「型の構成」を手がかりにして－，武道学研究，第49巻，第2号，日本武道学会，2016年。
- ・嘉手苺徹：空手の名称の変遷－②「唐手（からて）」から「空手道」への変容－，日本武道学会代44回大会，研究発表抄録，日本武道学会，2011年。
- ・嘉手苺徹：空手の名称の変遷空手の名称の変遷－①「手（ティー）」から「唐手（からて）」への変容，日本武道学会第43回大会，研究発表抄録，日本武道学会，2010年。
- ・嘉手納宗徳：尚巴志，沖繩大百科事典刊行事務局：沖繩大百科事典，中巻，沖繩タイムス社，1983年。
- ・嘉手納宗徳：武備，沖繩大百科事典刊行事務局：沖繩大百科事典，下巻，沖繩タイムス社，1983年。
- ・河津梨恵：『南島雑話』の構成と成立背景に関する一考察，史料編集室紀要，29号，2004年。
- ・漢那敬子：解題，史料紹介 岸秋正文庫文庫「薩遊紀行」，史料編集室紀要，沖繩県教育委員会 第31号，2006年。
- ・岸秋正寄贈文庫（沖繩県立公文書館）
- ・球陽研究会：球陽，読み下し編，角川書店，1974年。
- ・金城正篤：台湾事件，沖繩大百科事典刊行事務局：沖繩大百科事典，中巻，沖繩

- タイムス社，1983年。
- ・金城正篤：方言論争，金城正篤・上原兼善・秋山勝・仲地哲夫・大城将保：沖縄県の百年，山川出版社，2005年。
 - ・金城正篤・上原兼善・秋山勝・仲地哲夫・大城将保：沖縄県の百年，山川出版社，2005年。
 - ・金城裕：月刊空手道，合本複刻，榕樹書林，1997年。
 - ・金城裕：唐手から空手へ，日本武道館，2011年。
 - ・金城裕寄贈文庫（沖縄県立図書館）
 - ・金城正篤：琉球処分，沖縄大百科事典刊行事務局：沖縄大百科事典，下巻，沖縄タイムス社，1983年。
 - ・下川五郎：「空」に就いて，木暮清雄：こぶし，慶応義塾空手研究会，1930年。
 - ・公益財団法人全日本空手道連盟，<http://www.jkf.ne.jp/topics/news/20160804/8821>，2016年11月30日）と「KARATE」
（WORLD KARATE FEDERATION,<http://www.wkf.net/index.php>，2016年11月30日。
 - ・広辞苑，第6版，DVD-ROM版，岩波書店，2008年。
 - ・国立国語研究所，沖縄語事典，国立国語研究所史料集 5，大蔵省，1976年。
 - ・小島瓊禮：阿嘉直識遺言書，沖縄大百科事典刊行事務局：沖縄大百科事典，上巻，沖縄タイムス社，1983年。
 - ・小玉正任：はじめに，琉球と沖縄の名称の変遷，琉球新報社，2007年。
 - ・近藤健一：（1）会話伝習所，第3節 琉球処分直後の学校設置，第1章 学校が「大和屋」と呼ばれた頃，近代沖縄における教育と国民統合，北海道大学出版会，2006年。
 - ・近藤健一郎：1 近代における方言札の出現，方言札 ことばと身体，社会評論社，2008年。
 - ・近藤健一郎：第2節 学校教育の実態，第2章 近代教育の導入，沖縄県文化振興会史料編集室：沖縄県史，各論編，第5巻，近代，沖縄県教育委員会，2011年。
 - ・財団法人全日本空手道連盟：空手道形教範，ベースボール・マガジン社，2002年。
 - ・崎浜秀明編著：独物語，蔡温全集，本邦書籍，1984年。
 - ・笹間良彦：図説 日本武道辞典（普及版），柏書房，2003年。
 - ・後多田敦：琉球救国運動，Mugen 舎，2010年。
 - ・島尻勝太郎：中山伝信録，沖縄大百科事典，中巻，沖縄タイムス社，1983年。
 - ・島袋全発：打花鼓，島袋全発著作集，おきなわ社，1956年。
 - ・島村幸一：琉球船、土佐漂着史料にみる日本文芸の享受，立正大学国語国文，第46号，立正大学国語国文学会，2008年。
 - ・下川五郎：「空」に就いて，こぶし 創刊号，慶應義塾空手研究会，1930年。
 - ・下地聡子：近代沖縄における新聞の変遷，沖縄県史，各論編 第5巻 近代。

- ・下中直人：沖縄県の地名，日本歴史地名大系第 48 卷，平凡社，2002 年。
- ・首里市役所：沖縄県首里市市政十周年記念誌，首里市役所，1931 年。
- ・清国義和団の動乱，琉球教育，第 53 号，沖縄県私立教育会事務所，1900 年。
- ・杉本善郎：武徳誌，第 3 編，第 6 号，武徳誌発行所，1908 年。
- ・杉本善郎：武徳誌，第 4 編，第 9 号，武徳誌発行所，1909 年。
- ・鈴木耕太：冊封の舞台に供された組踊，沖縄文化 第 43 号巻 2 号，沖縄県立芸術大学，2009 年。
- ・鈴木耕太：組踊，的討物の歌謡，琉球アジア社会文化研究 第 9 号，琉球アジア社会文化研究会，2006 年。
- ・戚継光：紀効新書，卷之 5，江戸書林，1846 年。
- ・戚継光：武備志，卷 91，中国兵書集成，中国兵書集成編委会編，解放軍出版社，1987 年。
- ・寒川恒夫：技の言語化，早稲田大学体育学研究紀要 34，早稲田大学体育局，2002 年。
- ・寒川恒夫編：図説スポーツ史，朝倉書店，1991 年。
- ・寒川恒夫編：教養としてのスポーツ人類学，大修館書店，2004 年。
- ・寒川恒夫：日本武道と東洋思想，平凡社，2014 年。
- ・高宮城繁・新里勝彦・仲本政博編著：沖縄空手古武道事典，柏書房，2008 年。
- ・高宮城繁寄贈文庫（沖縄空手会館）。
- ・高良倉吉：羽地仕置，沖縄大百科事典刊行事務局：沖縄大百科事典，下巻，沖縄タイムス社，1983 年。
- ・高良倉吉：解題，沖縄県沖縄史料編集所：沖縄県史料，前近代 1，沖縄県教育委員会，1981 年。
- ・高良倉吉：琉球王国の構造，吉川弘文館，1987 年。
- ・知念朝功：学校のあゆみ年表，養秀百年，養秀同窓会，1980 年。
- ・照屋信治：近代沖縄教育と「沖縄人」意識の行方－沖縄県教育会機関誌『琉球教育』『沖縄教育』の研究－，溪水社，2016 年。
- ・照屋信治：第 3 章 1910 年代の『沖縄教育』誌上の「新人世代」の言論御－親泊朝擢の編集記を中心に－，溪水社，2014 年。
- ・遠山寛賢：奥義秘術 空手道，鶴書房，1956 年。
- ・遠山寛賢：空手道大宝鑑，鶴書房，1960 年。
- ・遠山寛賢：護身・鍊胆 空手道，鶴新書，1956 年。
- ・渡嘉敷唯賢：沖縄空手秘伝「武備志新釈」，文進印刷，1995 年。
- ・徳田安貞：唐手，球陽，第 18 号，沖縄県立中学校学友会，1909 年。
- ・徳田安貞：唐手雑感，養秀，養秀同窓会，1961 年。
- ・富木謙治：武道論，大修館書店，1991 年。

- ・豊嶋建広・井下佳織・嘉手苧徹・浜崎鈴子：空手道の国際化における諸問題，空手道研究，第16号，日本武道学会空手道専門分科会空手道研究会，2013年。
- ・『内閣文庫』，番号23769。
- ・永井竜一：南島雑話補遺編5，鹿児島大学付属図書館蔵，1933年。
- ・長澤規矩：和国本明清史料集 第4集，及古書院，1974年。
- ・仲宗根源和：空手研究 第一集，空手研究社興武館，1934年。
- ・仲宗根源和：空手道大観，東京図書，1938年。
- ・仲宗根源和：武道極意物語，東京図書，1938年。
- ・仲原善忠：仲原善忠全集，第1巻，沖縄タイムス社，1977年。
- ・仲原善忠：琉球王国の性格と武器，沖縄と小笠原，4号，1958年。
- ・仲原善忠：琉球王国の性格と武器，仲原善忠全集，沖縄タイムス社，1977年。
- ・長嶺将真：史実と伝統を守る沖縄の空手道，新人物往来社，1975年。
- ・中村保夫寄贈文庫（沖縄空手会館）がある。
- ・中本正智：はしがき，琉球語彙史の研究，三一書房，1983年。
- ・中本正智：琉球方言，沖縄大百科事典，下巻，1983年。
- ・仲本政博・津波清：沖縄伝統古武道とは何か，高宮城繁・新里勝彦・仲本政博：沖縄空手古武道事典，柏書房，2008年。
- ・波平恒男：同化・差別・皇民化，沖縄県史，第5巻，近代，。
- ・二木謙一・入江康平・加藤寛共編：日本史小百科，東京堂出版，1994年。
- ・二山和睦，1867年（組躍，那覇市歴史博物館所蔵）。
- ・西里喜行：明治国家と琉球処分，沖縄県史，各論篇，第5巻，近代，。
- ・西山松之助：近世芸道論，岩波書店，1972年。
- ・日本国語大辞典第2版編集委員会：日本国語大辞典，第2版，第4巻，小学館，2001年。
- ・日本国語大辞典第2版編集委員会：日本国語大辞典 第2版，第9巻，小学館，2001年。
- ・日本武道館：日本の武道，日本武道館，2007年。
- ・野村寛一：柔道，第9巻，第9号，講道館，1938年。
- ・原田禹雄：夏子陽使琉球録，榕樹書林，2001年。
- ・原田禹雄：郭汝霖重編使琉球録，榕樹書林，2000年。
- ・原田禹雄：徐葆光 中山伝信録 新訳注版，榕樹書林，1999年。
- ・原田禹雄：張学礼 使琉球紀・中山紀略，榕樹書林，1998年。
- ・原田禹雄：福州府志，明代琉球資料集成，榕樹書林，2004年，p.145。
- ・原田禹雄：訳注 陳侃 使琉球録，榕樹社，1995年，p.27)。
- ・原田禹雄：訳注 明代琉球史料集成，榕樹書林，2004年，p.330)。
- ・原田禹雄・三浦囃雄訳注：蕭崇業・謝杰使琉球録，榕樹書林，2011年。

- ・ハワイ州立大学・西塚邦雄編：琉球教育，復刻版，第2巻、第13号，本邦書籍，1980年。
- ・東恩納盛男・嘉手苺徹：東恩納寛量，高宮城繁・新里勝彦・仲本政博編著：沖縄空手古武道事典，柏書房，2008年。
- ・東恩納盛男・嘉手苺徹・高宮城繁：宮城長順，高宮城繁・新里勝彦・仲本政博編著：沖縄空手古武道事典，柏書房，2008年。
- ・沖縄今昔，東恩納寛惇全集 5，第一書房，1978年。
- ・東恩納寛惇：仕置原文，校注 羽地仕置，東恩納寛惇全集 2，第一書房，1978年。
- ・東恩納寛惇：阿嘉直識遺言書，東恩納寛惇全集 5，第一書房，1978年。
- ・東恩納寛惇：阿嘉直識遺言書，歴史と国文学，第27巻21号，太洋社，1942年。
- ・東恩納寛惇：阿嘉直識遺言書，歴史随筆，東恩納寛惇全集 5，第一書房，1978年。
- ・東恩納寛惇：講演『阿嘉親雲上遺言書』について，養秀，第1号，1975年。
- ・東恩納寛惇：士と武士（その一）（その二）（沖縄と小笠原，財団法人南方同胞援護会，1957年。
- ・東恩納寛惇：序，富名腰義珍：琉球拳法 唐手，武俠社，1922年。
- ・東恩納寛惇：付録阿嘉直識遺言書，沖縄今昔，南方同胞援護会，1958年。
- ・東恩納寛惇：東恩納寛惇全集 2，第一書房，1978年。
- ・東恩納寛惇：東恩納寛惇全集 5，第一書房，1978年。
- ・東恩納寛惇：東恩納寛惇全集 9，第一書房，1978年。
- ・比嘉武信：新聞に見るハワイの沖縄人90年（戦前編），若夏社，1990年。
- ・肥後藩士（詳細不明）：薩遊紀行，1801年（沖縄県公文書館蔵）。
- ・比屋根照夫：島袋全発，沖縄大百科事典刊行事務局：沖縄大百科事典，中巻，沖縄タイムス社，1983年。
- ・深沢秋人：第1章 久米村の成立，第4部 古琉球の断面，沖縄県文化振興会史料編集室：沖縄県史，第3巻，古琉球，沖縄県教育委員会，2010年。
- ・船越義珍：空手道一路，産業経済新聞，1956年。
- ・富名腰義珍：空手道教範，大倉広文堂，1935年。
- ・富名腰義珍：増補空手道教範，広文堂書店，1941年。
- ・富名腰義珍：琉球拳法 唐手，武俠社，1922年。
- ・富名腰義珍：鍊胆護身唐手術，広文堂，1925年。
- ・ベイジル・ホール著、春名徹訳：朝鮮・琉球航海記，岩波文庫，1986年。
- ・平凡社地方資料センター：日本歴史地名大系第48巻 沖縄県の地名，平凡社，2002年。
- ・本会々員原国政勝氏の危難，ハワイ州立大学・西塚邦雄編：琉球教育，第1巻，

- 本邦書籍，復刻版，1980年。
- ・真栄城勉：明治期の沖縄県における運動会に関する歴史的研究，琉球大学教育学部紀要第1部・第2部(42)，琉球大学教育学部，1992年。
 - ・前林清和：近世日本武芸思想の研究，人文書院，2006年。
 - ・真栄平房昭：第1章 16～17世紀における幕藩制支配，第1部 近世琉球への転換，沖縄県文化振興会資料編集室，沖縄県史，第4巻，近世，2005年。
 - ・真境名安興：沖縄一千年史，真境名安興全集，第1巻，琉球新報社，1993年。
 - ・真境名安興：沖縄教育史要，真境名安興全集，第2巻，琉球新報社，1993年。
 - ・松田隆智：中国武術一少林拳と太極拳，新人物往来社，1972年。
 - ・松本信雄：空手道集成，慶応義塾体育会空手部，1936年。
 - ・摩文仁賢和：攻防自在 護身術空手拳法，大南洋社，1934年。
 - ・摩文仁賢和：攻防自在・空手拳法 十八の研究，空手研究社興武館，1934年。
 - ・摩文仁賢和・仲宗根源和：攻防自在護身拳法 空手道入門 別名空手独習の手引き，興武館，1935年。
 - ・摩文仁賢和・仲宗根源和：攻防自在護身拳法 空手道入門 別名空手術教範，京文社，1938年。
 - ・三木二三郎・高田瑞穂：拳法概説，東京帝国大学唐手研究会，1930年。
 - ・宮城亀：沖縄教育，義務教育延長記念，第31号，沖縄教育会，1908年。
 - ・宮城仁之助：龍潭，第1号，沖縄県師範学校内学友会，1902年。
 - ・宮城仁之助：送別会，龍潭，第2号，沖縄県師範学校学友会，1903年。
 - ・宮城仁之助：本会記事，龍潭，第1号，沖縄県師範学校内学友会，1902年。
 - ・宮城仁之助：名護兼久ノ演技，龍潭，第1号，沖縄県師範学校学友会，1902年。
 - ・宮城鷹夫：本部朝勇，高宮城繁・新里勝彦・仲本政博編著：沖縄空手古武道事典，柏書房，2008年。
 - ・宮城長順：剛柔流拳法，手稿，1932年。
 - ・宮城長順：唐手道概説，喜宝院所蔵，1934年。
 - ・宮城長順：唐手道概説（琉球拳法空手道沿革概要），糖華，第2号，大阪糖業倶楽部，1936年。
 - ・宮城長順：法剛柔吞吐一空手雜藁一，月刊文化沖縄，第3巻，第6号，月刊文化沖縄社，1942年。
 - ・宮城篤正：糸洲安恒，沖縄大百科事典刊行事務局：沖縄大百科事典，上巻，沖縄タイムス社。
 - ・宮里栄一：沖縄伝剛柔流空手道，実業の世界社，1979年。
 - ・宮島壮英：東恩納寛惇，沖縄大百科事典刊行事務局：沖縄大百科事典，下巻，沖縄タイムス社，1983年。
 - ・宮本常一・原口虎雄・比嘉春潮：日本庶民生活史料集成，第1巻，探検・紀行・

- 地誌（南島編），三一書房，1968年。
- ・陸奥瑞穂：唐手拳法，東大唐手研究会，1933年。
 - ・本永守靖：沖縄対話，沖縄大百科事典刊行事務局：沖縄大百科事典，上巻，沖縄タイムス社，1983年。
 - ・本永守靖：会話伝習所，沖縄大百科刊行事務局：沖縄大百科事典，上巻，沖縄タイムス社，1983年。
 - ・本部朝基：沖縄拳法唐手術組手編，唐手術普及会，1926年。
 - ・文部科学省：史料5 財団法人日本武道館史料，
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/rikkoku/detail/1293110.htm,2016年11月30日。
 - ・山内盛彬：10 王城落成祝の木遣音頭，山内成彬著作集，第2巻，沖縄タイムス社，1993年。
 - ・山内盛彬：慶賀木遣，山内成彬著作集，第2巻，沖縄タイムス社，1993年。
 - ・山内盛彬：王城落成祝の木遣（チャ yi）音頭，山内盛彬著作集，第2巻，沖縄タイムス社，1993年。
 - ・山内盛彬・諸見里朝保：唐手部記録，宮城仁之助：龍潭 創立40周年記念号，沖縄県師範学校学友会，1911年。
 - ・山崎博士古希祝賀会：山崎博士の演説と文章，山崎博士古希祝賀会，1941年。
 - ・山本正昭・上里隆史：首里グスク出土の武具史料の一考察，沖縄米文研究 2，沖縄県立埋蔵文化財センター，2004年。
 - ・養秀同窓会：沖縄県立第一中学校と剣道，1994年。
 - ・楊名時監修・大塚忠彦翻訳：沖縄伝武備志，ベースボールマガジン社，1986年。
 - ・横山学：宝暦十二年琉球国船漂着記録『大島筆記』諸本について，ノートルダム清心女子大学 生活文化研究所年報 Vol.11，ノートルダム清心女子大学 生活文化研究所，1997年。
 - ・吉川秀雄：空手雑感，富名腰義珍：修正増補版空手道教範，広文堂書店，1941年。
 - ・吉見俊哉：運動会と日本近代，青弓社，1999年。
 - ・義村朝義：自伝武道記，月刊文化沖縄，第2巻，9月号，月刊文化沖縄社，1941年。
 - ・龍潭，国民精神総動員号，第33号，沖縄県師範学校学友会，1938年。
 - ・林伯原：近代中国における武術の発展，誠信社，1999年。
 - ・林伯原：中国武術史，技芸社，2015年。
 - ・林伯原：明代の武術，中国武術史－先史時代から十九世紀中期まで－，技芸社，2015年。
 - ・盧姜威：沖縄伝武備志の研究，沖縄県立大学博士論文，2011年。
 - ・和田久徳・高瀬恭子：李朝実録の琉球国史料（訳注）（4），南島史学，第39号，南島史学会，1992年。

新聞

- ・赤田の弥勒，琉球新報，1898年8月19日。
- ・安里安恒談(松涛)(1)(2)(3)：琉球新報，(1)は1914年1月17日，(2)は18日、(3)は19日。
- ・安里安恒談(松涛)：沖縄の武技(上)，琉球新報，1914年1月17日。
- ・綾門大綱後の大親睦会，琉球新報，1898年8月19日。
- ・運動会雑感，琉球新報，1905年年11月13日。
- ・小川銀太郎の巡視，琉球新報，1901年10月23日。
- ・出征軍人及家族救護第1回剣舞大会，琉球新報，1904年4月15日。
- ・沖縄の武術家 新垣小と東恩納，琉球新報，1914年1月24日。
- ・沖縄戦基に「一億総特攻」，沖縄タイムス，2010年5月13日。
- ・沖縄唐手大会の順序，ハワイ報知，1927年7月2日 (<http://museum.hikari.us/>)。
- ・唐手講演会，日布時事，1934年5月10日 (<http://museum.hikari.us/>)。
- ・唐手奨励会，琉球新報，1908年2月10日。
- ・頑固の児童教育，琉球新報，1898年6月13日。
- ・空手術を準成果に，東京朝日新聞，1940年3月17日。
- ・幻の「空手座談会」発見，琉球新報，2006年9月23日。
- ・国民抗戦必携①②③④，東京朝日新聞，①は1945年6月10日、②は11日、③は12日、④は13日。
- ・師範学校の唐手大会，琉球新報，1911年1月25日。
- ・師範学校沿革略(3)，琉球新報，1906年6月27日。
- ・師範学校唐手大会，琉球新報，1911年1月25日。
- ・松涛：唐手は武芸の骨髓なり，琉球新報，1913年1月9日。
- ・松涛：唐手は武芸の骨髓なり，琉球新報，1913年1月9日。
- ・神秘的な武術琉球の「唐手」，東京日日新聞，1922年6月3日。
- ・青年演武大会，大阪時事新報，1908年8月7日。
- ・大学教授の沖縄観，琉球新報，1906年9月22日。
- ・竹槍なくば唐手で，東京朝日新聞，1945年3月29日。
- ・中央に紹介さるる沖縄の武術(上)，沖縄タイムス，1922年4月23日。
- ・中学校の道場開き，琉球新報，1906年11月1日。
- ・中学校運動会の概況，琉球新報，1898年5月1日。
- ・中学校職員 of 唐手，琉球新報，1905年2月5日。
- ・東恩納寛惇：阿嘉親雲上遺言書，琉球新報，1953年4月24日～28日。
- ・那覇首里臨時連合運動会，琉球新報，1905年3月9日。
- ・莫夢生：唐手の伝来(下)，陽春雑筆，沖縄タイムス，1922年4月27日。

- ・富田常雄：唐手武魂（一），東京新聞，1945年4月3日。
- ・富田常雄：唐手武魂（二），東京新聞，1945年4月4日。
- ・父は唐手母は手榴弾，読売新聞，1945年5月14日。
- ・武徳会柔術試合（京都），東京朝日新聞，1909年8月10日。
- ・武徳会武術家優遇例，琉球新報，1902年5月23日。
- ・北条侍従の学校巡視，琉球新報，1907年2月3日。
- ・本社主催・空手座談会（一），琉球新報社，1936年10月27日。
- ・本社主催・空手座談会（二），琉球新報社，1936年10月28日。
- ・本社主催・空手座談会（三），琉球新報、1936年10月30日。
- ・満場の観衆を感服させた唐手術の威力，沖繩朝日新聞，1930年11月11日。
- ・名称を“空手”に統一し 振興会を結成！，琉球新報，1936年10月26日。
- ・屋宜曹長の歓迎会，琉球新報，1899年10月21日。
- ・乱暴漢の養成所，琉球新報，1899年1月15日。
- ・琉球の無手勝流，大阪時事新報，1908年8月9日。
- ・連合運動会，琉球新報，1905年11月11日。